り　狩野春水○一同柳黃鳥雪の松、木つゝき其外小鳥　狩野玉榮按するに、同書は、玉榮の筆なのせす、こゝもに春水の筆とす、○一同蘆杜若澤桔梗、鷺鶉其外小鳥　狩野洞壽按するに、同書に、一雙四季花車、洞壽筆とあり、○一同茶摘　狩野梅軒○一同田に鴈秋草　狩野祐甫○一同水鯉其外小魚　狩野洞壽按するに、同書に、こ○一同人丸赤人　狩野探林○一三雙墨繪ゑんかう、奈良八景、賴政ぬゑ、

俵藤太百足　狩野常川按するに、同書には、一雙は墨繪ゑんかう常川筆、一雙に奈良八景、一雙に武者繪赤松長山鐵棒引村上人礫、右二雙は狩野探常とあり、すへてかく異同の是非か辨しかたし、都合二十雙鵝林來聘詳錄、官中要錄、

寛延元年六月朔日

朝鮮國王へ被遣候物之内、御屏風箱御料紙硯箱御臺子大卓、右之分疵付不申ため、外箱申付候得共、朝鮮人へ渡候節は、外箱は取り、一重箱にて相渡候樣に、宗對馬守方へ可被申達候、

六月大成令續集、

寛延元年、朝鮮國へ被遣候御屏風は、下張紙御右筆へ被仰付、日本古戰記百倍の餘勢を書て用ゆ、上張共出來候節、繪師に被仰付、結構に出來す、又唐より獻上之品も、張扱たる類は、其國の戰功を細に記したる書にて、下地より張上たるものなり、雜藏考錄、匿見聞同、

明和元甲申年二月萬七日、信使呈するところの國書方物の次第、

明和元甲申年

朝鮮國王李昑奉書日本國大君殿下、聘信之曠、一紀有餘、竊聞殿下纘承令緒、撫寧海宇、且在交好、曷勝欣發、玆循故常、亟馳使价、致慶修睦、鄰誼則然、土宜雖薄、聊表遠忱、惟冀勉恢前烈、茂膺新祉、不備、

癸未年八月　日　朝鮮國壬李昑是まて三才雜錄同し、

別幅　人參伍十觔　大紬子一十匹　大緞子一十匹　白苧布三十匹　生苧布三十匹　白綿紬五十匹　黑麻布三十匹　虎皮一十五張　豹皮二十張　青黍皮三十張　魚皮一百張　色紙三十卷　彩花席二十張　各色筆五十柄　眞墨五十笏　黃蜜一百觔　清蜜一十器自注、每缸一斗、　鷹子二十連　駿馬二匹自注、鞍具、　際

癸未年八月日　朝鮮國李昑珊瑚日次記、槿域紀抄○按するに、別幅の品數、御徒方萬年記同し、

同年三月七日、老中松平右近將監武元、松平周防守康福上使として、客館東本願寺にいたりて、歸國の命を





傳へ、朝鮮國王への御返簡、ならひに御進物を附與す、三使已下例のことく賜物あり、

明和元年三月六日、

一宗對馬守へ、朝鮮國王へ之御返簡内見被仰付之、林圖書頭讀聞之、

同月七日

一朝鮮信使御暇に付、國王へ之返簡は、當日本願寺へ遣之、對客所下段、三使へ被下物は南之庇、其外被下物は上使之席へ不出之、

一上使右近將監、周防守自注、衣冠重を着、太刀帶、檜扇、裝束所より歩行にて罷越、御右筆御返簡之箱先達而、中門之外に持參、對馬守、和泉守、自注、衣冠重、太刀帶、○按するに、和泉守は御用掛寺社奉行松平乘祐なり、加藤遠江守、毛利能登守、大井伊勢守、一色安藝守自注、各大紋、○按するに、加藤遠江守、毛利能登守は御馳走人、大井伊勢守は御用掛大目付、一色安藝守は御勘定奉行なり、庭中程出迎、上上官東之方へ罷出、御返簡上使之先に立、階上疊縁迄御右筆持參、和泉守差圖して上使へ持參、床之上中央に差置之、和泉も上段へ上る、上使三使階上にて一揖相濟上段へ通候節、下段西之方へ退く、三使緣頰東之方へ出向、上使三使互に一揖有之、上使は西、三使は東順々に上る、各茵に着座、上使對馬守へ、三使今度逗留中無爲一段之事候、歸國御暇被下、國王へ之御返簡　別幅之通被遣之旨、上意之趣對馬守へ右近將監申渡之、對馬守上上官を以三使へ申達、小童人參湯持出之、三使御請之儀申達、之右過而三使へ被下物御目錄、對馬守家老、自注、衣着之、緣頰通持出、對馬守へ差出、右近將監三使幷從者へ被下物之儀申聞、對馬守上上官を呼傳之、上上官上段へ上り承之、對馬守家老差引有之而、上上官三人、上判事一人、製述官一人、上官一人下段へ罷出、上上官上官へ被下物之御目錄、如最前持出節、對馬守目錄可相渡旨相達、上上官以下御目錄を持少進み出、上使へ向ひ頂戴之而退く、中官下官への被下物目錄、家老東緣にて渡之、家老下段へ罷出、中官、下官へも被下物有之、御目錄頂戴之旨、上上官へ達之、上上官三使へ傳之、從者迄拜領物被仰付候御禮、三使上上官を以申之、右過而如以前退出、以上、御日記、

明和元年

日本國源家治、敬復朝鮮國王殿下、信使遐臻、聘儀寔盛、就審起居安寧、嘉慶殊深、方今以承紹前緒、撫

育群黎、仍由舊典、斯叙新懷、幣物既厚、禮意且隆、乃知敦兩國講信之意、而昭奕世修睦之誼也、言將菲品、附諸歸使、惟冀永締鄰好、共奉天休、不備、

寶暦十四年甲申三月日（按するに、この年六月十九日改元、明和となる、）

日本國源家治

別幅　貼金六曲屏風二十雙　描金案二張　描金鞍具二十副　染華綾一百端　綵紬二百端　整

寶暦十四年甲申三月日　日本國源家治（柳營日次記、栗園漫抄、）

寶暦十四年三月、御返書の副本御文庫に寶藏す、林大學頭信言是を草す、御印は源寛祐の三篆文なり、（外蕃通書、）

明和元年三月七日

上使　松平右近將監　松平周防守

朝鮮國王へ被遣物御返簡

一屏風二十雙　一鞍皆具二十口　一大卓二飾

一亂茶宇　二百端　一紗綾染物百端　以上

銀五百枚、綿三百把宛　三使へ　銀二百枚宛

上上官三人へ（自注、君聲崔知事、聖任李同知、仲擧玄同知、）　銀五十枚宛

上判事三人へ　銀三十枚　學士一人へ　銀五百枚　上官、次官へ銀二十枚　小童へ（按するに、栗園漫抄には、銀五百枚、上官次官小童と載せて、別に小童へ二十枚の事なし、前例によるに、栗園漫抄の方是なるへし、）　銀千枚

中官、下官中へ　銀百枚　馬藝之者二人へ　銀百枚　馬藝之節罷出候　上上官、軍官、理官、小童、中官、下官　銀六十枚へ、書物射藝等相勤輩へ、

右は歸國之御暇被仰出候に付、三使旅宿本願寺へ被遣之、（柳營日次記、栗園漫抄、）

明和元年二月十一日、御祐筆部屋縁頰

（表御右筆組頭）赤堀平右衛門　（表御右筆）新村登八郎

右は朝鮮人御暇之節、本願寺へ罷越、御返簡持出、御用被仰付旨、松平攝津守（按するに、若年寄忠愼、）申渡之、（柳營日次記、）

明和元年、吾國よりの御返簡、幷朝鮮王の書簡の寫を傳へ寫して、世間流布せり、多くは以前の書簡、日を經て流落せるを、今般の物として人を誑す、甲申の歳御返簡に、世子御誕生のことを、（按するに、孝泰院殿去年十月御誕生なり、）答に普天同慶といへる語あり、信使肯せすして曰、普天の二字は萬國の中、中華ならては云かたき字なり、願は闔國と改めたまへ、もし否されは、狀受て歸り難しと、彼是往復の上、乞に隨て闔國と改したり、その後御返書の寫とて人の見せたりしに、一向に右二事なかりし、右普天のわけは、江戸旅館に居合せたる人の語りき、普天の字吾國の人は公然として詩文に稱するなれとも、外國よりいへは許しかたき譯あり、只中華は古より、外なきを以自處、わか國は古も、朝鮮等の國々より自ら諾して中華を許したり、わか國の近頃は一種の神道者流出して、異論紛々たり、是に限らす、稱呼は君子の謹て正すへきことなれとも、又一偏に云難きことあり、略す、金鶏雜話、





# 通航一覽卷之百二

## 朝鮮國部七十八

### ○兩國書幷儀物信使御暇等　文化度

文化八辛未年五月廿二日、對馬國府中宗對馬守義功の邸において、朝鮮の信使聘禮のとき捧けし、かの國書ならひに方物、及ひ愼德院殿に呈せし別幅の品數、

文化八辛未年

朝鮮國王李珌、奉書日本國大君殿下、聘使之禮、曠踰四紀、逖承殿下克纘洪緒、誕撫區域、休閒所及、欣聳曷已、玆循故常、庸伸賀儀、至於易地行聘之舉、寔出兩國惇好之義也、不腆土宜、聊寓遠忱、惟冀益懋令猷、茂膺休祉、不備、

辛未年二月　朝鮮國李珌（山本氏筆記、一諾一言、）

文化八年、朝鮮國より之獻上物、

國王より之分　公禮單

一大君前　人參三十三斤　大繻子五疋（按するに、山本氏筆記には、大綸子に作る、下同し、）　白苧布

大緞子五疋（按するに、同書に、大緋子に作る、）　白苧布

五疋　生苧布五疋（按するに、同書に、この二品ともに十五疋と載す、）　白綿紬

二十五疋　黑麻布十五疋　虎皮七枚　豹皮十枚
青黍皮十五枚　魚皮五十枚　色紙十五卷　彩畫
席十枚　各色筆三十柄　眞墨三十笏　黃蜜五十
斤　清蜜五器　鷹子一連（按するに、同書に、鷹子十居とあり、是なり、）　駿
馬一疋（自注、鞍具、）
一儲君前　大繻子五疋　無紋綾子十疋　白苧布
十五疋　黑麻布十疋　虎皮五張　人參三斤
（按するに、同書に、三十斤と載す、）　豹皮七枚　青黍皮十張　色紙十
五卷（按するに、同書には、此間各色筆三十柄、眞墨三十挺の二品を載す、是なるへし、）　花硯三面
鷹子五居　駿馬一疋（自注、鞍具、）
一日本兩使臣各　豹皮二張　虎皮二張　白苧布
十疋　白綿紬十疋　黑麻布五疋　色禮二卷　黃
筆二十柄　眞墨十笏
聘使より　私禮單
一大君前　豹皮二張　虎皮三張　白苧布五疋
一儲君前　右同
一朝鮮よりの書翰は、小笠原大膳大夫殿奉預、同進
獻もの同人持越に相成、御鷹十五居馬二疋、是又同
人持越、尤右船者請負人苦屋久兵衛、
但鷹馬其外餌飼付添として、宗對馬守家來罷越
候、
一御馬鷹餌烏飼料飼葉之儀は、海陸其筋御代官懸
に被仰付相渡候間、場所々々に於て、附添の者より
請取、書付差出候樣可相心得旨、對馬守家來へ相達
候事、（以上近藤某留書、）
同年六月十五日、上使小笠原大膳大夫忠德、脇坂中務
大輔安董同所において鈞命を傳へ、信使歸國の暇賜
はり、かの國王に御返翰及ひ別幅、ならひに愼德院殿
よりの御返物を授與す、また兩使已下賜ものをの
の差あり、

文化八年、御返簡渡之次第

一朝鮮へ被遣幷被下之御品、宗對馬守屋鋪前日飾
付候に付、脇坂中務大輔幷大目付を始掛り一同、
（自注、袴羽織着用、支配向同斷、對馬守家來は麻上下着用、）罷越見分可致事、
但不寢番等之儀、對馬守家來へ可申渡事、
一朝鮮之信使へ御返簡渡候に付、兩上使幷掛御役
人一同、當日宗對馬守屋鋪へ相越候に付、支配向一
時早同所扣所へ相越、尤供之義は即刻相返し、御禮
式相濟候而呼寄候事、
一對馬守屋敷にて、刻限時半共、其度々御目付方支



配向迄知らせ候樣、對馬守家來へ爲申談候事、
一掛り御役役人一同、半時早相揃、尤供は即刻相返
し、御禮式相濟呼寄候事、
一御右筆幷差添御徒目付御小人目付、上使出門半
時早、上使旅宿へ參着、御返簡幷被下之御目錄入候
長持、御右筆請取、直對馬守屋敷へ差添罷越、三之門
にて對馬守家來に爲持、裝束所鑰幷被下物之御目錄
但鑰は上使持參、於裝束所鑰幷被下物之御目錄
美濃守（按するに、大目付井上美濃守、）請取、同人より對馬守へ相
渡候事、
下札御次第には、三之門內にて、御右筆取出し、上使
之先に進み、裝束所床に置之と有之候に付、本文
之通にては、御次第には、少し振れ候得とも、上
使參着に臨み、御返簡箱御別幅箱等、三之門內
にて取出し候儀、混雜に可有之、其上兩使以下へ
被下之御目錄等、長持に殘り有之候に付、方々不
手都合故、本文之通之手續に取調候事、
一兩長老（按するに、天龍寺植長老、東福寺宜長老なり、）罷出候はゝ、其段御目
付方支配向へ相屆候樣、對馬守家來へ、支配向より
爲申談候事、

一儒者罷出候はゝ、其段御目付方支配向まて相屆
候樣、兼而可申談置候事、
一御小人目付敷出し、掃除勤番所等見廻り、宜旨申
聞候はゝ、座鋪向（自注、掛り、上段下段櫻間之間雲之間鷺之間簾所屏風仕切、鶴下段左右簾垂之、其外簾卷之、上官扣之間之方、）其外玄關外三之門邊迄、對馬守掛り一
同見廻相越候事、
但見廻り相濟扣所へ引取候節、火之元等諸事念
入被申付候樣、對馬守へ御目付申談候事、
一右見廻り相濟、各着替之事、
一右見廻着替等相濟候上、兩上使へ御時分宜旨可
申遣、御目付支配向へ申渡、支配向より對馬守家來
へ、只今兩上使旅宿へ案內申遣段申通、直に御時分
宜段、御徒目付御小人目付を以、兩上使旅宿へ申遣
候事、
但御目付方支配向之儀は、兩上使へ御案內申遣
候を、曲尺に座鋪向其外出役之場所々々へ相廻、
尤對馬守玄關續之間を請取、御徒目付、御小人目
付相詰居、附人幷都而御用向取扱候事、
一御勘定方支配向之儀も、此節玄關脇廊下へ相廻
候事、

一兩上使御越之節、
旅宿出門　對馬守玄關へ　宮谷橋附人　同斷
馬場先橋附人　同斷
右之通致附人、馬場先橋附人參候はゝ、一同出迎之場所へ罷出候事、
但附人差出候節、御小人目付對馬守家來引連罷越、致差圖差出候事、
一兩上使供廻り、對馬守二之門外にて、外供之分相殘し、三之門外迄は、平日下乘迄被連候供之分被連、同所にて下乘之事、
但兩上使鑓武器牽馬等、二之門外腰懸前に行列立置候事、
一三之門より內は、布衣着之者計五人つゝ、兩上使の跡に從ひ候事、
但場所々々にて殘り候供之分者、出役之御小人目付差引爲致、惣同勢は一之門外扣所へ爲引取置、駕籠は臺所門より臺所前供置所へ直に構入置、退散之程合見計繰出置候事、
一一之門內二之門外三之門外番所勤番之家來は、右番所前に罷出、兩上使通行之節平伏爲致候事、
但武器飾り組手桶等、對馬守より飾付候事、
一對馬守一之門外二之門外坂下邊、年三之門外へ御徒目付一人つゝ、御小人目付二人つゝ罷出、制方之樣子爲見置候事、
但下馬所且旗鉾等纏ひ候場所へは、對馬守家來心得候者附居候樣、兼而達し置、右之者へ御目付方支配向より制方申談候事、
一兩上使裝束所へ、掛御役人相越、銘々挨拶之上、時分宜段信使客館へ案內可申遣哉相伺、夫より信使對馬守屋敷へ相越候樣申遣、彼方承知之趣可申聞旨、御目付方支配向より、對馬守家來へ爲申談候事、
一信使相越候節、客館罷出候由對馬守玄關へ、宮谷橋番所前迄罷越候由同斷、馬場先橋迄罷越候由同斷、右之通致附人、馬場先橋附人にて、出迎之場所へ、掛り御役人相廻り候事、
但附人差出候節、御小人目付對馬守家來引連罷越致差圖、對馬守玄關へ申込、三注進共支配向より申聞次第、小札を以て兩上使家來迄、支配向爲差出候事、





一兩使（按するに、正使金履喬、副使李勉なり）、三之門外石段之上にて下輿、對馬守家老先立、休息所前諸御役人出迎有之手前にて開く、
一兩使休息所へ通り候程合見計、中官、下官之輩、對馬守家來致差引、別構饗應場へ入置、退散之節も、是又同樣對馬守家來取扱可申事、
一印信關帖之儀、最初休息所へ持參、夫より樓欄間へ相通候節、右之間床に可置事、尤對馬守家來差引可致候事、
一兩候休息所へ相通り候段、大目付、御目付より兩上使へ可申達事、
一兩使休息有之、樓欄間へ相通し候て宜節案內可申聞旨、對馬守へ大目付幷御目付より申談置、左右有之候はゝ、樓欄間へ兩使相通し可申哉之段、兩上使へ相伺、御案內次第相通し、其段申達、對馬守を始諸御役人、銘々御行禮席へ相廻り候事、
但此節兩上使御目付案內にて、九老之間に扣、對馬守同斷、御目付は直に御行禮席へ相廻り候事、
一兩使樓欄間へ通候はゝ、後座へ着座之上官、雲之間へ寄置、兩使御行禮場着座相濟、直に屏風仕切內へ着座之儀、對馬守家來取扱可申事、
一御行禮中御用之ため、御目付方支配向座敷內手近之場取に見計、代々相詰可申事、
一樓欄間外に相詰御對馬守家老、御行禮相始候而支度宜候哉之段、御徒目付より相尋、宜趣承之、御目付へ申聞候はゝ、其段美濃守へ相達し、同人より御右筆幷對馬守へ申談、御返簡御別幅箱、廣間へ爲持出候事、
一御行禮之間警衛諸所番所、幷中間入置候場所等、作法爲見廻、御徒目付、御小人目付一度爲見廻候事、
一御行禮相濟、兩上使幷諸御役人扣所へ退座を、曲尺に御徒目付、御小人目付、場所之出役場へ相廻可申事、
一兩使樓欄間より對馬守案內して、御返簡を先に立休息所へ退座、御返簡假上段に置之、兩使退出之儀、對馬守より大目付、御目付へ左右有之、諸御役人最前出迎之場所へ出送之、
但兩使往返とも人拂、幷朝鮮人供差引之儀は、對馬守家來兼而相心得、制方致し可申事、
一朝鮮人馬場先橋罷通候附人之儀、對馬守家來へ

爲申談、申來次第、兩上使供之分構出し置宜旨、御徒目付申聞候はゝ、其段御目付より申達、最前出迎之塲所迄出送之、

一兩上使御退散相濟、掛り御役人一同引取候事、

同日

一朝鮮之信使へ、宗對馬守屋敷において御返翰等相渡に付、上使小笠原大膳大夫、脇坂中務大輔、幷井上美濃守、自注、各衣冠、林大學頭、柳生主膳正、自注、各大紋、按するに、主膳正は御勘定奉行なり、遠山左衞門、佐野宇右衞門、村垣左太夫自注、各布衣、○按するに、左衞門はこの頃左衞門尉、宇右衞門は肥後守と稱し、ともに御目付なり、左太夫は御勘定吟味役なり、されども御役營ありてこゝにいたらず、代り松山惣右衞門なり、事は信使聘禮并御饗應の條に辨す、對馬守屋敷へ相越、

一御返簡箱

大納言樣御別幅箱、上使持參之、三之門內にて御右筆自注、布衣、假取出し捧之、上使之先に進み、裝束所床に置之、

一朝鮮國王へ之御返物は、先達而對馬守屋鋪へ遣之、廣間西之張出へ並へ置、兩使被下物落緣に並置、其外被下物は廊下へ不出、

但兩使以下使下物之御目錄は、對馬守家來美濃守渡置之、

一朝鮮人客館より對馬守屋鋪一之門迄、同人家來行列にて相從ふ、

一一之門外にて、上官以下は下馬、上上官は二之門外坂下にて下駕、旗鉾之下官其外從者此處に止る、兩使は三之門外石壇之上にて下輿、

但三之門より玄關前迄薄緣敷之、

一三之門內外、對馬守家來兩使を出迎罷在、休息所迄家老自注、布衣着之、令案內、于時對馬守自注、衣冠、○按するに、對馬守義功、この頃病により、嫡子岩千代義賢これに代れり、美濃守、大學頭、主膳正、左衞門、宇右衞門、左太夫は廊下西之方、兩長老は南之方に出迎、兩使と一揖之後、兩使は休息所東之方、對馬守、兩長老は西之方に立並ひ、相互に一揖有て兩使着座、何も退去、上上官は入頰東之方、上判事以下は次之間、次官小童は廊下に罷在、中官之輩は玄關前庭上に群居、

一兩使休息有之、對馬守家老樓欄間へ令案內、西之方に着座、上上官は緣頰北向に罷在、兩長老は扇之間入頰へ出座、

一廣間簾掛之、





一御返簡箱

大納言樣御別幅箱、御右筆廣間へ持參、對馬守先立、美濃守差續出席令差圖、御右筆上段床中央に並置、美濃守其御返簡之側に扣罷在、御右筆は西之入頰へ退く、

但上使出席之時、美濃守下段へ退座、

一大學頭、主膳正廣間下段西之方へ出座、左衞門、宇右衞門、左太夫は緣頰左右に着座、

但儒者自注、假布衣、西之入頰に罷在、

一對馬守先立、大膳大夫、中務大輔廣間上段西之方へ出座、對馬守は下段諸役人之上に着座、

但兩上使之家來布衣着之者刀持共、西之入頰に罷在、

一對馬守上使之方を伺罷在、于時上使會釋有て、對馬守緣頰へ相越、兩使可差出旨、上上官へ申達之、

一兩使出席、下段上より三疊目にて一列に拜禮、對馬守差添、拜禮之席令差圖、兩使上段東之方に立並ふ、于時大膳大夫、中務大輔座を立、相互に一揖有て着座、

但兩使に相從上官之輩、後座に罷在、

一上上官下段敷居之內にて一同拜禮、次に上判事以下冠官迄、緣頰へ順々罷出拜禮、次官、小童は落緣、中官は庭上にて拜禮、

但上判事以下次官小童迄は、對馬守家老差引之、拜禮之席は、上上官附添令差圖、中官は對馬守家來導いて罷出、右畢而上上官下段東之方に出座、

一上使會釋有て、對馬守上段へ上る時、上意可申渡旨申聞、對馬守上使之側へ進む、于時今度兩使逗留中、無異一段之事に候、歸國御暇被下候、國王へ之御返簡、幷御別幅之通被遣之旨、上意之趣、大納言樣よりも御別幅之通被遣候段、御意之趣申渡之、對馬守承之、上上官を上段へ呼申含之、上上官兩使へ申傳ふ、兩使御請之趣、上上官を以對馬守へ申述之、對馬守上使へ申傳ふ、畢而對馬守上上官下段へ復座、

一兩使へ被下物之御目錄、對馬守家老持出、於下段對馬守請取之、上段へ進み上使之方を伺ふ、于時兩使幷從者へ被下物之儀申聞せ、御目錄可相渡旨申渡、對馬守上上官を上段へ呼、御目錄渡之、上上官兩使へ相渡、銘々頂戴之、對馬守は上段之末へ退

き、上上官は下段へ復座、次對馬守家老差引して、上上官二人上判事、製述官、上官各一人、下段敷居之内へ呼出し置、此時家老御目錄下段へ持出、對馬守方を伺候節、被下物之儀相達し、御目錄可相渡旨申聞、則渡之、下段西之方へひらく、上上官以下御目錄を持少し進み、上使に向ひ頂戴して退、家老退去、上上官は下段に復座、

一中官以下へ被下物之御目錄は、對馬守家老緣頰へ持出、上判事へ渡之、畢而家老下段へ罷出、其旨上上官へ達之、上上官上段へ進み、兩使へ傳之、于時從者迄拜領物被仰付候御禮、兩使上上官を以對馬守へ申述、對馬守上使へ申傳ふ、對馬守、上上官下段へ復座、

一大膳大夫、中務大輔幷兩使座を立、相互に二揖有て、兩使樓欄間へ退去、大膳大夫、中務大輔は、對馬守先立裝束所へ退去、

一美濃守上段へ上り、御返簡之側に扣罷在、對馬守下段へ出席、于時美濃守會釋、對馬守差圖して、上上官二人上段へ上り御返簡、大納言樣御別幅捧之退き、樓欄間之床に置之、畢而諸役人退座、

一對馬守、兩長老樓欄間へ相越、兩使と相互に一揖有て退出御返簡、大納言樣御別幅上上官捧之、兩使之先に立、對馬守、兩長老令案内相送、面々如出迎之時、

一御返簡は、三之門内にて轎に載之、兩使之先に立て持參之、對馬守、兩長老玄關前中程迄送之、以上小野某留書、

文化八年

日本國源、敬復朝鮮國王殿下、當价戾止、華緘隨達、因悉啓居寧謐、欣幸靡極、今者以不承統業、蒙修聘禮、珍貽稠疊、殊感隆誼、如其成禮津島、則事雖從新、意在循舊、所以度時制宜、而敦兩國之好也、玆具贈品、寄諸還使、惟冀彌揚景烈、允受純嘏、不備、

文化八年辛未月日一話一言、

文化八年六月十五日、對馬守邸に於て、國王へ御返簡御渡之儀あり、自注、着服着坐等の事、都て聘禮の日と同し、○御返簡は、御右筆役送、大目付差添差圖、上上官是を請とる、是日公方樣、大納言樣より國王へ遣され物あり、又正副使以下へ拜領物有之、自注、御返簡被仰渡相濟て後、兩使へ被下物上使より申達、對馬守目錄相渡、上上官以下は對馬守家老下段へ呼出し、目錄相渡す、家老布衣を着す、是日朝鮮歸國御暇上使より申達、御返簡按するに、御返簡は前に同しければ、こゝに略す、





別幅

、、――　、、――　、、――

整

文化八年辛未　日本國御姓名御朱印あり、

按するに、御返簡御別幅とも、執筆は御勘定格奥御右筆詰屋代太郎弘賢なり、大納言樣御返簡は、御別幅とも按するに、この書愼德院殿よりも御返簡ありしこと記せしは、誤りなり、執筆は表御祐筆男谷彦四部思孝也、御印章は銀印にて、濱村藏六と云彫刻者をめされ、御細工所に於て、林大學頭幷御細工頭立合是を製せしと云、此一件は小倉藩士の筆記せる物を得てしるせり、國王書簡御返簡等に至ては備はらさる物あるもむへ也、今是に隨てあらためす、

公方樣より朝鮮國へ被遣物

屏風十雙（狩野伊川筆賴信海渡之圖義家雁列之圖）　同人筆四季大和山水　同友川筆博雅三位琵琶傳時秋笙曲傳受）　同祐清筆唐船圖古木梅に月　同探信筆顧朝富士牧狩）　同洞白筆櫻町菊亭）　住吉内記筆堂上放鷹）　狩野青青筆牧牛野馬）　狩野洞琳筆春秋花鳥　板屋桂意筆内垣代付舞樂左青海波林鶯古散手貴德狛鉾打樋）　鞍皆具共十口　料紙硯箱三通　色羽二重五十疋　亂茶苧百端

大納言樣より

大卓一脚　紗綾染物百端　越前綿三百把

公方樣より御鮮人へ被下物、

銀五百枚、綿三百把宛　兩使へ　銀二百枚宛

上上官へ　同五十枚宛　上判事へ　同三十枚

學士へ　同四百七十枚　上官、次官、小童中へ

同四百枚　中官、下官へ

大納言樣より

銀二百枚、綿百把宛　兩使　銀百枚宛　上上官へ按するに、この書上判事三人賜ものを脫せしものなり、　同十枚　學士へ　同二百枚　上官、次官、小童中へ　同二百二十枚中官、下官中へ山本氏筆記○按するに、兩丸より使者に賜ものゝ數、下の近藤某留書と符合せず、猶後考をまつ、

文化八年六月十五日

一朝鮮國へ之御返翰御渡有之、兩上使幷御役人儒者御右筆、其外支配向一同相詰、

一朝鮮信使上上官上官次官小童中官下官罷出、御禮式相濟、

但雙方服之儀は、來簡請取之節之通に付略之、

一御返翰渡濟畢而、聘使以下歸國之御暇、兩上使より申達、

一岩千代代勤、

一朝鮮國へ之御返簡は、脇坂中務大輔殿持越有之候、

一同御返物品々は、御普請役御小人目付附添、午十二月廿三四五日三度に江戸御差立、未年閏二月三日對州へ着有之、但右船請負人は細屋勘左衛門、

大略品　長持十一棹御屏風、　同二十五棹御反物貳棹、綿九棹、銀拾四棹、　同八棹御馬具類六棹、銀御道具貳棹、　箱物五箇御返簡箱・紙料紙硯箱・鞍鑾等、

右附添、吟味方下役喜多川四平　御普請役河口覺藏　御普請役代伊藤佐野吉　御小人目付鎌方幸吉、柳本藤兵衛、藤村甫助

同年

別幅　畫屏風一十雙　鞍具一十副　硯紙匣三副　染繒伍十匹　綵紬一百端　整

文化八年辛未月日　日本國

朝鮮人へ被下銀、御本丸より

信使、副使へ　五百枚宛、按するに、この書兩使に賜はり綿の文を脫せり、下同し、

上上官三人へ　二百枚宛　上判事三人へ　五十枚宛　學士一人へ　三十枚　上官、次官、小童四十二人中へ　三百五十枚　中官、下官中へ　七百枚

西丸より

兩使へ　二百枚宛　上上官三人　百枚宛　上判事三人　二十枚宛　學士一人　十枚　上官、次官、小童四十二人中へ　此度百五十枚　中官、下官中へ　二百二十枚

外、西丸御用意分百二十枚、御本丸より書畫之者へ被下候御用意銀、二十枚、

同年、朝鮮國王諱字、

椿字旦字暾字鵬字珣字棨字暲字晄字㮚字懌字岐字

峘字昑字琈字倧字淏字棚字焞字盢字鈞字昑字絳字

祿字珌字

右者朝鮮國王諱字書送事、

辛未二月日　敬天玄知事印

陽元玄知事印



明遠崔同知事印

以上、近藤某留書、

通航一覽卷之百二終



# 通航一覽卷之百三

## 朝鮮國部七十九

### ○執政附溜詰書儀并諸向三使贈答　從慶長度至寛永元年

按するに、執政書儀贈答の事、慶長十二年より寛永元年までは、連署一紙なりしが、同十三年書式を改められ、彼此各通となり、かつ返物あり、以降定格となれり、また諸向三使自分の音物贈答の事、天和度にいたりてはしめて見ゆ、○この條すへて、兩國書并儀物信使御暇等の條併せ見るへし、

慶長十二丁未年五月、朝鮮國通信使來聘あり、時にかの禮曹參判吳億齡より執政の輩に、書牘及ひ土宜を贈りて和交の驗を述、かつ特に本多佐渡守正信の許に、往年生虜となりしものを刷還あらん事を乞ふ、よりて正信御旨を窺ひ、返書ならひに乞ふところの俘囚若干を、信使に附與してこれを還す、諸執政よりも返簡ありしなるへけれとも、今その記載を欠く、この時觀光寺承兌より、かの國松雲の許に書儀を贈れり、

慶長十二丁未年、信使之節、禮曹參判より御老中樣方に書翰を送り、朝鮮之擄日本に殘居候を申請候、日本朝鮮修好本末、兩國和好再興、對馬編年略、

慶長十二年

朝鮮國禮曹參判吳億齡、奉吾王命、上書日本國執政佐渡太守本多公閤下、交隣有道、自古而然、二百年來海波不揚、敝邦亦何負貴國也、抑壬辰之變、無故而動兵、禍及先王之廟矣、敝邦上下不可忘之痛也、累年馬島太守稱王命雖求和、敝邦猶抱差、承聞今者貴國改前代之非、行舊交之道、故差信使爲和交之驗也、然則閤下奏達殿下、盡刷還被擒男婦者、所不讓古來、所以治國者以其民、貴國敝邦易地皆然矣、閤下力停調以全大事、則流芳名萬世者必矣、伏希勿怠、恐惶頓首、不宣謹言、

萬曆三十五年正月日　朝鮮國禮曹參別吳億齡印

文之折樣如此右に在之、日本國王に之朝鮮王之敕書も、如此往古と（按するに、往古は是利家の時をさせしにや、）同前故、不書圖、

上　書

朝鮮國禮曹參判吳億齡謹封

日本國執政佐渡太守本多公閤下

別幅　虎皮三張　白綿布一十疋　白苧布一十疋　油紙三張　花文席伍張　整

別幅之折樣も書と同前、上に別幅と二字書之、印も無之、別に無字、（朝鮮通交大紀、兩朝書簡、續善隣國寶記、）

慶長十二年信使來聘、此時禮參判曹吳億齡我國政府へ送れる書を、信使に附し來たせり、左に記す、

朝鮮國禮曹參判吳億齡、敬奉我國王之命、致書于日本執政閤下、壬辰之變、實敝邦不可忘之痛、而抑貴國不可洗之羞也、交隣之道、信義爲重、無故加兵、亦獨何心、是宜天地鬼神所共憤者也、今貴國王先奉咫尺之書、乃謂改前代非者、信斯言也、豈非兩國生靈之福也、我國王玆遣使价、以答來意、第念既曰前代非者、則所當盡反其所爲、敝邦生靈、繫累凡幾萬、拘繫凡幾載、自六七年來、馬島似若致力於刷還者、而前後所送、不啻九牛之一毛、閤下其亦念及于玆否、夫國之所以爲國、以其民也、況敝邦之民、實是天朝之赤子也、今其國要結新好、不於此時盡還被擄男婦、則貴國雖稱改前代非者、其誰信之、此正閤下周旋宣力之秋也、如速出令、輙即刷還一男一歸、不許仍留、使彼此生民各自奠居、則兩國交驩、萬世永賴、豈不休哉、惟閤下勉圖之、且將土物、略具別幅、餘冀春和若序珍重、不宣、萬曆三十五年正月日、

和文

朝鮮國禮曹參判吳億齡、敬て我か國王の命をもつて、書を日本執政の閤下にいたす、壬辰の變、誠に敝邦忘るへからさるの痛にして、貴國洗くへからさるの羞なり、交隣の道、信義を以て重しとす、故なくして兵を加ふ、是誠に天地鬼神のともに憤るへき所のことなり、今貴國王先に書をいたし、前代の非を改むといふもの、果してこの言のことくむは、寔に兩國生靈の福といつへし、よりて我國王爰に使价を遣し、以て來意に答ふ、但其前代のする所をもつて非たりといふときは、今宜く盡く其する所に反すへし、敝邦の生靈久しく擄たるもの其幾萬といふことをしらす、六七年來馬島力を刷還にいたすか如しといへとも、前後の送るところ猶九牛の一毛に似たり、夫國の國たるゆへんは、其民有を以てして、且敝邦の民は實にこれ天朝の民たり、今兩國新好を結ふ、此時に當て盡く其被擄の男婦を還す事なくむは、貴國前代の非を改むといふとも、また何によりてかこれを信すへけむ、誠に閤下力を盡すへきの時なり、若速に令を出し、其一男一婦を留ることなく、彼此の生民をして各其居を安せしめは、今兩國好みを修るもの、萬世まことに其福をうくることあらむ、唯閤下幸に是をはかれ、（朝鮮通交大紀、○按するに、この吳億齡の兩通の書、前書は特にさして本多正信に贈り、この壹通は猶その事を衆執政の輩に通せんための書なるへし、）

慶長十二年五月

本多佐渡太守　正信拜復

朝鮮國禮曹參判吳億齡閤下、

蒙國王鈞命、被寄芳墨、特數種嘉貺、如別錄拜受、莫勝欣幸之至、抑敝邦與貴國、數年雖絕往來、再如舊時行交道、而海山雖路、遙被勞華使者、吾王所感悅也、即今書中所示諭之大事、具奏達焉、貴國男女生擒之輩、散處于郡國者、殆垂二十年、以國中諸士之養育、或有作嫁娶者、或有生嬰孩者、其身有不可歸國之心、則可隨所思、有還鄉之望者、速可作歸計之嚴命、吾王愛憐遠人之志尤深厚也、已（按するに、この間脫文あるへし、）不治宜奏達、敝邦寬宥之命意於殿下也、珍重、恐惶頓首、

歲舍丁未五月日　本多佐渡太守藤原朝臣正信印

（按するに、この復書の事により異論あり、元和度に出す國朝寇章錄併せ考ふへし、）

前南禪見東鹿苑承兌奉書、（按するに、曇光寺承兌、此頃相國寺塔頭の隨一なるゆゑ、鹿苑院をも兼住す、鹿苑院は兼住のかたなを記せしにや、）

朝鮮國妙高山松雲大師法座下、呂祐吉、慶暹、丁好寬
三珠樹、朝鮮敵邦兩地之和平、興舊典決大事而歸國、
前日所寄之芳墨拜覽之日、即雖裁答書、臨三使之
歸、不可無書、貴國之士民在敵邦者、普濟以欲還本
國者、慈憐尤深矣、貴國民人拘留敵邦者若干、數年
得邦內諸士之愛養、而或有作妻妾者、或作奴僕者、
各各隨分之宜也、貴國無士民、則無治國之驗、大師之
慈心、馬島厚情、無遺餘演說之、則吾王辨別貴國亂
後之治體、想像兆民異鄉之旅懷、而欲歸本國者返
之、不欲歸國者、可隨人人所求之、嚴命已降、持吾王
殿裡數年、依列之輩亦令之歸國、旅人思鄉者、古今
之常也、積日累年、彌可令歸入者必矣也、敵邦土宜
三種、雖爲微物、聊表寸忱、

歲次丁未五月日　　鹿苑野礼承兌印

拜贈　重箱六組　錫鉢一十事　扇子一百柄

右采納惟幸、以上異國日記、

慶長十二年、朝鮮禮曹參判寄書于本國執政申之間、
被還遣所擄男女、本州編稔略、

慶長十二年、命宗義智、使文祿之俘猶殊者數百人、
從三使歸朝鮮、烈祖成績、

慶長十二年、先年太閤秀吉彼國へ人數を被遣し時、
取來男女、此度召連上る、彼者とも高麗へ歸朝を悅
事無限、按するに、創業記こゝに止る、高麗人路次中、行時常に馬を急
に責ける間、馬病無際限、宮本常代記、創業記、慶長年錄、慶長見聞書漏分、慶長日記、

慶長十二年、先年秀吉公彼國より召捕給ふ男女を
被返下、彼者とも喜事無限、是より朝鮮人日本へ來
伏すとなり、諸家祕隱、雜話燭談、

慶長十二年、後水尾院御宇、明の萬曆三十五年、こ
の年朝鮮昭敬王、去冬神君御書なされし回答とし
て、呂祐吉、慶暹、丁好寬をして來聘せしむ、此事を致
事撮要に、回答使呂祐吉回自日本、刷還被虜人一千
二百四十餘名、探得家康自主國政、盡反秀吉所爲、
傳位於其子秀忠等情、具由奉聞、と記せり、朝鮮通交大紀、

薩摩國市來自注、湊ともいふなり、伊集院の間に苗代村といふ
あり、此地に朝鮮人の子孫數多住居す、秀吉公朝鮮
征伐の時、朝鮮人男女十餘人薩州へ御預け有りし
を、此所へ移し置れしに、いかゝの事にや年々に人
數增し、今此所に住する朝鮮人の子孫千五百餘人、
何れも有髮にて、髮をは頭上にくる〳〵と曲て、琉
球人の髮結しごとくにて、何もかんざしをさして





居るなり、人物長けも高く面も細長くして賤しか
らず、昔よりも日本と緣談するは堅き御法度にて、
天窓なりも日本流の月代あたまにそる事ならず、
五七代も日本の地に住居して、八九分まで風俗に
なれし事故、天窓なりも日本あたまに仕度と、度々
領主へ願し事なれともゆるしなし、今も通鮮役の
者有りて、一家へ二人扶持被下、國主參勤通行の節
には、古例ありて目見えをして、朝鮮踊をするな
り、此地は諸役免地にて、頭分の家五軒あり、此家
には朝鮮より渡りし時に着し來りし裝束を持傳へ
て居る事にて、目見えの時は朝鮮裝束にて出るな
いへり、平生の業には、薩摩燒といふ諸器の陶をし
て渡世とす、他國へ出す事夥事なり、此地より分家
して鹿屋村といふ所も、朝鮮人の子孫住せり、今に
朝鮮言葉交なり、母をはアバ父をはムマといふ、
落穗雜談一言集○按するに、この書及び下に引ところ
ろは贅に似たれども、俘囚の因に姑らく采錄す、

薩州鹿兒島の城下より七里西の方に、ノシロコと云
所は、一鄉皆高麗人なり、往古彼國の一鄉男女老若
囚籠として歸り、爰に住せしむ、今に子孫朝鮮の儘
の衣服言語なり、庄屋の名をシンホウチユンとい
ふ、申伴屯と書なり、日本へ渡りてより、長壽續た
る家は四代、短は八代にも及ぶ、最早二百年にも近
し、いつしか此國の詞をもるつうせり、此村は半分
は陶師にて、高麗燒を作る、上品は國禁にて賣買す
る事を許さず、太守より實の朝鮮物なりとて、諸方
へ贈らるゝなり、常の衣類下着は日本の衣類にて、
衣類は袖廣く法衣のごとし、珍形にて鳥を追ひ田
を耕す、此國の內とは思はぬ心地するなり、朝鮮の
通詞は、此村の人つとむるとかや、野翁物語、

元和三丁巳年八月、信使來聘のとき、かの禮曹參判尹
壽民より、老中酒井雅樂頭忠世、本多上野介正純等の
許に書と物とを來して、猶俘虜を還さん事を乞へり、
忠世、正純等五名連署の返翰を出し、求るところの生
口は、先年これを刷還し、今散在せる耄倪にいたりて
は、思鄉の者なし、猶搜索し歸國を欲するものは、强
留なかるへきのむねを諭す、

元和三年丁巳、朝鮮參判送書本國執政、可還給俘擄
之由、令請申之間、欲還本土者、應其望而可還之由
有台命、云々、先是依請雖還遣之、猶留日本有之故
也、本州編稔略、

元和三年、朝鮮國禮曹與執政書

朝鮮國禮曹參判尹壽民、謹致書于日本國執政大人閣下、比者貴國克纘前烈懇要隣好、既令對馬島主義成柳川調與傳達情悃、此果誠信、豈非兩國生靈之福哉也、敝曹敬奉我殿下之命、姑依往例、差遣行人、用謝厚意、仍具咨馳報天朝耳、我國民庶、被擄渡海者不知幾何、生爲異域之累囚、死作望鄉之孤魂、言念及此、慘痛何極、往年信使之行、深荷執政之勉力、雖得刷還、此是九牛之一毛、未見實効、自古交隣果如是乎、民維邦本、政先保民、玆者兩國方修好敦睦、若不返其赤子、則信義安在、此正閣下務盡周旋、一意宣力之時也、幸願體諒規處、摠將我國髦倪、許還舊土、以賁新業、則彼此交驩、庶乎有終、豈不休哉、千萬勉圖、不腆土宜、遙奉菲儀、詳具別幅、統希周旋、餘付譯舌、惶恐不宣、萬曆四十五年五月日禮曹參判尹壽民、方策新編、

元和三年八月廿九日

一於御前、從朝鮮日本執政への書をよむ也、紙こしらへ箱以下、上樣へのと同前、上包の紗はうす紅梅緒紅なり、右之書案在于左、按するに、案翰の文、方策新編に同しけれは略す、此返書可相調旨御諚にて、箱も取て旅宿へ歸る、上樣へ上り候書類上包物共に、廿八日御前へ返上、書の上書也、中にて卷留、

謹　奉書

朝鮮國禮曹參判尹　壽民（朱印也）謹封

日本國執政大人閣下

右此書一通也、別幅は同し文書にて五通あり、日本の執政五人也、本多上野殿、酒井雅樂殿、土井大炊殿、安藤對馬殿、按するに、土井利勝、安藤重信、板倉伊賀殿、按するに、板倉勝重、京都所司代なり、然るにこの列に加へられし、御思慮ありしなるへし、此五人と云々、

別幅　虎皮三張　人參十斤　帽段十匹　墨雲二十笏　黃毛筆四十枝　麝

日本國五臣一同、謹奉報于朝鮮國禮曹參判尹壽民、旁注、除此字不書也、閣下、遠寄華箋、披而閱之、則恰如對顏語、不堪蹈舞、忽差吳允謙梓李景稷、旁注、除此名不書也、三官使、捧殿下瑤翰靈奇珍適來、不辭大洋脩程之險、玆講千里同風之好、懇誠尤至矣、加之五臣亦各受五種之嘉貺、叵罄謝悰、貴國民庶在我邦者、先禪依懇求、周告域中悉還之、纔遺餘之者、或締婚媾、或安栖處、而無望鄉思念乎、然而累囚慘痛、刷還牛毛之告報不知其





實、今至黃耇赤子、令旋還之、却及慘痛矣、蓋人人有懸心緒于歸國者、何涉慳吝哉、重可諭域中、若有强留輩者可處法、今以信義爲心、如此愈不忘先契、益可依篤睦、萬般期後信、不悉頓首、

龍集丁巳秋九月日　日本國五臣一同　按するに、この書翰中、尹壽民等の名姓を刪りて、旁註を下せしのみしは下に見ゆ、

右之書下書八月晦日御城へ持參、御前にて樣子具に申上、朝鮮の書と數篇講尺、文體御意に入候、則御臺所にて御年寄衆各又双談吟案ありて、彌可然由相定、請書可仕由也、則間合鳥子三枚請取旅宿に歸る、明る九月朔日、早々清書虔筆、按するに、賽は賽西堂にして、この時の筆者をいふなり、下同し、

右之紙者間合鳥子白し、奥口來紙を置て書之、十七行也、書と支干との間一行明る、奥よりひた〳〵と卷て、上眞中にて卷留る、上書圖左、

謹奉　報于

朝鮮國禮曹參判　閣下

日本國五臣一同（朱印）謹封

按するに、尹壽民の下に此名を除て不書と自注あり、

如此折とめて加籠なしに直に上書あり、此上間に合鳥子白、すこしきり捨て包なり、上下を折かへすなり、その上には上書もなく其儘なり、

右書九月朔日に御城へ持參、伊賀殿、大炊殿、上野殿へ渡す、大炊殿御取被成也、酒井雅樂殿は親の服穢にて、按するに、雅樂頭の父河内守重忠、この年七月廿一日卒す、無出仕、安藤對馬殿も此日は不會也、右三人の御談合には、朝鮮の壽民へ返札可遣歟と也、從上樣朝鮮王に御廻禮無之間、御無用に候歟、然は使者衆へ音信可有之由也、

同年九月二日、宗對馬守家老島川内匠より洋首座に贈る書中、

先年御奉行衆より被遣候書も、朝鮮奉行之いみ名を兌長老被遊候て、殊外朝鮮にてそしり申候、兌長老も諱を官位かと思召候て御書被成候、朝鮮之儀不案内に御座候て、被遊候間御尤候、乍去今度儀は、傳長老樣に柳川得貴意候はゝ、可然候樣に申拵度被存候か、如何候はん哉御申候て、可然候はゝ賴存候、

一同日、右之島内匠狀を御城へ持參、閑齋に内談、御年寄衆へ見する、則土井大炊樣、本上州、安對馬殿、板伊州、各拙老と相談、道春も在座末、朝鮮奉行

へ日本五臣よりの書の諱を除候事は、手間も不入候間、相除可遣と申て、尹壽民の名三字を除き、來臨の勅使三人の名も相除なり、

一同日年寄衆印の談合也、行令の字を書て渡す、二寸五分四方に可然と申なり、此印は御帳内に納、異國への日本より遣奉行之書には、重ても此印を可押評定也、歸于旅宿、右之五臣の書を書改なり、廣筆松首座に持せ、土井大炊殿へ相渡なり、（以上、異國日記○按するに、老中印章の事、この時かく仰出されしか、のちまたまたちくなるを見れば、終にその事を改め替られしと見ゆ、）

元和三年、朝鮮禮曹參判尹壽民贈書于吾邦之執政、是先年朝鮮人民爲俘囚在吾邦者、唯今請還之、有旨曰、此度其欲還者宜放歸、或在此而安居舍、爲嫁娶有子孫者不欲還、亦可任其意、（是迄慶延略紀同し、）若有欲還者不許之、則宜有法禁者也、此趣酒井雅樂頭忠世、本多上野介正純、板倉伊賀守勝重、土井大炊助利勝、安藤對馬守重信五臣同奉旨贈返翰、此時酒井雅樂頭忠世罹父喪、故不預信使拜禮之事、然禮曹回翰押判、爲五官之上首、（紀年錄羅山文集、）

元和三年の信使來りし時に、僧錄司前の南禪崇傳長老國書を草すへしと聞て、柳川豐前守調興長老へ使を遣し、前年執政より禮曹に答られし書式も、禮におゐてかなはす候よしの事を申す、（按するに、慶長十二年、本多正信より返書に、朝鮮國禮曹參判吳億齡閣下と載しをいふなり、）長老此事を以て執政の人々と相議し、執政の書をは前年の式を改めらる、彼禮曹に贈られし我國執政の印章之事も、寛文十二年以來、おの〳〵名の印を用ひて、大小定まらす、天和のたびには、某地の城主の四字を用ひ、其大さ方一寸六分なりなと申す事もありき、此崇傳長老、元和三年九月四日の記に、我國の執政の印は、行令の二字を用ひ、其大さ二寸五分、自今以後、此印を用ゆへきよし仰下されて、御帳内に納て置れしと見えたり、但我國執政の書の事も、正德元年に議せられて、これより後は京都代々の例のことく、彼國の儀政府我國の執政、書を往來せん事はさも有へし、禮曹の書然るへからすとて、其事を停めらる、但聘事に就て彼信使にしめすへき爲に、本多彈正少弼忠晴對馬守に贈りし書ありき、それには掌客使の印の字を用ひしめらる、忠晴聘事を承る故なく、其後又相模守政直朝臣の（按するに、老中土屋政直、）義方に下されし書には、相模守源朝臣としるされ、押字を用



ひられて、印章は用ひられす、すへてこれらの事とも、其事宜を議定の上に仰出されしによりてなり、（以上柳營補編、）

寛永元甲子年十二月、老中酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝等の輩に、かの禮曹參判吳百齡より信使に附して書儀を贈り、大猷院殿御繼位を賀し奉り、又在留の生俘を求む、よりて忠世、利勝等より、方今さらに望鄕の情なく、强へからさるのよし、四員連署の返簡を出す、（條末に出す攷事撮要によるに、のちまた百餘人の囚虜か還されしものなり、）

寛永元甲子年

朝鮮國禮曹參判吳百齡、奉書日本國執政僉閣下、逖聞貴國新王繼位、邦運重開緬、惟股肱大臣、左右輔弼、奠鴻基於鞏固、綿福祚於久遠、甚慶甚慶、我王殿下承審、新王不忘舊約、思繼前好、誠意拳々、出於尋常、故差專使、奉幣馳賀、兼答馬島賀使之來意、所以明累世之信、結兩國之驩、使彼此億萬蒸黎、咸囿於安生樂業之中、休哉、且聞本國人口前日來及盡還、留在貴境者尙多、懷土思鄕、人情所同、反其倪髦、古訓所許、更仰無遺、刷出付此使臣之歸、以修鄰好之義、不勝幸甚、不腆副帖、聊表遠忱、曷足稱儀、統希垂亳、不宣、

天啓肆年捌月（異國出契、方策新編、）

寛永元年

一朝鮮之臣下吳百齡より日本執政へ有書、是も於御前披讀す、此書も、將軍樣へ上る、紙たてはゞ何も同前、樣も奥よりひた〳〵と卷、上の眞中にて卷止、上書圖面左、

奉書

日本國執政僉閣下　朝鮮國禮曹參判吳百齡謹封

有別幅圖左

虎皮二張　金襴五匹　花襴絹五匹　照布三匹

白紙十卷　整

此別幅之紙も、書と同前之紙にて、如同五通疊五つと書と合六、一つに二所ゆい、高麗紙のたけはゞ廣き薄き紙に一つに裹、其上をもよぎの紋紗にて、角かけてきり〳〵と卷、上下を取て眞中にて結ひ、五臣一同と云紙札を付なり、

右之書何も將軍樣御前にて披讀講釋仕、西之丸に持參、大御所樣に（按するに、台德院殿、）可懸御目御諚也、御機嫌

不斜也、此次にとんきんより、八月に上候よし被仰、安南國之書を被成御見せ、此返事をも可仕由御諚なり、併先高麗之返書相濟、其以後之儀と被仰出候間、右之安南國之書も懷中而退出、

一西之丸へ直に出仕、雅樂殿同道也、大炊殿各々伺候御前、即於御前右之高麗之書何も披讀講釋仕、御機嫌克即返書可相認之よし被仰出、右之書とも何も持て歸院仕候なり、

一朝鮮衆出仕之翌廿日、介方長老被送書案在左、

謹呈日本禪僧錄司金地長老榻下、屢聆禪風、私動馳想、昨者緣僉公輸効心力、獲達命宣旨、懋昭睦鄰之義、歡忝甚多矣、其領國報、以歸旆遲速、亦復在師之善謀而已、餘蘊倩於馬島之緩頰、汗略、

別錄

莞留如何、書不盡意、冀垂法照、不宣、主臣頓首、

天啓肆年冬十二月　日

荷潭　龍溪　孤山

按するに、この三名は別號なるへし、崇傳の返翰に三官使とあれは即三使をさせしなるへし、されとも正使鄭岦は烏川、副使姜弘重は晋山、從事官辛啓榮は鷲山と號せしなれは、ふゝんなり、但し各別號を書せしにや、

此書黃紙、如經ひたゝと折て書之、

別錄　人參一斤　花絲絹陸匹　花席三卷

計

此別錄白紙、如經折て、

書之此別錄と、右書と一つに入架籠、架籠白紙、外題赤紙也、左に圖あり、

日本禪僧錄司　金地長老　榻下　謹封

謹答朝鮮國三官使旅寓檐下、日之先所頒華牋、手之不釋、戶之不置、公計紛擾、以故裁答遲引、似慢非慢、伏乞高恕、三般之恩惠、實不意之嘉貺也、抑僉爺麾下捧貴國王殿下詔書、不辭海陸千里之險而來朝、吾大樹源君受禮、歡顏叮嚀之祗、待荷衰榮者、所具瞻也、早整出國報、歸計甚在近、全使節之禮、發勳策之譽者、誰不仰止哉、楮國有隙地、信口亂道、聊述卑臆云爾、三官大使出朝鮮、來拜侍源君御前、畫棟朱甍、輪奐美、寶冠珠履、禮容全盛、筵揖缺一、班坐高案、羞珍百物、連帶得同章歸故國、定知賢王意欣然、

日本僧錄司前龍淵以心叟崇傳朱印二

此返書內曇鳥子二枚續て書之、奥よりひたゝと





たゝみて、上の眞中にて卷納、上書なしに架籠へ入、架籠も內曇の鳥子也、外題なしに直に書之、右之圖在左、

謹　答

日本僧錄司前龍淵以心叟崇傳（印なし）謹封

朝鮮國三官使　旅寓檐下

一十二月廿日、左之高麗之書、將軍樣御前にて讀申、次に東京之書被成御取出、於御前讀申候、此返書も可調由、直に被仰出候、朝鮮之書以後不急儀と御諚なり、此東京之書も懷中して退出、案左にあり、

朝鮮國官司綱

正一品衙門　宗親府　議政府　忠勳府

從一品衙門　正二品　右六司

輔相　吏曹　吏部　戶曹　戶部　禮曹　禮部

兵曹　兵部　刑曹　刑部　工曹　工部　右六司

判書　參判　參議　此三司者、右吏戶禮之三曹從官也、

參知　此乃右兵曹之從官也、

又禮曹判書參判、皆是二品宰臣、判書掌天朝之文書、參判掌鄰國之文書也、

一同月廿二日、年寄衆よりの返書は、雅樂殿、大炊殿、阿波殿、讃岐殿四人連判に可調被仰出、又雅樂殿、大炊殿より別紙に返書被遣也、案左に有之、

雅樂頭藤原忠世

大炊守藤原利勝

日本國臣　阿波守藤原忠行　謹奉報章

讃岐守藤原忠勝

朝鮮國禮曹參判麾下、珍染圭復多幸、吾新大樹源君、受大人父君禪、主日域掌宇內、國豐民樂、越三員大官使、捧貴國王殿下詔書來朝、修盛禮備賀儀、歡納無他、至微臣亦逐一有恩賜、如副帖領之、而進以爲榮、不變舊好、彌修隣盟者、此彼之良策也、貴國人口留在吾邦者、先年依懇求、普觸域中刷還之、猶漏其網者、更無望鄉情也、不堪强還、是安生樂業之道也、乞思慮焉、風化都在三官使歷覽、餘蘊束高閣之仰、豐能保千鈞軀、永作萬年計、不悉、

龍集甲子冬十二月　日

日本國臣　讃岐守藤原忠勝朱印　阿部守藤原忠行朱印

大炊頭藤原利勝同
雅樂頭藤原忠世同

按するに、この返書異國出契、方策新編同し、また按するに、酒井忠世等四人はみな源姓にして、この書簡にすへて藤原と記せしはふしんなり、もしくは源君に嫌ひあるをもて、こゝさらにかく載しものにや、猶後考をまつ、

一同日御本丸へ朝鮮より上候書箱、幷五臣一同へ越候書、包物以下如元持參、雅樂殿、讃岐殿、伊賀殿ゟ相渡し候、御前へ御上け可被成よしなり、

右此書間に合鳥子無下繪、口奥を來紙置て書之、奥よりひた〳〵とたゝみ、上眞中にて卷留、はゞ三寸五分計なり、上に直に宛所以下書之、圖在左、

謹奉　報章
朝鮮國禮曹參判麾下
日本國臣　雅樂頭藤原忠世　大炊頭藤原利勝　阿波守藤原忠行（無印）　讃岐守藤原忠勝　謹封

日本國臣雅樂頭藤原忠世、回翰朝鮮國禮曹參判閣下、遙賜花箋、發緘覩嚴意、三官大使不辭海陸千里之嶮、適來獻貴國王殿下寶書、述高命、賀吾新日本國主攀其高躅、實舊交隣盟之厚也、殊備靈區之珍產數般、忻納惟幸、小臣亦受芳贈、件件拜收、不罄謝辭、別裁置印、一統答書述心緒、越略繁辭、伏仰自愛珍重、

龍集甲子冬十二月日



右奉行衆之書共、廿三日早天に、大炊殿、雅樂殿へ持せ遣、清兵衛使也、即朝鮮信使ゟ被遣、自分之音信も被遣由也、但右書連判之書一通、桐之箱に入緒環あり、上書付無之、大炊殿、雅樂殿書も、別に同前之箱用意して被遣也、朝鮮人對馬守幷豐前以酊、極月廿四日立江戸歸洛、

日本國　、、、、、
、、、、、
、、、、、
、、、、、
、、、、、
、、、、、
、、、、、
臣龍輯支干、、、
日本國臣　、、、日

こゝにも粘印ゟ本そ、今度の御年寄衆の書に□□には印無之、

土井大炊殿より朝鮮へ被遣候朱印之形

酒阿波殿印も同斷

雅樂殿讃岐殿より之印形

右板周防殿より正月十四日に來、柳川殿より之寫直に被爲下也、

日本國臣雅樂頭藤原忠世　朱印

右書も連印之書の如、奥よりひた〳〵と卷納、圖在左、

謹奉　報章
朝鮮國禮曹參判麾下
日本國臣雅樂頭藤原忠世（朱印）謹封

日本國臣大炊頭藤原利勝、回章朝鮮國禮曹參判足下、遠傳玉汗、近知芳意、吾新大樹源君、既續令緒主日域、列國諸臣繼踵入侍、君君臣臣、父父子子、善哉今也、今也三員官使捧貴國王殿下詔書、來述賀禮、備異產、領納珍重、微臣亦受數般之恩惠、且喜且愧、彌修隣交、互無隔礙者、公私之大幸、何事如焉、餘具在一統署印之牋上、順序自齎、

龍集甲子冬十二月　日

日本國臣　大炊頭藤原利勝朱印

右之書奥よりひた〳〵と卷て、上の眞中にて卷納、圖奥にあり、

謹奉　報章
朝鮮國禮曹參判麾下
日本國臣大炊頭藤原利勝（朱印）謹封



ヲリカヘシナリ

別（或幅）錄　私御年寄衆より之別錄に、印無之名有之、
、、、、、
、、、、、
、、、、、
計

寛　二／今度略二字不書之、
乙丑孟陬
、、、
（名
、、、、

以上異國日記、

寛永元年十二月、此度酒井雅樂頭忠世、自注、家臣、將軍土井大炊頭利勝、自注、大相國臣、酒井阿波守忠行、自注、大相國臣、酒井讃岐守忠勝、自注、將軍家臣、板倉周防守重宗、自注、所司代、各自朝鮮受書翰、即遣返書、紀年錄、

攷事撮要に、天啓五年按するに、我寛永二年、乙丑記して、鄭岦立

等回自日本、刷還被虜人一百四十一名、關白言欲盡刷送、以其人等已生長子孫、不能折居云云、と見えたり、朝鮮通交大記、

通航一覽卷之百三終

# 通航一覽卷之百四

## 朝鮮國部八十

執政附溜書儀幷諸向三使贈答　從寛永十三年至天和度

寛永十三丙子年十二月、信使來聘によて、かの禮曹參判朴明榑より井伊少將直孝累代武鑑によるに、直孝この頃執事職なるへし、故に決して少將とす、老中堀田加賀守正盛等の許に書翰及ひ方物を贈り、本域昌平を奉祝す、その書中猶人口の事に及へり、直孝正盛等各謝書及ひ土産を報ひ、此年兩國書式を改め給ひ、はしめてかの國王に御進物あり、よて執政往復の書も各通となり、また禮曹の許に返物ある事、こゝにさしまれり、かつ乞ところ遺民の子孫等、さらに歸國を願ふものなきよしを答ふ、

寛永十三丙子年、井伊掃部頭直孝、土井大炊頭利勝、酒井讃岐守忠勝、松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、堀田加賀守正盛、各自朝鮮受書翰、則遣返書、紀年錄、

寛永十三年、朝鮮國禮曹與執政酒井讃岐守書

按、又有與井伊掃部頭藤原直孝、土井大炊頭利勝書、文幷同此、故今略之、復書倣此、





朝鮮國禮曹參判朴明榑、奉書日本國執政源讃岐守公閣下、竊聞大君自嗣承以後、輯寧邦域、安養民庶、豐大之福、近古稀有、此誠懋德施仁之明效也、亦惟股肱輔弼將順其美、與國同休、甚盛甚盛、自甲子修聘以來、歲已周星矣、舉故事通慶禮、隣國之體也、茲因馬州陳請、委遣使价、仍問執事興居、亦不忘故也、土宜不腆、莞領是希、崇禎九年八月十一日、禮曹參判朴明榑、

別幅　虎皮二張　黃毛筆三十柄　油煤墨二十笏　鷹子一連　整

崇禎九年八月十一日　朝鮮國禮曹參判朴明榑

執我酒井讃岐守復朝鮮國禮曹書

日本國臣讃岐守源忠勝、敬答朝鮮國禮曹參判朴公閣下、一封手帖、千里面譚幸幸、茲三官使遠至、捧齎國書、賀我源大君繼前緒致太平、兼獻許多奇產如別幅、既奏達之、其修聘禮、惇舊好休哉、抑去歲義成調興相懇、時察有造贋書者、糺決焉、是行也殿下改往自新、可嘉奬矣、故以本邦所出見投贈之、到宜啓禀、且如余亦拜佳貺、感謝之至也、因呈薄物、以表寸心、統希領收、餘事勒官使還、維時祁寒、順序自嗇、不宣、

寛永十三年十二月廿七日　日本國臣讃岐守源忠勝

別幅　白銀一千兩　越州綿一百純　整

寛永十三年十二月廿七日　日本國臣讃岐守源忠勝

朝鮮國禮曹與奉行堀田加賀守書

按、又有與松平伊豆守源信綱、阿部豐後守忠秋書、文幷同此、故略之、復書倣之、

朝鮮國禮曹參判朴明榑、奉書日本國奉行藤加賀守公閣下、竊聞左右翊戴大君、敷宣仁惠干戈已戢、疆域永謐、此實天之所祚、而民之攸暨也、逖傃風聲、冢深景仰、茲因通聘、並候興居、且念前此使臣之回、刷還本國俘口、已有成例、向者貴國雖誘以歲久折居爲難、尚有括送百數十人、則今之存者、亦豈無楚吟越聲之思者乎、我殿下仁心惻怛、不忍忽棄、非以是而爲有滋於見戶也、貴國信義明白、必無間阻、故敢申例、請冀垂矜諒、不腆土品、用效微忱、統希鑒裁、不宣、

崇禎九年八月十一日　朝鮮國禮曹參判朴明榑

別幅　虎皮二張　黃毛筆三十柄　油煤墨二十

笏　鷹子一連　　整

崇禎九年八月十一日　朝鮮國禮曹參判朴明榑

奉行堀田加賀守、復朝鮮國禮曹書

日本國臣加賀守藤正盛、敬答朝鮮國禮曹參判朴公閣下、一封手帖、千里面譚幸幸、茲三官使遠至、捧齎國書、賀我源大君繼前緒致太平、兼獻許多奇產、如別幅、旣奏達之、其修聘禮、惇舊好休哉、抑去歲義成調與相愬、時察有造贋書者糺決焉、是行也殿下改往自新、可嘉奬矣、故以本邦所出、見投贈之、到宜啓禀、況如余拜佳貺乎、感謝之至也、因呈薄物、以表寸心、統希領收、且所請生口、先是皆刷還之、今無遺焉、縱纔存者、爲子爲孫、無欲還者、若或願還者、須待他年、餘事勒官使還、維時祁寒、順序自嗇、不宣、

寛永十三年十二月廿七日　　日本國臣加賀守藤正盛

別幅白銀一千兩　越州線一百純　　整

寛永十三年十二月廿七日　　日本國臣加賀守藤正盛以上續善

隣國寶記、方策新編、

寛永十三年の冬、朝鮮の使來貢す、彼國の禮曹贈簡及ひ土宜方物を松平伊豆守信綱によす、信綱返簡及ひ奇物を投して、以てこれを獻酬す、本朝列侯傳、

執政ゐの書簡、寛永元年迄は、一紙連名に候故、執政より返翰も連名に而遣候、寛永十三年以來は、執政ゐ銘々一通宛來候故、返翰も一通宛遣し候と、林七三郎同百助申上之、柳營祕鑑脫漏、

寛永十三年、寛永二十年、明暦元年三度共に、御老中より朝鮮へ返簡に、印判之文字、何れも名乘にて御座候、寸法心次第に被成候故、大小有之候、朝鮮聘考、

寛永十三年十二月、朝鮮信使來聘す、道春又その事を執行、御書翰を草稿し、老臣の答書をつくる、林道春傳、一話一言、

寛永二十癸未年七月、朝鮮國聘使の時、かの禮曹參判李德より土井大炊頭利勝、酒井讃岐守忠勝等の許に書牘及ひ物を贈り、嚴有院殿御誕生の奉賀等を伸ふ、よりて利勝、忠勝等より返書土宜を贈り、かつ求むるところ俘囚遺漏の民離居を欲せす、刷送すへきことのなきよしを報す、

寛永二十癸未年、朝鮮國禮曹與執政土井大炊頭書

朝鮮國禮曹參判李値、奉書日本國執政藤公大炊頭



閣下、嚮因馬州傳報、聞貴國有儲羨之慶、我奉幣馳賀、蓋以章貴大君延嗣之大慶、兼齎香祝、用薦社堂、亦以著貴大君奉先之誠也、休哉、惟冀左右輔弼克扶洪祚、不腆別幅、想在勿却、統希鑒諒、不宣、

崇禎十六年二月日　　朝鮮國禮曹參判李値方策新編

○按するに、執政よりの返書によるに、この餘の來翰は、今逸せしなるへし、

寛永二十年

日本國臣從四位侍從兼大炊頭　按するに、下文によるに、この間姓を脫せしなるへし、下ゟ利勝、敬答朝鮮國禮曹參判李公閣下、遠寄書信、交道彌篤、就審、貴國王開我大君之有繼嗣、而馳三使捧土物、以伸弄璋之慶、其福可嘉焉、且遣三使於日光山、備祭具奉奠東照大權現、歆饗如在、美哉、大君感愈怡悅、以本邦方物寄之、殊茲我輩枉承佳惠、如副帖受焉、幸甚、令依使价還而、贈微物表寸忱、載在別幅、匪報之、永以爲好也、餘冀昭察、不宣、

別幅　白銀一千兩　越州線一百純　　整

寛永廿年八月三日　　日本國臣從四位侍從兼大炊頭源利勝

日本國臣從四位若狹侍從兼讃岐守忠勝、敬答朝鮮國禮曹參判李公閣下、遠寄書信、交道彌篤、就審、貴國王開我大君之有繼嗣、而馳三使獻土宜、以伸弄璋之慶、其志可嘉焉、即啓達之、且貴國王自製祭文、令三使登日光山、備清酌庶羞之供、奉奠東照大權現、歆饗如在、美哉、先是所令群臣題詠、亦旣相達焉、其奉崇之意固深、御前怡悅殊甚、如臣等亦感、今因三使歸、以本邦之方物被寄之、到宜奏進焉、殊茲余輩亦承佳惠、如副帖幸甚、因贈微物表寸忱、載在別幅、可領取焉、匪報之、聊修永好也、餘冀亮察、不宣、

寛永廿年八月三日

別幅　白銀一千兩　越州線一百純　　整

寛永廿年八月三日　　日本國從四位若狹侍從兼讃岐守忠勝

日本國從四位侍從兼加賀守紀正盛、敬答朝鮮國禮曹參判李公閣下、遠寄書信、舊交通篤、就審、貴國王開我大君之有令嗣、而馳三使捧土宜、以伸弄璋之慶、其丁寧之盛志可嘉焉、即啓達之、且遣三使於日光山、備祭具奉奠東照大權現、歆饗如在、美哉、其慕遠深切矣、大君感愈怡悅、及三使還、乃以本邦之方物寄之、到須奏呈、茲余輩亦承佳惠、如副帖領之幸甚、而今贈微物表衷忱、載在別幅、匪報之、聊修永好也、

餘冀亮察、不宣、

寛永廿年八月三日　　日本國臣從四位侍從兼加賀守紀正盛

別幅同前

日本國臣從四位豐後守　按するに、御役人代々記によるに、忠秋は慶安四年にいたりて侍從に任す、阿部忠秋、敬答朝鮮國禮曹參判李公閣下、遙枉書音、交際愈渥、就審、貴國王開我大君之有玉胤、馳三价捧方物、以抒其慶賀、即奏進焉、且遣三价于日光山、備清酌焦羞之供、致祭東照大權現之廟、歆饗如在、善哉、先是所令群臣題詠、亦既相達焉、其奉崇之志不淺淺焉、大君怡悅殊甚、乃今以土宜寄之、到宜啓達、玆如我輩、亦賜副帖、領受依數、感刻有餘、因三价之歸、附菲薄之物、是效方寸之忱也、又別書謂、貴邦俘口、猶遺在本邦、而有娶老孤獨思歸者可刷還、先年既還之、偶有漏者、然歲月久遠、而或爲子或爲孫、或世爲婚姻、不欲離居、故今無可括送者、若鰥寡孤獨、猶有欲歸者、非所制也、統冀鑒察、不宣、

寛永廿年八月三日　　日本國臣從四位豐後守阿部忠秋

別幅同前

日本國臣從四位內匠頭源信成、敬答朝鮮國禮曹參判李公閣下、三使遠到、一封爰開、就審、貴國王賀我幼君、贈其異產、件件如目錄啓稟之、乃動喜色、因以本邦之物產被遣之、到則依數而可達焉、且賜我以副帖、領收之、堪荷佳惠、今三使還、寄菲薄之物、載在別幅、聊表其信也、餘冀高察、不宣、

寛永廿年八月三日　　日本國臣從四位內匠頭源信成　按するに、信成はこの頃歷有除殿の御側なり、

別幅同前

續善隣國寶記、方策新編○按するに、慶延略記によれば、この外井伊掃部頭直孝、松平伊豆守信綱、阿部對馬守重次よりも返書を出せしなるへし、今逸せしにや、

寛永二十年八月、井伊掃部頭直孝、土井大炊頭利勝、堀田加賀守正盛、阿部豐後守忠秋、松平伊豆守信綱、阿部對馬守重次、牧野內匠頭信成、板倉周防守重宗、右面々より朝鮮王ゟ別幅白銀百枚、墨漆蒔繪食籠一ッ、色々扇子二百本、此節御書簡別幅委外有、慶延略記○按するに、この書別幅の品類異同あるは、混淆して誤りなり、また酒井讃岐守忠勝一人を脫す、姑く參考に存す、

寛永廿年秋、朝鮮國信使來朝、彼國禮曹參判贈書簡并土產松平信綱、信綱依仰遣返簡并音物、改選諸家系譜、

明曆元乙未年十月、信使來聘す、時にかの禮曹參判申





翊全より大老井伊中將直孝、松平中將正之、酒井少將忠勝、老中酒井雅樂頭忠清、松平伊豆守信綱等に書儀を來して、松平正之に贈る書牘の外いま所見なし、嚴有院殿の御繼立を賀し奉り、かねて日光山獻備及ひ奉祀せしむるの事を筆せり、よて直孝、正之、忠清等より返翰銀子等を贈りて、これを謝す、

明曆元乙未年十月九日

一朝鮮人今日は上官二人計、御老中ゟ禮に參候由、聘禮行はれし、按するに、きのふ御三人方ゟ明日參候由、保科肥後守、井伊掃部頭、酒井雅樂頭、酒井讃岐守、松平伊豆守、阿部豐後守ゟ參由、朝鮮使來聘記、

明曆元年

朝鮮國禮曹參判申翊全、奉書日本國正四位上左近衛中將兼掃部頭藤原公閣下、遠聞貴大君光紹前烈、我王殿下思續舊好、委差使价、奉幣馳賀、兼齎扁額御筆及香燭燈籠樂器、用薦太猷院廟堂、因並焚香于大權現廟堂、所以彰貴大君奉先之誠也、惟冀輔弼新政、克扶洪祚、不腆副帖、想在勿却、統希盛諒、不宣、

乙未年四月日　　禮曹參判申　翊全

別幅　白苧布一十匹　白綿紬一十匹　黑麻布伍匹　虎皮二張　花席伍張　四張付油荒三部　黃毛筆參十柄　油煤墨二十笏　鷹子一連

乙未年四月日　　禮曹參判申翊全

朝鮮國禮曹參判申翊全、奉書日本國從四位下行左近衛少將雅樂頭源姓酒井氏公閣下、

書面與肥後守不違一字、

別幅　與肥守同

朝鮮國禮曹參判申翊全、奉書日本國從四位下侍從兼伊豆守源姓松平氏公閣下、

書面與肥後守不違一字、

別幅　與肥後守同

朝鮮國禮曹參判申翊全、奉書日本國從四位下侍從兼豐後守阿部公閣下、

書面與肥後守不違一字、

別幅　與肥後守同　朝鮮往來、

明曆元年、返翰

日本國臣正四位上左近衛中將兼掃部頭藤原直孝、復書朝鮮國禮曹參判申公閣下、信使遠到、賀我大君能紹洪緒、以到治平、獻幣修禮於東武、且直赴日光山、奉祀東照太神君閟宮大猷院廟、其懇厚之志懿哉、

如余亦被惠土宜數件、足以感悅焉、今聞信使還、而附微物、副以別副、領受惟幸、統冀亮恕、不宣、

明暦元年乙未十月日

別幅　白銀一千兩　越州綿一百純　整

明暦元年乙未十月日（線巻隣國寶記、方策新編、）

明暦元年（按するに、この書年月を記されとも、書中によりて今年の事と定む、）

井伊掃部頭より朝鮮返翰之事に付文通

朝鮮返簡之儀被仰聞、過分至極存し候、書簡に日本御平安、上様御息災之儀於有之者、其品又朝鮮國無事之由有之儀候はゝ、其段宜、音物之禮、又此方より、送物之品計御考、其外公儀向之儀、一切に無之樣に賴入存候、書簡請申儀、惣別迷惑至極候得共、大猷院樣御代に、上意に而御座候得者、兎角不被申上候き、唯今は遠慮に奉存候得共、御老中御指圖に而も候はゝ、不及是非候、此心中御考、返簡之儀賴入候、以上、

十月六日　　井伊掃部頭

道春法印樣

此通切紙に而來

内々如御約束申候、朝鮮禮曹書簡幷別幅兩通爲持進覽候間、其元に被差置、返簡之儀御調、如先年賴入候ゝ書箱も則進候間、御覽可被成候、從此方先年之書箱は、桐木地に而やろう盞に仕、兩脇に緒附之、環打緒付候迄に而相渡し申候、此度も其通に可申付奉存候、如何可有御座哉、箱高一寸五分計、横四寸計に仕、長さ一尺四寸二分計御座候間、此度之書如何程計寸方可有御座哉、頓而御極御申越必賴入存候、夫次第申付度候、幷印判先年之例有之間、返簡出來次第爲持越可申候間、讃州（按するに、酒井忠勝、）返簡同前に、是も於其元御押候樣に被成可被下候、朱に而押申候はゝ、其朱も讃州御押候朱可有御座候間、夫を御用可被下候、恐惶謹言、

十月九日（腕振申候、印判御写許可被成候、）　直孝

猶以書紙拵等之儀迄、先年之通りに御申付賴入存候、書簡之内權現樣大猷院樣御事御座候、此段は御代替前御代に而御座候間、難有奉存候旨は、私返簡に御書加候而も苦かるましく候哉、勿論當御代之儀は、私返簡には、必於何事も御無用に被成賴入存候、以上、

井伊掃部頭直孝





道春法印樣

人々御中

今朝任御指圖、一入進覽申處に、返簡一通別幅幷御扣兩通被下、其御口上に而被仰聞候趣承屆、先以忝次第存候、御扣別幅留に指置可申由、被仰聞被下候間、此方に留、それを見候而相濟申儀に候間、御封候兩通は、封之儘返置申候、又印にくの儀蒙仰大慶に存候、如何樣にも宜樣被成可被下候、印判は御左右次第爲持指越可申候、

一返簡箱之儀（一長、一尺四寸内のり　一高、一寸八分内のり　一横、三寸八分内のり）

此寸法に申付候間、今朝御見せ被成候御封之通に候得は、かつこう能御座候間、左樣に思召可被下候、紙詰申にも不及儀と存候、

十月十八日　　井伊掃部頭

道春法印樣

先刻之御報幷使之者に御直に被仰聞候趣承屆、先以忝存候、如仰今度之書簡、跡々と違念入鎖かまひにて御座候、就夫讃州御老中外家迄、可被出如何と御了簡之儀、如何にも尤成儀と存候、外家申付候も、輕々與可申付候間、俄にも出來可申候、各御一同に外家迄被成御越候に、私一人左樣無之候得は、無相應に成行可申候間、各外家に返簡箱御入候はは、私も左樣可仕候、存處は今度之書簡箱念入申間、返簡箱淺黄服紗にて包、臺にのせ、相渡可申歟と存し候、兩樣申付候間、各被成候樣子御聞合、乍御六借被仰聞可被下候、それ次第に可仕候、讃州ゝ被仰達に及申間敷候、必此返事御事多可有御座候間被下間敷候、以上、

十月十九日　　井伊掃部頭

道春法印樣

被入御念御切紙、先以忝存候、

一返簡箱外家可然由、其通に申付候事、

一三使ゝ音信幷上上官兩人ゝ遣物、讃岐守殿より之書付御覽被下、雅樂殿、伊豆殿、豐後守殿も右同前之由被仰聞、誠過分至極難申盡候、如御紙面、私は萬先年之通に、宗對馬守殿賴入申候間、右之書付入不申候、國王、三使、上上官ゝ音信之儀は、銘々に目錄仕、對州ゝ進申候、以上、

十月廿五日　　井伊掃部頭

道春法印樣（覲聽草、）

明暦元年十月二日、朝鮮國正使趙珩、副使瑜瑤、從事官南龍翼、江府に到る、八日三使登營して大君にまみゆ、九日上上官二人、朝鮮國禮曹參判申翊全及ひ三使の聘物を持して、公の（按するに、中將正之をさす、）邸に（自注、芝の宅○按するに、正保江戸繪圖及ひ延寶二年江戸大繪圖によるに、今の西丸下牧野備前守、本庄安藝守屋敷是なり、）來る、（自注、三使聘物虎皮一枚張、人參壹斤、白苧布、白綿紬各伍匹、黃毛筆二十柄、眞墨二十笏、色紙二卷、石鱗一斤、油芚一番、）家臣遠山伊右衞門布衣を着して命をおこなふ、大原左近右衞門布衣を着してこれに副たり、

朝鮮國禮曹參判申翊全、奉書日本國從四位上左近衞中將兼肥後守源姓保科氏公閣下、遠聞貴大君光紹前烈、我王殿下思續舊好、委差使价、奉幣馳賀、兼齎扁額御筆及香燭燈籠樂器、用薦大猷院廟堂、因並焚香于大權現廟堂、所以彰貴大君奉先之誠也、惟冀奉宣新化、克扶洪祚、不腆副帖、想在勿却、統希盛諒、不宣、

乙未年四月日　　禮曹參判申翊全

別幅　白苧布一十匹　白綿紬一十匹　虎皮一張　黃毛筆二十柄　油煤墨一十笏　鷹子一連

乙未年四月日　　禮曹參判申翊全

廿四日、大原左近右衞門をして申翊全に復書也、白銀一千兩を三使に、白銀二百兩を上上官に贈る、

日本國臣正四位下左近衞中將兼肥後守源正之、復書朝鮮國禮曹參判申公閣下、三員聘使遠馳、賀我大君重熙累洽以致治安、獻土宜件件、拜覲於殿前、誠是隣邦之好永不渝、淡兮之交久彌敬者也、且令三使自東武徑躋日光山、扁貴國王殿下親筆於大猷院祕殿、供香燭燈籠樂器、又燒薌於東照大神君靈廟、其敬嚮之志不炳焉哉、想其可肅然乎、今依信使歸而、被寄本邦物產、宜啓稟、如余亦被惠手書、而贈別幅數品、不堪欣抃、因呈薄儀、戴在副帖、匪報也、永以爲好也、餘希亮察、不宣、

明暦元年乙未十月日

正四位下左近衞中將兼肥後守源正之

白銀一千兩　越綿一百純

明暦元年乙未十月日

正四位下左近衞中將兼肥後守源正之（土津遺事、方策新編、）

明暦元年

日本國臣從四位上若狹少將兼讃岐守源忠勝、敬答朝鮮國禮曹參判申公閣下、官使三員、來修聘禮、以賀





我大君克繼前業、艾安桑域、進呈珍產若干、拜於殿內、可謂交隣之德不孤、治世之美無疆、且令三使自此徑經杏路、直陟日光山、揭貴國王殿下親筆扁額於大猷院廟堂、獻幕帛、供香燭燈籠樂器、又燒薌於東照大權現神宮、而奉匹馬、大君甚悅焉、其恭敬之志、可謂昭昭也、豈不感饗哉、方今信使畢事催歸、以本邦土物被寄之、宜啓稟焉、如臣等亦幸承佳貺、依副帖檢領欣欣、因贈菲物、以表微忱、而尋舊盟如數、可被受之、餘冀鑑諒、不宣、

明暦元年乙未十月日

別幅　同前、（續善隣國寶記、方策新編、）

明暦元年、執政酒井雅樂頭復朝鮮國禮曹書

日本國臣從四位左近衞少將兼雅樂頭源忠清、敬答朝鮮國禮曹參判申公閣下、官使三員、來修聘儀、以慶我大君承繼洪業、統御日域、捧異產多般、拜於殿內、可謂善隣之德不孤、治世之美無疆、且令三使自東武直登日光山、揭貴國王殿下親筆扁額於大猷院廟堂、獻幣帛、供香燭燈籠樂器、又燒薌於東照大權現神宮、而奉匹馬、其恭敬之志、可謂昭昭也、豈不感饗哉、方今信使、竣事告歸、以本邦物產被贈之、宜敷奏焉、如臣等亦辱得佳惠、如數受之幸甚、因呈薄物、戴在別幅、聊表寸丹、而約永好、餘希鑑諒、不宣、

明暦元年乙未十月日　　從四位左近衞兼雅樂頭源忠清

別幅　同前、

執政松平伊豆守復朝鮮國禮曹書

日本國臣從四位侍從兼伊豆守源信綱、敬答朝鮮國禮曹參判申公閣下、官使三員、來修聘儀、以慶我大君纘繼鴻業、統御日東、捧異產多種、拜於殿內、可謂善隣之德不孤、治世之美無疆、且令三使自東武直登日光山、揭貴國王殿下親筆扁榜於大猷院廟堂、獻幣帛、供香燭燈籠樂器、又燒薌於東照大權現神宮、而奉匹馬、其恭敬之志、可謂昭昭也、豈不感饗哉、方今信使、竣事告歸、以本邦物產被贈之、宜敷奏焉、如臣等亦辱得嘉惠、如數受之幸甚、因呈薄物、戴在別幅、聊表寸丹、而締永好、餘希鑒諒、不宣、

明暦元年乙未十月日　　從四位侍從兼伊豆守源信綱

別幅　同前、

執政阿部豐後守復朝鮮國禮曹書

日本國臣從四位侍從兼豐後守阿部忠秋、敬答朝鮮國禮曹參判申公閣下、官使三員、來修聘儀、以賀我大君承繼丕業、統御日域、捧異產多般、拜於殿內、可謂善隣之德不孤、治世之美無疆、且令三使自東武直登日光山、揭貴國王殿下親筆扁額於大猷院廟堂、獻幣帛、供香燭燈籠樂器、又燒香於東照大權現神宮、而奉匹馬、其恭敬之志、可謂昭昭也、豈不感享哉、方今信使、畢事告歸、以本邦物產被贈之、宜敷奏焉、如臣等亦辱得嘉貺、如數受之幸甚、因呈菲物、載在別幅、聊表寸丹、而尋永好、餘希鑒諒、不宣、

明曆元年乙未十月日　　從四位侍從兼豐後守阿部忠秋

別幅　同前、方策新編、

通文館志

書契式自注、筒鐵裝飾、黑漆黃畫鳳、內裏紫的方紬甲猴、外裏紅綿紬單猴、並金畫鳳○舊例、執政四人、奉行六人、而康熙壬戌、則因馬島問慰官、定奪執政一人、執事三人、西京尹近侍各一人、所修書契贈物、至辛卯信使時、差倭之來、以國白意言之曰、兩君交好則有之、人臣無私交之義、執政奉行等處、不當有書契贈物云、故依其言書、物并革己亥之行、因島主之言、復有執政四人、近侍四京尹各一人、修書契贈物、

外面右邊書奉書、左邊書日本國執政具御某公閣下、自注、執事以下隨其官號、而對馬島主則云日本國對馬州太守某公、以上稱閣下、內式同、合符處書朝鮮國禮曹參判自注、內式同、內姓名自注、踏圖書、凡書姓名處皆踏、下同、謹封、內式朝鮮國禮曹參判姓名奉書日本國執政具御閣下、云々、年月日、禮曹參判姓名、

回答書契自注、櫃墨漆、褙淺色絹、以纖帶束之○乙未信使、則執政等八人通書契、而稱日本國臣云々、壬戌己亥、信使則執政以下六人通書契、而隨其職、稱執政執近事臣西京尹云云○按するに、乙未は明曆元年、壬戌は天和二年、己亥は享保四年なり、

外面右邊書敬答、自注、或云、奉答奉復、左邊書朝鮮國禮曹參判某公閣下、自注、對馬島主以下、則皆稱禮曹大人閣下、內式同、合符處書日本國執政官御自注、執事以下至護行、沙門、各隨其號、內式同、姓名自注、踏圖書、謹封、內日本自注、平行、國執政官御姓名敬答朝鮮國禮曹參判某公閣下、云云、年月日以下同上例、別幅執政以下回禮、各白銀一百枚、越前綿一百把、年月日以下同上例、方策新編、日觀要攷、

天和二壬戌年八月、信使來聘、かの禮曹參判洪萬容より大老堀田少將正俊、老中大久保加賀守忠朝等に、書と物とを贈りて、常憲院殿御繼統の賀儀を奉る、よて正俊、忠朝等五員より、各これを謝して答書を出す、また大老老中以下、三使自分の音物贈答あり、明曆度以前、三使贈答ありし事、今所見なし、



天和二年、贈執政書、

朝鮮國禮曹參判洪萬容、奉書日本國執政從四位左近衛少將兼筑前守紀公閣下、遠聞貴大君光承令緒、丕紹前烈、我王殿下思續舊好、嵩差使价、奉幣馳賀、所益篤誠信、克修隣睦之誼也、惟冀輔弼新政、永扶洪祚、不腆土宜、莞納是幸、統希崇亮、不宣、　壬戌五月日　禮曹參判洪萬容

別幅　虎皮三張　豹皮二張　段子三匹　白照布十匹　青皮五張　油紙五部　黃毛筆三十柄　眞墨二十笏　魚皮十五張　際

壬戌年五月日　禮曹參判洪萬容續善隣國寶記、方策新編、

天和二年、執政堀田筑前守復朝鮮國禮曹書、

日本國執政從四位左近衛少將兼筑前守紀正俊、敬答朝鮮國禮曹參判洪公閣下、遠寄芳緘、交義益厚、就審、貴國王聞我大君承紹洪運、克襲休祥、遙馳三使、爰贈方物、不渝舊盟、愈修隣好、臣等亦辱佳貺、如數檢領、感佩殊深、千里同仁、萬年無疆、信使專對竣事、因呈薄物、以表寸誠、鑒察惟希、不宣、　天和二年壬戌九月日、從四位左近衛少將兼筑前守紀正俊

別幅　白銀一百枚　越前綿一百把　整

天和二年壬戌九月日　從四位左近衛少將兼筑前守紀正俊續善隣國寶記、方策新編、

天和二年

朝鮮國禮曹參判洪萬容、奉書日本國執事從四位侍從兼加賀守藤原公閣下、遠聞貴大君光承令緒丕紹前烈、我王殿下思續舊好、嵩差使价、奉幣馳賀、所以益篤誠信、克修隣睦之誼也、惟冀輔弼新政、永扶洪祚、不腆土宜、莞領是幸、統希崇亮、不宣、　壬戌年五月日　禮曹參判洪萬容

別幅　虎皮三張　豹皮二張　段子三匹　白照布十匹　青皮三張　油紙五部　魚皮十張

壬戌年五月日　禮曹參判洪萬容

按するに、朝鮮聘考に、執政の輩五人へ書翰、式の事見えたれども、來書、この外見る所なきは、方策新編に、禮曹與諸執政及京尹書並同、是故今略之とあるゆゑなり、

日本國執事從四位侍從兼加賀守藤原忠朝、奉答朝鮮國禮曹參判洪公閣下、遙辱華翰、交情太渥、就審、貴國王聞我大君克纘前緒、以介景福、遠馳三使、及贈奇產、交隣之道、率由舊年、親仁篤義、益固邦基、臣等亦拜嘉貺、切堪感刻、聊呈菲物、爰表微忱、尺素雖短、寸丹有長、餘勒聘使還、惟冀鑑諒、不宣、

天和二年壬戌九月日

執事從四位侍從兼加賀守藤原忠朝

別幅　白銀一百枚　越前綿一百把　整

天和二年壬戌九月日

執事從四位下侍從兼加賀守藤原忠朝

以上柳營秘鑑、方策新編○按するに、方策新編に、自餘は豐後守阿部正武、山城守藤原忠昌の名のみ存して、答書を載せざるは、同文なればなるへし、

天和二年

一朝鮮より書簡、何れ之分へ指越し然るへきや、幷に官位名附之儀承度由、宗對馬守申越候、老中之官位先例之通書付獻上すへしと、阿部豐後守より林春常へ申來る、先例書式に候得は、左之通りに御座候、

日本國執政從四位下左近衛少將兼筑前守紀公

日本國執事從四位下侍從兼加賀守藤原公

日本國執事從四位下侍從兼豐後守阿部公

日本國執事從四位下侍從兼山城守源公

日本國執事從四位下侍從兼丹後守越智公

右五人ゟ書簡可差越候旨、被仰出に付、如此相調獻上す、寛永二十年には、牧野内匠頭へも（按するに、牧野備後成その頃殿有院殿の御傅なり）書簡來る、此度若君樣（按するに、淨德院殿、御守無之に付、四人の老中へ書簡二通つゝ差越候樣に、宗對馬守方へ被仰渡、

御老中より朝鮮へ返簡に、印判文字之書付、

一天和元年、堀田筑前守は古河城主、大久保加賀守は佐倉城主、阿部豐後守は忍城主、戸田山城守は岩築之城主と印判之文字に被用候、牧野備後守は牧野二字印判に被用候、此節は印判何れも同樣に、大さ竪横共に一寸六分にて御座候、

一朝鮮より御老中への書簡は、禮曹參判之官より來し、印判之文字も、禮曹參判と字にて御座候、

寶永六年十月日　林七三郎　林百助（朝鮮聘考、享保四己亥年五月朔日、御用掛御勘定組頭奥野忠兵衛に、宗對馬守家來平田直右衛門より答る書中、

天和信使之節、朝鮮人御老中樣へ參候道筋、

一御老中樣方ゟ參候道筋は、本誓寺より傳馬町へ出、本町通常磐橋へ入、井伊掃部頭樣へ參り、堀田筑前守樣、（按するに、江戸方角安見圖鑑によるに、今の西丸下松平玄蕃頭屋敷是なり、）保科肥後守樣、大久保加賀守樣、阿部豐後守樣、（按するに、同圖によるに、肥後守は今の同所本庄安藝守屋敷、加賀守は今の同所牧野備前守屋敷、豐後守は今の和田倉御門內松平肥後守屋敷なり、）戸田山城守樣、稻葉石見守樣、堀田對馬守樣、（按するに、貞享江戸大繪圖によるに、山城守は今の一橋殿屋形、備後守は今の松平肥後守屋敷にして、西の方にあり、石見守、對馬守屋敷今詳ならず、）御屋敷順之通、段々相務候き、

一對馬守宅ゟ三使招請之節、道筋は本誓寺より新橋通り對馬守屋敷へ參り申候、

同年五月廿三日、同斷、

覺

一當秋三使ゟ銀子之返物有之衆、御書付出可有之候事、

覺

一天和信使之剋、銀子之返物有之御方、書付差出候樣に被仰下候故、左記之候、（按するに、三使より音物の品數、いまその記載を缺く、）

一銀子百枚宛　井伊掃部頭樣　保科肥後守樣御銘々より

右三使中ゟ（按するに、上文御三家返物の事を載す、今分條す、）

一銀子三十枚宛　右御兩人樣へ、御銘々より

（按するに、この間上上官中ゟ之文を脫せしなるへし、）

一銀子百枚宛　御大老堀田筑後守樣　御老中大久保加賀守樣　阿部豐後守樣　戸田山城守樣　御側牧野備後守樣（京御所司代）稻葉丹後守樣

右禮曹ゟ之御返物、御銘々より

一銀子百枚宛　右三使中ゟ　右御六人樣御銘々より

一銀子三十枚宛　右上上官三人中ゟ　右御六人樣御銘々より

一銀子三十枚宛　御若年寄堀田對馬守樣　稻葉石見守樣御銘々より

右三使中ゟ

一銀子枚宛　右上上官中ゟ　右御兩人樣御銘々より

一銀子三十枚宛　右上上官中ゟ享保己亥信使記錄、

江戸御馳走人　小笠原大助樣　內藤左京亮樣

京都御馳走人　本多隱岐守樣（大坂御馳走人）　岡部內膳正樣

天和二年八月、朝鮮人來朝、御返簡無下馬將軍之印、請得而還與之、大悅而反、

酒井侯第與大城門相對、朝鮮人來朝、下馬于下馬札下、放呼酒井侯爲下馬將軍、（朝鮮遣事○按するに、この寧外の書及び下の文武太平記の外

所見なく、かつ事實不審なれとも、姑く存して後考をまつ、

天和二年八月、御代替りにて、朝鮮人來朝、御返簡を異國の使に渡されける處、三使の面々披見して、御先代より返簡、日本の下馬將軍酒井雅樂頭の印形なし、依之三使請取す、雅樂頭不首尾にて、當時大老堀田筑前守正俊なりと、斷はりいへとも聞入す、是まて下馬將軍の子孫續て、數度の返簡先例となれは、此度に限り餘人の印形にては、朝鮮へ歸り大王の前にて申譯成難しと、三使一同に申ける、柳澤申けるは、三使の願ひ日本の恥辱ともならん、尤前雅樂頭無調法ゆへに御役召放され、悴河内守格別に召出され雅樂頭となし、先規の通り印鑑被仰付然るへしと言上しけれは、此儀に評議一決して、酒井河内守を被召出、雅樂頭と被仰付、印鑑相濟、御城大手先屋敷は、堀田筑後守拜領せしを明させ、西の丸下にて屋敷を被下、先代のことく雅樂頭は元屋敷を下されける、依之諸人下馬將軍と號しける、御城大手の御門先ゆゑ、大小〻登城の節下馬の場所ゆゑ、朝鮮人も是より下馬す、全く雅樂頭に下馬するにあらす、將軍の位にあらす、たゝ雅樂頭屋敷御城の御門と向ひ合なれは、あだ名を下馬將軍と申し來りける、文武太平記、

通航一覽卷之百四 終



# 通航一覽卷之百五

## 朝鮮國部八十一

### ○執政附溜詰書儀幷諸向三使贈答 從正德度至文化度

正德元辛卯年十一月、朝鮮國信使來聘、是より先鈞命によりて、執政かの禮曹と書儀往復の事をとゝめらる、三使自分の音信、大老井伊中將直該等老中以下、諸向贈答は例のことし、

正德元辛卯年

一又近例彼國の禮曹、我國の執政等書簡を謝し贈る議あり、昔京の代には、九州の探題といへとも、猶彼議政府よりこそ書をは通したれ、今其例によらんことは、彼國にも願へからす、近例のことき は、我國も又願ふ處にあらす、此事をもやむへしと對馬國に仰下さる、此二月に至ては、彼東萊府使とか聞えしもの丶、對馬守に書を贈りて申せし事ありしかと、是も又仰下されし如くには事成ぬ、白石私記○宗氏通信使伺幷掛合の條併せ見るへし、

正德元年十一月朔日、詰番井戸新兵衛廻狀之内、

一御三家方へ　上上官　一御老中方へ　上官

右之通罷越候由、

一同月二日、朝鮮人井伊掃部頭殿御老中方へ相廻候に付、人拂兩組出勤、左之通、

柴田三左衛門組共
設樂善左衛門組共

右熨斗目上下、明ヶ五時常磐橋揃、

中山勘解由

右御役當之内、井戸新兵衛東本願寺へ相越居、人拂之刻限等差圖いたす、右兩方之代り、在宅にて心得、

一同十二日、朝鮮人御老中方へ相廻候に付人拂固、

土屋數馬組共
丹波權兵衛組 助江原與右衛門

右熨斗目上下、明五時常磐橋揃、

一同十三日、朝鮮人上官御老中方へ相越候に付人拂、

長谷川半四郎組共 外櫻田揃
金田惣八郎組共 常磐橋揃

右熨斗目上下、明五時揃、

右前日觸有之候處、十三日相廻候事相延候由、前夜御目付天野彌五右衞門被申聞、以上、御徒方萬年記、

正德元年十一月十二日、本願寺にて御饗應、十四日夜掃部頭殿へ御暇御禮として上官計參上、琉韓記事、

正德元年十一月十二日

一信使昨日被下御暇、爲御禮井伊掃部頭老中、間部越前守、本多中務大輔若年寄中へ、上上官一人上判事二人差遣之、柳營日次記、

正德元年十一月三日

一明四日、朝鮮人上官御老中方へ參候御觸、

同五日

一只今朝鮮人上上官御老中方へ參候御觸、

同十一日

一明十二日明後十三日兩度、御老中方へ參候御觸、正寶事錄、

正德元年

三使中より音物　井伊掃部頭へ

一人參二斤　一虎皮一枚　一色紙五卷　一石鱗

一斤　一白蜜十斤　一扇子二十本　一松笠百

一笔二十本　一眞墨十挺　一芙蓉香五十本

松平肥後守へ　按するに、肥後守正容は溜詰なるべし、

一人參一斤　一油布拾疋　一色紙三卷　一石鱗

一斤　一眞墨十挺　一芙蓉香二十本　一扇子二

十本　一柏子二斗

土屋相模守へ

一人參一斤　一虎皮一枚　一色紙三卷　一石鱗

一斤　一白蜜十斤　一扇子十本　一松笠百　一

筆二十本　一眞墨十挺　一芙蓉香二十本

秋元但馬守　間部越前守　大久保加賀守

阿部豐後守　井上河內守　本多中務大輔

一同斷　按するに、相模守政直、但馬守喬朝、加賀守忠增、河內守正岑、豐後守正喬は、ともに老中、越前守詮房、中務大輔忠良は、ともに御側用人なり、

久世大和守へ

一人參一斤　一油布五疋　一筆二十本　一扇子

十五本　一色紙三卷　一柏子一斗　一石鱗一斤

一眞墨十挺

加藤越中守　鳥居伊賀守　大久保長門守へ

一同斷　按するに、大和守重之、越中守明英、伊賀守忠救、長門守教愛は、ともに若年寄なり、

右持參之朝鮮人上上官三人、使令六人、小童三人、



小通事三人、朝鮮人へ相附候家老大浦忠右衞門、留守居鈴木左次右衞門、徒士四人、通詞二人、弓足輕四人

三使并上上官へ贈物

井伊掃部頭より　白銀百枚　羽二重三十疋

三使中へ　白銀五十枚　上上官三人中へ〇松平肥後守より　白銀百枚　三使中へ　同三十枚

上上官三人中へ〇右同斷　土屋相模守より〇右同斷　秋元但馬守より〇右同斷　大久保加賀守より〇右同斷　井上河內守より〇右同斷　間部越前守より〇右同斷　阿部豐後守より〇右同斷　本多中務大輔より〇久世大和守より　白銀三十枚　三使中へ　同拾枚　上上官三人中へ〇右同斷　加藤越中守より〇右同斷　鳥居伊賀守より〇右同斷　大久保長門守より以上朝鮮聘禮事、

享保四己亥年五月朔日、宗對馬守家來平田直右衞門ゟ、御用掛御勘定組頭奥野忠兵衞に答ふる書中、

正德信使之道筋

一御老中樣へ參候道筋は、本願寺より雷門通淺草筋へ、本町通常磐御門より入、井上河內守樣按するに、正德三年分見江戸大繪圖によるに、今の龍の口北森川出羽守屋敷なり、裏御門和田倉御門入、松平肥後守樣按するに、同圖による、即今の屋敷なり、表御門前、秋元但馬守樣按するに、同圖による、今の內藤紀伊守屋敷、表御門前、外櫻田へ出候而、井伊掃部頭樣相勤、夫より大久保加賀守樣、大久保長門守樣、加藤越中守樣、秋元但馬守樣、間部越前守樣按するに、同圖によるに、加賀守は今の牧野備前守屋敷、長門守は今の本庄安藝守屋敷、越中守屋敷詳ならず、越前守は今の酒井右京亮屋敷なり、松平肥後守樣、土屋相模守樣、本多中務大輔樣、井上河內守樣、久世大和守樣、阿部豐後守樣、鳥居伊賀守樣、按するに、同圖に、相模守は今の阿部伊勢守屋敷、中務大輔は今の松平和泉守屋敷、大和守は今の一橋殿屋形是なり、伊賀守は今の酒井雅樂頭向屋敷なり、右之順々に相勤罷歸候、道筋參り候節之通に御座候、

同年同月廿七日、同斷、

前刻は御手紙致拜見候、然は正德年中、朝鮮人へ御返物之銀、其外之品被相贈候、書付寫差上候樣被仰下、則別紙に書載致進上候、

一白銀百枚　一京絹三十疋　三使中へ　一白銀五十枚　上上官三人中へ　右井伊掃部頭樣より

〇一白銀百枚　三使中へ　一同三十枚　上上官中へ　右土屋相模守樣より〇一右同斷　右秋元

但馬守様より○一右同斷　右大久保加賀守様より○一右同斷　右井上河内守様より○一右同斷　右阿部豐後守様より○一右同斷　右間部越前守様より○一右同斷　右本多中務大輔様より○一白銀三十枚宛　三使銘々へ　一同十枚宛　上上官銘々へ　右久世大和守様より○一右同斷　加藤越中守様より○一右同斷　右大久保長門守様より○右同斷　右鳥居伊賀守様より○一白銀百枚　三使中へ　一同三十枚　上上官中へ　右松平肥後守様より○一綿三十把　三使中へ　右參向駿府上使長澤壹岐守様より○一同斷　同斷　右江戸着上使品川豐前守様より○一右同斷　同斷　右安否御尋上使京極大膳大夫様より（按するに、以上三人ともに高家なり、）○一綿百把　同斷　右品川上使酒井左衞門佐様より○一同斷　同斷　右江戸館伴酒井修理大夫様、眞田伊豆守様御銘々より○一白銀三十枚　上上官中へ　右御同人様御銘々より○一色羽二重十疋　三使中へ　右仙石丹波守様、横田備中守様御銘々より（按するに、この二人とも、○一に御用掛大目付なり、）○一絹縮十端　右同斷　右荻原近江守様より（按するに、御勘定奉行なり、）○一島羽二重五疋　右同斷　右町御奉行丹羽遠江守様、松野壹岐守様御銘々より○一羽二重五疋　右同斷　右同斷坪内能登守様より○一綿百把宛　三使銘々へ　右松平伊豫守様より○一右同斷　右松平民部大輔様より○一白毛拂一柄　一琉璃鐘壹套伍枚　一訓蒙圖彙一部　一張子合一箇　一墨十笏　正使へ　一訓蒙圖彙一部一琉璃鐘壹套伍枚　一墨十笏　一張子合一箇　一彩扇十柄　副使、從事銘々へ　一京絹二疋　一薄小紙千枚　一彩扇十柄　崔同知へ　右新井筑後守様より○一綿五十把　三使中へ　右江戸宿坊本願寺より○一白銀百枚　三使中へ　一同三十枚　上上官三人へ　右京御所司代松平紀伊守様より○一綿百把　三使中へ　一白銀三十枚　上上官中へ　右京都御馳走人本多隱岐守様より○一白銀三十枚　三使中へ　右京都上使建部内匠頭様より○一白羽二重五疋　同斷　右京町御奉行安藤駿河守様、中根攝津守様御銘々より○一攝州たばこ一箱宛　同斷　右京都宿坊本國寺より○一綿百把　三使中へ　一同二十把　上上



官中へ　右大坂御城代土岐伊豫守様より○一右同斷　右大坂御馳走人岡部美濃守様より○一色羽二重五疋　三使中へ　右同所町御奉行北條安房守様、桑山甲斐守様御銘々より○一白羽二重二十疋　三使中へ　一同十疋　上上官中へ　右大坂宿坊西本願寺より○一白銀十枚　一美濃紙百帖　三使中へ　右駿府御馳走人遠藤下野守様より○一絹縮十端　同斷　右同斷齋藤飛驒守様より○一色羽二重十疋　同斷　右同斷戸田靱負様より○一美濃紙十束　一白銀十枚　同斷　右同斷土方丹後守様より○一絹縮十疋　同斷　右同斷一柳主税様より○一色羽二重十疋　同斷　右同斷石川藏人様より○一同五疋　同斷　右同所町御奉行水野小左衞門様より○一綿三十把　同斷　右同所下向之時、上使畠山下總守様より○一桐花紙二百幅宛　同斷　右木下平三郎様より

右御三家様諸方より（按するに、御三家方の事は分條す、）被遣候銀子は二ツ、寶字銀にて被遣候、（以上享保己亥使記錄、）

享保四己亥年十月、朝鮮の信使來聘のとき、かの禮曹參判金演より老中の許に書牘ならひに方物を贈りて、有德院殿御繼統を賀し奉る、老中よりも書儀を贈れりてこを謝す、（こたびかれて宗對馬守義誠に內命ありて、兩國書式等復古せられしにより、また執政贈答あり、）老中以下三使贈答また例のことし、

享保四己亥年、朝鮮國禮曹參判より御老中所司代への（按するに、所司代の贈答は、信使參向道中の條にいたす、）來簡別副幷返簡別幅之寫、

朝鮮國禮曹參判金演、奉書日本國執政姓公閣下、逖聞貴大君嗣有令緒、丕紹前烈、我王殿下思續舊好、耑差使价、奉幣馳賀、所以益篤誠信、克修隣睦之誼也、惟冀輔弼新政、永扶洪祚、不腆土宜、莞領是幸、統希崇亮、不備、

己亥年（按するに、年の下四月の文を誤脫せしなり、）朝鮮國禮曹參判金

別幅　虎皮二張　豹皮二張　段子三疋　白照布十疋　青皮三張　油紙伍部　魚皮十張　鷹子一連　計

己亥年四月（按するに、この頃老中は井上河內守正岑、久世大和守重之、戶田山城守忠眞、水野和泉守忠之なり、）

日本國執政名、敬答朝鮮國禮曹參判金公閣下、遠辱華箋、捧誦數回、貴國聞我大君肇固鴻基、三使告賀、爰贈珍具、隣交之際、禮敬益厚、吾亦蒙嘉惠、而荷盛

眷、喜慰無盡、不知所謝、乃將薄品、略表微意、統希
鑒諒、不備、

享保四年己亥月日　　日本國執政　名

別幅　白銀一百枚　綿一百把　際

享保四年己亥月日　　日本國執政姓名（以上、脫漏、柳營祕鑑、雜話燭談、）

享保三戊戌年正月十四日、宗對馬守より朝鮮人來朝之節、執政へ差越候書翰之名付、如何可仕哉と相窺之、日本國執政源頼直（按するに、頼直は土屋相模守政直の誤りなり、されども政直は享保三年三月、御役御免となる、）如此之書例にて、執政への書例可差越候、執政よりも右の書面、銘々に一通宛可相調候、（以上、柳營祕鑑脫漏、雜話燭談、）

享保四年九月廿四日、奥野忠兵衛様より直右衛門への手紙、左記之、

朝鮮人御老中若年寄中へ相廻候節、官人の人別承度候、乍御六ヶ敷御書付可被遣候、

一右官人座敷へ通り、候面々何様有之候哉、前々御馳走之品も承度候、御書付明朝被遣可被下候、若年寄衆にても同事に候哉、

一先刻御報之趣致拜見候、道中より申來次第、爲御知可被成候、以上、

九月廿四日　　奥野忠兵衛

平田直右衛門様

右返事

先刻は御手紙致拜見候、御老中様方御若年寄衆へ相廻り候、朝鮮人之人別申上候様にと被仰下候、此度は不相知候得共、上上官三人、小童三人、小通事三人、使令六人、下官三人罷越候、此度も同前にて可有之と存候、

一右之節御座敷へ通り候朝鮮人、幷御馳走之品も御聞被成度之由被仰下候、上上官は御書院にて御茶たばこ盆出、白木御縁高に御菓子盛合御出し被成候、對馬守様より相添候家老の者も同席にて、上上官同前に、御菓子被下候、此度も其通と相見え申候、

一小童、小通事使令は、何も中官にて御座候、此者ともは御寄附、奥之間にて御菓子御茶被下候由相見え申候、此度之御書付には、中官、小童、下官之儀見之不申候、左様可被思召候、享保己亥信使記錄、

享保四年十月





一明六日御老中方へ、同七日御三家方へ、上上官幷上官參候節、道筋町々にて商賣仕候儀は勝手次第に候、見物人有之、棧敷を懸候儀、是又勝手次第に候、道節掃部可仕候、以上、

十月　大成令補遺、

享保四年十月六日、老中若年寄へ朝鮮人相廻る、（柳營日次記、御日記、）

享保四年十月七日、（按するに、六日の誤寫なるへし、）御老中廻り道筋登城の節同斷、（鶏林來聘記、）

享保四年九月廿八日上使、同廿九日右之御禮上上官御老中へ參、

一十月六日上上官御老中廻り、

一御老中へ進物、

虎皮三張　豹皮二張　大段子三疋　白照布十疋

青黍皮五張　油荳五部　黃毛筆三十柄　眞墨二十笏　魚皮拾五張

右は井上河内守殿へ禮曹より

虎皮二張　豹皮二張　大段子三疋　白照布十疋

青黍皮三張　油荳五部　魚皮十張宛

右は久世大和守殿、戸田山城守殿、水野和泉守殿へ禮曹より、

虎皮一張　豹皮一張　白照布五疋　青黍皮二張

油荳五部　黃毛筆二十柄　眞墨十笏

右は松平伊賀守殿へ禮曹より（按するに、伊賀守忠周は京都所司代なり、）

人參一斤　色紙三卷　黑麻布十疋　石鱗二斤

白蜜十五斤　松笠一百枚　芝筆二十柄　眞墨十笏　芙蓉香二十枚　鷹子一連宛

右は井上河内守殿、久世大和守殿、戸田山城守殿、水野和泉守殿へ三使より、

人參一斤　黑麻布十疋　色紙三卷　石鱗一斤

眞墨十笏　黃筆二十柄　芙蓉香二十枚　扇子二十柄　柏子二斗　鷹子一連宛

右は井伊掃部頭殿、松平肥後守殿へ三使より、（按するに、この二人は溜詰なり、）

人參一斤　色紙三卷　石鱗一斤　黑麻布五疋

魚皮十丈　黃筆二十柄　眞墨十笏　柏子一斗

鷹子一連宛

右は大久保長門守殿、大久保佐渡守殿、石川近江守殿へ三使より、（按するに、長門守敎寬、佐渡守常春、近江守總茂は、ともに若年寄なり、）

一御老中様方より被下物在之候得共、品々知れ不

申候、以上月堂見聞集、

寛延元戊辰年六月、朝鮮國禮曹參判李匡世より聘使に附して老中の輩に書儀を贈り、惇信院殿御嗣立の奉賀を伸ふ、よて謝書を出す、また三使例のごとく自分の音信贈答あり、

寛延元戊辰年、老中へ朝鮮國より之書翰并別幅

朝鮮國禮曹參判李匡世、奉書日本國執政源公閣下、遡聞貴大君嗣有令緒、克篤前烈、我王殿下思續舊好、專差使价、奉幣馳賀、此誠睦隣敦信之誼也、惟冀輔弼新政、永扶洪祉、不腆土宜、莞領是幸、統希崇亮、不備、

丁卯十一月日　　禮曹參判李　匡世

別幅　虎皮二張　白苧布十疋　白綿紬十疋

黑麻布五疋　花席五張　油苞五部　鷹子一連

際

丁卯年十一月日　　禮曹參判李

老中より朝鮮國へ之返翰并別幅

日本國執政姓名奉書朝鮮國禮曹參判李公閣下、遙惠華簡、薰誦數遍、貴國聞我大君克承前緒、三使來賀、奉幣以陣隣交之誼、禮敬愈睦、吾亦蒙恩惠、以遇盛春、無任歡抃、不知所謝、乃將別幅、庸效寸悃、統希丙鑒、不備、

延享五年戊辰六月日　　日本國執政姓名

別幅　白銀一百枚　綿一百把　際

延享五年戊辰六月　　日本國執政姓名

按するに、延享改元、寛延となりしは七月十八日なり、また按するに、この頃老中は酒井雅樂頭忠知、堀田相模守正亮、松平右近將監武元、本多伯耆守正珍、秋元但馬守涼朝、西丸老中は西尾隱岐守忠直なり、

若年寄へ各三使自分音物按するに、自餘諸向に、三使よりの音物所見なし、

人參一斤　色紙參卷　黃毛筆二十柄　眞墨十笏

黑麻布五疋　石鱗一斤　柏子一斗　鷹子一連

魚皮十張　　計

按するに、この頃若年寄は板倉佐渡守勝清、堀田加賀守正陳、小出信濃守英智、同有德院殿御附は加納遠江守久通、小堀和泉守政峯、同浚明院殿御附は戸田淡路守氏房、三浦志摩守義次なり○以上鷄林求聘詳錄○按するに、この別幅進物の事により、老中衆より宗對馬守への連署あり、因に附載す、

延享四丁卯年九月二日、老中松平右近將監御本丸附被蒙仰、秋元攝津守若年寄より大納言樣附老中被仰付、老中方より宗對馬守へ、朝鮮人信物之儀被申達、其書之趣、

一筆致啓達候、今般秋元但馬守大納言樣附御老中松平右近將監跡被仰付候、依之同席並之通、朝鮮人信物有之候樣に、通達可有之候、恐惶謹言、

九月三日　　本多伯耆守正珍花押

松平右近將監武元花押

堀田相模守正亮花押

酒井雅樂頭忠知花押

宗　對馬守　殿

秋元但馬守大納言樣附老中、九月二日被仰付に付、其旨老中方より對馬守へ通達之處、三使發都以後、信物難成旨被申越、其書之趣、

一筆致啓上候、三御所樣益御機嫌克被遊御座、恐悅奉存候、然は來聘之信使對府到着以來、各中樣御人數之儀、尙又及論談候得共、先達而申上候通、御一人之儀は、三使發都以後承達候故、何分にも啓開難相成國風之由申募候、此上强而論談仕候ても不容易趣に相聞、其上奏府時節可及延引段如何敷、不本意奉存候得共、御差圖を任奉蒙候、近日上船有之候樣可仕候、尤日限相極候はゝ、追而可遂御案內候、此段爲可申上如此御座候、委曲雅樂頭殿へ申上候、恐惶謹言、

三月十七日　　宗　對馬守義如

酒井雅樂頭樣

堀田相模守樣

松平右近將監樣

本多伯耆守樣

右世上沙汰には、御兩卿へ進物失念にて、來朝延引之段、專ら申候得共、虛說にて、右秋元但馬守へ進物之義、申違にても可有之候風聞有之候事故、爰に以記之、朝鮮來朝記、

延享四丁卯年、老中、若年寄中へ上上官相廻り候道筋

東本願寺より東中町、雷門前より駒形町前通り、淺草御門橫山町、常磐橋御門堀式部少輔へ罷越候、夫より小笠原右近將監屋敷後通り、秋元但馬守へ罷越、酒井雅樂頭、三浦志摩守、西尾隱岐守へ罷越、夫より龍之口戸田淡路守、板倉佐渡守、堀田相模守、本多伊豫守、井伊掃部頭、夫より元之道へ罷歸り、松平右近將監、堀田加賀守、水野壹岐守へ罷越し、夫より松平下總守屋敷前通り、本多伯耆守へ罷越候、

一傳奏屋敷前通り、加納遠江守へ罷越、夫より元之道へ罷歸る、（鷄林求聘詳錄、朝鮮來朝記○按するに、この頃の江戸繪圖所見なし、）

寛延元戊辰年五月廿二日

上使　酒井雅樂頭
本多伯耆守
上使　西尾隱岐守
上使　秋元但馬守

大御所樣より
大納言樣より

右は昨日朝鮮人着に付被遣之、同日上上官右上使御出の方へまゐり候よし、（栗園漫抄、御徒方萬年記、）

寛延元年五月廿二日

三使へ上使被成下候爲御禮、明廿三日雅樂頭、伯耆守、隱岐守、但馬守宅へ、上上官相越候事、

覺

一明廿三日、上使之爲御禮、雅樂頭、伯耆守、隱岐守、但馬守へ朝鮮人上上官罷越候、急度固人留には不及候得共、名主月行事罷出、諸事不作法無之樣可申候、尤與力差圖も可有之候間、其趣可相心得候、

五月

覺

明廿三日、上上官御老中方へ參候に付、

一町々看板取入候に不及候、
但本看板之外、安賣之儀有之下け看板等は取入可申候、
一のふれん其儘掛置可申候、
一商賣物往來へ出張有之候分取入、道筋掃除可仕候、

五月

同年六月朔日

明二日、御老中方、若年寄方、松平肥後守、井伊掃部頭へ上上官參候に付、道筋町々にて商賣仕候、義勝手次第に候、見物人有之、棧敷を懸候義、是又勝手次第候、道掃除可仕候、以上、

六月

同月二日、覺

今日上上官溜詰、御老中方、若年寄方へ相廻り候、先達而申渡候通、上上官相廻り候往來横小路へ拂入候節、朝鮮人二三町程も通過候て、往來可致候、

六月

同月二日

今日、御暇上使爲御禮、御老中方へ朝鮮人上上官罷越候、急度固人留には不及候得共、名主月行事不作法無之樣可申付候、

六月以上、大成令纂集、

寛延元年六月二日、井伊掃部頭、松平肥後守、松平讃岐守、老中、若年寄不殘、其宅へ上上官罷越す、官中要錄、

明和元甲申年二月、朝鮮使來聘のとき、かの禮曹參判李潑より、浚明院殿御紹立を奉賀のため、老中の許に書儀を贈るにより、謝して返簡を出す、（老中以下諸向三使贈答ありしなるへけれとも、今その記載を欠く、）

寶曆十三癸未年

朝鮮國禮曹參判李潑、奉書日本國執政源公閣下、逖聞貴大君紹有令緒、克篤前烈、我王殿下思續舊好、尋差使价、奉幣馳賀、此誠睦隣敦信之誼也、惟冀翊贊政化、永扶洪祚、不腆土宜、莞領是幸、統希崇亮、不備、

癸未年八月日　禮曹參判李潑

別幅　虎皮二張　白苧布一十疋　白綿紬一十疋　黑麻布五疋　花席五張（按するに、方策新綱には、花席五張なのせず、）　油芚五部　鷹子一連　際



癸未年八月日　朝鮮國禮曹參判李潑（方策新編、栗園漫抄、）

明和元甲申年、執政復朝鮮國禮曹書

日本國執政源某、敬復朝鮮國禮曹參判閣下、華緘遙至、薰誦數回、貴國聞我大君丕承洪業、信使通聘、慶賀修禮、同在明時、共欣盛事、我亦蒙覃恩、以辱厚貺、懷躍有餘、感謝曷罄、玆將薄儀、聊敦寸忱、鑒諒惟希、不備、

寶曆十四年甲申三月日、日本國執政源某（是まて栗園漫抄同し、）

別幅　白銀一百枚　綿一百把　際

寶曆十四年甲申三月日　日本國執政姓名印

按、諸執政復書文並同此、

（方策新編○按するに、寶曆改元、明和となりしは、この年六月十三日なり、また按するに、この頃老中は松平右近將監武元、松平右京大夫輝高、井上河内守利貞、松平周防守康福、同四丸附は阿部伊豫守正右なり、）

明和元年二月十九日（按するに、信使この月廿七日聘禮ありしなれば、こは廿九日の誤字なるへし、）

上上官御老中へ參向、栗園漫抄、

文化八辛未年五月、朝鮮國通信使對馬國にいたりて來聘あり、時にかの禮曹より、上使小笠原大膳大夫忠德、脇坂中務大輔安董に土宜を贈る、（こたび執政贈答の事なかりしと見ゆ、）

兩上使よりも返物あり、また正副兩使より兩上使を

はしめ、御用掛大目付以下に自分の音物あり、大目付以下よりも返物ありしなるへけれども、今所見なし、

文化八辛未五月廿八日、小笠原大膳大夫旅宿へ、禮曹兩使より音物上上官持參、自注、禮曹より虎皮二張、豹皮二張、白花布十疋、席綿紬、□□、黑麻布五疋、壯紙二卷、眞筆二十柄、眞墨十笏、右臺に居けり、正副使より虎皮二張、豹皮二張、白張白苧布五疋、黑麻布五疋、白綿紬五疋、白木綿十疋、花席二枚、右臺にすへけり、同日夕方右挨拶として、客館へ使者を遣す、自注、脇坂へも贈りし成へし、また其證を得されはのせす、六月十六日、大膳大夫より禮曹へ白銀五十枚、綿五十把、正使へ白銀五十枚、上上官三人へ白銀十五枚、客館へ使者を以て遣す、自注、按するに、脇坂よりも此事有へし、未得されはのせす、（山本氏筆記、）

文化八年

日本兩使臣各按するに、兩上使をさす、こは兩使自分の音物なり、下同し、

豹皮貳張　虎皮貳張　黑麻布五疋　白木綿拾疋　花席三枚

白綿紬五疋　白苧布五疋

江戸接待臣六員各按するに、この六員は、即御用掛林大學頭、正、御目付遠山左衛門尉、佐野肥後守、御勘定吟味役松山總右衛門にして、ともに對馬國にあるものなりふなるへし、

豹皮壹張　虎皮壹張　白綿紬壹疋　壯紙貳卷

黃筆十柄　眞墨五笏近藤某留書、

通航一覽卷之百五　終

# 通航一覽卷之百六

## 朝鮮國部八十二

### ○御三家附御兩典　御三卿　三使贈答　明暦度　天和度

按するに、御三家の贈答、明暦度以前の事今詳ならす、天和度より御兩典、寛延度より御兩卿に音物あり、されとも姑くこゝに慎括して本文に掲く、

朝鮮國來聘の三使より、御三家御兩典及御三卿に、自分の進物を贈る、よて御返物等あり、明暦度のみ、御三家より、かの國王に進物ありし事見ゆ、因にこゝに收む、

明暦元乙未年十月九日

一明十日、御三家へ朝鮮人參上之儀被仰出、御日記、

明暦元年十月九日、朝鮮人今日は上官二人計、御老中へ禮に參候由、御三人方へ明日參候由、朝鮮使來聘記、

明暦元年、朝鮮國王へ銀二百枚、綿二百把、紀伊大納言頼宣より被贈之、水戸中納言頼房も同前、尾張中納言光義よりも同前、紀伊水戸尾張三卿より三使へ銀百枚、綿百把充贈之、幷上上官二人へ銀二十枚充遣はさる、朝鮮往來、

享保四己亥年五月朔日、御勘定組頭奥野忠兵衛、宗





對馬守家來平田直右衛門贈答書中、別紙左記之、

天和信使之節、朝鮮人御三家へ參り候道筋、

一御三家樣へ參候道筋は、本誓寺より傳馬町へ出、本町通常磐橋へ入、堀田筑前守樣按するに、この頃の江戸繪圖に詳ならされとも、今の大手前酒井雅樂頭屋敷東の方にありしなるへし、御屋敷へ行當り、和田倉御門前やよすかし通、日比谷御門より甲府樣按するに、江戸方角安見圖鑑によるに、いまの日比谷御門内御用屋敷の地なり、相務、上杉彈正樣御門前御堀はたを參、糀町へ出、御門際より土居裏を通り尾張樣、紀州樣御兩所樣相勤候而、夫より松平左京大夫樣前按するに、眞享板江戸大繪圖によるに、今の赤坂喰違外にあり、御堀はた罷通、水戸樣へ相勤、罷歸候刻は御堀はたを參、筋違橋御門より入、通り町筋より本町通、本誓寺へ歸申候、

同年同月廿三日、同斷、

覺

當秋三使へ銀子之返物有之衆、御書付出可有候事、

右答

覺

天和信使之刻、銀子之返物有之御方、書付差出候樣に被仰下候故、左記之候、

一銀子二百枚充　尾張中納言樣

紀伊中納言樣　水戸宰相樣御銘々より

右三使中へ

一銀子六十枚充　右御三人樣より

右上上官中へ　以上、享保己亥信使記錄○按するに、この下に大老以下の返物を載す、今分條す、

天和二年

一九月二日三日兩日に、甲府殿、尾張殿、紀伊殿、水戸殿へ、三使より上上官三人つゝ遣之、

一朝鮮人御暇に付、音信遣衆、

銀二百枚　甲府　同斷　尾張殿

紀伊殿　同斷　水戸殿　在國に付於名護屋被遣、

一最前使者に參候者三人へ、銀二十枚充被遣候由、朝鮮來朝記、

天和二年九月三日、朝鮮の三使より使者三人來る、御家老口上聞之、煙草盆茶菓子出云々、御返答述之歸去云々、進上物鷹子一連、人參一斤、虎皮二張、白熙布五疋、芙蓉香二十本、黃毛筆二十柄、眞墨二十笏、際、壬戌九月日、通信使云々、七日銀二百枚三

使へ、同二十枚充三使の使者三人へ、羽織三ッ宗對馬守殿へ、時服二ッ同人家來へ、銀何枚通事へ、右之通被遣之、人見私記載櫻田記、

天和二壬戌年九月

鷹子一連　人參一斤　虎皮二張　白照布伍疋

芙蓉香二十本　黃毛筆二十本　眞墨二十笏

際

壬戌九月　　日本信使 叔麟 朱印

封套　奉呈水戶公閣下、

問一昨日三使所贈相公之土宜、惟錄品數、不具姓名、一楮尾押一印、稱三使所贈、一見印文二字、疑是尹公之字乎、古人於交際自稱名不稱字、以爲通式、右三件竊有所疑、貴國之法乎、願聞之、村願言按するに、秀君筆話に、水戶殿家來中村新八願言と載す、

外國　奉朝鮮國通政大夫吏曹參議知製敎東山尹君使臺書

嘗聞錫疇叙倫、垂之洪範、繼好親仁、謂之禮經、貴國密通本朝、振古抵今、講信修睦、而不渝盟倍約、意其檀君之闢基、千古荒昧、箕子之遺風、百世廣覃、方今使臺、當持節之任、受專對之命、山水之遙、備嘗險難、猴亭之長、不爲無勞、曩者始覩懿範、極增愉快、然朝堂初筵、未飽玄論、唯憾萍水一遇、難於繼見、玆辱嘉貺多儀、感佩有餘、愧罔瓊琚之報、然敢無交際之羞、乃具不腆如別幅、伏冀亮炤、不宣、

奉朝鮮國通訓大夫弘文館典翰知製敎鷺湖李君使臺書

爵然紫氣、望異人過、炳焉星輝、古賢者之聚、天壤之間物皆有感、人誠然矣、嚮旗旄到都、衆咸謂黃星絳雲神朱龍草觀也、屬者在朝堂、一挹清塵、禮典有則、豈敢攄鄙悃、而其藹然和氣、粹然詞容、是知弼乎中者、必彪乎外、宜矣、觀者之驚愕以爲異也、夫遐方君子衡命、握節有至於斯、誠厚幸也、只恨不能聞玄譚奇論、而爲請著五千文字、館舍咫尺、不能邂逅諸君子、把觴歌四牡、亦爲快已、承惠土宜若干、無任良荷之至、謹裁尺一、宣寄衷素、幷致菲儀、聊答來意、豈無媿瓊瑤、永靡相忘也、旋旆在邇、時惟高秋、戒謹霜露、

奉朝鮮國通訓大夫弘文館校理知製敎竹菴朴君書、

夫使於四方、遂桑弧之初心、邀榮名于他邦、實士君子之所希也、臺下奉命、不遑寧處、駙騎載驅、衝雞之梅雨、星槎遠泛、泊馬島之荻風、積水之環九州、煙濤難濟、征衣之亘三季、寒暑既易、匪躬鞅掌之勞、爲何如哉、將幣之日、幸瞻丰采、玉山瓊樹、使人恍然心醉、公庭之儀、禮文有制、恨不能飫叙區々、辱貺貴國土宜、喜荷交併、爰陳芹儀如狀、廻軫不日、把袂無由、參商之別、不堪瞻望之至、萬祈亮鑒、

九月六日　　源光圀頓首

朝鮮國通信正使尹趾完、謹奉復書于日本國參議從三位兼行右近衛權中將水戶侯源公閣下、日者奉對雅儀、寔深傾慕、而公朝之會、非私語之所、終無一言半辭、少抒衷曲、迄今耿々不忘、不意辱賜華翰、寄意勤摯、廼知誠之所在、彼此同然、仍念閣下以明德茂親、協贊新化、仰體貴大君修睦之儀、推此心而眷眷於不佞、具相愛相敬之意、溢於辭表、圭復再三、感荷千萬、第有所一段不安於心者、願此儀狀所附、白金三百兩、名雖餽贐、實係貨寶、古之人未有以金爲幣者、蓋由受之者不免貨取之嫌、而與之者亦非使人安心之道故也、閣下書中、有交際相報等語、執此論之、於不佞宜無可辭、閣下又必曰、自有已事、固無所妨、而特循常之言、變謬之事耳、在閣下則不然矣、窺觀閣下以禮自將、至於簡牘儀式之微、無不一出於禮、眞好禮之君子、今遇好禮之君子、若不以禮相勉、則烏在乎貴相知心之道哉、玆遣舌官、謹將送惠白金、全封還呈、惟閣下諒此區々之意收納、而不爲之嗔恠、則閣下所以禮待不佞者、豈世俗厚幣相贈之比也、回轅之後、嗣音無階、臨書悵然、不知所去、伏希崇照、不宣謹狀、

壬戌九月初七日　　尹趾完頓首

朝鮮國副通信使李彦綱、謹奉復于日本國參議從三位兼行右近衛權中將水戶侯源公閣下、鄰好世篤、修聘有禮、如不佞者、亦忝使价之列、獲覩貴邦儀物之盛、何其幸哉、日朝堂之會、乍接清範、雖公朝禮肅、不敢交私語、河間典刑、固已稟之、而心醉矣、不意玆者寵賜華翰、誠意懇摯、弊詡過隆、盥手披翫、恍如入蘭室接芝眉、而展良覿也、顧不佞何以得比於高明也、第贊用羔鴈、固卿大夫之制、縞紵相贈、古人亦有行之者、而貨而取之、君子之所深恥也、不但受之者爲傷廉、抑恐有傷於愛人以德之義、故所餽白金三百兩、玆不敢領留、謹全封奉還、竊想高明、亦必有以諒此心、而恕其罪也、使事既竣、旋轅有日、山川夐濶、

後會無期、臨紙不任悵悃、伏希崇炤、

壬戌九月初八日　　李彦綱頓首

朝鮮國通信從事官朴慶俊、謹拜復于日本國參議從三位兼行右近衛權中將水戸侯源公閣下、頃陪饗席、獲覩模範、有拘公堂之儀、靡攄嚮慕之忱、迨庸懋々、恒切耿々、不料茲者辱賜華翰、辭旨既眷、副以儀狀數目、又多有以見明公、不廢古人行者必贐之義、而亦可知明公仰體大君、款接隣使之意也、感激于中、嗚謝何已、第惟索金槃產、陸賈貽誚、無處受餽、孟子有戒、今此所貺、雖曰舊例、以金爲幣、實非古禮、何必循常襲謬、違古蔑禮、以自速貨取之刺乎、以閣下禮將之心、而犯無處之戒、使俺等廉恥之道、而有索金之誚、則得不乖於無與無取分、而卒不免於傷惠傷廉之嫌、交與之際貴相知、辭受之節所關不細、幸乞特諒微衷、亟恢盛量、所還儀狀、俾許仍留、別固有得於交與之際、而庶無愧於辭受之節矣、使事既完、歸期已屆、一渡溟海、便隔箕斗、瞻想德宇、不覺悵缺、不宣崇照、

壬戌九月初七日　　朴慶俊頓首

重寄三使臺書

辱賜復札、三四讀之、不覺交梨在口、明月入懷、齒頰馥郁、胸膈洒落、而獎借甚過、恐非所以愛人之道焉、況不佞乏文才、操斧于班門、實不能無恥、何當大方之觀乎、前者所贈是交際之儀、而木李之報也、且有行者以贐之事、承薄物封還、顧夫芹忱之心未能彰乎、抑亦非儀之情不能備乎、我竊惑焉、三使臺閣下清廉高節、過于胡質、踰于陸績、不腆微物、豈容高明傷廉之疑乎哉、況我贈非南越之裝、使臺亦非遊說之徒乎、古人有以黃金爲中幣者、有其辭則皆受之、不以爲傷義、然則於無與無取之道、彼此何傷乎、望請三使臺閣下、克察區々赤心、擴充萬頃弘度、以諒交際之報、則講信修睦之禮成、相愛相好之情通、千萬幸孔勿疑、伏希炤亮、回字倉卒、併呈三使臺閣下、勿罪不敬、

重陽之日　　水戸侯源光國頓首拜

謹封奉復朝鮮國通信三使臺閣下

昨者猥瀝鄙悰、仰渙崇聽、謂閣下諒區々之意、非出於不恭、而猶且悚惕、日夕不安、茲承辱覆、勉諭諄動、深佩眷愛之情、出尋常萬々、況滿紙琳琅、耀人眼目、重幣未蒙枚還、又獲此寶、百朋之賜、何足以喻其輕重也耶、贐行以金、已有故事、凡諸贈遺、皆不敢辭、而獨於閣下縷々煩辱者、誠以閣下飭躬以禮、待人以誠、庶不因循謬例、以盡取與之道、來諭至以芹忱未彰、非儀不備等語、及自引咎、而責之以交際之義、如是而終始固辭、則恐不免爲不恭之歸、茲用黽勉拜領、古人所謂感恩則有知己、則未者正爲今日道也、秋序向闌、日氣漸冷、只祝爲國保重、伏希照亮、不備謹狀、

壬戌重陽　　通信正使　尹趾完
　　副使　李彦綱
　　從事官　朴慶俊

封套奉復水戸侯源公閣下水戸義公韓使往復、

天和二年九月、三使より光圀公へ使者を以、品々を進上致し候、使者に遣し候者は有官と申候、名は朴再興、千承業、洪禹載と申候、此時光圀公御家來大紋素袍を着し、規式嚴重也、三使よりの音物の目錄、

奉呈水戸公閣下

鷹子一連　人參一斤　虎皮二張　白照布伍疋
芙蓉香二十本　黃毛筆二十本　眞墨二十笏

際

壬戌九月日　　通信使

此目錄の仕立樣不禮に付、光圀公より三箇條の御疑ひの問を、御書中村新八に持せて被遣候、新八學士成琬に渡し候得は、成琬開き見て、暫く思案の體にて、何共答る言葉なく、通辭五右衛門を以申は、是は上上官、上判事の者とも司る事なり、我々御返答仕難き由申候、新八是を聞て、左樣ならは此書を留置れ、上上官、上判事へも御相談有之、三使へ達し御返事承り度由申候、通辭五右衛門是はむつかしくならんと思ひしにや、加樣の事は朝三を以て申候樣にとて、辭退に及候に付、夫より小山朝三に按するに、前文に宗對馬守家來と見ゆ、其段を申聞、件の御疑問を請取候、其問に曰、

問　昨日三使所贈我相公之土宜、惟錄品數、不具姓名、尾押一印、稱三使所贈、見印文二字、疑是尹公之字乎、古人於交際、自稱名不稱字、以爲通式、右三件竊有所疑、蓋貴國之法乎、願聞之、

さて二三日過て、新八は朝三に面談致し、御返答はいかゝ被成候やと相尋候へは、朝三申候は、上上官、上判事に見せ候處、皆々こまり申候て、三使へ相達

し不申しては、中々御返答可仕樣無御座候由申候、又新八申候は、私先達申候通、三使へ被爲相達候儀、此方本意に被存候、御自分若御遠慮も候はゝ、此方より對馬守殿へ直に伺可申候、かく申候へは、朝三しからは三使へ申達、御答申候樣に可仕候、此書付に名書無之はいかゝと申候儘、早速新八か姓名を書渡し候、朝三是を三使へ相渡し、光圀公より以使者御尋被成候儀に御座候間、つまびらかに御返答可有由申候へは、殊の外こまり申候、同六日光圀公御家來住野藤右衞門忠英、吉弘左助元常使者として來り、三使へ御書簡幷銀三百兩充被下候、但し十匁を一兩とす、一所へ三貫目、三所にて九貫目なり、同七日小山朝三方より、中村新八方へ狀を以申遣候は、先日の御疑問三箇條、三使へ達し御返答被致候樣、度々申候處、一ッも申開事あたはす、あやまりの段申候、此上せひにと申もいかゝに奉存候、何分御高免の段願申上候、依之以後通信使の禮の弊も改り可申と珍重奉存候、又昨夜の御書簡御文章を、殊外驚嘆稱美仕候と申やりぬ、斯て三使は對馬守へ談し、白銀を辭退致し、先達の三問の御返答も不仕、彼是の申譯に、水戸御屋敷へ上判事三人を遣はさんとせしを、再使其例言に依、對馬守殿達而留られ候故、對馬守殿家來平田隼人を賴み御返簡を差上候、夫より同十三日朝鮮人江戸發足、神奈川の宿にて、光圀公は齋藤平介を御使として、旅宿へ御送りの詩文幷紙一箱充被下候、

儀狀　謹具　送行詩一章　日本紙　共廿品

奉申敬

參議從三位兼行右近衞權中將

水戸侯源光圀頓首拜

按するに、送行詩、この書載する所誤脫多けれは省く、その詩、下の朝鮮遺事に見えたり、

右被遣候紙は、備中檀紙、越前奉書、引卵色紙、加賀の染紙、伊豆の桂紙、是は修善寺紙なり、美濃武儀紙、是は美濃紙なり、武儀郡より出るに依て名とす、常州水戸柔紙、以上七品也、三使大悅、和答を奉り、又御返禮として三使數品を進上申候、平助にも扇筆墨を送る、光圀公御年此時五十五歳、勞君筆話、

天和二年、水府義公送朝鮮來使詩及賜紙品、

奉送朝鮮國東山尹公使日本國歸

萬里勞來聘、三韓尋舊盟、衣冠皆駭矚、草木亦知名、





遽爾已臨別、黯然不盡情、鄉人若相問、文物屬昇平、

奉送朝鮮國鷺湖李公歸本國

星軺持使節、敦好結交隣、邂逅言雖異、慇懃情尙親、寄詩推李杜、分袂隔胡秦、今日君歸去、長爲遠別人、

奉送朝鮮國竹菴朴公之歸本國

雞林交際久、銜命使扶桑、盛禮復難得、良緣不可常、綠陰辭舊里、黃菊惑他鄉、殘夢屋梁月、相思幾斷腸、

常山源光圀頓首

右之通三通共に、白綾に行字に被遊、御自筆なり、綾の長さ四尺六寸、幅一尺四寸、御印三つ、御首印は雪朝遠望、奥には御名御字の兩御印、綾を卷て儀狀の袋内へ御入、三使へ別々に、檜の白箱に入之、

御贈物箱の書付　日本紙

同入日記之寫

備中檀紙　越前奉書紙　越前卵色紙自注、さりのこ紙の事、　加賀染紙　伊豆桂紙自注、修善寺紙の事、　美濃武儀紙自注、美じ紙の事、　常陸水戸柔紙　共七品

三使大悅和答を奉り、且數品を差上、使人にも扇子筆墨等を贈なり、使人は齋藤平助なり、

朝鮮來三使和義公之作三通

敬次送別韻奉呈水戸侯常山源公詞案下

溥儀來賀慶、大信豈申盟、未入扶桑界、先聞水戸名、周旋仰懿範、委曲荷深情、臨別仍相勉、但宜賛太平、

東山尹趾完頓首

敬次日本國水戸侯源公贈別詩韻

海外逢知己、天涯即比隣、一言携手地、傾蓋許心親、使節初辭粤、歸程遠向秦、新詩有餘意、百里問行人、

朝鮮國通信副使李彦綱拜稿

敬次別韻奉呈日本國水戸侯源公詞案下

使節隱槎影、來觀日出桑、河間承好禮、交際荷非常、別意投新句、歸程指故鄉、音容從此隔、安得不回腸、

朝鮮國通信從事官竹菴朴慶拜稿

右立紋紗綾に、各自筆にて書之、

呈義公儀狀　謹具　奉和詩一章　龍鞭黃毛筆二十柄　大折油煤墨二十笏　桃花紙三卷　青藍紙三卷　雲花紙肆卷　黃菊紙伍卷

奉申謝　朝鮮國通信正使尹趾完頓首拜

謹具　奉和詩一章　各色紙十伍卷　大小墨二十笏　各色筆二十柄

奉申謝　朝鮮國通信幅使李彦綱頓首拜

謹具　奉和詩一章　桃花紙二卷　黃菊紙二卷
雲晴一本紙二卷　青花紙二卷　雪花紙二卷　黃
毛筆二十枚　大折油煤墨十笏　中折洒金墨十笏
清心元一本丸二十丸　蘇合元一丸二十丸
奉申謝　朝鮮國通信從事官朴慶賴首拜　朝鮮遣事、

通航一覽卷之百六　終

# 通航一覽卷之百七

## 朝鮮國部

### ○御三家附御三卿三使贈答　從正德度至明和度

正德度以後も例のごとく、寛延度より御兩卿御贈答あり、

正德元辛卯年十一月朔日、詰番井戸新兵衛按するに、即御徒頭、廻狀之內　御三家廻り

一御茶水邊　一御弓町出口　一水戸殿前邊　一水戸殿前邊より市谷迄之內、御堀端出候道々、一尾張殿前邊　一四谷御門內外　一麹町　一紀伊殿前邊　右之通

一御三家方へ上上官　一御老中方へ上官

右之通罷越候由、

十一月二日、朝鮮人御三家方へ相廻候に付、人拂固め、御徒方四組出勤、

御茶水邊御弓町出口水戸殿前迄　井戸新兵衛組共

水戸殿前邊市谷御門邊迄　菅沼圖書組共





市谷御門前より尾張殿前邊御堀端四谷御門迄　土岐內記組共

四谷御門之內より麹町紀伊殿前邊迄　三宅大學組共

御三家方へ參候節道筋

本願寺より筋違橋迄は登城道、筋違橋御堀端通り聖堂前、水道橋通水戸殿屋敷より永見甲斐守前、牛込御門前通市ヶ谷御門前、尾張殿屋敷、榊原七右衞門前より四谷御門へ入、麹町通六丁目より紀伊殿屋敷、御徒方萬年記、

正德元年九月廿七日、獻上御鷹罷越、鷹二十三居、內十居獻上、十三居御三家方へ、

正德元年十一月二日、御三家方へ上上官使者有、以上琉韓記事、

正德元年、三使中より音物、　尾張中納言殿へ

一鷹一居　一人參一斤　一虎皮二枚　一白照布五疋　一芙蓉香三十本　一筆二十本　一眞墨二十挺　水戸中納言殿へ

紀伊中納言殿へ

一同斷　右持參之朝鮮人

上上官三人　小童三人　使令六人　下官三人

小通事三人　朝鮮人へ相附候家老　平田隼人　裁判役寺田市郎兵衞　留守居三浦貞右衞門　徒士四人　通詞二人

弓足輕四人

三使并上上官へ賜物　尾張中納言殿より

白銀二百枚　三使中へ　同六十枚　上上官三人へ

右同斷　水戸中納言殿より

右同斷　紀伊中納言殿より　以上朝鮮聘禮事、

享保四己亥年五月朔日、平田直右衞門より與野忠兵衞への返書、

正德信使之節、朝鮮人御三家へ參候道筋

御三家樣へ朝鮮人參候道筋は、本願寺より寺町通り、廣德寺前上野二王門前廣小路、小笠原右近將監樣、三宅備前守樣、本多信濃守樣按するに、正德三年分間江戸大繪圖によるに、右近將監は稱今の下谷廣小路の屋敷、備前守、信濃守は、ともに今の筋違御門外、神田仲町の邊にあり、御屋敷前より

り御堀はた、學堂前水道橋永見甲斐守樣（按するに、同圖に、甲斐守屋敷詳ならざれども、船河原橋邊にありしなるへし、）御屋敷前、船かはら橋牛込御門通り、一ケ谷御門より榊原忠右衛門樣、河原右近樣（按するに、同圖に、忠右衛門は尾張殿市ヶ谷屋形表門前にあり、右近の屋敷詳ならず、）御屋敷前より（按するに、此間尾張殿に參るの事を脫せしなるへし、）一ヶ谷御門入、麹町六丁目通り紀州樣へ參、右之道筋罷歸、水戸樣へ參申候、

同年同月廿七日、奥野忠兵衛樣より之手紙左記、

天和朝鮮人返物之銀子之譯、御書付被遣之候、乍御六敷正德之返物銀、其外被相贈候品も承申度候、御書付可被下候、

右之返事左に記之、

正德年中、朝鮮人へ御返物之銀、其外之品被相贈候書付寫差上候樣に被仰下、則別紙に書載致進上候、

右手紙に相添候別紙書付左に記之、

御三家樣、其外諸御役人樣より、三使上上官へ御返物之覺、

一白銀二百枚　　三使中へ

一同二十枚充

右尾張樣より

一白銀二百枚　　三使中へ

一同二十枚充　　上上官三人へ

右紀州樣より

一白銀三貫目充　　三使中へ

一同二十枚充　　上上官三人へ

右水戸樣より以上、享保己亥信使記錄、

享保四己亥年十月

一明六日御老中方へ、同七日（按するに、諸記によるに、明六日は五日にして、七日は六日の誤寫なるへし、）御三家方へ上上官幷上官參候節、道筋町町にて商賣仕候儀は勝手次第に候、見物人有之棧敷を掛候儀、是又勝手次第に候、道筋掃除可仕候、以上、

十月大成令補遺、

享保四年十月六日

一朝鮮人上上官御三家方へ罷越、水戸殿へは此度不罷越候、（御日記、柳營日次記、）

享保四年十月六日

一御三家方廻り道筋、下谷通り黑門前廣小路、下谷御成道より昌平橋通り御茶之水、

水戸殿、尾張殿、紀伊殿、歸之節も道筋同斷、（鵝林來聘記○按するに、御日記等によるに、この書水戸殿を加へしは、あらかじめ記せしものと見ゆ、）





寛延元戊辰年六月三日

明四日御三家方へ上上官參候節、道筋町々にて商賣仕候儀勝手次第、見物人有之棧敷候儀、是又勝手次第候、道掃除可仕候、以上、

六月大成令續集、

寛延元年、御三家方へ上上官相廻り候節道筋

東本願寺より黑門通り、下谷廣小路石川主殿頭屋敷脇通り、水道橋外水戸殿へ罷越候、夫より御堀端通り市ヶ谷八幡前、尾張殿へ罷越候、夫より又八幡前歸り、御堀端通り四ツ谷御門、麹町五丁目紀伊殿へ罷越候、夫より元之道へ歸り候、（鵝林求聘詳錄、朝鮮來聘記、）

寛延元年六月四日、朝鮮國三使の役者市ヶ谷御館へ參上御對面所二の間へ通り、成瀨隼人正、石河伊賀守應對、書簡進上物等は請取之、進上物は朝鮮人參等也、先達而宗氏家來差添來り取扱有之、御對面所一の間より東へならへ置て、退出の後御勝手へ取入、宗氏家老も同席へ通す、右席へはむし菓子水菓子等出る、下官輩は御玄關前腰掛に殘り、饅頭被下之等之處、下官は一人も不來、中官以上に付、小座敷一二之間雁之間等席分ありて通し畢、（護花園隨筆、寛延元年、御三家幷右衛門督殿刑部卿殿へ、朝鮮國王より之別幅、

人參一斤　虎皮二枚　白照布伍疋　眞墨二十笏

黃毛筆二十柄　芙蓉香二十枚　鷹子一連　計柳營拾穗集、

寛延元年六月五日、朝鮮人へ被下物、三使へ白銀二百枚、上上官へ銀六十枚被下之、御使布衣番頭、旅宿淺草本願寺へ、（田邸記錄抄○按するに、この書は田安殿屋形の記なれば、被下物とあるは推して知るへし、）

明和元甲申年三月三日四日、別幅音物配、栗園漫筆、

○宗氏信使招待等

寛永二十癸未年、信使聘禮後、宗對馬守義成鈞命により、私邸において三使等を饗應す、また曲馬あり、（寛永二十年及び明曆度は、曲馬の事今所見なし、）以降來聘ごとに必その事に及ふ、

寛永二十年癸未、信使正使通政大夫尹順之、副使通訓大夫趙絪、從事通訓大夫申繻也、義成君先導、七月七日入江戸、義成君蒙台命、饗三使于私館、是饗私館之始也、（本州編年略、）

寛永二十年

寛永二十年七月廿日、應宗太守之佳招、初謁朝鮮

淬溟公、綴蕉詞一首、以代贄奉呈左右、　春齋

郊迓旁軺使、錦帆片々輕、東洋朝日曙、西路島雲晴、
魚縱千尋壑、鵬飛萬里程、風濤安穩處、兩國共昇平、

依宗太守之簡呼、初見朝鮮龍洲公、述俚語一章、

以換東脩、捧于鳥皮右、　同

朝鮮王者使、交道善芳隣、靈瑞知寄物、乾爻見大人、
明珠元在頷、紋彩孰攀鱗、旅館高吟丁、雲與東海濱、

赴宗太守之高館、邂逅朝鮮竹堂公、作野律一篇、

以代投刺、而達於座右、

壯遊經海陸、遠到自高麗、卓爾使臣節、直哉君子姿、
清陰傍砌茂、瀟洒向風垂、滿架南山綠、簡編載幾詞、

以宗刺史之先容、折楊一闋、捧朝鮮淬溟君玉座下、以爲初開聲欵之券、

考　槃　邁

源々千里水、揚厲孰臨深、穩得葦航便、好傳桑域音、
北賓修聘好、東嶼入清吟、借問有何樂、如同知者心、

得宗刺史之引招、村謳一曲、獻朝鮮龍洲君綺席右、以爲初接芝眉之證、

適來專對副、踏破幾山川、三島十洲路、五湖七澤天、
行藏諸葛臥、詩畫伯時眠、他日得雲雨、分恩必沛然、

因宗刺史之容接、鄙歌一拍、呈朝鮮竹堂君淨几前、以爲初對清容之契、

交隣韓國使、日出海東隅、長展凱之讌、時開與可圖、
柯亭煙一色、渭畝綠千區、風節存夷險、人言是丈夫、

次贈林秀才　淬　溟

白雪蜚高唱、千金價亦輕、詞華欺錦繡、文彩妬霞晴、
春氣傳顏苾、心源識聖程、萍逢仍衰々、方覺足生平、

次贈林秀才　同

珍木凌雲秀、奇峯拔地深、今來天外路、始聽鄂中音、
明月分清翫、玄風入朗吟、堪知考槃樂、亦何古人心、

宗使君家酒席和林秀才韻　龍　洲

繡句李長吉、奇書蔡有鄰、誰知窮海外、今見若而人、
冀北驥將老、溟南鵬化鱗、自憐槎上客、十載臥漳濱、

次林秀才韻　同

君如孔北海、我媿謝臨川、濁視相逢地、奇毛欲上天、
莫誇驪水手、應耻枕書眠、壯士差文藝、原頭路坦然、

宗太守酒席次酬林春齋　竹　堂

蓬島靄雲遍、扶桑紅日麗、春林鍾秀氣、玉樹帶芳姿、
天驥蹄初放、溟鵬翼未垂、相尋豈修刺、莫厭枉清詞、

次酬考槃秀才　同

弱冠才如錦、清文動座隅、開名吾已久、會面未曾圖、
脩竹元高臥、扶桑亦別區、使華非到此、那得識潛夫、

顯宗太守林園

一區華館即蓬萊、勝日朱門停晚開、丹閣拂雲金作埒、
錦筵留客玉爲盃、林霞水際時濃淡、海鶴階邊自往來、
惆悵星槎歸去後、夢魂應託此高臺、

宗太守席上　龍　洲

風流太守一時才、甲第穹隆向術開、列屋蛾眉梳墮馬、
滿蔔美酒瀉金罍、

宗太守酒席殊題一律　竹　堂

飛閣出雲迥、疎簾臨水清、身兼五馬貴、掌有一珠明、
寶劒交牙軸、金盤帶玉觥、君家再接宴、相伴使華行、

奉和淬溟公之高韻　春　齋

釜山浦上出東萊、萬里好風煙霧開、滄海波濤龍吐玉、
他邦樓閣蟻浮盃、名高韓地幾年矣、客寓江城數日來、
歸去錦榮何以比、功如漢室畫雲臺、

奉次龍洲公之高韻　同

欣遇三韓專對才、主人屋裏雅筵開、自今彌約交鄰好、
海錯陸毛宜酌罍、

奉嗣竹堂公之高韻　同

馬島牧司第、雅談玉露清、山頭朝霧霽、海岸水天明、
萬里浮龍舳、一堂對兕觥、我邦佳境在、說與附君行、

宗對州席上奉汚淬溟公之高韻　考　槃　邁

砌庭淨埽絕蒼萊、此景此時望眼開、今日相逢則雅曲、
座中交酌舉巡盃、群鷗片々浴波去、萬木蕭々洗暑來、
直使遊人遂忘返、池邊燒了一樓臺、

奉賡龍洲公之嚴韻

本是雞林翹楚才、秋風稱意笑談開、盛筵奇觀須誇說、
彩筆添光映玉罍、

奉嗣竹堂公之芳韻　同

珍重奇遊日、園林秋氣清、詩篇諧律呂、流水鑑虛明、
來往幾停棹、獻酬今洗觥、扶桑千里景、一々入吟行、

附林秀才奉寄羅浮山人　淬　溟

休論萍水即新知、隔海神交歲歷移、一見自堪欣意氣、
百年還合托襟期、昨從蕭寺蒙詩句、今與寧馨共酒巵、
良會世間難再卜、預愁天外費相思、

使君席逢羅浮二郎走贈羅浮公　龍　洲

地部古無雨露邊、尙書才力冠群賢、窓前草帶傳家學、
數千里內無青眼、見爾二郎白髮年、內一作外、

醉贈春齋考槃二難自注、詩有相勉之意　竹　堂

顏苾非貧苾、芳庭玉樹聯、風流殊俗士、經史自家傳、
筆可師懷素、詩宜效謫仙、文章亦小技、大道在而賢、

奉和竹堂君之芳韻　　春　齋

展讀華篇裏、芬芳字々聯、兩邦交際久、千里信音傳、
席上宴三恪、飲中勝八仙、良哉奇遇日、幸甚對諸賢、

奉和竹堂君之詩韻　　考　槃　遙

聞君歌一曲、金奏又殊聯、才望冽山秀、芳聲日域傳、
威儀猶拔俗、筆墨動通仙、拚却異端害、同當學聖賢、
席上宴能、三使將歸、時竹堂筆語、示春齋考槃、吾
當西還之日、君等可再來相見、
春槃答曰、滯留有日則可訪旅館、雖然足下達此旨
於宗太守而可也、太守招我則必不俟駕也、
竹堂曰、吾欲見君輩、豈待宗太守耶、西還之日、當
一邀所館、（自注、先是螺山筆談曰、竹堂次日夕顏卷及春槃之意有焉云々（異國日記、

寛永二十年七月、朝鮮信使尹順之、綿綢中繻來聘を
しとき、春齋弟靖をともなひて宗對馬守義成の宅
に行、三使に會し、席上にて唱和し、他日また贈答
あり、このたひしたかひ來るところの進士朴安期
詩才あり、春齋、靖詩筒の贈答數度に及、寛永譜

明暦元乙未年十月、宗對馬守義成於宅饗應之節、朝
鮮人所望にて、猿舞都傳内か放下有之候、承寛雜錄、
天和二壬戌年九月七日、三使以下宗對馬守方招請
之、七五三饗應有之、其外略之、天和韓聘記、

天和二年

一宗對馬守へ朝鮮人振舞、
一籠扳琴之助、都傳内猿廻し、爲馳走被呼之、朝鮮來朝記、

天和二年

宗太守席上、奉呈三使君、　　整　　宇（按するに、整宇は林春齋なり、）

奉官遊海外、才邁漢三明、風度同中國、鄉望指北城、
離筵歌四壯、使節衣雙旌、相遇無他事、一心竭寸誠、

平太宰席上、奉酬整宇林公、

左海層濤晏、扶桑曉旭明、星槎通日域、使節滯江城、
勝集欣傾蓋、離魂遂去旌、驪珠字々寶、珍重荷深誠、

奉次宗馬州席上韻示韻　　竹　　庵

華堂拚勝會、霜菊焰筵明、秋老重陽節、人淹不夜城、
交懷縱執贄、離魂暗隨旌、前後相思處、佳篇足見誠、

陪馬島太守之宴、呈三大官使、　鶴　　山（按するに、鶴山は人見友元なり、）

秩々賓筵秋興多、庭池晚霽靜風波、紫微雲遠三星彩、



翠蜜園濃四壯歌、

平拾遺席上奉次鶴山韻　　竹　　庵

歡會偏於此夜多、滿林秋影落池波、新交未洽還催別、
愁慝驪駒一曲歌、和韓唱酬集、

天和二年九月七日

今日宗對馬太守饗三使於下谷之宅、同知朴再興、僉
知承業、洪禹載、進士琬李聘齡及諸裨將諸判事童子
等數百人皆至、松平因幡守、松平備前守以對馬守之
外親、各來觀焉、整宇、木順菴及余亦會焉、饗畢、三使
休于側室、因州備州整宇順菴及余喫飯於内室、既畢
倚欄而坐、諸裨將童子、游觀於後園之山假池橋、其中
有相知者、遠視相笑、少焉翠虛滄浪見余儕而步來、
上堦就座、引硯欲筆語、對馬太守之從士等來曰、有
遊戲之觀、整宇及余等猶欲筆語、朝三（按するに、小山朝三、）等曰、
朝鮮人皆好此戲、余儕即止、各到前堂、或有猿戲、或
有幻術、或有飛戲、喧鄙陋太懶看之、整宇謂朝三曰、
此間可謁三使、朝三曰、三使及衆客皆好此戲、暫可
俟矣、整宇不能强之、蕉然而止、余耳語戲曰、朝三何
言、朝鮮三使好猿舞乎、整宇、順菴笑之、衆戲畢既近
黃昏、三使就座、對馬太守使整宇、順菴及余會於三
使、整宇及余使朴同知安判事通言曰、既黃昏宜
退、三使曰、作詩乎、整宇及余辭謝再三、時正使尹東
山把筆書詩、乃頃日整宇及余所寄詩之和章也、於是
整宇賦五言律、余賦絶句呈三使、順菴書頃日所賦之
律詩、既而點燭、其間副使李鰲湖和整宇之詩、從事
朴竹菴和余詩、李鵬溟、洪滄浪亦在座隅、余想若與三
使及翠虛、鵬溟、滄浪等、把筆閑話、或相共酬和、則佳
興太多矣、然草々之間、不能催興、整宇、順菴及余揖
退、而後又供膳於三使、儀畢、三使及朝鮮群輩皆去、
余儕亦辭歸、

同月九日

今日重陽登營儀畢、午後到宗對馬守之下谷宅、堀田
總州、酒井和州、堀田織部相會、少焉元老古河羽林
來臨、對州迎於門而入内堂、饗畢、成翠虛、洪滄浪、安
判事等出謁焉、其餘寫字官畫師小童等亦在外堂、元
老招洪滄浪安省齋書屏風、小童朴成益裹鳳章亦在
座隅、元老使余以筆話問、滄浪曰、當歸告而明改書
以傳致耳、時既夕陽、對州曰、朝鮮乘馬之人在此、可
觀馬藝乎、元老曰、固佳、於是元老到馬場之樹、總州
和州織部及酒井權佐皆至、余引滄浪共入其亭、裨將

鄭泰碩、刑時廷着紅錦戰服走馬、或立鞍上、或筋斗或攀鞍乘地、或仰臥駸々而馳、每馳相叫、如笑如叱、及場末不能停之、乘登墩上而停馬、滄浪書示余曰、所見如何、余曰太奇、滄浪曰、貴國亦有此等技藝乎、余曰有之、然所用稍殊、元老命對州之侍童、勸菓於滄浪、而相顧進席、滄浪曰、不佞無他才識、而兩閣下眷愛特深、不佞將何以報之、余曰、足下奇才、孰不眷愛乎、滄浪莞爾而揖、余曰、騎馬之妙藝、名之曰馬戲乎、所稱何如、滄浪曰、本國稱以馬上才、余見走馬而呼者曰、笑耶叱馬耶、滄浪曰、咆哮用氣之聲也、余曰、不用鞭乎、答曰、不用鞭而馬自走、余曰、足下乘如此乎、答曰、不佞則非武官也、使臣以爲解文詞、啓聞于朝而帶來、其實文學之徒也、然猶能馳馬擊射、敵邦宜騎射、故人多能之、此等甚多、乘馬事畢、元老入內堂、衆客皆坐、滄浪亦就座、安判事及二小童猶在座、於是秉燭、和州問安判事曰、足下見富士爲如何、安判事能通言曰、峯容奇秀、固是第一之山也、和州曰、貴國大山孰是勝乎、判事曰、大山不少、金剛山亦太高峻、滄浪自側書曰、金剛山一名楓岳、一名皆骨山、以上、韓使手日錄、

正德元年十一月四日、曲馬御上覽、此間に對馬守屋敷にて、大名衆御好之御客有之に付、曲馬二三日も有、同七日對馬守屋敷にて三使振舞、琉韓紀事、

十一月十六日、宗對馬守宅へ朝鮮人曲馬四度、諸大名方見物御出、上上官より下官迄不殘振廻被致よし、續談海、

正德元年、三使宗對馬守屋敷へ來り、馳走として鞠の曲、こま廻し等は、三使をはしめ甚感悅して見物す、御能拜見は通詞を以て謠を聞せけり、鞠こまなどは、通辭不入して、天晴才覺の馳走なり、元正問記、

享保四己亥年五月朔日、宗對馬守家來平田直右衛門より、御用掛御勘定組與奥野忠兵衛に答ふる書中、

正德度信使之時

一對馬守宅へ招請之節之道筋、本願寺より新寺町通り、織田山城守前通りより、對馬守屋敷へ參り申候、

一對馬守宅へ三使招請之刻、曲馬之儀は御馳走方より出申候、此儀は不遲御事に候間、重而可申上候由申達、



一正德之節、松平三四郎樣と申候御方御死去に付、俄に出馬差支候故、其分對馬守方より出し、差繕候樣に被仰出、纔の事と申、急成場故奉畏相勤申候、重而箇樣之節對馬守へ不被仰付候樣に、何も樣に被仰上置被下候樣に申上候處、今度は淺野又六郎殿、牧野備後守殿俄に死去故、わり直し六ヶ敷候、乍然當年は左樣之儀は有之間敷由、御挨拶被成候、同年九月十六日、同斷、

一松平對馬守樣へ按するに、御用掛寺社奉行、鈴木左次右衛門致參上、御用人吉田十兵衛に出會申達候は、三使對馬守方へ招請之節、道筋掃除等之儀、當日之儀計にても無御座、信使御當地到着以後は、此方屋敷へ朝鮮人折々用事に付、往還仕事に御座候間、不絶掃除等有之候樣に、御觸被成被下候樣に申達候處、十兵衛被申聞候は、何樣兼而其了簡にて、掃除幷横迫は喰違等迄被申付置候、尤到着砌に罷成候はゝ、又又掃除等之儀、被相觸候樣に可申上旨被申聞、罷歸候、以上、享保己亥信使記錄、

享保四年十月三日、宗對馬守宅見廻老中大目付相越、如官日鑑抄、

享保四年十月九日、於宗對馬守宅饗應、承寬雜錄、

享保四年十月、

一九月對馬守殿へ三使招請、上上官上官等百餘人饗應、過て猿舞し有之、辰松八郎兵衛人形つかひ申候、堺町子共七八人狂言おどり仕候、朝鮮人殊外悅、數多懇望仕候、晝五ッ過に參、夜四ッ時に歸り申候、

一宗對馬守殿江戸御屋敷にて、朝鮮人御振舞被成候節、手づま人形つかひ辰松八郎兵衛、幷猿まはし御よび被成、藝を致させ御見せ被成候由、尤猿廻しは、前々より御見せ被成候例有之候由也、

一十二日、於宗對馬守殿又々曲馬、何も見物有之、以上、月堂見聞集、

寬延元戊辰年六月五日、覺

明六月朝鮮人宗對馬守屋敷へ參り候間、道筋町々諸事入念、相觸候通可相心得候、尤火之元之儀、別而無油斷可申付候、以上、

六月　大成令續集、

寬延元年、宗對馬守屋敷へ罷越候道筋

本願寺より寺町通り、夫より織田山城守屋敷脇前

通り、宗對馬守屋敷へ罷越候、歸候道筋同斷、朝鮮來朝記、鷄林求聘詳錄、

寛延元年

一六月六日、於宗對馬守宅朝鮮人饗應馳走、

番附　一泰平町家正月手づまからくり　一曾我五郎時宗、小林朝比奈、力くらべ荒事、人形手づまからくり、一しやむ島化もの盡し大からくり　一鞍馬山僧正が谷手づまからくり　一高砂尾上の鐘手づまからくり、

猿藝　一長崎をどり連舞、二疋　櫻川、一疋

一若衆たんせん、一疋　一かしまをどり連舞、二疋

一獅子の亂曲、二疋　一五人手つぬくい、同斷附鹽くみ

一輪ぬけ、一疋　一鳥さし、一疋　一籠ぬけ、一疋

一竹の曲、一疋是まて柳營拾穗集同し、

一九日、對馬守宅にて曲馬、鷄林求聘詳錄、

寛延元戊辰年六月八日、覺

明九日朝鮮人之內曲馬之者、宗對馬守屋敷へ參候間、道筋之町々諸事入念、前々相觸候通可相心得候、尤火之元之儀、別而無油斷可申付候、以上、

六月　大成令續集、

寛延元年六月六日、宗對馬守へ招請也、

同九日、宗家において曲馬、官中要錄、

明和元甲申年三月五日、宗家へ信使招請、槃園漫抄、

## 通航一覽卷之百七 終





# 通航一覽卷之百八

## 朝鮮國部八十四

### ○筆談唱和等　從慶長度至寛永十三年

按するに、かの使者來聘ごとに、必筆談唱和あり、天和正德の頃より、その事やゝ盛なり、故にその書類冊をなすもの百有數ヶ卷にいたる、素より悉くこれを枚擧すべきにあらず、この條輯錄する處は、內命等によりてその事に及ひしものは、取取するは論なし、自餘彼此國體朝典に關係すべきの類を主とし、及ぼすに雅趣有跡において、彼等吟詠ありし事等を以てす、その筆談唱和において、無用の雜談清風明月のみの事等は、敢てとらざるなり、

慶長以來、朝鮮國使のとき、江戸旅館本誓寺をあり、馬喰町にはしめ、凡その往還經過の所々において、筆談唱和あり、元和度の事所見なし、

慶長十一丙午年、按するに、慶長十年の誤りなり、朝鮮國使僧惟政松雲來、安するに、この年、松雲及び孫文或講和使として渡來せしなり、拜大神君于伏見城、其留洛之間、先生往彼旅檐而筆語、惟政稱其有讀書之眼、讀耕文集載羅山先生行狀、

慶長十年乙巳二月、京師蕃館與朝鮮使僧松雲筆語、自注、松雲號四明山大師、講性政、

松雲問曰、天何言哉、我欲無言、是何意也、孔子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、是何意、」先生答按するに、林道春なり、下同し曰、聖人以子貢多言、故曰天何言哉、天何言哉、蓋警子貢也、雖然聖人之道、豈可以言而不傳哉、有德者自有言、又豈浮誇荒唐之言爲貴乎、雖然其實理要在學者默識而已、聖人之起居語默動靜之間、自莫不有其敎、與天道之四季次序風雨寒暑晝夜、亦莫非敎、何異是、豈俟聖人之言而後爲之敎乎、故孟子曰、不言而喻者、其斯之謂歟、元亨利貞者、天道之常也、仁義禮智者聖人之敎也、是乃所以聖人與天同德乎、學者不可不學聖人、」問、善哉美哉、旣曰吾無隱、無隱者何在、」答、宋黃太史參晦堂、聞岩前桂香、時以吾無隱乎爾、爲入頭處、禪者所示與儒者所言、豈果相同乎、羅太經曰、豈惟會點之見解、却無顏子之工夫、是言如何、若有示諭者憐我、」問、聖人所以樂者何事也、」答、是周子之所示二程者也、儒者一生之功、夫唯在于此耳、」問、古人以不遠復三字、以成君子一生功業、不可以古之糟粕而已、君之朝夕用心處、又如何、」答、不遠復者、顏子所以不貳過也、成湯旦日改過不吝、以是爲工夫、亦好余工夫、唯在主一

無適、」問、主一至佳、君年未及而立、頗有看書之眼、爲君多之、

此時先生二十三歳、羅山文集○按するに、以上の事は、通信使の時にあらされとも因に存す、慶長十二丁未年五月辛亥、按するに、辛亥は廿日なり、信使、この月十四日江戸を發し、この日駿府に着す、登城、拜神君而退、三使又入正純宅、賜飲食而去、○是時僧元佶自注三娄、號稱足利學校、三使問其名寄書曰、昔秦徐市載上古墳典來於此、想其書猶留到今、願一見之、且聞老帥纂出貞觀政要、欲一閲之云云、佶報曰、徐市所傳來經籍、藏在祕府、不許縱觀、政要纂抄草稿未成、故不能應來意云々、○三使食於正純宅、時林忠按するに、林氏部補法印道春、はしめ惺窩の門に入りし時、惺窩これに名つけて忠字子信といり、邂逅、筆語未半而相引、續本朝通鑑、

寛永元甲子年、朝鮮信使來朝江戸、先生聞副使姜弘重兼春秋館學士、舉疑問三條示之、不能答、又與進士李誠國筆語唱和、自注、誠國號海菴、有能書之名、故先生使彼筆夕顏巷三大字、以爲堂額○羅山文集、

寛永元年、林道春弟永喜、又台德公に奉仕する事先生に相同し、今年朝鮮人來朝す、副使姜弘重は春秋館の學士を兼たりときく、疑問三箇條を擧て是をしめす處に、答ふる事あたはす、一話一言載林道春傳、

寛永元年、今冬朝鮮信使來貢江戸、其副使姜弘重兼春秋館學士、先生因記疑問三則示之、弘重無答辭、又與進士李誠國筆語吟唱、朝鮮專使之不能答先生之問條者、有所素聞其洽才、而且無遑于當務之多事耶、癸未之聘使、按するに、寛永二十年、欲修交誼而不遂矣、進士朴安期一見筆語曰、不佞在海東、聞羅山之名久矣、而後詞札往復、推之爲老先生、且逢此方之畫手、圖其肖影、請先生爲之贊、攜歸以爲榮也、明暦乙未之信使趙珩按するに、正使、同簡于先生曰、嚮因使行聞盛誼素矣、俞瑀按するに、副使、曰、日域之文章、以羅山爲第一、皆是不爲溢美、不爲虛譽也、墜夫本朝之古閎學之人、世世不乏、匪當流俗競唱嘗丞相也、迨乎近世、猶有藤長親探海之學、藤兼良廣覽之務、雖然合併而祇察之、其所觸手之牙籤軸々、彼各未及此之甚多也耶、畫耕文集載羅山先生行狀、

寛永十三年丙子之冬、朝鮮貢使任絖、金世濂、黃床三大夫聘于東武、馬島太守宗義成爲之擯介、有命館之於本誓菴若、其執簡而從者姓權名伏號菊軒、蓋彼國之學士也、余邂逅於三使、萍水相逢而已、且伏出謁者再三、旣而聘禮卒事而還、孟春過洛時、都筑蜀介吉保見伏示其詩、伏乃和之、高會難再、鴻臚之曉、淚雖無從也、新詩有幸、雞林之風物可以觀乎、方今吉保之郎罷、偶到東武、叩余陋室、請求其和、余不知吉保、而與其郎能舊相識久矣、不克峻拒、遂書以塞之、

日本朝鮮隣境連、贈酬金玉韻鏘然、侏離嘈雜不煩耳、兩地心知筆語傳、

庚辰仲冬上浣　　夕顏巷道春

問朝鮮信使

朝鮮國奉命使來爲觀國賓、想其優于仕學歟、平素思問之疑難有多端、先就貴國事跡以質之、

一開說檀君享國一千餘年、何其如此之長生哉、蓋鴻荒草昧、不詳其實乎、抑檀君子孫苗裔、承襲遠久至此乎、恠誕之說、君子不取也、且中華歷代之史、朝鮮三韓傳備矣、而皆不載檀君之事何也、以齊東野人之語故乎、

一箕子遭殷亂、避地朝鮮、或曰、武王封之、然貴國俗稱、箕子來、其從者五千人、故云、半萬殷人渡遼水、此事中華群書未之見、欲知其所據、

一唐太宗之伐高麗也、飛矢中其目而還、故李稽云、那知玄花落白羽、白羽箭也、玄花目也、聞是貴國之美談也、按舊新唐書通鑑、皆無此事、可謂中華諱而不言之乎、鄢陵之戰、晉呂錡射楚共王之目、淮南之役、漢帝中流矢幾殆、皆是記而不諱也、所以爲實錄也、以萬乘之主而傷高麗箭、奈何其得祕而匿哉、然則此非貴國之美談、而一方之私言歟、願聞其辨、

一異國貢調於本邦多矣、況貴國聘使、古今不可勝數乎、就中圃隱鄭夢周當洪武十年、來聘于本邦、即是我永和三年也、按するに、將軍義滿の時なり、距今二百數十歳、聞其久矣、似聞此人性理之學、如有所傳、故有忠義之氣、然要其終、則聞貴國殺之云爾、圃隱有何罪乎、行一不義殺一不辜、聖賢之所不爲也、貴國學聖賢之法、則彼罪狀得其情歟、

一本邦貴介公子講武之暇、頗愛放鷹、故養飼之術不乏人也、貴國李爛所編鷹鶻方書、有草楊、有柏部根、有胡王師根、有野人乾水、想其鄉藥集成有之歟、是何等藥物哉、須據中華之本草而告其異名、若其不然、俟其圖說以廣異聞、又所謂朱砂散、所用猪肝者、家猪乎野猪乎、昔白香山詠鷹云、吾聞諸獵師、今爲養鷹坊者、聊問焉、

一貴國慵齋成文云、湯泉在天地間、自爲一類、受性本然、未必有待而溫也、多在北方寒凉深山窮谷之

問、非由炎氣而成矣、殊就貴國中、往往指示其沸涌處浴浣處以實之、乃排唐子西所謂炎州地性及硫黃礜石之說、雖然水中有火、老槐生火、雨中有雷火、野澤有燐、蜀國井底有火、又火山雖霪雨火常燃焉、知陰嶺寒谷土底無硫黃哉、凡温泉臭多而不臭少、其氣似硫黃、則子西之說未易輕詆、自憐耳目隘、未測陰陽故、請詳其說、

一貴國先儒洪溪、李滉專依程張朱子說、作四端七情分理氣辨、以答奇大升、其意謂、四端出於理、七情出於氣、此乃朱子所云四端理之發、七情氣之發也、宋學膚淺、豈容喙于其間哉、退溪辨尤可嘉也、我曾見其答、未見其問、是以思之、其分理氣則曰太極理也、陰陽氣也、而不能合一、則其弊至於支離歟、合理氣則曰、理者氣之條理也、氣者理之運用也、而不擇善惡、則其弊於蕩蕃歟、方寸之內所當明辨也、大升所問果如何、

寛永十三年季冬八日　民部卿法印夕顏巷道春

以上、羅山文集、按するに、この答今所見なし、

寛永十三年十二月、朝鮮信使來朝、承旨與進士權伋筆語、問朝鮮官制於信使、又揭朝鮮國書中所載疑問數件示之、不能答之、

同年臘月、江府蕃館與朝鮮學士權伋筆語、自注、伋號霜軒、

先生問、按するに、林道春、下同し、唐宋文散官階自二品至五品、皆有大夫之異號、自六品以下有郎無大夫、貴邦官制亦可有階級、今所問則每品其大夫名須記取、」權伋答、唐宋之制、自有當時史籍、而沿革不同、考諸其文可知也已、我國遵倣華制、品級有制、一品正從、則有大匡輔國崇祿之號、而大夫之稱止於四品矣、五品以下亦各有郎稱、」問、中華文散官正從一品、有開府儀同三司等號、無大夫稱、自二品以下有大夫稱、止于五品、今貴邦已依中華官制、奈何相違戾哉、但文官武官淆雜云爾哉、吾聞貴邦官職制法、所定編著板行于世、我朝亦須有其書猶文乎、若今所筆語有不實、則如他日證明何哉、若不能諳記、則考諸貴國官志可也、」答、開府儀同三司即唐之官制也、我國官制、斟酌古今而損益之、若言其槩則中朝之制也、武官階雖高、不得與階卑在官抗禮、則是猶中朝之都督、乃一品武官、而以五品翰林之官、爲御史巡按者也、烏有淆雜之理哉、若夫我國官制板行之語、則既有可考之道、何必以筆端相辨哉、然大約有九品階級、舉一隅則可反其三也、」問、見所答未得其趣、且今洪姜兩譯人記云、二品嘉善大夫、三品通政通訓大夫云々、然今正使通政大夫、副使從事官通訓大夫、由是見之、則人與位相下上者也、疑上加疑、何以得其趣乎、又想中華正議大夫通議大夫、與貴國通政大夫通訓大夫相當歟、雖然小國之卿、當大國之大夫、則通政通訓共是從四品歟、請告其情勿食言惟可、自注、通事洪喜男、姜渭賓共爲嘉善大夫、故云之、」答、洪姜所謂嘉善爲二品者、名實不同、蓋我國官制有散影二規、散者如閑散之謂也、影者如形之有影、只有稱號而不得踐其位、猶唐之賞爵也、亦猶皇朝賞職帖也、通政通訓既是三品之階、而向稱官制板行、則何不考閱以破其疑耶、凡人相交不信則難久、況堂々天下所共知之官制、何可相瞞乎、小國自有卿、大國自有大夫、雖欲引古之語比而較之、三品之崇階、又豈如四品之昇秩乎、中華正議通議之稱、今不可一一記取、而通政通訓之三品、昭若日星、更無可言、」問、人臣有相國左右丞相、是古今之官制也、貴邦亦可有之、欲聞三公之稱、」答、漢時以蕭何爲相國、其後平勃爲左右丞相、則其稱古矣、我國有三公、一曰領議政、二曰左議政、三曰右議政、」問、議政相當大匡輔國崇祿大夫否如何、大匡輔國大夫當相國、又輔國崇祿大夫當左右丞相、有大夫而無公、又無卿乎、」答、相國之階職各異、若幷與階職而呼之、則大匡輔國崇祿大夫議政府領議政、而餘皆類此、其下又有兼職、所謂公卿者、蓋汎稱宰相之名也、」問、正使任統何州縣人乎、其字如何、其望秩如何、常陪王側者乎、按撫巡檢者乎、歷進士登第者乎、副使、從事官按するに、副使は金世濂、從事官は朴慶右なり、准之、請述其履歷行實、」答、我國之決若是、近侍之臣則人不敢呼其字、而只稱其別號、從當何叩而委白、是計三使臣皆是京華望族、而上使登進士捷文科、屢經御史之任、而出入銀臺、常侍經筵之側、副使早歷進士狀元及第狀元、出入玉堂、而且明儒學、爲一世文宗、從事官亦登進士捷文科、歷揚清顯、正笏立朝、方爲執法之官、遠近莫不服其風稜、皆一時之極選也、」問、中國王公世史稱其里閈姓名、往々然矣、貴國殿下亦何不稱其姓諱乎、欲聞其詳而知三使之爲人也、向既稱任統金世濂黃庠、則不斥其名歟、要須告其事、」答、盛敦果爲至矣、以子思子而稱孔聖曰仲尼、則字是別稱之一也、但國中稱之曰、任某官金某官黃某官、而不稱其字、故不

佞亦不敢知也、上使之號白麓、副使之號東溟、從事之號青丘、則稱之有此足矣、不佞少有遺世之志、以詩酒自放於禮法之外、周遊天下、不與世相接數矣、此所以不敢知者也、必欲知之、則從當探知以達焉、

丙子臘月與朝鮮進士文弘績筆語（自注弘績號白眉、）

先生問、除夕逐儺有之乎、」文弘績答、戲子等及十二獸、造像雜戲、有逐鬼之舉、」問、十二獸神號欲聞之、」答、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥等十二獸也、子爲鼠、丑爲牛、寅爲虎、卯爲兎、辰爲龍、巳爲蛇、午爲馬、未爲羊、申爲猴、酉爲鷄、戌爲狗、亥爲猪、」問、後漢書禮儀志、逐儺雖有方良不祥攬諸等諸神之號、後世群書未詳言其故、儺神與邪鬼之名各欲聞之、」答、聖人言理不語鬼、後世何以詳知、」問、聖人不語怪、乃論語所記也、然易云、載鬼一車、又云、知鬼神之情狀、周公能事鬼神、宰我問鬼神之義、孔子告之、故雖聖賢不能不語鬼、貴國依中華既有儺禮、則其神號鬼號、何不有之乎、是以問焉、」答、所示是矣、然周公豈好鬼神而事之者也、是不過敬鬼神遠之之道也、宰我之問、孔子答之、豈亦好鬼神也、吾未詳人事之大焉、知神鬼之號也、儺禮則是亦敬鬼遠之道、豈有他哉、」問、儺禮在季冬晦乎、在立春前夕乎、」答、立春有進退之候、儺禮則非進退也、每年季冬念九日夜半爲之耳、」問、竊聞、天啓三四年之際、（按するに、我敬元寛永の頃なり、）貴國李倧廢李琿而即位然乎、李琿于今無恙否、在草江乎、問君主事、雖難告語、而請其示答、」答、我國邦憲嚴明、臣不敢言君事、不佞不敢依命矣、不佞武人不知文義、閣下問諸學士可也、」問、貴邦有陣法書、紫陽大君作序、紫陽大君想是殿下之天倫也、欲聞其諱、」答、不知紫陽大君之爲人、安知其諱、」問、頭上之毛巾奈何、」答、我國漆市皮入染者也、」問、漆皆皮何皮歟、」答、貴邦有此皮、似猫而體大、色黄而毛膩也、」問、鼬屬而大者歟、」答、然、」問、殿下御諱、或稱倧或稱倧、較欲知其實、又有李侄歟、」答、侄乃殿下同生弟也、臣不敢論君、幸恕亮焉、」問、侄皆有即位之事乎、」答、本無此事矣、有如此事乎、」問、柳川調興之徒、僞造國書、罪發配流、而其徒屬當斬訖、（按するに、ここは、前年の事なり、）貴國能知之乎、」答、我國邊地、距京太遠、僕粗聞如此事爾、」問、然則貴國朝廷、既聞知此事歟、」答、朝廷不知之、」問、貴國官位大匡輔國之上、有左右丞相、相國等乎、大匡輔國、即是相府執政乎、」答、





大匡輔國、是相府執政也、」問、申文忠叔舟（按するに、申叔舟は、我嘉吉元年來りて將軍義教の襲を弔せし專、樓客使覽に見ゆ、）爲大匡輔國、而後兼禮曹參判、不知高官亦兼帶參判乎、」答、往昔之事、實所不知、想其身死後、贈職大匡也、」問、軍旅法、凡吹角、雖中華亦然、貴國角製奈何、以何作之乎、欲聞其形樣、」答、凡此軍旅、作倣中華、非我之製也、其義不知之耳、」弘績曰、思故鄉母而不忘、（自注席間有橘、）」先生曰、今所答有穎封人遺羹、陸績懷橘之心、可見其孝、甚嘉歎之、」先生問、貴邦三淸、一則釜山也、其二欲聞其名、」答、不知之、」問、帽段是何物哉、黑青絹乎、」答、正是正是、」問、深衣之製法、詳載文公家禮、是行來朝人、縫裁之工手知之者乎、」答、我國有劉希慶、嘗善於此、年九十而往年死矣、今有學焉者、而是行亦無帶來者、然考諸家禮、則亦必有可據之制矣、」問、裁縫之工人雖無之、攜深衣而渡海無者之耶、」答、無之、」問、貴國奉秋丁日釋奠之禮、至今無懈耶、」答、不但春秋有釋奠之禮、我殿下三年一謁于聖廟、」問、雲板一隻、雲板何物、」答、雲板未詳知之、但中朝大官坐堂之時、有打雲板之說、以此雅測、則如幸刹之木魚類也、」問、我們此是、我等之義歟、」答、正是正是、」問、耍子謂婦女歟、」答、妻之兄弟謂耍子、而婦女亦謂之耍子、」問、師米師字義如何、精鑿米歟、」答、正是正是、」問、撒酒風、醉之醒歟、」答、醉酒失性、如李布之行也、」問、白硾紙貴國所出紙也、是何紙、」答、雪花紙也、色白、」問、耍們師三字、其音奈何、」答、耍音沙女轉、們音門余稱、師音敗春也、然考其韻解則詳矣、」問、砂貼木貼、此二者何物、」答、以土爲砂貼、以木爲木貼、此盛饌物也、」問、杻炬、松明之類乎、」答、杻小木也、以杻爲炬、非松明也、」問、馬蹄車食、是何膳乎、」答、以眞木合蜜、煮油作果也、」問、七樸床飯、盛饌乎美食乎、」答、盛饌之具、非美食也、」先生問、宴儀時有車食、車食者何、」答、所謂車食者果名也、非果子也、乃以糒蜜合爲果、煎於香油者也、」問、獐皮、是何獸、」答、乃羔也、似羊色白者也、存毛爲羔、去毛爲獐皮也、」問、巳雌羊旱、右四字、古貴邦人來斯土、紳而記之、不會其義、若有其義乎、請聞之、」答、不佞少好學問、晚而投筆、慕班超之志、從事戎間、凡諸文義、茫然迷津、但此四字、以臆說解之、則字畫非篆非眞亦非草也、似是籀文、而恐是前朝之佩物也、巳恐是王字、雌國字、羊似是貴字、旱

族字也」先生曰、右四字如所云、非篆非科斗、今足下以意解說之、蓋是也歟、千歲陽氷、於足下亦可以見之、多可多可、」答、陋鄙淺見、變何寵獎、心實忸怩也、」弘績曰、剪燭夜話、平生之一大幸、而身上有病、如是辭退、臨別黯然之懷、曷有其極、相思一念、未嘗忘于懷也、」先生答、告別而辭、吾儕情多、難以筆而盡、只瞻戀而已、」弘績曰、多謝厚意、以上、羅山文集、

寛永十三年

朝鮮國中直大夫詩學教授菊軒權侊筆話　　石川大拙稽顙

啓朝鮮國權菊軒文丈梧右、西裔東極海、陸萬里、舟中有時、這口無恙使、君到東武、通信節竟盛禮、夫惟闔國之大幸也、大慶也、珍重珍重、

復　學士菊軒敬

風霜辛苦、職分內事也、敬蒙垂慰、感豁良多、

再啓　大拙

是行也、雖欲隨三使君入貴邦見風俗、國制不許自恣獨行、故思而止此、大明與貴邦者接境、到貴邦雜行僧徒、則有獲遊衍乎西湖、經行乎南京耶、吾丈入大明、覩魯鄒之儒風挙跡否、其餘遐遙何國、留連何地、可得而聽、

再復　權敬

謹悉敎意、不覺投袂而起敬也、豈料高衆麋寰、有此卓爾之偉人也、深用敬慕、無以爲喻、不佞亦早有壯遊之志、超然追司馬子長探禹穴、浮沅湘之風、往年涉渤瀚歷青齊、放歌乎燕市之中、翱翔乎鄒魯之鄉、而今從使行、又窮貴國之山川、平生志願、於是乎異矣、得與貴公又有今日之會、則是又壯遊之一大幸也、良荷良荷、

啓　大拙

如書右端、遠遊之願不去心矣、它日若國制無妨、依商舶之便、欲乘跡於三韓、流芳於百世、吾丈有待耶、

復　權敬

各天異地、往來無便、尊公未知緣何得到我邦耶、

啓　大拙

不佞豈以相欺爲哉、何食言、曩則老親在堂、故不遠遊、父母終天年、翅有負米之慕、無捧檄之恩、緣茲數年已還、辭官頤祿、抱病致仕、今隱洛汭、以歌考槃、所以一生不觸女色、無有妻子、行李蕭然、乾坤一浮客、何地不遊、貸恕至禱、





復　權敬

杜陵詩云、旣無遊方戀、行山復何有、此誠悲痛之辭也、不佞室有七十歲老親、而爲官事所迫、奔走東南、望西山之落日者、于命幾歲月耶、分身無術、忠孝難全、遊子之情、誠可慽矣、今盛問敎、自以浮客許身、孝子終身之慕、溢於言表、不佞之周遊萬里、有倚門之望者、能不愧乎、

啓　大拙

講武之暇、雖咀嚼六經涉獵百家、蕭敬踈頑、無一事之可稱于世者、第每有興趣、一咏一吟、樂心於其中、是故蕪音累氣、頗有二百餘篇、幸攜所在案間之舊詘一卷來也、匈歷電矚、可發一粲、

復　權敬

奉讀清編未卒業、而使覺貴邦有大家手也、竊見意圓而語新、法古而格清、何其用力於詩家者、如此之工耶、不可一遭電過以孤盛眷、倘能留置以爲客榻一宵之珍翫耶、大槩三篇之後、惟唐人得詩家之風韻、而宋元以下、雖謂之無詘可也、貴作出入古今、直與大曆諸家、互爲頡頏、則不佞今日之行、不可謂無所得也、亦不可謂無知音落莫而歸也、未知尊公許可也、

朝鮮筆談集、

寛永十三年

啓　大拙

小詩之中至有可取者、幸加鄧斤、巧拙肩淺、勿敢爲皮裏陽秋、

復　權敬

貴詩何待鄙言、而後方可發輝耶、況萬里行役、意思茅塞、恐不敢當此盛意也、

又請　同

東武有道春者、亦嘗再見、而有唱和之詩、未知貴邦以此人爲文苑之領袖耶、願聞之、

復　大拙

所論道春者、別號曰羅浮子、素與吾善、昔日親炙乎函丈之間者有年、彼無書不見、無事不知、數百千言、一過誦憶、最爲我國之儒宗也、吾君於東武有傾蓋之雅言詩之會云云、依於仁遊於藝、東方君子之國、地靈人傑、豈虛豈虛、談何容易呵呵、又有敎授正意者、儒而醫也、博聞强記、殊工文章、是又當時之英才也、四來學者、擔囊負笈、遊其門者、不知幾許、羅浮與正意友善、正意對吾君、有論道問事之文否、各有何論

談哉、

疊啓自注、見予詩卷、如有所得、擊節而歌、予所好者、無不注意、故有此問、　大　拙

近代體製者、凡本晚唐以後詩、上自大漢下至盛唐、古律古風、好之讀之者蓋尠、故曉奇新深遠之幽趣者、百無一二、宜哉詩之不興、嗟軾北虜使者以能詩、示詩曰、賦詩易事、觀詩稍難、詩之難見、自古復爾耳、方今吾君觀詩、何其精哉、何其微哉、詩感於物而形言、所感有邪正、所形有是非、邪正是非、顯然乎詩中、如見余肺肝、則情性之美惡、亦何以獲寂滅哉、可想可惡、

復　菊　軒

正意雖不得見、而以書問答、眞博雅之士也、不佞願以尊公爲貴邦詩家之正宗、以正意爲文苑之老將、其餘亦有唱和之作、而詩不如尊公、文不如正意也、然文或勤讀者能之、詩非天生淸格不能爲也、尊公可謂日東之李杜也、古人以楊伯起爲關西夫子、不佞以尊公爲日東李杜者非妄、實知言也、

歲丁丑之月正、朝鮮學士菊軒權伏與石川大人問答、

啓　大　掘

以正意稱我文壇之將帥、誰謂匪其任、以不佞稱我詩林之宗匠、誰謂當其選、雖然道眼所照、無處遁焉、但以此丹印玉音、冠小詩卷、則寒灰腐草、欵發光輝者耶、是又楚波及晉之謂歟、吁何幸侈旃、感甚擧甚、感甚擧甚、

復　權　敬

窃聞之、惟知言者能言人之善不善、不佞以淺見劣學、得見淸編亦多矣、況崑山之璞、何得玉人之磨琢、然後方見萬丈之光耶、然盛眷至此亦不可孤、惟願尊公老唱白雪、則巴人豈効之者耶、

又請　同

敢問、尊公原任何官、而今君何地、尊諱誰也、軒號何也、抑且貴邦之文人、無敢出於公之右者、而獨屛居、而不爲施設、於當時者何也、願聞之、不佞姓權、名伏、菊軒即號也、

復　大　拙

姓源、氏石川、諱坳、字丈山、假官名曰左近衛、謂別號曰大拙窩、雖爲東照大神言累葉之舊臣、昔不願軍令、獨挺於營中、入死地先登、自後不歸幕下、至今若是而已、大丈夫何銜首級之功哉、況又於文才乎、



復　權　敬

言愈多而意益苦、意益苦而別亦難、不如引刀而斷此情也、情之至者無文、貴詩明日送人完璧如何、人來時倘寄一詩、是明日又相見也、不佞亦當構拙而呈之也、渭城柳綠、灞橋梅發、人生到此、別懷何可量也、唯願珍量千萬、珍重珍重、

爰叩蓬廬、謁朝鮮國菊學軒士權文丈、笔語移晷、

抃躍之餘、卑興一首、拓呈吟梧前、

日本朝鮮隔海瀛、不圖相遇結文盟、使星明日留此地、唱和皇華歌鹿鳴、

寛永丁丑孟陬十又八日

雜泐隱士大拙窩異國日記、朝鮮筆談集、

# 通航一覽卷之百八終



# 通航一覽卷之百九

## 朝鮮國部八十五

○筆談唱和等　寛永二十年明暦度

寛永二十癸未年、明暦元乙未年、三使已下筆語唱酬あり、

寛永二十年癸未七月七日、朝鮮國正使通政大夫禮曹參議知製敎尹順之、自注、字樂天、號滯溪、副使通訓大夫行弘文館典翰知製敎、兼經筵侍講官、春秋館編修官趙絅、自注、字日章、號龍州、從事官通訓大夫行吏曹正郎知製敎申繻、自注、字君澤、號竹堂、來聘、到江戶而館于本誓寺、進士朴安期、自注、字眞卿、號蠟山、又號廣陵居士、十八歲登第、舉進士、從來、其餘從者凡四百人許也、宗對馬守平義成同道而來、岡部美濃守藤宣勝、加藤出羽守藤泰興、爲之館伴、

八日薄暮赴本誓寺賦一絕呈朴進士　春齋

扶桑國裡海隅東、邂逅韓人問俗風、莫恨山河千里隔、狄鞮筆語意相通、

和奉林春齋　螺山居士

萬里扶桑碧海東、孤槎流滯已秋風、逢君不恨聲音別、

幸有靈犀一點通、

漫裁律詩一章呈朝鮮螺山居士　考　槃　邁

交隣修好是英雄、奉命浮槎日本東、颯々新涼吹未已、
熙々丰采意無窮、千年高挂雞林月、萬里遙傳鯷壑風、
且喜遭逢萍水會、一觴一詠一堂中、

和奉考槃邁　螺　山

騷壇獨擅主盟雄、藉甚職名振海東、白馬高談驚莫測、
黔驢拙技媿先窮、相逢定有二生業、異俗寧論百里風、
更得清詩刮塵眼、却敎珠玉滿懷中、

得見清容、於我爲幸、倉卒被小詩以述情、早被惠和章、其神速可歎美也、於是又疊和前韻、以汚朴進士之一覽、

貴國元來隣日東、檀君衛滿舊時風、叔舟圃隱自傳命、兩地千年交會通、自注、時進士有信使之召而起座、不及和之

我家按するに、道春みつからいふなり、春齋考槃邁邂逅朝鮮朴進士、其所唱和詩、偶得見之、不奇遇乎、因賡載以投木瓜、而瓊報不爲不埃云爾、

水陸傳郵渤海東、送梅雨過向梧風、文倫同有太平象、
贏得使星車軌通、自注、時七月九日巳刻、

又

人是鰲頭眞箇雄、情同應不限西東、一方土俗舌猶譯、
千里雲烟路豈窮、對馬島邊看向日、句驪海外任凌風、
聞名未識蓋籌否、襞積難舒逢掖中、

疇昔偶値朝鮮朴進士、迎接唱和、席未暖、有故告暇、以爲恨也、故別綴小詩、且嗣考槃邁律詩之韻響、以同投呈之、自注、金箔墨五錠、聊寓微意、春齋

名顯貴邦登試場、芝眉相接豈相忘、詩盟若稱秀才意、
何處秋風不故鄉、

又

朝鮮進士一時雄、萬里公程東又東、既涉海瀾看水遠、
未曾亭堠笑途窮、萍浮鬱島神仙窟、草偃我邦君子風、
下筆不休知頓敏、唯疑錦繡在胸中、

又寄朴進士　考　槃　邁

螺山居士朴安期者、冽汕之學士、而一時之秀也、是行從三官使來聘庠本邦、余既聞其名、想見其風采、昨日之夕、偶得對見、何慶加之、其威儀動作可觀焉、乃以五十字之卑唱、爲萬里相識之左券、即得高和、其語句筆勢可觀、其敏捷之才、子建之七步、飛鄉之八叉、可幷按者乎、余爲謝其惠、將再颺言、時居士以官使之召故草々去、余亦退、棗瓢之遺憾不可得言、於是遂再嗣響以呈之、自注、金抹墨五塊贈之、莫哨于毛、之鷺





謁看北客翰林雄、國是從來震旦東、驛路雲邊頭屢顧、
故鄉天末眼終窮、多年想像檀君迹、今日猶存箕子風、
請問三韓今古事、毫端抒志白州中、

又次春齋詩韻

太平簫鼓響丁東、早邀金風送凱風、何忘夜來傾蓋後、
神交千里杳應通、

右三通封贈之未達、而入夜進士開封、

此日之暮會朴螺山於岡濃牧假館　春　齋

偶會佳人東海州、揮毫席上最風流、鴻臚館裡認陳迹、
兩國千年一樣秋、

次酬春齋　螺　山

孤舟自幸到鱗洲、況遇詩仙第一流、安得從君開妙訣、
碧桃花下度千秋、

走筆呈朴進士　考　槃　邁

再陪清眄海東陬、元是朝鮮進士尤、八道勝區三浦浪、
願從足下得周遊、

次酬考槃邁

降生疑是攝提陬、才子中間最拔尤、邂逅異邦成勝會、
澹然相對見天遊、

開足下弱冠擧進士、其芳聲可嘉尙矣、以等語爲題乎欲聞之、今玆歲幾哉、」不才謬忝進士、何足稱乎、蓋以詩賦僥倖焉、詩則以圓通禪院感舊賦蜀僧爲題賦、則以麒麟不踐生草爲題矣、不佞三十六年、虛生人世間、倘所謂老苒々、其將至者非、」春齋之歲幾何、」歲二十六、」考槃之歲幾何、」歲二十、」春風顏面似是一樣、或者昆季也否乎、卓識可歎也、實是兄弟也、

口占寄朝鮮朴秀才　夕　顏　巷

進士由來選擧流、星槎浮做海東遊、語言雖異字何異、
一面心知兩地秋、

不佞素聞日東有羅浮先生、今見此詩、非尋常人說話、丈人無乃是耶、」即是、」然則何不早言耶、僕之欲躡清塵久矣、」欲訪對馬太守、美濃太守、而倉卒來此矣、」幸晤語足下惟幸、」偶然相値、天與其便、萍之與水本無情也、況人乎、無情相値、無情相對、正是杜子所謂與君對泛虛舟者也、」今此旅邸、眞勝張氏隱居也、即迷皈去歟、正愧庸陋不及杜工部也、一笑、」足下雖愧子美、然詩蘗子美者乎、

次奉夕顏巷大人　螺　山

一棹來穿碧海流、扶桑拆木作奇遊、留連更遇騷壇匠、
本是傾情數十秋、自注、不佞聞公高名已久、落句所及、非偶然語也、
不佞聞羅山名久矣、疇昔之遇出於稠廣、倘非奉
雅什而接緒言、幾不知吾所慕者在其聞也、及到
館寓、拆見芳緘、又識兩佳士之爲玉胤、夫何博
賢橋梓並鳴一時、樹日域詞林赤幟乎、其盛美益
可尙、已因和高韻、用寓嘉歎、　螺　山
赫々高名冠海東、奇才爭許運斤風、相逢逆旅開詩戰、
怯卒驚開鼓一通、
卓立詞林氣勢雄、頹波一障百川東、九丘八索無凝滯、
周誥殷盤盡究窮、文彩已能成豹霧、扶搖直見上鵬風、
況兼二美能傳業、不羨韋賢在漢中、
又以短律續奉
縱得聞名慣、無由一識顏、那知夕顏苞、即是舊羅山、
意益金樽裡、談清玉麈間、奇逢成宿願、相對澹忘還、
奉酬春齋　螺　山
盍簪佳會共文場、勝事平生不可忘、安得與君遺俗累、
相從結社水雲鄉、
渤澥波深富嶽雄、專稟精氣出天東、蘇公父子名相敵、
荀氏門闌慶未窮、一見幸同蛩蚷意、殊方豈比馬牛風、
不須金鴨添香炷、自有蘭薰滿室中、
奉酬考槃邁　螺　山
萬里奇逢在日東、一團和氣襲春風、堅貞已保黃牛志、
綜核休論白虎通、
太玄何必數楊雄、之子高才挺海東、幸得眼青敦友誼、
自憐頭白坐詩窮、華堂對酒三更月、故國回帆萬里風、
好會古來容易失、莫嫌頻到旅窓中、
謝春齋考槃邁兩公惠金抹墨　螺　山
初訝金丸落手中、磨來硯上彩雲濃、他年兩地傳書疏、
可得憑渠寫遠悰、
拙筆四幅、几隱畫二幅各一封、爲奉兩公、拙筆四
幅、翎毛畫四幅、又奉夕顏苞、足下幸傳達之、
漫嗣朝鮮之進士朴螺山所寄芳響、且謝其惠、繕寫
舊詩幅幷後素若干幀、因貽篷子一箱、以表寸忱
也、非以物矣、
夕　顏　苞
昔日麒麟賦、抗名年少顏、吾元胡蝶洞、君是一螺山、
武野答青願、士岩入白間、善從專對後、規祝錦榮還、
寄朴進士　考槃邁
古者本朝大臣淡海公藤原不比等、奉勅撰官位令職





員令、本邦之官位備焉、其曰義解、曰集解者、先儒皆
註解之也、其後時有增減、世有沿革、然皆無不本于
官位職員令、是官庫之祕籍、而世不多藏之、今足下
欲聞本邦官位之制、其請之甚切、故余不得已、別以
此職原抄兩冊投呈之、此書近世大納言源親房之所
編也、其記職簡而擇矣、又便于披閱、然往々有用國
諺俗語者、蓋中華亦有方言鄉音常談等之字、不慣習
則可不易曉乎、足下其察之、正一位從一位以下者、相
國藤原兼良之所補也、兼良居桃華坊、女官內侍司以
下者、外記清原秀賢之所增補也、悉皆雖無麗華之文
字、頗存職林之舊例耳、不以爲遼豕幸々、余贈之於
足下也、且應足下之懇請、且換餞送之資、且表連日
交遊之信、且爲他年懷望之媒而已、
應朝鮮朴進士之求、題其壽像、自注、進士頃日於美濃守宿坊、遇畫工狩野探幽、請畫其眞、探幽即圖之、進士求余贊識、
夕　顏　苞
繪是日東繪、人是朝鮮人、仙螺累卷石、臥龍裁冠巾、
奇哉朴進士、認假以爲眞、眞假同一理、隱顯共分身、
彼此奈消息、請看手澤新、以上、異國日記、
寬永二十年
寄朴進士
今晨陰晴不定、故三使登府延及十八日、亦是期快晴
云々、想像即時閑暇、可以伸旅懷、雖然聞眼疾爲祟、
頗勞緬懷、蓋是修途之艱辛、水土之不習、酷暑之繁
溽、倩書之懇求、不得止而至此乎、不可不保養也、唯
願銀海之浪華、與空華共開散之遍也、祝玆在玆、昔
韓退之張文昌皆雖病目、然不廢讀書、不停吟詩屬文
唱樂府、足下亦宜然、且子夏丘明之所疾亦在此、未
曾聞抛筆冊、況厥有國語乎、足下所見祟、則不日而
良已、然且養且吟、以不至累日而可也、我所念亦在
玆、或曰、五色使人目亂、或曰、有肉眼、有凡眼、有道
眼、有阿那律之眼、我豈敢哉、心不在焉、視而不見、故
非禮勿視、是所養目、而告足下亦如是、不識謂何、
孟秋十六日
朝鮮朴進士几右
琉球酒一壺、氷糖一小壺投贈之、只恐涓滴之微
也、不堪挹酌氷霜之薄也、難慰煩敲、吁慚赧慚
赧、
螺山家之祖宗乎、出自乎、慶尙道元帥、其諱葳者、以
洪武二十二年與對馬島相挑、是蓋掃賊船也、洋海之

廣也、鼠輩之潛也、非我邦之所能知也、恭讓王賞元帥功、賜衣服鞍馬銀錠、其後三十年之冬、祕書監密陽先生、敦之其諱者、奉使我邦、永堅隣好、爲二國之和親、樾陽村爲序、以色其行、又判事雙雞先生聘于我邦、僑居二歲、作詩感人心多矣、李詹見其行錄爲之跋、皆是貴國千古之嘉話也、距今已過百年、想夫螺山家之出自耶非耶、振古聘禮之來、多々載在國記、置而不言、近世人只聞鄭圃隱申高靈之善專對、而未知密陽雙雞之鳴于兩國之間、方今螺山中學士之選、踰東鯷人之層瀾、歷西海道之艱嶮、而後風飡露宿、馬背車往、漸達于江府、有命寓居一精舍、我偶逢之館伴人之宅、書一詩以代譯語、時見之謂、嘗聞日東有我、而嘉聞其名久矣、即報之以和章、數日唱和數篇、我兒輩亦屢贈屢酬以爲幸、不以爲僥、嗚呼、若夫實爲元帥密陽雙雞之後、則其繼先烈、跨絕域之勳、必不忝祖宗、以揚家聲、而善鳴者在是行耶、然設使同姓異房亦何妨哉、然則密陽雙雞不獲擅美于前代乎、又繼前韻欲使歌之、唯其聲音之有異同、是之懼而已、羅山文集、

寛永二十年

先生按するに、林道春、下同し、六十一歲七月、朝鮮信使尹順之趙絪申濡來朝、自注、順之號涇溪、絪號龍州、濡號竹堂、先生與三使詩筒贈答數回、且與進士朴安期屢筆語唱和、恕也靖也按するに、恕は春齋林恕、靖は考槃林靖なり、亦然、

與朝鮮進士朴安期筆語自注、安期號螺山、

安期曰、不佞素聞日東有羅浮先生、今見此詩、非尋常人說話、丈人無乃是耶、自注、此時互唱和故云爾、先生曰、即是、安期曰、然則何不早言耶、僕之欲蹠清塵久矣、先生曰、欲訪對馬太守美濃太守、而倉卒來此矣、幸晤語足下惟幸、安期曰、偶然相値、天與其便、先生曰、本邦貴介公子好臂蒼鷹者、見貴國所編鷹鶻方論、則其中有未詳者、有藥劑難知者、有飼養法不練習者、足下若聞諸鷹師、以被告示、則摘其方論中不易識、它日可問之也、諾否如何、安期曰、僕不知鷹、知鷹者不來行中奈何、先生曰、貴國陣法有紫陽大君序、是何王之親族乎、敢問、安期曰、我國無紫陽大君、必誤書或傳訛也、先生曰、此書纔一冊、有五行陣法及行伍旌旗皷角之節制、貴國板本、今見在本朝、何曰無之乎、景泰年中人也、按するに、景泰は明景帝即位の年號なり、安期曰、然則或其別號、故未聞也、大君職名無紫陽、先生



曰、馬喫躑躅花、則中毒或病或斃、與羊不異、想貴國馬亦然乎、欲解其毒救其死、而未知藥、請示其藥方爲幸、救物者廣仁之端也、勿爲靳固可也、安期曰、未曾見喫躑躅而病者、未嘗知救藥云、先生曰、躑躅花者杜鵑花也、可得其旨以問馬醫、安期曰、杜鵑與躑躅不同、躑躅有毒、杜鵑花則食喫不妨云、安期曰、不佞來此後、識字之人必求詩文、雖不知字者、亦求拙筆、異邦新知有求於我、義難拒絕、是以一日之間、作詩文幾至數十篇、揮拙筆幾至七八十幅、至夜分不得寐、然而未及應者亦多、紙之積及肩矣、是以紛々無暇、尊太公前日之惠詩、尚一二首未和、公二難疇昔之篇、亦未奉謝、幸須諒之、稍圖隙當爲之耳、曾聞車天輅五山公來貴邦、爲我任力能優爲六、僕則如此、可愧微才之不及古人也、然僕則又兼書寫之事、故益無暇給耶、先生曰、所言固宜然、前日余所告倩書之懇求勞足下盖是而已、車天輅之後才、於足下今又見之、可以嘉奬、及閑暇可知未酬之卑韻、所竢無它、想其日光道中有邉、則疊和優乎有爲也、且明日春齋考槃應宗太守之招赴焉、若謁竹堂君則足下爲先容幸々、如吾兒輩之所告、安期曰、車天輅之詩、今有流傳者乎、先生曰、不多、先生曰、借宗太守便、漫呈卑詞于申竹堂、今暮已得賜和章、感刻感刻、雖以太守奉謝之、猶復憑足下、欲傳謝語、善達之惟幸、安期曰、申竹堂願見公父子、得詩實如披霧、公須更以詩投之、竹堂不厭僕屢更也、謝語當告之如敎、先生曰、本邦畫師狩野探幽初謁足下云爾、安期曰、異地奇遇、良幸々々、筆端風雨可得見乎、幸傳道之、安期曰、欲以數幅携歸故國、我當以拙詩報之、先生曰、可求畫樣、安期曰、隨其所長何必樣爲、然山水翎毛吾所喜、安期曰、先生作我眞賛書其上、又大幸也、自注、此時安期請探幽求其寫眞、探幽即座描之、先生曰、足下之壽肖需拙賛、雖然自賛可也歟如何、若强之不肯辭乎、余亦有請、倩足下以余所有松竹梅之賛、求竹堂君之迅筆、是所欲也、足下爲余點頭乎否、安期曰、自賛不難、而必需公者豈無意乎、幸毋吝一揮筆、松竹梅繪朝送乎僕處、此甚非難也、先生曰、壽像之拙賛、任其求所不辭避也、所請之松竹梅賛、竟竹堂申君之筆、今足下諾之、幸々多謝、明旦可送呈足下、

書序曰、成王既伐東夷、肅愼來賀孔安國、傳云、海東諸夷駒麗扶餘馯貌之屬、陸氏釋文云、肅愼馬融

廣也、鼠輩之潛也、非我邦之所能知也、恭讓王賞元帥功、賜衣服鞍馬銀錠、其後三十年之冬、祕書監密陽先生、敦之其諱者、奉使我邦、永堅隣好、爲二國之和親、樓陽村爲序、以色其行、又判事雙雞先生聘于我邦、僑居二歲、作詩感人心多矣、李詹見其行錄爲之跋、皆是貴國千古之嘉話也、距今已過百年、想夫螺山家之出自耶非耶、振古聘禮之來、多々載在國記、置而不言、近世人只聞鄭圃隱申高靈之善專對、而未知密陽雙雞之鳴于兩國之間、方今螺山中學士之選、踰東鯷人之層瀾、歷西海道之艱險、而後風飡露宿、馬背車往、漸達于江府、有命寓居一精舍、我偶逢之館伴人之宅、書一詩以代譯語、時見之謂、嘗聞日東有我、而未聞其名久矣、即報之以和章、數日唱和數篇、我兒輩亦屢贈屢酬以爲幸、不以爲儌、嗚呼、若夫實爲元帥密陽雙雞之後、則其繼先烈、跨絕域之勳、必不忝祖宗、以揚家聲、而善鳴者在是行耶、然設使同姓異房亦何妨哉、然則密陽雙雞不獲擅美于前代乎、又繼前韻欲使歌之、唯其聲音之有異同、是之懼而已、羅山文集、

寛永二十年

先生按するに、林道春、下同し、六十一歳七月、朝鮮信使尹順之趙絅申濡來朝、自注、順之號涕溟、絅號龍州、濡號竹堂、先生與三使詩筒贈答數回、且與進士朴安期屢筆語唱和、恕也靖也按するに、恕は春齋林恕、靖は考槃林靖なり、亦然、

與朝鮮進士朴安期筆語自注、安期號螺山、

安期曰、不佞素聞日東有羅浮先生、今見此詩、非尋常人說話、丈人無乃是耶、自注、此時互唱和故云爾、「先生曰、即是、」安期曰、然則何不早言耶、僕之欲蹠清塵久矣、」先生曰、欲訪對馬太守美濃太守、而倉卒來此矣、幸晤語足下惟幸、」安期曰、偶然相値、天與其便、」先生曰、本邦貴介公子好臂蒼鷹者、見貴國所編鷹鶻方論、則其中有未詳者、有藥劑難知者、有飼養法不練習者、足下若聞諸鷹師、以被告示、則摘其方論中不易識、它日可問之也、諾否如何、」安期曰、僕不知鷹、知鷹者不來行中奈何、」先生曰、貴國陣法有紫陽大君序、是何王之親族乎、敢問、」安期曰、我國無紫陽大君、必誤書或傳訛也、」先生曰、此書纔一冊、有五行陣法及行伍旌旗皷角之節制、貴國板本、今見在本朝、何曰無之乎、景泰年中人也、按するに、景泰は明景帝即位の年號なり、安期曰、然則或其別號、故未聞也、大君職名無紫陽、」先生



曰、馬喫蹶蹋花、則中毒或病或斃、與羊不異、想貴國馬亦然乎、欲解其毒救其死、而未知藥、請示其藥方爲幸、救物者廣仁之端也、勿爲靳固可也、」安期曰、未曾見喫蹶蹋而病者、未嘗知救藥云、」先生曰、蹶蹋花者杜鵑花也、可得其旨以問馬醫、」安期曰、杜鵑與蹶蹋不同、蹶蹋有毒、杜鵑花則食喫不妨云、」安期曰、不佞來此後、識字之人必求詩文、雖不知字者、亦求拙筆、異邦新知有求於我、義難拒絕、是以一日之間、作詩文幾至數十篇、揮拙筆幾至七八十幅、至夜分不得寐、然而未及應者亦多、紙之積及肩矣、是以紛々無暇、尊太公前日之惠詩、尚一二首未和、公二難疇昔之篇、亦未奉謝、幸須諒之、稍圖隙當爲之耳、曾聞車天輅五山公來貴邦、爲我任力能優爲六、僕則如此、可愧徵才之不及古人也、然僕則又兼書寫之事、故益無暇給耶、」先生曰、所言固宜然、前日余所告倩書之懇求勞足下、蓋是而已、車天輅之俊才、於足下今又見之、可以嘉奬、及閑暇可知未酬之卑韻、所竢無它、想其日光道中有邉、則疊和優乎有爲也、且明日春齋考槃應宗太守之招赴焉、若謁竹堂君則足下爲先容幸々、如吾兒輩之所告、」安期曰、車天輅之詩、今有流傳者乎、」先生曰、不多、」先生曰、借宗太守便、漫呈卑詞于申竹堂、今暮已得賜和章、感刻感刻、雖以太守奉謝之、猶復憑足下、欲傳謝語、善達之惟幸、」安期曰、申竹堂願見公父子、得詩實如披霧、公須更以詩投之、竹堂不厭僕屢更也、謝語當告之如敎、」先生曰、本邦畫師狩野探幽初謁足下云爾、」安期曰、異地奇遇、良幸々々、筆端風雨可得見乎、幸傳道之、」安期曰、欲以數幅携歸故國、我當以拙詩報之、」先生曰、可求畫樣、」安期曰、隨其所長何必樣爲、然山水翎毛吾所喜、」安期曰、先生作我眞贊書其上、又大幸也、自注、此時安期請探幽求其寫眞、探幽即座描之、」先生曰、足下之壽肖需拙贊、雖然自贊可也歟如何、若强之不肯辭乎、余亦有請、倩足下以余所有松竹梅之贊、求竹堂君之迅筆、是所欲也、足下爲余點頭乎否、」安期曰、自贊不難、而必需公者豈無意乎、幸毋吝一揮筆、松竹梅繪朝送乎僕處、此甚非難也、」先生曰、壽像之拙贊、任其求所不辭避也、所請之松竹梅贊、覓竹堂申君之筆、今足下諾之、幸々多謝、明旦可送呈足下、

書序曰、成王既伐東夷、肅愼來賀孔安國、傳云、海東諸夷駒麗扶餘馯貌之屬、陸氏釋文云、肅愼馬融

本作息愼、北夷也、馯戶旦反、地理志音寒、麗力支反、孔穎、達疏曰、漢書有高駒麗扶餘韓、無此馯、馯即韓也、音同而字異爾、余謂高駒麗一作高句麗、即高麗也、馬韓辨韓辰韓謂之三韓、所謂新羅高麗百濟也、新羅一名雞林、若孔疏則三韓亦當曰三馯、昔肅愼人來于日本、載在日本書紀、又我朝聖武帝時、渤海王以使者獻書狀幷貢物云、高麗國亂、去都逃移渤海、此蕞爾小國耳、太元之末、高麗國大臣門下侍郎李成桂遂乘勢篡國、幷呑新羅百濟、分國郡爲八道、洪武年中、李氏請大明、乞改國號曰朝鮮、大明許之、故其後聘使齎國書來、皆曰朝鮮國李某、至我朝寬永年中、彼用大明年號崇禎、○又按、肅愼今可在韃靼中、以上、羅山文集、

明曆元乙未年、韓人來聘、孟冬二朞到江戶、時堂慈之恙既免、鉅鰲如向者所言、是故余與向陽兄相遞往彼寓館、相逢學士、而筆語吟酬、又各呈詩章于彼三官使、皆有和答、此度正使通政大夫趙珩、號翠屏、五十歲、副使通訓大夫兪瑒、號秋潭、四十二歲、從事官通訓大夫南龍翼、號靈谷、二十八歲、學士中直大夫李明彬、號石湖、三十五歲、譯官軍官書者畫者樂工脈子等凡五百許人、群下之衣裳穢陋、飲食卑猥、臥起一衣、上下同器、其不足觀也、固既如此、雖然三伊及學士儀狀不野、文藝不乏、其登營之拜謁、余之所親覩也、又二荒山殿堂之稽顙、揖拜人之所告語也、且此四人之吟詠、其格體語句、大槩相類、儘有工拙、不可謂無中華之遺風、余與三伊不接而逢、唯瞥見兩回而已、石湖會晤至再至三、顏情頗熟、屢問色變如何、又問天只違和如何、則彼所蘊之孝志可推知之、所寄贈之詩律、必嗣響互無債負、則彼所勵之才調、亦可以見矣、三伊亦非嫌對遇于此邦之人、苟與文士筆談唱和、且聞知日域之典故、則必欣喜而欲爲東遊之所得也、惟是所伴來之人、所通譯之屬徒、自調護之、妄自尊大之、不肯許彼此之觀見也、無奈時勢而已、世人靡然、以壺谷爲今般博洽第一、彼僅四七之齡、而備聘使之員、故喧傳焉耳、既是雖不爲流輩、而何獨特勝乎、秋潭裁百五十韻之長律、歸程發府之前日、寄達之于羅山老爺、以需其和想、彼爲衒夸才華于兩邦之故也、於是老爺老懶、雖似不堪技癢、而木扣則鐘不能不鳴、故和篇速成、追及於相州小田原投之、聊復小快哉、夫對隣接壤之文友胥値、唯是談學論文、況與韓客目擊肩拍、眞是邂逅之事也、倩毛穎以討論經史、遞詩筒以陶寫性情、是學者之所可爲也、且夫韓客之往還也、途中經營、館內之供設巨夥矣、浮奢矣、彼棧山航海之勞勤、唯是一入金城、拜台顏而足矣、攀躋黑髮之岑、而上香恭敬、歸府乃賜官暇、昔者滋野貞主之入鴻臚館、簡寄蕃客也、菅原禮部之與渤海裴大使詩韻交響、是本朝前世之美談也、今則無之、非一大闕事乎、儻有上之所命、則余雖不敏、豈不躡二公之淸塵乎、況又有老爺家兄之文陣、堂々乎所言既長姑舍是、余侍病之故、書史不展于案頭、筆硯不觸于手裡者、日子不少、又有韓客之事、而往々多務、余之報章遲怠、以此幸勿訝焉、讀耕文集明曆元年寄丈山丈人書、

明曆元年十月、朝鮮聘价趙珩兪瑒南龍翼來貢、既到大坂、見先生按するに、林道春、所裁五花堂記、同感賞之、入府之後拜禮畢、而三使贈土宜數品于先生、亦是丙子癸未之舊例也、按するに、寛永十三年、同二十年をさす、先生寄詩章而唱酬焉、既而御回簡執事之復書如前規、至將發府、而俞瑒自注、秋潭、號、投扶桑壯遊百五十韻、以求嗣響、先生即辰燈下和之、靖隨其口占而筆之、一人在側、就其數句成而繕書之、翌日早竣、乃速馳達于小田原、秋潭愕然、大稱譽之、作詩幷序以謝之、先生復次來韻、追及於中途、世皆以爲曠古之偉事、日域之快談也、讀耕文集戰羅山行狀、

明曆元年、和奉源吏部君倭歌末字幷序、

今歲八月下旬、朝鮮信使繫船於播州室津待風、留滯三四日、室津今隸姬路城、城主吏部大卿源君到室津接待之、饗應之、一日招石湖李學士於其假館、石湖賦律詩一篇、以述海邊之景、其次日中達紹柏兩禪衲執謁、君咏倭歌、以祝信使來朝、兩衲作詩和奉之、既而踰月、信使到東武、聘儀事畢、賜暇發途、時仲冬朔日也、是月下旬、君不俟信使歸路過室津、而裝五馬以來東武、季冬中旬到麾下、即日我弟春德訪君、被見石湖詩、乃是彼自筆也、春德寫之以歸、翌日余往候焉、君被示其咏歌、使侍史謄之而退出、經日春德和石湖詩以呈之、於是余亦撮君之倭歌末字以爲韻、捧絕句一首、且次石湖韻、同奉贈之、

海路要樞兵衞森、使船偶到自鷄林、高歌感動異邦客、
添得雲山韶濩音、自注、和石湖之作見別卷、然以其見前、故今不贅於此、

答李學士問

後柏原天皇　後奈良天皇　後陽成天皇　名諱、年壽

此後天皇幾世、而哉父子相傳、兄弟相傳、男皇女女皇、及改元年號幷詳示、

關白次序　官位次序　名山大川　幷詳示

右朝鮮國學士李石湖就茂源禪師問之、方今官事頻繁、且聖善疾病未愈、故不遑詳記、然以其所請難默、故粗抄出如左、

人皇百五代
後柏原天皇　後土御門天皇之子、御諱勝仁、改元三、文龜、自注、三年、永正、自注、七年、大永、自注、六年、在位凡二十六年、壽六十三、

百六代
後奈良天皇　後柏原天皇之子、御諱知仁、即位翌年、猶號大永七年、其明年改元享祿、四年改元天文、至二十三年改元弘治、其三年崩、在位合三十二年、壽六十二、

百七代
正親町天皇　後奈良天皇之子、御諱方仁、即位翌年改弘治、四年號永祿元年、至十二年改元元龜、至三年改元天正、其十四年內禪、在位合二十九年、其後七年而崩、壽七十一、

來問脫此帝、故補書以示之、

百八代
後陽成天皇　正親町天皇之孫、誠仁親王、自注、陽光、諡之子也、御諱周仁、以親王早世、故受祖皇禪、天正十四年即位、其明年不改元、猶號天正十五年、至二十年改元文祿、歲在壬辰、即是我國關白豐臣秀吉有大事於貴國時也、至四年改元慶長、其三年秀吉薨、我兵自貴國班師、慶長十六年天皇內禪、在位凡二十五年、其後七年而崩、壽四十七、

百九代
太上法皇　後陽成天皇之子、御諱政仁、慶長十六年即位、其明年未改元、而慶長二十年、而改元元和、至九年而改元寬永、其六年內禪、在位十八年、近年薙髮號法皇、

百十代
太上天皇　法皇第一皇女也、御諱某、寬永六年受法皇之禪即位、其明年不改元、猶用寬永七年、至二十年而內禪、在位十三年、

百十一代
後光明天皇　法皇之子、太上天皇異母弟也、御諱紹仁、以寬永二十年即位、明年改元正保、其五年改元慶安、其五年改元承應、其三年甲午崩、在位凡十二年、壽二十一、



百十二代
今上皇帝　法皇之子、後光明天皇異母弟也、御諱某、去年甲午踐祚、今茲乙未改元明曆、

關白次序　本朝之古任大臣者執國政、又置大連官、與大臣相並用事、其後有左右大臣、又立太政大臣官、而冠左右大臣之上、號三公、又有內大臣、其位在公卿之間、清和天皇幼歲即位、太政大臣藤原良房以外祖攝政、自注、號忠仁公、其嗣太政大臣藤原基經相續攝政、陽成天皇在位不良、基經行伊霍之事、立光孝天皇、光孝春秋既高、故基經復辟、然萬機皆先關白於基經、自注、號昭宣、本朝關白之職昉於茲、自是以來、基經子孫嫡流連綿執柄、帝幼則攝政、帝長則爲關白、天下事皆決於關白、而天皇垂拱而已、縱雖任三公、大臣者不居關白職、則唯擁虛位耳、如此者二百餘年、然平清盛以武人勃起於朝廷之間、源賴朝創主將之業關東以來、闔國皆入武家之手、朝廷陵夷、關白有而若無也、豐臣秀吉生於匹夫之間、謀略勇猛、幷呑日域、觀兵威於貴國、且震動大明、時自號關白、凡武人之爲關白者、本朝古來秀吉唯獨也、

官位次序　我朝之官制、詳備於官位令職員令、然藏在官庫、余既閱之、先賢亞相源親房據二令、而作職原抄二卷、簡而易見也、刻梓廣行於世、今寄一部於足下、故不詳言之、

名山大川　五畿七道之廣也、六十餘州之多也、山之名者、川之大者、豈可勝計哉、我是京洛之產也、今在東武、曾奉命登日光山、且有官事、赴南紀高野山、沙汰僧徒、其所經歷者十餘州、其間名山大川既多、況余所未見者、所未聞者乎、詳載於本朝風土記也、其事跡顯著於國史及小說者、余所臆記不爲不多矣、然旅亭留滯倉卒之間、談何容易哉、

乙未十月下旬

日本國

禮部法眼春齋林子記之　以上、向陽集、

明曆元年

逸書

朝鮮來貢使表請曰、仄聞徐福來日本時、齎先秦之書以往、故歐陽脩詠日本刀詩有云、徐福往時書未焚、逸書百篇今猶存、想夫其科斗篆字之典謨訓誥、幷諸經傳亦有之乎、使臣幸覩國光所望請者、許一窺其古書、何幸加旃、平生所念在茲、今表請以聞、不堪懇歎之至、

## 箕子國聘禮使

居諸

日本國玄蕃寮下

王仁論語

百濟國人來貢于本朝、居之鴻臚館、時其人有請望于菅江之門、其詞云、

辨韓國信使、私致書日本國大學寮曹司、昔聞弊邦使价王仁持論語來于貴國、仕應神帝爲博士、蓋以世而記之、當于西晉之初、其所齎獻其論語白文而已乎、魯歟齊歟柳古歟、漢儒訓說乎、何氏集解乎、行于今世者、文字有小異、故願見焉、曹司爲貴國儒宗、想須傳受有在、請其示諭、

月日　　辨韓國信使某致書

日本國大學國子監曹司

以上三卷、百問及問條二十七件、所示恕靖也、先生或稱二木子、或稱老林、又稱大林、恕稱仲林、靖稱叔林、共設詞擬問對之禮也、合編之爲一書、號曰攻堅從容錄、取諸學記之語也、自注、寛永十七年庚辰之冬、

任筆百問　闕、

丙申之歲所作未脫藁、而罹丁酉之災、羅山文集、

明暦元年、

百濟國人來貢于本朝、居之鴻臚館、時其人有請望于菅江之門、其詞云、

辨韓國信使、私致書日本國大學寮曹司、昔聞、弊邦使价王仁持論語來于貴國、仕應神帝爲博士、蓋以世而記之、當于西晉之初、其所齎獻其論語白文而已乎、魯歟齊歟柳古、漢儒訓說乎、何氏集解乎、行于今世者、文字有小異、故願見焉、曹司爲貴國儒宗、想須傳受有在、請其示諭、

月日　　辨韓國信使某致書

日本國大學寮國子監曹司

日本國大學寮曹司、復書百濟國奉命使旅館下、風波不揚、使人安穩、陸車海舟、不辭萬里之遙、山礪河帶、無逾二國之盟幸幸、聞貴國與中華交際不絕、則文獻之徵可知而已、方今足下當專對之任、其風采可想、欲日叩館下謁清容、然曹中有事而未果、忽得尺素、晤言惟同、夫貴國王仁以本朝應神帝十六年乙巳來、乃晉司馬炎太康六年也、其所持到論語爲白文歟、爲魯齊柳古歟、未可考焉、然西漢張禹始合魯齊、東漢鄭玄考合三論爲定本、則此本乎、其註解孔安國馬融鄭玄等所作乎、如何氏集解、則成於曹魏之時、晉



距魏甚近、則其未及行於外國乎、漢儒訓說已久、則必行於外國、然豈白文而已哉、如文字不同、則傳寫之誤、習受之異、擇之而可也、所謂卒爲五十、井有仁之仁當作人、一章有兩子曰字之類、傳寫之誤也、菜羹瓜作菜羹必作而樂之下有道字之類、習受之異也、足下思之、王仁本者藏在官庫乎、雖我輩不容管見、故不能應足下之求、如今所告則愚意之所推察也、我輩苟生於弓治之家、雖遊于經史之林、不敏而不有新得之、然我邦先覺之說、頗與有開焉、又有私淑於人、邂逅在近、使管城子爲狄鞮則善矣、不宜、

烏兎　日本國大學寮東曹司文章博士菅原道文

同寮西曹司吏部郎中大江音綱

辨韓國來聘使某座下、鷲峯林學士文集、

明暦元年乙未六月より御宮御建立有、按するに、武藏國橘樹郡稻毛領中丸子村羽黑大權現なり、御本社とちふき、拜殿こけらふき、色々の彫物仕、極さいしきなり、明暦二年丙申の二月八日に御遷宮あり、誠に古今の建立なれはとて、御宮の額を朝鮮人にかゝせけり、

羽　乙未孟冬

大權現

黑　朝鮮國雪峰

とあり、緣起によりてみれは、乙未は明暦元年なるへし、調布日記載緣起○按するに、この書、因に姑らく存す、

通航一覽卷之百九終

# 通航一覽卷之百十

## 朝鮮國部八十六

○筆談唱和等　天和度　正德度

天和二壬戌年信使の時、水戸中納言殿儒官を、かの客館淺草東本願寺に（本願寺類燒によりて、この年より客館となれり、）遣はし筆語せしめらる、自餘吟唱あり、正德元辛卯年筆話唱酬の輩、命によりて裝束正服にて應對せり、

天和二年壬戌八月廿一日

一朝鮮國の三使名は、尹趾完、李彦綱、朴慶俊といふ者江戸に來朝す、光圀公是を聞給ひ、林春常方へ仰被遣候は、朝鮮の三使江戸滯留の內、彼是御問被成度由、夫より案內給はるへきとの御事也、依之春常より宗對馬守義眞の家來小山朝三と、內藤左京亮の家來大高淸助と兩人に、右の思召の段を達せられ候に付、光圀公御家來今井小四郎正興、中村新八顧言、并森指月此三人を被遣候處に、小山朝三又對馬國の町人加勢五右衞門通辭として、右兩人朝鮮の學士成琬と言者數度參會いたし、其外宮鄭牛俊、又は金指南、印劍覺、鄭文客なとゝ言者に對談いたし、禽獸草木地名器物國字等の事、其外被仰付候事共を相尋、折々の參會なり、（秀若筆話、）

天和二年

一朝鮮人來貢の時、新八仰付られ客館へ節々參り、或學士參會仕候、此時御自身の御官衞御名字を書付、學士へ見せ候樣に仰付らる、小山朝三諸事取持候か、新八へ申候は、御三家は日本の宗室にて類無之尊貴に御座候由、內々朝鮮人に申聞置候、然處に參議三品なとの御官位を承候は、存の外に思可申候、見せ申候處、無用に仕度由申候、其段申上候へは、朝三了見不宜思召され、御三家と稱し尊大の樣に相見え申候、類すくなきかと存候へは、漸く三品の官人にて候、左樣に候へは、此上高大なる官祿の侯伯幾人も多と存候程、日本の規模になり申候間、有躰に申聞候樣にと仰付らるなり、（義公遺事、）

天和二年

一酒井大和守忠國、天和二年八月朝鮮人來聘之時、本願寺にて洪世泰と筆談し別著さす、忠國時に寺社奉行たり、





一窓前有月　松無影　欄外無風　竹有聲（自注、朝鮮本百聯抄に見ゆ、（一話一言）

天和二年

一信使之時、行中之書物を被禁候事、天和二年に始り、天和日記錄に委細相見居申候、元來此方より被仰上候に付、從公儀被仰出たる事に候、（自注、中略、）重而信使之筋書物之御賴有之候はゝ、額字にて候はゝ、二三枚、唐紙に書事に候はゝ、二枚歟六枚屛風用に成候外は相成申間敷候、其分通詞頭へ可申付置候、（自注、中略○一話一言載雨森東五郎筆記○按するに、これらの事により、また明和元年正月、松平右近將監渡す、大井伊勢守達の御書付あり、因に載錄す、）

朝鮮人に詩作贈答筆談等に罷出候者、一通之談話之趣意相認候處、且古來二義兩說之疑敷所なとを談、或風雅を以贈答仕候樣成事は不苦候得共、一分之學力を自負之爲、異國をなちり、彼國をあざけり候樣成筆談等、第一國躰不辨筋違候樣相見に付、林大學頭方にては、天和以來弟子とも差出候節、詩作贈答計に而筆談等決而、仕間敷段堅申付來候、云々、（柳營日次記、御觸書、）

正德元年、投刺

我姓林、名信篤、字直民、稱整宇、又號鳳岡、羅山林道春孫、而弘文院學士向陽軒春齋之子也、先主崇道好學、在位之日、率由舊例、拜爲弘文院學士、厥役身遇榮選登庸、起群叙朝散大夫、任國子祭酒、管掌聖廟祭祀之事、且建寮塾以待來學、日日陪侍論辨經義者、凡三十年也、新主亦不棄菲才、眷遇不淪、然以身老形疲、特蒙恩命、不預外務、唯有侍講之召耳、今日欲接芝眉、即携二子及門下官儒十四人塾徒七員、欣然而來、可謂天假良緣者乎、幸々、壬戌之秋（按するに、天和二年、）三官使來聘、蚤時稱整宇者、乃是我也、右件々請告之三大官使、則惟幸、

大學頭林信篤稿

余姓林、名信充、字士信、號龍洞、一號翼齋、又稱快堂、乃國子祭酒信篤長子也、當先主治世之時、以父祖之蔭、早賜學料身、列官班、屢預講習討論之事也、新主亦忝恩顧、侍講于經筵者數矣、經筵講官林信充稿

李學士、不穀姓李、名礥、字重叔、號東郭、生甲午、乙卯登進士科、癸酉爲柑科及第狀元、丁丑又登重試及第、歷太常通制使正地部員外郎、出爲安陵太守矣、今此從使時以製述官承命、來到叩及至都下恭聞成蹙、名丞欲一承淸咳、而未果矣、先賜枉顧、盛篆殆背勝

踰、

林祭酒問、嘗聞帝堯戊辰年檀君開貴國、而享祚一千餘年、何其如此之長生哉、蓋鴻荒草昧、不審其實乎、」又問、武王封箕子於朝鮮開八條遺敎而猶存、從者五千人、故貴國有半萬殷人渡遼水之句、是誰人之所作乎、」李學士答、檀君事跡、布在我東方策兮班可考、蓋當洪荒之世、我東者無君長、檀君降於神木下、立爲君享國至於數千餘歲、此蓋人文之始數也、厥後素車東來、克闡文敎至于今不衰、箕子平日所杖之杖、井田遺址、尙在於我國平安道箕聖所都之處、其子孫綿綿不絕、而其後變爲朴奇韓三姓矣、我祖宗朝列立箕子殿、樹碑而頌其德、設饗以報其功、到今國家之所遵守者、皆箕聖之緖餘耳、渡遼之句、蓋其時幾證之、不知出於誰手耳、

祭酒、　按宋史、貴國習箕子作風、撫朱蒙舊俗、嘗聞朱蒙者高麗始祖、以高爲姓、其裔孫今在乎否、」東郭、高麗之稱、蓋取山高水麗之義也、朱蒙即其名也、高麗始祖乃王氏也、高麗之後尙有存者、頃年我聖朝祿用之、多有立朝者矣、高麗諸王之陵、多在於我國松都府、故每年遣使致祭、亦置守陵之卒、使之禁火禁牧矣、

東郭、　試士之法、自漢而始、至明朝猶遵守之、蓋三代以後非科目則士之得進無其階矣、我國非有設科取士之法、而此外如有道德學問高明者、不拘於科第而擢用之矣、即今中州亦有科第、而貴國獨無此規、可歎可惜、」又問、　貴國尊聖右文之治、猗歟亦盛、但我國毋論州郡之大小三百六十餘州、皆設聖廟、春秋釋菜如禮、貴國亦於各州置聖廟、則尤好矣、」祭酒、　我先主自幼好學、及老齡弗輟弗措、親臨經筵、全講四書數回、且又悉講易本義全編、政務之暇、即召聚儒生論辨經義、儒生若有設問、則答辨如流、衆皆恐感平伏無言、我亦在經筵侍讀者二十餘年也、恩眷之厚、今猶不忘之、先生按するに、常憲院殿たさし奉る、二十年前建聖廟于昌平坂、我雖不敏辱膺祭酒之任、春秋二仲之奠、今猶不懈、先主治世之間、或每歲或隔歲、屈躬惇禮、恭詣聖廟也、今新主亦能繼其志述其事也、

祭酒、　貴國之法、亦八歲入小學、十五歲入大學乎、足下登第主榜者何人、每歲春秋科第之選、果然不怠乎、」東郭、　我國之法果如所□□、敎閥閱子弟及閭巷、凡民皆八歲入小學、敎之以灑掃應對愛親敬長之道、踰十歲則入大學、敎之以三綱八條之法矣、科制每





三年設大比明經科、以製述試士、或歲一爲之、或數歲一爲之、則無定法耳、僕之登科時、座主主試者、即原任大臣李公頤命矣、

東郭　牧隱先生白注、譯李穡、文集亦得見否、即僕外家先祖耳、」祭酒　未見全集、

快堂　足下及第賦何題乎、以詩乎以文乎、」東郭　我國科規、設監試之科、即古之司馬科、分兩日試多士、初場則以進士試、以詩賦出題試之、終場則以生員試、出義疑題以試之、入選之人又設會試而試之、取進士百人生員百人、得中之人只得進士生員之號而已、猶着白衣、使是儒生也、大科則有三年大比之科、皆以漢唐宋舊制也、以四書三經試多士、能淹熟背誦者取三人、蓋象三十三天也、此外有謁聖廷試增廣春塘合士黃柑、各名節取士之科、所謂謁聖、主上每年展謁於夫子聖廟仍試士、而賜第、所謂廷試增廣、國有大慶、則必設科而取士、此與四方同慶之意也、所謂春塘合士、主上請武於後苑、仍試士賜第、黃柑則濟州牧進柑子於上、必分賜諸士、取士賜第、而居魁者只賜第、其餘則給初試節目之科、亦取一人矣、大科表策論賦箴銘頌、各體中出一題而試取之、且每於兩年集文臣於殿庭、出表策中一題而試取之、只五六人而止、此謂之重試及第、

祭酒問學士　一國王之服幷旗嘗用雲龍否、一吾國名之爲楓、貴國亦有之否、貴國喚之爲甚名、未審其枝其葉與中華楓樹相同乎、願詳見敎、一虎與豹相互挑勢否、亦或相和而同居乎否、　一大明律分類目錄四卷、　一大明律讀法三十卷、　一大明律直引不記卷數、　一律解辨疑三十卷、一讀律瑣言不記卷數、一讀律私箋二十四卷、　一讀律管見不記卷數、　一律條最要不記卷數、　右八件書貴國亦有之否、

謹復、我殿下凡朝會着垂旒之冕服繪龍之衣、此蓋皇明所賜之命服也、凡旗幟皆畫雲龍、蓋亦古制也、我國亦有所謂楓樹、秋後始赤、而但比於此葉、葉樣稍大矣、蓋我國之楓或云辛木、所謂楓樹恐別有其種耳、杜詩曰、靑楓葉赤、天雨霜楓之自有其木尙矣、虎豹我國山峽中多有之、豹者比於虎、體小而長、皮上之紋點點成斑、與虎並處而不相鬪、或云豹能制虎云、蓋其力比虎尤健矣、大明律諸書我國皆有之、凡斷獄科罪之法、與我國經國大典、參考折衷而用之耳、以上、韓客贈答別集、

正德元年

一新井筑後守詩集、朝鮮人へ見せ序書き申候由、
一新井筑後守荻原近江守兩方は殊の外はばき〻申候由、
一十月廿七日五ッ時より相詰於西本願寺、老祭酒公幷七三郎、百助、其外官儒仕官幷書生之面々十四五人也、唱和夥有之、同廿八日木下平三郎を初として深見新右衞門、三宅九十郎、室新介、土肥源四郎、服部藤九郎、深見久之亮、自注、兩人は祇園與一、紀州素袍也、の儒者假布衣也、五ッ時より相詰、午の內は學士書記等引込和讀して罷出、日暮把燭の頃夜の五ッ時迄も、唱和夥敷有之、
一十一月五日は新井筑後守殿方、木下門下衆七人筆談有之也、
一鄭夢周か自注、圃隱也、十一世の孫來る、武官にて御座候、新井筑後守知人に成る、舞樂を喜び感入申候、本は國の樂候へ共今絶申候、扨々面白きと申候、
一佐々木萬次郎品川より、按するに、脫字あるべし、屏風に萬次郎筆有之を見て褒申候處に、落ち付と否、萬次郎筆談に被遣彌ほめ申候、
一祇園與一は、公義筆談被仰付、御問せ被遊也、
一霜月八日の日に、三使あの方より尋にて、林祭酒に逢可申候との事にて逢被申、自注、文章通れ家風を有と申しき、先年來朝の時の事共を尋ね、御茶進可申と申候內、其儘自分の料理を出す、子息の事をも尋ね子息はあれに罷在候、後にとの事にて對面不被成候、其後も酒菓など三使より林大夫へとて、祭酒へ送る也、
一洪蒼浪、友元へ書簡幷詩を三首贈れる、又兵衞返禮和韻あり、
一三使祭酒へ逢申候時分、羅山の孫と書き書記へ贈り申候也、林家の名聞き及ひ居り申候、筆談にても文章國の風に逢申と申候由、
一林大學頭、林七三郎、同百介、林又右衞門、人見又兵衞、同帶刀、同七郎左衞門、深尾權左衞門、同權十郎、庄藤左衞門、和田傳藏、安見文平、近藤半介、桂山重五郎、得力十之允、津田右內、秋山半藏、大久保加賀守殿內樋口彌門、丹羽□□內小見山忠兵衞、土屋相模守殿內渥美忠五郎、阿部豐後守殿內片岡勘介、學頭飯田左仲、同神島團藏、浪人依田喜左衞門、同熊谷傳藏、合二十五人、林門の內兩日筆談に出つ、
一深見新右衞門唐音妙手、南音のみ存し北音を不知



故に、朝鮮の唐音は北音なり、八代洲河岸に□しとて浪人學舍に居る所に、新右衞門埒明き不申を聞き、參りて韓人の唐音者に逢、物語すきと通し笑談仕候也、是は北音を覺申候故也、
一官儒の外は學頭よりして麻上下熨斗目也、
一林家の詩贈答共は、あの方朝廷に收り有と申候、今度も七三郎、百介殿を以、向陽函三の樣也と按するに、脫文、
一九十郎は三使へ序文、啓文、五十韻の詩を送る、何も返答あり、啓を送りたるには狀を返禮する也、鏡湖あの方より問かけ筆談して曰、公の學問如何なるそや、文章好き也と云々、褒ける故李退溪事を引き、朱子學信向、日本にも左樣の人あり、山崎嘉右衞門と云、其餘を酬と云、
一筆談學士先年程に有之ひたもの直し、或は中聯抔より書き直して手間取由、直に對座にても書き申候や、大樣抔をかみ〳〵作申候也、九十語、
一富士は諏訪湖より見物見事也、○朝鮮人一首あり、以上、中村氏筆記抄、
德力伊賀守良安より六代十之丞良顯、後號有隣、實は讃岐國鄉士佐々木八郎左衞門正種か男也、元祿十六年六月廿五日被召出、拾五人扶持、同月廿八日常憲院殿に拜謁し、寶永元年十二月十五日百十俵を賜ひ、御近習番格になり、六年三月二日寄合儒者、正德元年七月朔日御記錄御用奥勤、享保三年十二月五日評定所儒者、八年九月廿六日病氣に付御免、

正德元年享保四年朝鮮人贈答、一話一貫

正德元年十月十八日朝鮮人參着江戶、同月廿八日於本願寺筆談、十一月朔日朝鮮人御目見、與同僚登城、按するに室新助をいふなり、同月五日朝鮮人御饗應于白書院有樂又與同僚登城、同月九日又於本願寺筆談、同月十一日朝鮮人御暇、同月十九日朝鮮人發足、同月廿二日登城時服拜領、鴻巢年譜、

正德元年

問、鴻巢　大明一統志朝鮮下有北嶽山、其下註云、本朝初朝鮮國王李某依此山爲都、莫是爲漢城府之鎭否、豈其山在京城北耶、不然其所以名北嶽者如何、」答、鏡湖　北嶽即我國國都之鎭山、勝國之世築城于此、以爲保障之地、逮我神祖定鼎于此、以建萬世無窮之基、

明志所記亦不謬愆矣、

問、鳩巢　北嶽之義如何、」答、鏡湖　其義無他在北故也、

問、鳩巢　貴國所謂三京、是漢京幷西南二京稱之、否、」

答、鏡湖　我國漢京是即今王都、平壤是西京即箕子及高勾麗所都、松京即開城、勝國所都、慶州即新羅所都、自注、今按、此答徒言四都之地、不言三京、是指何等言之、所答非所問也、若其所言則史所載、已昭然矣、何待於問而後知之、

問、鳩巢　貴國平安道有狄踰嶺、意是昔時狄來犯時、或踰此嶺、故以爲名耶、不然其所以名者如何、願示之、」

答、鏡湖　我國平安道江界地有此嶺、當初命名不以北狄來犯故也、厥後或被北虜之兵、其名偶驗、七家唱和集、

正德元年十一月八日、陪林祭酒赴于客館、奉呈東郭李公詩幷小序、

竹　堂

前月念七日、嘗陪林祭酒末位、初接芝眉、且賜高和、感謝無窮、登時官儒先生、鱗次蝟貫、如僕孤陋不敢擅呈蕪詞、徒仰風度而已、自謂良緣已盡矣、今日何幸辱得舟登龍門、歡抃之餘、拙伎復瀆、固賦一律以要芳和、所謂得隴望蜀之喩也、伏乞藻鑑、

問、竹堂　貴邦官制有散影二規、僕謂散者閑散之散、影者形影之影、唯有其號而不得掌其職、果然乎否、」

答、鏡湖　曰然、但散則無實職而只、以軍銜受祿者是已、影則只給告身而無付職之規矣、

問、竹堂　然則散限武官、影限文官乎、」答、鏡湖　文武一體耳、

說曰、(口談)昌周　長崎一年來多少唐船、躭閣幾多日子、」答、說曰(口談)明敬　長崎一年來七八十隻唐船、三四月間來了、十二月回唐、長崎有個舊規矩、來早的早回去、來遲的遲回去、所召直到十二月便都回唐去了、

說曰、(口談)昌周　長崎到南京、或者到寧波、或者到普陀山、不知有多少路程、」答說曰、(口談)明敬　長崎到南京有三百餘里路、到寧波有三百餘里路、到普陀山有二百餘里路、沒甚麻遠、

說曰、(口談)明敬　南京人看儞們朝鮮人及琉球人等衣冠便涕哭、道中國衣冠倒存在外國、我們如今的模樣羞殺人了、」答說曰、(口談)昌周　我三十年再到北京、曾見了琉球人、就是我們衣冠一般、

又寫云、明敬　吾國富岳、見者聞者無不駭然、在昔華之使人亦多題之、足下親見其山、豈可不題之哉、嘗聞貴國亦有一座大山、其名未知、見教見教、」又答寫云、鏡湖　我國名山甚多、而其最奇而大者金剛山、足下所聞無



乃是耶、富岳亦神、時而奇秀、清淑所不及金剛耳、僕路中有富岳一篇、而句數浩多未及錄示、可嘆、

又寫云、　蓋天地間分爲三山六海一分田也、而於其三山中果然最奇者富士山而已矣、富士山外更有何山、貴國金剛雖奇吾未之聞也、願要詳敎、」又答寫云、金剛乃白頭山初落也、有一萬二千峰、皆以白玉削成、東臨渤澥、北接長白、根盤數千仞、不見畔岸、山中多有人跡不到處、亦多神異之事、故中國之人有願生東國一見金剛之語、宇宙名山恐無與此山爭畫者耳、

又寫云、明敬　金剛若果如此、信可謂名山也、吾國尙有若干名山、皆秀麗而崢嶸、良非尋常之所比者、然獨不如富岳、富岳者聳半空而跨八州、放金光以散玉花、頂上有池、而淸水如鏡、腰間無樹、而白雲似帶、寔是金砌玉築者、而其狀非凡、山中唯有山神、土地出沒、而妖精怪物飛禽走獸之類、猶有不到之處、而況人乎、自古稱我國爲蓬萊、以有富岳也、富岳之所以奇特而無雙者、其分明哉、足下所言富岳不及金剛之說、未可全信、金剛載於何書中、旣是貴國名山、則必有圖矣、願欲求借一看、答寫云、鏡湖　金剛已載中州山海經、故華人有願生說、今不暇更論也、圖畫有之、而適不在行中、可嘆、

問、耳白　我國史載、我神世有素盞嗚尊、往新羅國、貴邦今亦傳此等事耶、」答、東廊　素盞嗚尊之說、皆在新羅之世、世代久遠無徵、不可考矣、

問、耳白　聞諸使君到我東都之日、城營張古樂、憶諸賢亦與觀焉、僕頃傳承其樂曲、半是高麗調也、貴邦聲樂有此等遺韻耶、前日道路及我京尹、この頃、松平紀伊守信庸京都所司代なり、奉國命過此館之日所奏者、皆是皷吹雜調、而如廟堂盛宴、則別又有一部舞曲、如前日東都所觀者乎、」復、東廊　前日廣庭之樂令人忘味、果是高麗古樂之流入者、而中國之樂亦十居八九矣、我國古樂俗樂之別、而古樂皆自中國傳來者也、非守出於高麗也、

問、耳白　僕先日問貴邦諺文、敎諭縷縷、詳悉多謝、然彼字體如篆字樣者、離合華之古文而所造歟、其大略可得聞乎、」復、東廊　諺文字體、特出於我聖祖一時制作、非摸倣篆籀之舊也、

問、耳白　聞貴邦俗恥再嫁、若再嫁、失行婦女所生之子、不許入士流、其禮今苟達于上下乎、聞貴邦俗喪必三年、雖奴僕例許百日喪、若願行三年者亦許之、蓋惟奴僕奔百日或三年之喪、則其主如數口之家使令如何計得、奴僕亦無力者生計如何營得、如喪祭者或儒

或佛、各以其所信而行之乎、若夫士庶因儒敎則據朱子家禮等乎、貴邦蓋有制乎、往昔佛敎入我國、必自新羅百濟等國、則知古者三韓信佛者亦多、當今貴邦尙儒乎、信佛乎、儒佛相半乎、（右四件有故無復、）

問、菊叢　中秋賞月自古而然、九月十三夜賞月之咏、間見中華詩集、貴邦亦當此夜賞清光乎、」答、東郭　我國例於八月十五夜賞月、九月十三夜不以爲佳節、寧有賞月取樂之事乎、

問、菊叢　嘗聞貴邦官職考、文武官階頗祿、各々有糙米幾石中米幾石田米幾石三色米穀其別如何、」答、東郭　糙米即精鑿之米、中米鑿之不甚精也、田米即粟米也、

呈東郭李公案前謹請示諭

問、彥琴　青丘是朝鮮國別名耶、或曰、新羅別名也、謹請諭之、李唐之世、密敎流傳貴國、中華書策所記甚明著矣、不知至今盛行於貴國耶、且有密敎耆傑能樹法幢者耶、密敎闡揚之場或山或寺又幾處耶、謹祈示之、」答、東郭　眎諭謹悉、而我大東於禹貢爲青州、故曰青丘、非新羅之別號也、我大東自箕聖、以後專尙儒敎、斥佛家甚嚴、新羅高麗之末、頗崇信尊奉、而入我聖朝、群儒輩出、倡明我道、則釋敎之不行固也、是以儒自儒、佛自佛、學西敎者、就窮山深谷中設道場、誨徒衆者不無其人、而淸虛堂休靜英蓉堂惟政若、而人外不過誦經攻詩之徒而已矣、眞言宗禪宗多有之、而某寺有某寺無、未知之耳、

筆語

問、正數　日本神世素盞嗚尊、師其子五十猛神、到於新羅國作樂、所謂迴庭樂也、貴國于今奏此樂耶、」答、東郭　迴庭樂條是新羅庭樂、我國梨園皆用雅樂、故則不用之耳、

問、正數　日本應神天皇御世、百濟國王仁來朝、大闡儒道、皇子菟道稚郎子師王仁而學之、其後菟道與兄大鷦鷯尊互相讓受禪、而兄弟有如夷齊之行、皇子薨去、大鷦鷯尊悲哀不已、于時王仁獻和歌奉勸即位、於是大鷦鷯尊即位、號仁德天皇是也、貴國史錄中有王仁事實耶、」答、東郭　我東諺傳、百濟王仁入日本時、携千字文及論語一卷、而來敎誨多士、日本之有文字蓋始於此云々、而百濟之亡、幾千載史籍不傳於世、無由考信矣、高麗時送鄭圃隱先生、賀皇明大祖皇帝登極、圃隱先生親見其創業之初禮樂文物彬々日述、故其文集中有贊美之詩矣、

問、正數　聞洪武末中華與貴國絕、至永樂元年相和、今也貴國受大淸歲曆年號耶、貴國今年號如何、」答、東郭　即今我國旣服事大淸、則用其年號固也、是以公私文書皆用康熙耳、

問、正數　貴國大王朝中華耶、」答、東郭　述職之禮周以後廢罷不行、故曾在皇明之世、亦無朝聘之擧、況今日乎、每年冬至惟遣使陳賀而已、

問、正數　貴國諸侯就國耶、又稱太守、有封地耶、」答、東郭　我國三百六十餘州皆有太守、而亦隨其地之大小高下、其官牧夫爲上、府夫次之、郡守次之、縣令次之、縣監爲下矣、或三年而解、或六年而解、皆無封建之制矣、

禀、正數　貴國與日本通信之事、又昔年自三韓朝貢日本之事、皆詳于史書、中華與日本通問之事、爲在黃帝唐堯之世、自注、出于雲笈七籤山海經等、歲月久遠難決知之、周代與日本通之事、出于論衡、有理致源委也、從魏隋唐宋數代自日本遣使、又有釋氏爲求法航海、至大元與日本不相和、自大明興與日本將軍大相國義滿、自相和屢聘問、明主封日本肥州阿蘇山於壽安鎭國、謚義滿曰恭敬王、此時我王室衰微、諸道分裂、頑民犯國禁、入寇于大明、萬曆中豐臣秀吉窺於大明、路依于貴國、終與大明不相和、雖至大淸未通、唯每歲商船至肥前州長崎而互市耳、」復、東郭　我國通日本蓋久矣、壬辰之變出於不虞、痛哉痛哉、顧後通聘修好、一如前日、誠交孚豈非兩邦之幸乎、聞貴國則不與大淸相通云、未知然否、大海環回塲圍自固、眞所謂天府之地也、

禀、正數　貴國書經國大典、海東諸國記、東國通鑑等、闕日本事蹟、亦傳聞之訛不少、懲毖錄、平壤錄等又闕其事實、皆詳于太閤家譜、豐臣實錄、慶元記、朝鮮征伐記、西峯今按等書也、舊事紀、古事記、日本紀、續日本後紀、續日本後紀、三代實錄、類聚國史、新國史、祕府略、本朝通鑑綱目、本朝通紀、園大曆記、王代一覽、歷代筌宰錄、此外神書經史子集大凡八千餘部皆悉存焉、中華經籍古今詩編等、每年華船載到吾邦、天然慶幸不知矣、

復、東郭　貴國事蹟、我國元無記聞載錄之事、不過道聽塗說、則安得其不爽乎、所眎諸書未由得見、可恨之、此外所示謹悉、而此等事我國未詳之矣、夜短行忙、不得展布、所聞尤快快、以上、鷄林唱和集、

正德元年

一廿一歳の時にいたつて、豫州の家を去しかば、この時に及ひてこそ、同し志の人々をあひ知りて、もの學ふ事をも得たれ、おもふ所あれは師を求むるには及はす、此頃よりそ對馬國の儒生阿比留といひし人をは相識ける、廿六の春再ひ出て仕ふる身と成ぬ、ことしの秋朝鮮の聘使來れり、彼阿比留によりて平生の詩萬首を詠して、三學士の評をこひしに、其人を見て後に序作るへしといふ事にて、九月朔日に客館に趣く、製述官成環書記官李聃齡幷裨將洪世泰などいふもの、共に逢て詩作りし事など有之、三夜に成環我詩集に序作て贈たりき、此年泰情先生も自注、木下平之丞殿の事也、公に召出され給ひ、彼阿比留彼門に入てもの學ふ、そのゝち我出羽國山形といふ處に行事ありし時紀行一卷あり、自注、貞享三年丙寅の秋、我三十の歳時の事也、阿比留其卷をもて木先生に見せ參らせ、朝鮮人の序の事など申せしかは、あはれ其人を逢見はやと宣ひぬとて、阿比留媒して始て木先生に見え參らせし事あり、其後彼阿比留病して死せんとする時に、我をして先生の碑文を望と申、我をして書しめたりき、自注、阿比留後には西山順蔚と申せし、元祿元年九月三日に病死しき、○白石私記、

正德元年十一月五日、筑州も本願寺の旅館へ訪問せられしに、正使趙平泉は筆硯授て云、筆頭自ら舌あり、何そ譯者を雇んやと書して示され、因て筆談に及へり、白石の對話は卒迫の間といへとも卓然たる高論にて、皆國家の德を輝す世に傑出せり、尋常筆談は、皆製述官三書記以下の事のみなり、彼國にても、昔より隣好交聘有といへ共、今日此會の盛事は、僑向の相得たるにも愧る事なしといへり、誠春秋の時賢大夫の相會するに似たり、且云く、歸て以て國乘に記さんといふ、筑州も庶幾は數十紙を上せて他日幸に賜へといふ、故に正使趙泰德其言語を輯錄して江關筆譚と名つけ、刊して贈られしといふ、予按するに、この書末に未其朝鮮板を見す、唯謄栖霞道人識とあり、正德朝鮮聘使錄附言、字せるのみ藏せり、

江關筆談　通政大夫吏曹參議知製敎趙泰德輯

辛卯自注、正德元年、十一月五日在江戸時、白石源璵君美自注、新井筑後守、來訪館所叙寒暄訖、

平泉取紙筆示曰、筆端自有舌、可以通辭、何必倩譯、自注、平泉正使號○按するに、即趙泰德、白石曰、敬諾、

南岡曰、貴邦先秦書籍獨全之說、曾於六一鐫刀之歌見之矣、頭書、歐陽永叔日本刀歌云、徐福行時書未焚、逸書百篇今絕、曾存、今嚴不許傳中國、舉世無人識古文、先王大典蔑夷津、文忠ゞ集、至今猶或有一二流傳耶、○按するに、南岡從事號邦彥、

白石答曰、本邦出雲州有大廟、神俗謂之大社、嘗開神庫所藏竹簡漆書、蓋古文尙書云、

青坪曰、其書想必以科斗書之、能有解之者、亦有謄傳之本耶、自注、青坪、副使號○按するに、即任守幹、

白石曰、本邦之俗、深祕典籍、蓋尊尙之也、況似有神物呵護之者、亦可以恨耳、

平泉曰、或傳熊野山徐福廟有科斗之書、古文厄于火而不傳云、此言信否、

白石曰、此俗人誣說、

青坪曰、有書不傳、與無同、果有此書、則當與天下共之、深藏神廟、意甚無謂、何不建白膽傳一本耶、自注、此下當有白石答、

白石又曰、尾張州熱田宮、諸君所經歷也、此宮中亦有竹簡漆書二三策云、蓋科斗文字、

南岡曰、歸時可能得見否、

白石曰、神府之祕、不可獲觀矣、

平泉曰、蔡中郎之祕論衡、本不足美事、崇信鬼神、又近於楚越之俗、有書不見、與無有何異、

白石曰、周外史所掌三皇五帝之書、孔子乃斷自唐虞以下訖于周、凡百篇、秦火之後、漢人始傳今文於伏生之書、嗣後亦得古文孔子壁中、其篇數增多於所聞伏生之書、於是今古文併得五十九篇、而先儒以謂、古文至東晉間方出、其書皆文從字順、非若伏生之書有不可讀者、其亦難言矣、且若始得壁中書云科斗書廢、時人無能知者、況今去漢已遠、世果有能知其書者哉、後之要見二帝三王之道者、何必求於先秦科斗之書、善讀今文亦既足矣、且夫二帝三王之道、與民同其好惡而已、我先神藏之、後民奉之而至于今、今且褻神明拂民情、或索而得之、乃謂、我能得二帝三王之書、無乃非二帝三王之心乎、所以不敢也、

白石曰、公等奉使萬里、合二國之驩、雖則賢勞豈不壯哉、若僕生懸弧以來、譬如座井、未嘗始望洋、初冠在壬戌之聘、造詩貴邦二三君子、則後唐山琉球及大西洋歐羅巴地方和蘭蘇亦齋意多禮亞人等至於斯、僕皆得見之、且今與諸公周旋有日于此、少償四方之志耳、

青坪曰、大西洋是西域國名、歐羅巴意多禮亞等國在何方耶、

白石曰、貴邦無萬國全圖耶、

南岡曰、有古本、而此等國多不載、

白石曰、西洋者、去天竺國猶亙萬里、有所謂大小西洋、僕藏有圖一本、可以備觀覽焉、

南岡曰、異日有所儲、毋慳一示、

白石曰、第恨其地名誌以本邦俗字、諸君難解、其圖義、在月令廣義、圖書編等書者即是、

南岡曰、吾國無此書矣、

明日白石送一小圖來曰、萬國全圖原本二式、有地毬、有橫幅皆係蕃字、其字如絲髮、地名人物風俗土產盡備焉、利山人所刻六幅圖及月令廣義、天經或問、圖書編等所載、譯以漢字、略記其梗槩而已、此小圖吾長崎港人所作、其編地之法尤妙、只惜圖小、所載地名存十一於千百、且譯以諺文、恐諸君不可解、試使對馬州譯人讀之可也、若其地毬橫幅等原圖、則歐羅巴諸國所貢數本、藏在祕府、今僕之力不能使諸公一覩之、亦可以恨也、」青坪曰、琉球去此當幾千里、福建距長崎亦幾何、」白石曰、本邦里法五百里、在南海之中、其地當于赤道之下、故氣候熱云、福州距長崎亦略同、」青坪曰、福建往來之路、曾聞有海賊之出沒者、商船亦無被刼之事耶、」白石曰、閩海寇賊所未嘗聞、」南岡曰、每年往來商船有定額云、然耶、」白石曰、唐山及西南海船、歲額有百六七十艘、當年來聚于長崎港、」平泉曰、聞近年海路多梗、唐船不來云、未知何故、」白石曰、去年南京商船、愆其來期、後聞浙江等處、賊船出沒、今年奉官兵勦捕賊首、海路已開、其來如舊、」南岡曰、賊是何等賊、何以勦滅耶、」白石曰、出懷中小冊視之、乃曰、賊魁鄭盡心、陳明隆、李老柳、爲南京總兵所獲云、老柳眞是賊名、其以盡心爲名、可發一笑也、南岡曰、鄭盡心是鄭錦餘孽否、」白石曰、誠然、」青坪曰、曾聞西洋古里國、利瑪竇者到此、有文字留傳者、信然、白石曰、只有交友論一篇、我國嚴禁天主法、盡火其書、交友論者、百川學海說鄂等盡收錄焉、」南岡曰、琉球使來聘貴國云、其冠服儀度何如、文字何如、」白石曰、中山使副冠服、即是明代遺制、自餘以色絹纏其首、至于常服、則王子以下亦如之、但以錦紫黃紅青綠爲差等、童子簪金花、衣則大袖寬博、腰束大帶、官制正從各九品、國中文書與本邦之俗同、或有善和歌者、明代以來比歲朝聘、故習文讀字以任長史通事之用者、永樂中間所賜閩人三十六世之後也、今中山二十八世祖舜天王者、本邦源將軍爲朝之子、故其王源姓、以尙爲氏者以王父字爲氏也、」白石曰、當今西方諸國、皆用大清章服之制、貴邦猶有大明之舊儀者何也、」平泉曰、天下皆左衽、而獨我國不改華制、清國以我爲禮義之邦、亦不加之以非禮、普天之下我獨爲東周、貴邦亦有用華之意否、今看文敎方興、深有望於一變之義也、」白石曰、僕嘗學詩、至於雅頌、則知殷人在周服其故服而





來也、始聘使之來、竊喜以謂、朝鮮殷大師之國、況其禮義之俗出於天性者、殷禮可以徵之、蓋在是行也、既而諸君子辱在于斯、僕與其儀客冠冕袍笏、僅是明世章服之制、未嘗及彼章甫與黼冔也、當今大清易代改物、因其國俗創制天下、如貴邦及琉球亦既北面稱藩、而二國所以得免辮髮左衽者、大清果若周之以德而不以疆然否、抑二國有假靈我東方、亦未可知也、」青坪曰、貴邦劍銃爲長技云、故欲見劍術、曾已仰請高明、如或欲見我弓馬之才、亦當仰副耳、」白石曰、刀劍之術、前日聞命、且今及此、蓋似公以我爲有尙武之俗者、本邦素尙武也、雖然如今所聞、乃是古之技擊非我所尙也、虞書贊堯曰、乃聖、乃神、乃武、乃文、文武不可專尙也久矣、我開闢以來神聖相繼、德被四表、遠近率服、帝室中衰、戎車屢駕、當是時、源大將軍賴朝、天縱勇智討其亂略、耆定武功、夾輔帝室、實有如桓文之事焉、於是乎一變我仁厚之風、遂成勇銳剛毅之俗、愚嘗論之曰、本邦譬諸岐周之地、文王用之、以興二南之化、秦皇用之有朝八州之氣、風俗與化移易、顧導之之術何如耳、孔子曰、仁者必有勇、蓋東方之風氣亦使然也、及吾神祖受命、武以遏亂、文以興治、列聖纘業、百年于今、文武忠厚、不啻勝殷去殿之日、嘗聞昔者貴邦申文忠公叔舟按するに、申叔舟の事寛永十三年の條に註す、臨卒、戒宗康靖王問其所欲言、對曰、請勿與日本失和、申公於我前代干戈之際其言苦此、況今諸公憂國如文忠用心、則實是兩國蒼生之福也、」平泉曰、申文忠典即僕外先也、臨終一言、誠出於睦鄰好戒邊釁之意、而明公亦開此言、勉戒至此、兩邦千萬世之幸歟、可賀、」白石曰、前言以論善鄰之誼耳、不圖申公之外孫實來講兩國之和、公世其德、則豈唯僕所謂蒼生之福、公門亦餘慶焉、謹賀、」青坪曰、不佞常以爲貴邦一尙武之國、今來見之、則文敎甚盛、誠可奉賀、申文忠之言、千古格言、而即今兩國主聖時平、鄰好自然敦睦、何可一分相阻之念乎、客中悰欲一見絕藝、有所仰請、盛敎如此、慚悚慚悚、」白石曰、兩國和好、禮信而已、諸君於對州亦是東道之主、唯其以密邇貴邦、末界微事、相失其驩心是懼、」平泉曰、誠然誠然、但恐貴邦不如吾邦之盡誠信耳、」白石曰、自古敵國生隙、輕銳好事之人、爭長不相下、而開邊釁者多矣、老拙竊恐、後生少年必因交接節目、相失兩國之驩心、諸公歸國之後、能爲朝廷議焉、諸公國之

重臣、敢布服心、」青坪曰、細少節目、本來不爲討較、何有此過慮乎、然各壽在我之道、則鄰好可以萬世永固矣、白石曰、過憂過慮、老生常態而已、詩不云乎、采葑采菲、無以下體、我言雖毫、請亦擇焉、」平泉曰、宗對州、與俺等萬里同行、辛勤護持、其誠勤、國王殿下果已下燭否、」白石曰、伏惟明睿有臨、靡所不照、」平泉曰、貴國諱國諱之法如何、二名固不偏諱、而貴邦國諱有偏諱之規耶、貴邦人士所作詩文、或有犯用所諱之字、未知何故、」白石曰、本邦古字、猶貴邦諺文、中世以方俗假借隷楷等字以通義而已、是故凡用字法、要在訓詁、而不在聲音、如諱國諱之法、亦必不在文字、雖然及于近世、大抵有偏諱之法焉、」平泉曰、國書回答文字、曾前使臣或於未及正書之前得見矣、明間可以得見耶、」白石曰、辭命之事、僕不與焉、無能爲已、」平泉曰、俺所著、公知之乎、」白石曰、不知、」平泉曰、此是幅巾、」白石曰、本邦近製幅巾、僕未見古制也、若其有副幸得借一以倣製焉、」平泉遂脫贈、」白石起再揖謝曰、可以比縞紵之贈、」平泉曰、欲著幅巾、先著緇冠、制在家禮圖式、可考、」白石曰、副使從事所戴、似本邦所謂錦繡冠、又曰、下官前歲觀光於上國、幸及見天朝冕弁之制、蓋是上世之物、且本邦文物、出於三代之制者不少、如僕所戴者、即是周弁之制、衣亦如深衣之制、校之禮經、則知漢唐諸儒漫費其說也、」南岡曰、深衣之制、司馬公以後自有定論、貴邦豈有他本耶、」白石曰、考之禮經而可也、漢唐以來諸儒紛紛之說、何足以徵之也、本邦之俗、所稱吳服者、蓋與深衣之制大同小異耳、」南岡曰、貴邦冠婚喪祭、用文公家禮否、」白石曰、本邦禮多與三代之制相同、如其凶禮、則大連氏小連氏世掌相喪事焉、孔子稱善居喪者、即此且如唐陸德明周禮音義之書、引鄭大夫之說、以爲本邦蓋有古之遺法、可以見其梗槩耳、近世喪祭、儒家頗依朱子家禮而行之、江關筆談、

一白石の詩は、高華雄渾にして、片言隻語も塞乞の相に渉る事なし、大凡古今の詩人を簸選するに、窮愁孤獨の境を離れて富貴の相を得たるは此人に如はなし、徂徠と同時にして少し先進なり、故に詩は此人より開たりと言ふも誣るに非す、もとより仕途に就て經世を務としたる人ゆゑ、一生敎授に預らす、故に其名を知らさる者多し、且詩は此人の餘業にて其才第一經濟に長したり、閑散餘錄、

一朝鮮にて白石詩草を、吾國にて五十年前錦繡段三體詩を敎る如く、鄕里の兒童に敎となん、たとひ韓人に問とも實を答ふましけれは實否定め難し、昔朝鮮に庭訓往來、童子敎を兒輩にをしへしことは、東涯の盡簪錄に見えたり、然れは此說虛談にはあらし、金溪雜話、

一子或云、白石は日本開闢以來詩の上手也、文會雜話、白石の江關筆談は勝れたる筆談なりと溫夫いへり、同上、

一服藤九殿御申候は、今朝鮮人へ出合可申候御儒者衆は、假に布衣を御免のよしにて候、依之藤九殿御納戸の布衣拜借被成度候、御支度なり兼候よしにて候、不如意御尤には候へとも、何とそ布衣はわきにて御才覺可然御事に候、公役にて御服用との御事に候はゝ、いかにも御願もあるへく候へとも、私事にてかりにも御免たにありかたき事に候に、それならは布衣をも御借被成候へとは、某かこの御願の御使はなり申ましく候間、藤九殿へこのよしを可申入と存候、以上、白石叢書、

正德元年

題清見寺寄芝岸老師　趙平泉泰德

清曉山門得暫過、樓頭拂席白雲多、峰連富嶽千秋雪、日湧滄海萬里波、花樹地暄常爛熳、韻僧年老尙吟哦、匆匆却別諸天去、王事關心四牡歌、

遠州濱松領於增樂邑茶店、走筆賦即興　副使靖菴守幹

板屋蕭然望碧灣、闌舟深繫敗荷間、金爐一穗茶烟起、遠客停驂暫解顏、

呈李學士案下　池菴

牙檣朱轂入江東、顧仰音門賓館中、傾蓋塵淡消鄙吝、冬天恰似坐春風、

次奉池菴玄龍詞伯　東郭

多君筆力冠天東、玉索曾看彩障中、妙畫皆從心上出、精微自有晉人風、

走次前韻奉謝李學士賜芳和　玄龍

天假良緣仰易東、淸客相接碧樓中、金山玉海難探頤、激勵猶思立下風、

又寄東郭李學士案下　玄龍

淹飮香名期識荆、新篇玉唾忽然生、雞林文客駭殊城、

隻字服膺華袞榮、

次奉玄詞伯　東郭

今朝傾蓋似班荆、璨璨驪珠筆下生、一字黃庭須莫惜、持歸要作子孫榮、

又寄東郭李公　玄龍枕

能容謝客感包荒、清標凜若躡輕霜、高閣禮餘佳興在、貢園橘綠又橙黃、

次池菴詞伯　東郭

我御飄輪出大荒、海山時序政風霜、就中佳景如何似、松竹交青橘柚黃、

奉次池菴惠韻　嚴漢重龍湖散人

幕府韜珍愧子荆、旅遊千里客愁生、殊方邂逅能文士、賓館重臨諳覺榮、

卒呈李學士　祭酒林信篤

華北藻南鄰日東、車書通信軌文同、江山不必助詩興、大手排雲筆下風、

敬次林祭酒唇耻韵　東郭再拜拜稿

羅山家世冠天東、傑出諸孫趾美同、幸接芝眉賡白雪、新篇剩喜有遺風、

卒賦一絕奉呈李學士　經筵講官林信充稿

天挺仙姿風骨清、人間又遇李長庚、壯遊飽極觀瀾術、眼界悠々滄海情、

敬次林講官詞伯韵　東郭拜稿

海外風烟特池清、自憐蹤跡獨庚庚、逢君剩古騷壇興、異國新交亦應情、

走筆呈製述官李君　經筵講官林信知稿

都下新知勝舊朋、乾坤此會復何能、同舟洛水非吾事、幸喜龍門合一登、

敬次林講官詞伯韵　東郭拜稿

南來剛喜得高明、揮灑一篇一筆能、磊落元龍好氣象、千秋湖海又陣登、

題富士　正使

鳳鳥高翔霄漢邊、羽無五彩更翩翩、雲開喜運呈祥瑞、憩息蓬萊第一巔、

貴國諸賢每來此地、皆有佳作山野賦、蕪詞一章謹奉呈左右、伏冀效先賢、而莫惜擲地聲自注、前平泉有詩、使星渡海一寒暄、旗旆悠揚紫電飜、禪榻拂塵西望久、幸留彩筆照山門、

日本東海路駿州巨鼇山清見禪寺賜紫沙門芝岸稿





筆語之時、竹龍對李學士問焞之字聲曰、焞有三韻、呑焞退也如何、李學士曰、焞聲退也、李焞は先年來聘の時の王也、焞は王之名なる故、憚有て不問、佐々木竹龍歳十七歳たま〳〵問之、初て聲退なる事を知る、以上、琉韓記事、

正德元年

問、傳聞正使道公謂足下曰、西來以降不鮮所觀諸作、然大半不免韃風、而未足共談、唯獨林祭酒老于諸律、而不失祖風、二子信充、信智亦各英才、而善爲詩也、林家世繼其美者可知矣、未審果然有此語否、」答李の郭　果然有此話矣、前者我曾晤之味木立軒者、足下莫非聞于此人乎、南山閑書、

正德三年七月

一韓客筆談の書二部、又々板行仕候、問槎畸賞三卷、廣陵問槎二卷にて候、此内畸賞には長門の儒臣山縣少助、富田の入江若水、東武安藤仁右衞門、同所秋元喜内、廣陵には藝州の味木立軒、寺田立章など詩文贈答にて候、其内徠翁與松霞沼と在之文を附申候、徠翁は保山の儒臣荻生惣右衞門が號、松霞は則對州の儒臣松浦茂右衞門事なり、此書の趣は松浦方より惣右衞門門弟の山縣少助の文を稱美仕候に付、惣右衞門己が文に誇候而、彼大言一不循人墻下而走、唐唯韓柳明唯王李、自此以外雖歐蘇諸家、亦所不爲屑、」此語有之候、韓柳言もさして稱美仕候躰にも無之、歐蘇は不爲屑との事、口の明たる儘の申分と存候、都下の誹笑此事と存候、新井氏先生へも御咄の旨、先生被仰候は、道德は聖人の文章にて候、韓柳歐蘇の定論之處如此に申候は、聖人も道德を御存なきと申樣成事とて、御笑被成候、自注、正德三年七月朔日、小谷勤善來書、

一荻生惣右衞門事、只今江戸にて文章は我一人と稱し申候、此度問槎畸賞と申物を板行仕、弟子共朝鮮人と贈答の詩文、自身に批評を加へ出し、一笑を發申事に候、畸賞は奇賞と通申哉と存候、奇賞にては無之奇笑にて候とて、先日も深見氏なと笑申候、唐の韓柳明の王李の外は中國にても文章無之候、歐蘇もいまた文章を不存候由申候、近來の奇怪に候、彼か高弟山縣少助、毛利殿の儒臣にて雨森東五郎褒候て、海西無双と申により、雨森夫子と稱して雨森方にも簡を遣し申候、日本にて文章をしりたる

もの無之候處、珍重成事と雨森方ゐは右之通追從を申候て、山縣方への書簡には雨森松浦を兩生と稱候て、此兩生も文章なと不存候得共、此方の學に傾き申事奇特成事との申樣に候、雨森、松浦承り候ても不快に可存候、夫を板行流布いたし候、是は一言の失より辱を得申候由、新井氏も被申候、其外いろ〳〵の儒者發行、嘆かはしき事に御座候 自注、正德三年八月 四日書○鵜巢小說、

通航一覽卷之百十 終

# 通航一覽卷之百十一

## 朝鮮國部八十七

○筆談唱和等 從享保度至文化度

享保度以後信使筆語例のごとし、明和度筆談の事により御書付を出さる、

享保四年己亥九月十六日、會張藩賓館

稟、玄洲 按するに、玄洲、姓は朝、名は文耕とあり、 貴國讀書音與俗間語異同如何、」復、耕牧子 按するに、耕牧子は姜沆字子膏の號なり、 吾邦俗語各因習俗而不同、六經則以吾邦諺文釋其義、以教小兒、然吾國俗讀書之法有音釋及吐、音則正經釋則從俗語吐亦俗音耳、」稟、玄洲 貴國士君子冠服倣中朝尙矣、然若婦人飾髮則沿明制耶、又模髢風耶、」復、青泉 按するに、青泉は申維韓字周伯の號なり、 清制則一無頒行於我國者、但我國之事事模擬中華、而婦女飾髮之制、非明非清自是新羅舊習、人皆知其然、而亦難猝變、是以闕中宮女及京華、貴公家則多不用國俗、而以美女樣飾之、」稟、玄洲 貴國小童之頭髮、據何代之餘風耶、」復、青泉 若冠之前、皆如彼小童頭髮、而此制未聞倣何代、似是國中古俗、蓬島遺珠、

享保四年

問、洲 一製述官之職掌何哉、中夏亦有此官耶、」答、青泉 一製述官之稱、自非常有之職名、乃於使行時擇定於朝士中送之、而名曰製述者以其文字著述役也、如使臣之以某職爲通信使也、僕之本職乃祕書著作郎、以其官受祿食、只以今行、有此製述之稱矣、」一問、玄機 我國婦人妊娠者、至五月用軟布重疊如帶、或濶三四寸、自背纏至腹束縛、至分娩之日晝夜不解焉、倘胎長大覺胸中有氣急狀、方可少放三方或五分、不可滿寸也、漸序調護如此、不使胎恣長大也、從來因循而爲胎養家之常法也、偶有嬾婦少背法者、必憂產難、然中華方書率無言此者、唯癸囊便方載此法、知中原亦有此法也、不知貴邦胎養亦有用此法者耶、」 權道復 我國閭里間或有用此法者、然此法有妨胎氣、故士大夫家絕無用此法耳、

寫云、寬齋 想先生在貴國時、傳見我國之詩文、敢問有可觀者否、」寫云、嘯軒 壬戌詩文草本在鄙家、已盡覽了、辛卯諸作不能盡見、而壬戌之震澤柳剛之文、馳騖霏雰有作者軌則、木順庵詩文亦雅正、太醫令橘親民有謂格、辛卯則白石之詩、雨森芳州之文、有作者手段、三宅滄溟兄弟詩文清健有軌則耳、」寫云、寬齋 我國初學者多不諳字義、故卒作詩文則多不可解之語、是俗習之弊奈何、」寫云、嘯軒 詩則平仄有不中者、文則皆委曲順理、有勝於詩者、桑韓唱和塤篪集、

享保四年

答、嘯軒 問、條尙齋 按するに、尙齋は小倉貞とあり、 神祠有春日八幡住吉三神云、未知何神、而此外亦有幾許神耶、」春日即天兒屋根命、蓋國初輔弼賢臣、八幡即應神天皇、住吉即神功皇后、此外州縣各有鎭座神、難枚舉、兩國唱和集、

享保十三戊申年、雨森東五郎書上、

一信使の時、行中の書物を被禁候事天和中に始り、天和御記錄に委細相見え居申候、元來此方より被仰上候に付公儀より被仰出たる事に候、筆談等猥りに致し候者、若は用事を漏れ可申哉との恐有之事に候故、是は被禁候段其譯有之事に候得共、書き物を被禁候事は譯立かたき事にて、迚も御差圖を守り申さぬ事に候間、御禁制被成候事、重ては御無用被成可然候、且又信使の時方々より御家老中ゐ、書き物の御賴大分申來候、不得已一々御請被成候故、

右書物の儀に付、信使屋敷殊の外騒敷、外々御用の妨に成候事甚有之候、重て信使の節書き物の御頼有之候はゝ、額字にて候はゝ二三枚、唐紙に書候事に候はゝ二枚か六枚、屏風の用に成候外は相成申間敷候、其外通詞頭へ不申付置候間、彼方へ紙を被遣御書せ可被成候と仰聞、御家老中は書き物の事に御構不被成候様に有之度事に候、書き物の事にて御詰問もせひ〳〵と有之殊に享保年に、龜井隱岐守よりは、長持一竿に裏打致し候唐紙を入被遣候て、書物御望被成候故、道中船中御國まて暇々御書せ被成候得共、全濟兼申程に御座候、定て御家中の銘銘望候分も其内に入申候故、如右大分に成たる事と存候、何分益も無之事に、御家老中も餘臨時の御世話を被成、并役人中の手を塞候段、甚以如何敷事に御座候、

一詩文章は眞文役の外、取次の事無用に仕候様に、堅く可被仰付候事に候、外より取次候ては不宜譯數多有之候、交隣提醒、

寛延元戊辰年四月廿日、韓使船入浪速河港、同廿三日諸賢有唱和衆作、隨得錄之、延享唱和、

寛延元年五月、朝鮮國信使來朝于東都、臣元勳按するに、官醫橘氏なり、奉命接見使客、略問方產未闡、以資多識、寔非清平之餘化、何夫得然乎、元勳固有受敎于韓人之嫌、談說翩翩、聊示國字有餘、故無議論之補過者云爾、太醫令朝散大夫橘元勳識、

戊辰五月廿三日、到于鴻臚館謁製述官朴敬行于筆談所、橘先生仙槎筆譚、

寛延元年

稟、雪樓按するに、雪樓は、山宮維深とあり、　經國大典和學部載庭訓往來童子敎等書目、此皆兎園策而已、如六國史、懷風藻、經國集及諸實錄、律令等、皆未傳貴國耶、吾國水戸義公以一代雄才、撰大日本史二百四十卷、但以未刊行、不廣敷人間、貴邦東國通鑑亦嘗以義公校刊行于世云、」復、濟庵按するに、濟庵は正使書記李鳳煥なり、　貴國之書出來鄙邦者絶少、日本通鑑卷帙頗多、而近來自譯所出來矣、水戸侯之二百卷史未得刊行云、可恨東國通鑑閒已刊行云、其史蕪亂厖雜、無足觀耳、」稟、濟庵　女人染齒之俗、象何制度、跣足無袴之法恐涉無禮、其義可得聞耶、」復、雪樓　女人染齒、取烈女不更二夫之義、以白者則可以朱、可以黃、可以紫、而緇者不復變爲他色也、





婦人無袴者、中人以下之制也、取其簡便焉耳、如高貴則固有五重衣背子自注、方言加羅幾奴、裙自注、方言比言毛、方紅袴自注、方言晨波加麻、及襪、而士庶婦女則有大衣、無袴用襪、或跣足者庶人之婦女闕禮者也、」稟、濟庵　奴隸無袴何耶、」復、雪樓取其簡便也、至大朝會則用烏帽子白張、」稟、雪樓　中山傳信錄兄覩之否、」復、海皐按するに、從事書記李命啓の號なり、　未見、」稟、雪樓　清徐葵光所纂甚詳其國事、非海東諸國記之比、蓋奉使留滯之間所詳之也、其土俗與日本太同、蓋以爲薩摩州附庸、」復、海皐　小琉球、即大琉球宗室也、」稟、雪樓　宗室者、何耶、」復、海皐　中山王也、」稟、雪樓　慶長中薩摩侯家久、遣兵滅中山、擒王尙寧而歸、見之于大君、中山請永爲附庸、非小琉球、即尙島大琉球也、至今爲薩摩臣、」復、海皐　已聞之、以上、和韓筆談藻風編、

寛延元年六月九日

稟、雪樓　以經國大典觀之、諸公謁大君之日、所服皆公服、而三使唯爲朝服乎、三使官所冠三梁木箴否、其他諸官所載幞頭否、」復、海皐　金冠玉珮、我朝大公會時服之、適異國者亦如之、諸執事烏紗帽黑國領三梁木箴如大典、」稟、活庵按するに、良醫趙崇壽字敬孝の號なり、　神武帝、距今爲幾年、」復、雪樓　神武帝即周惠三十七年也、崩後至于當今凡三千餘年、蓋當貴國箕子中世乎、」稟、活庵　古人之姓皆一字、而貴國有二字爲姓者多何也、」復、雪樓　我邦多以地名爲姓者、故有二字三字至四字五字者、亦地名耳、雖漢土亦有複姓三字姓、何必我邦、」再復、洛庵　然矣、

稟、自注、天壽偶來朴短軒舍、未嘗與僕改通姓名直云々、　金天壽按するに、寫字官同金知天壽、字君寅、紫峰と號す、　願書いろは、」　僕即書四十七字、一過天壽高讀之善協國音、」稟、雪樓　君か代は千代に八千代をさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまで、此和歌義〔頗寶祚經千年至八千年又至沙石長爲大磐石之久也、」天壽以我國語答曰、面白事也、」稟、雪樓　貴國官階以四品以上爲大夫、五品以下爲郎、不與唐及我天朝同、不知一遵明制耶、服色何如、」復、海皐　官階則一遵明制、故四品之別與唐制差異、服色則二品以上衣淡紅衣帶犀帶帽角合紗、三品以下衣深紅衣帶銀帶、」稟、雪樓　日本書紀書韓地交通之諸國、有安羅國、任那國、加羅國、耽羅國、散半奚國、斯二岐國、卓淳國、喙國、卒麻國、加羅國即駕洛國王金首露所治乎、任那王姓未聞、其餘國今何在、」復、濟庵　書籍無可徵、」

稟、雪樓　耽羅即濟州地否、星主之後今存否」復、濟庵　星主之後、爲高氏梁氏」稟、雪樓　日本紀註引百濟本記、今六傳貴國尙存否」復、濟庵　有」稟、雪樓　檀君東國通鑑若爲檀氏者、東國史略即爲桓氏、不知孰是」復、濟庵　檀氏是也」稟、雪樓　新羅國初稱居西于、呼貴人之稱也、又稱次次雄、神之之辭、尼師今齒理之稱、其他麻立于之類、方言今尙存否」復、海皐　羅氏俗語今士大夫恥言之、所稱附之書契以前」稟、雪樓　貴國樂康獻王之所定乎、或明樂耶、正德聘使觀我國所傳之樂、公定開之」復、濟庵　鄙邦樂制、我世宗大王令朴堧剏成者也、皇風樂與民樂最稱云、辛卯使行時、貴國所傳之樂、皆高麗時靡靡之調云爾」稟、雪樓　吾邦所傳有五常樂、蓋舜之韶樂也云、其他爵有古樂、凡三百餘調、豈唯高麗之俗樂而已哉」濟庵笑而不答、以上、和韓筆談瀛風編、

延享五年五月、朝鮮信使來聘于東都、臣春恒奉命接見韓客、筆語唱酬凡數會、寔非昇平之餘化、何夫得然乎、按するに、春恒は東都官醫とあり、

稟、河春恒　曰、昨入殿上、有一可見者耶、宮室之美惡亦如何、軍官李栢齡在侍、予爲直問、」復、李栢齡　宮室之美麗、武昌之大觀、雖漢宮亦有加之乎哉、金鉤餘色、玉欄彫工、錦繡雜見、無一點瑕、可謂東方君子國也、市陌之繁繁、雖中國無加焉、桑韓醫問答、

寛延元年

稟、濟庵　貴國專以武力爲敎、文明之運姑未盡開、苟有一二君子昌明經術、循蹈軌轍、則三綱五常之理、天人性命之學何患乎、不造其極、而僕於五千里往返之役、閱歷數百文士、而詞章記誦之藝、都不關繫於爲人樣子、間有以經術爲問、而皆以濂洛關閩之正路、爲老生常談、睨而不顧、眞所謂蚍蜉撼樹者也、江戸藤原明遠、頗有才識、而亦於朱學陽尊、而陰擠究其所就、亦不過伊藤維楨之餘派也、未知草野山林之間窮經而講學、不悖程朱之旨者有幾人哉」復、搢蘐按するに、搢蘐は留守退藏とあり、所喩曲折詳盡、三復爽然、警於昏惰者爲厚矣、夫性命之賦與於人者極天罔墜、而聖賢所敎成己成物之道、自古互今擷撲不破、但世之有治亂興廢、實係于天運盛衰之機、然至於上成出震向離之德、下有補天浴日之功、則雖季世奚患不可復于三代之治、亦唯在待其人而已、孔孟周流天下爲此故也、吾邦天武帝時、建學校於諸州、使子弟學之、文武帝行釋奠之禮、置勸學院悲田院施藥院學館院、行常平義倉、其政事多皆因漢唐之法、今也風降俗衰、不如古昔、然天朝律令以問學爲第一義、京師有敎業坊、東武有昌平山、諸儒亦各建學堂以相講授、且吾邦固尙武力、即非武以征亂賊攘夷狄、不能永護王城以保百姓、不然則至夫北虜浸中原無之能禦、此所謂有文事者必有武備也、僕甞竊恨世運不復于古治敎、故今世大淸海內爲胡俗、鄒魯無純儒、寥寥乎未聞有其人也、天命無常、聖道東遷、朝鮮有退溪先生、日本有闇齋先生、文敎煥乎開於天東、而孔孟程朱之道、粲然明乎兩邦之間、可謂爲大東周矣、和韓文會、

寛延元年

貴邦諸州沿路所經處、僕纔得其大略、衣冠禮儀之道州々皆然耶、武敎太勝、文化似未盛、昇平幾百年、獨無賁飾笙鏞之治、不能無慨然者、玆以仰問、西京諸大夫所以輔相之道亦何如、濟庵」我邦開闢、天照大神降天、神武繼興、以神道設敎、風俗忠厚質朴未散、其後十餘世始與漢通好、頗采彼國之制、至延喜天曆聖代、則禮樂文物粲然大備、律令格式雖多因漢唐、其制治忠厚則本、我邦俗用三代之遺意衣冠之制樂舞之節、與盛周比隆、禮樂大行於天下、相傳千餘年、亂臣擅國制度始壞離、爲戰國干戈日動、然西京則儼然獨立、禮樂制度未嘗少變、以到于今、故西京公卿諸大夫望之如神仙中人、國朝則神祖受命定鼎東都、天下大治、紀綱風俗皆復延天之舊、比盛三代、但國朝奉天朝正朔不敢、自改制度冠服之制、且依戰國是以未免、致諸君之疑、若明詔一降、使國朝行古制、令朝出而夕達於四海、斯民復堯舜三代之舊可觀矣、特依遠以待天朝之詔耳、觀海○按するに、觀海は松崎慊明とあり、足下以西京文物望之如仙、苟然則豈不盛哉、但僕意則終有所未釋然者、冠婚喪祭之禮、衣服冠裳之制、非可以一時便宜、或行哉、不行或俗者也、六十六州僕既未盡見之、何可質言、而路過西京街巷阡陌之間、所目睹者與他處所見略無異、不過時有不剃髮之人而已、四禮之梗槩亦從人聞之、似與先王古禮大相違背、甚至於初不知有此四禮、衣服冠裳只著於朝會、而平時所以章身者、大叚乖錯、不襪無袴、其制已無可言、而其掩身之衣未之聞焉、異國人初見之致訝者勢所必至、足下以爲若發一詔令則可以行之、未知何所忌而尙不行古制耶、未可曉也、濟庵西京公卿諸大夫衣服冠冕皆守古制、不特

朝會、雖在間燕、衣冠必正、天下尊之、甚至若出行道、則士庶望而避之、不敢平視、公卿非天朝大事、不敢妄出街市、雖我邦人有未嘗得一見、天朝禮儀者、僕鄉里去西京不遠、幸得其略、公以沿路街市所睹謂西京、無甚美觀、理固當然、公問西京諸大夫、僕不敢不以實對、至謂民初不知有四禮、則草昧時固有然者、今時昇平民向文化、風俗丕變如堯舜三代之盛、海內洗然無此陋俗矣、觀海」足下之言、似諱時王法令而然也、事理當然、而第以沿途所聞見論之、則且未免有一俗、而非堯舜三代之舊山川之明媚人物之殷盛、只是冠婚喪祭之禮、衣服冠裳之制、有關於先王之民彝物則之常、從此以往天運循還、或有開口啓文之日、竊在異邦祝之、濟庵」惟我天朝天孫正統與天始開、與天無墜、國朝唯能奉天朝命、故國祚無疆、此自我邦治平之所以長久、中國無此事、由視其君如奕棋、我國朝不敢自作禮樂、以待天朝之詔、謙讓之至、唯我邦昇平百年、文化日盛、天若或覺悟、天朝一降明詔何難改之、有誠如公之言、觀海」來庭集、

寛延戊辰六月廿七日、平安本國賓館

稟、吾國古里數自富山浦津至大坂、三千五百八十里、又貴國所著應接記爲三千四百十里、則是自貴國王城至于吾國王城之里數乎、又或自貴國邊境至吾對州之里數乎、復、自釜山海至大坂、似是三千餘里耳」、稟、吾國樂家所傳有隋唐高麗二部、而隋唐部有萬歲樂、甘州、伊州、桃李花、採桑娘、蘭陵王、想夫憐等數十曲、高麗部有古鳥蘇、胡德樂、新靺鞨、崑崙、八仙、胡蝶、貴德、納曾利等曲、祭祀朝宴見用之、貴國亦應有雅樂、而吾國所傳高麗部樂曲、貴國亦應見存、今所書示曲名有異同否、且馬上所奏引路鼓吹傳承是軍門樂、豈古鐃歌之類乎、意是有其詞請書示之」、復、高麗之樂、俱非正聲、故今無存者、馬上鼓吹即行軍用兵時所用、豈有其詞耶、太廟雅樂一遵先王之五音用之耳、班荊問譚、

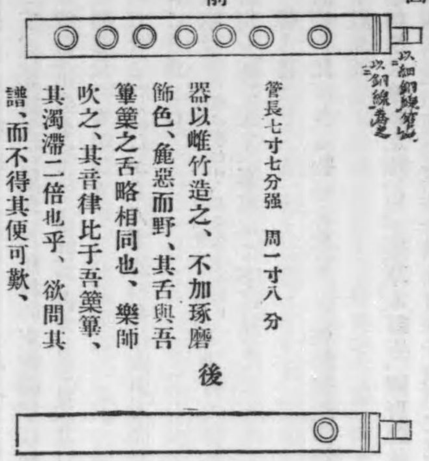
寛延元年

元勳云、敢問行中所備之音樂、所謂右方之樂乎」、敬行云、頃日暫時之話到今依然、又此一席相會足慰旅愁、何幸何幸、行中音樂即太常雅樂耳」、元勳云、宗史曰、貴國之樂有左右二部、曰唐樂、中國之音也、是爲左曰鄉樂、即貴國故習之樂也、是爲右按此鄉樂故習之樂、而爲殷代之物乎、然則上古之樂也乎」、敬行云、弊邦之樂、有軍樂雅樂二部、而左右之樂、非吾邦之故也」、元勳云、此行之樂有慾云、是鬷簫之謂乎、」敬行云、然」、元勳云、幸得觀此物乎」、敬行、頷」、樂師持來此器、略寫其樣以列于左、





慾圖




管長七寸七分强　周一寸八分

器以雌竹造之、不加琢磨飾色、麁惡而野、其舌與吾篳篥之舌略相同也、樂師吹之、其音律比于吾篳篥、其濁滯二倍也乎、欲問其譜、而不得其便可歎、

元勳云、舌乃蘆乎、」敬行、頷、」元勳云、弊邦固有鬷篥大小二品、今存者小鬷篥也、大者已失其器之製、僕按貴國傳其大者、吾亦傳其小者乎、今夫得慾之製曷勝榮荷、」元勳云、貴國本年置閏、在于何月、」敬行云、七月、」元勳云、然則與時憲書同、貴國有司曆乎、」敬行笑而頷、」元勳云、開寶通禮、幷唐令存在耶、」敬行云、或有之、不崇用也、」元勳云、貴國王都在國之中央乎、北極出地何度、」敬行云、國都在中央、北極出地三十五度、而貴國奈何、」元勳云、略與貴國相同、京都北極出地三十六度弱、東都乃三十五度有奇之地也、云、橘先生仙槎筆談、

東都淺草の闔王堂に、寛延元年來聘せる朝鮮人の書たる扁額を揚く、落欵に戊辰流月朝鮮國眞狂金啓升書くとあり、流月は何月たるを知者なし、近日刊行の秉穗錄に自注、尾張の人岡田挺之著す、朝鮮の南秋月余に和する詩の後に、甲申流頭日と誌せり、人に問ふに詳ならす、後に東國通鑑を見るに、國俗以六月十五日沐髮於東流水、祓除不祥、因會飲、號流頭飲、此文にて六月十五日なる事明かなりと記せり、中良按に、流月は流頭飲を行ふ月といふ事にて、六月を云なるへし、されは唐土にて上巳の日、東流水に洗祓して禊飲する故、三月を禊月といふを、据所とはすへき、

朝人詠歌

秉穗錄に載す、延享戊辰來聘の朝鮮人詠る歌、

トシテナンノンセントンチヤ　トラスンバ　ネイキルネイラ　チヤバチン　ビラ

中良按に、是は韓語にて詠たるなり、譯文なきを遺憾とす、往年或人の扇面に、鷄林の玄德淵字は仲擧なる者の、平假名字にて詠歌を書たるを見、其口氣大に熟したるものなり、

明日はまた誰なからんも知ぬ身に友ある今日の日こそ惜けれ

と云歌なり、按するに、この和歌有しは、明和度の事なり、其證彼條にあり、予韓人の書たる發句一號を藏す、影寫して下に見す、

韓人書

蝶輕し比はきる物一ゑかな　　朝鮮聖欽印桂林漫錄、

閻王殿扁額

故事朝鮮人來朝之時、宿于淺草本願寺、國府門前有閻魔像、門題曰閻魔堂、國府門前者往于淺草之途也、使人見其扁曰、書法非是、即請爲書閻王殿、冠冐曰、新羅王孫八代平章、戊辰流月、朝鮮國眞狂金啓升書、印曰、朝鮮國金啓升、額大九尺程、幅四尺程、字大尺有五寸程、冠冐長五寸程、幅二寸五分程、印長方四寸五分程、右二印皆白字朱押、字篆、戊辰延享五年也、朝鮮遺事、◎圖略

明和元甲申正月十九日

一左の書付松平右近將監被相達候、自注、十六日出る書付也、

朝鮮人に詩作贈答幷筆談等に罷出候者、一通りの對話の趣意相認候儀、且古來より二義兩說の疑敷所抔を談、或風雅を以贈答仕候樣成事は不苦候得共、一分の學力を自負のため異國をなぢり、彼國を貴み候とて我國をあざけり候樣なる、第一國體を不辨幷筋違候樣相見候、林大學頭にては天和以來弟子共差出候節、詩作贈答計に候て筆談等は決て仕間敷段、堅申付來候、依之此度出席の者共、右に準し詩作の唱和は格別、國躰を心得違候樣なる無用の雜事筆談不仕樣可相心得候、尤右筆談幷詩作唱和の度々、役人其席に立合不洩樣取集、林大學頭方に不殘差出候筈に候、且又筆談の儀相願候者の外給仕等に罷出、又は相願候て詩文贈答仕來候者も有之由相聞候、此儀は猶以如何に候間、相願候人數の外は、詩作贈答堅仕間敷事に候、

右之趣、可被相觸候、



正月　柳營日次記、御觸書、條令集、天明集錄、御徒方萬年記、

明和元年

鵝臺　○按するに、姓流名長愼字彌八、とあり、承貴國成均館儒生、冬夏有尊孔子爲王者、四配爲諸侯、行朝聘燕享之禮、策試選叙之式等之戲、不知今猶有此戲乎、而官不禁之、可以見貴國崇文敎之盛也、」秋月　○按するに、南玉字時韞製述官なり、敝邦成均館掌聖廟俎豆多士絃誦、春秋上丁行釋菜之禮、國子先生以每月朔望、與諸生焚香謁聖、後退坐明倫堂、講六經四書有宗性理之書、主上三歲一拜文廟、試諸生於泮宮之下、國子先生亦月試杏樹下、大比之科亦設於館內、而無朝聘宴享之儀、況戲之一字非所可論、雖他處固無之、矧聖廟肅穆之地寧有戲事、高開誤矣、」鵝臺　如所對則尊聖重道之隆、不堪傾慕、僕所問事詳載慵齋叢話、僕固疑其事、是以爲問耳、」秋月　慵齋叢話敝邦前世文人之記、而其說本多不經、心常薄之、此說則不載於慵齋話中、或無乃有假叢話傳播於貴境否、尤可疑訝、」鵝臺　書之不可盡信也、如此矣　僕非質諸高明、則殆誤一生矣、

支川　○按するに、元仲擧字子才副使の書記なり、衆中迎望宛如宿昔之交、神宮是入境後第一勝槩、而歸之叢詞甚可惜也、俗吏惱殺人之示說得快活、有如此形勝、不欲使遠客登覽者極無意味、大抵此行之拘束至及於吾輩、令人齮齮不樂、甚可歎也、」鵝臺　登覽鵝山、足以少慰羈愁也、凡此邦名山勝地多、屬浮屠或神祠、誠如公之言也、鵝山所覽東北本州地、有陶元山巴巫乾滿珠島、東岸則豐前州、文司關隼人祠、新羅碕、百濟野、楊柳浦、大里、皆在一瞬、凡法令所束、孰勝齮齕、而不敢自恣、是君子之所以爲君子也、和生詩見惠高和、至感至感、昨請一揮染、已領南成二公之賜、獨不得公之心畫、爲憾耳、」支川　文談絕勝韻語、況老成人、孚信之意、藹然言外者乎、新羅、百濟、皆敝邦舊都之稱、其曰碕野者、有命名之由、詳示之、白馬塚者又在何處、幷示之、僕平生鈍拙、筆亦如之、故固不敢臨紙放毫、昨日又未及旁聽相詫之語　致煩再問媿謝、」鵝臺　僕固不文不能書以盡意、慙媿尤深、新羅碕、百濟野、往昔三國入貢所繫船也、其側又有高麗港、白馬塚僕亦不知所在、乞心畫謹遜見示、蓋以歎服、僕之所請非以其巧妙、永以爲它日之容顏也、王弇州曰、畫精神五百年、書精神八百年、然則與不朽之大作其傳家以爲珍也、幸勿推辭、又前日旁觀同知長州公醫負丹崖揮筆甚

佳、如可得請、則公幸從臾之、退石（按するに、金仁謙、字士安、從事官なり、）貴邦賦稅、一遵什一之例乎、」鵝臺　租稅、以什之四爲率、」退石　比三代一何多也、」鵝臺　土壤豐腴、民猶以爲輕也、」退石　大率十手斗所種田收幾手斗、」鵝臺　沃土下種一斗收成一斛五六斗、雖瘠地亦不下一斛二斗、龍淵（○按するに、成大中、字士執、正使書記なり、）足利學校之古經、紀州山君之著述、如是海外異本、而僕未得一玩、深可恨也、歸裝甚忙無由購去、尤可歎、行槖其或帶來耶、願得一覽、」鵝臺　古經未刊行、考文亦多卷帙、僕不携來、不得供覽、可憾也、」又　忌日古者以甲子、司馬晉以來用日數、用日數則晦日死者小盡之月無忌日、閏月死者無閏之年無忌月、似宜從古爲正、不知貴國之制如何、」支川　忌日當以日月計、晦日死者勿論月之大小、皆以當月晦日爲忌日、閏月亦從本月數計、他年雖遇當月之置閏、亦捨閏而取本月、假如今年閏五月晦日死、他年皆以本五月晦日爲忌日、而後雖更遇五月置閏之歲、祭則行於本五月晦日、但其閏月晦日亦不聽樂不食肉、以終當夕耳、」龍淵　貴邦帶劒之俗、自源賴朝之時始之、果然、否、」鵝臺　古郡縣之世、唯武官幷兵士得帶劒已、士庶皆佩刀、則自賴朝時漸矣、」龍淵　曾見貴國三才圖會有云、安德廟中藏平氏故物、今尙留在、否、」鵝臺　相傳古有衣袍樂器甲冑之類、火災烏有、今唯存幼帝御劒、平敎經佩刀耳、」秋月　此地有安德祠、其詳可得聞否、」鵝臺　安德帝廟在此山、初帝即位幼冲、外戚平相國淸盛擅權、一門爲公卿者二十餘人、驕僭無度、朝綱大紊、於是右武衛源朝賴起兵關東、有源義仲亦擧兵應之、聲勢大振、平氏遣軍征討、諸軍皆失利奔潰、平氏乃奉帝蒙塵、據攝州一谷城、義仲入京恣其橫虐、賴朝乃遣弟範賴、義經、誅滅義仲、二將乘勢攻陷一谷、六師御舟保讃州八島、義經冒疾風怒濤、襲其不意、帝復航海、東軍追及、大戰壇浦、官軍敗績、於是帝外祖母二品尼、抱帝（自注、時八歲、）挾神璽腰寶劒、口占海底有都之什沒海、平氏公卿將士宮女命婦沉海者不知其數矣、實元曆元年春三月廿四日也、軍散後葬帝此山、後又陵上建廟、歲時享祭、其側有平氏諸將墓廟、壁畫侍女保傅諸臣像、北廂壁畫自帝降誕至沒海、平氏榮悴源平交戰之勝、是以自王侯至士庶緇流、凡有風致者、經過此地、無不詩歌以述懷古之情、往年貴國僧松雲者有弔古作、爾後



來聘賓僚皆有賡和、共臧廟中焉、諸公亦豈得無覽古之情乎、詩以繼往蹟如何、僕此行有鄙作、敢瀆電覽、忽聞豪傑起山東、廊廟無人長策空、終使翠華辭鳳闕、徒將神器鎭龍宮、紅裙漂浪魂何在、金甲懷沙恨豈窮、欲向水濱問陳迹、蕭蕭木葉下西風、秋月　安德廟古事、僕輩亦略有聞知、而未詳、今承詳喻可喜、但前日通聘之行、皆親見廟貌、所以有懷古之作、今行不得目覩、曾不知棟宇之制山川之勢、想像以作、恐近隔靴之爬、和韻非難、而不容輕易下筆、如何、如何、」鵝臺　欲親見廟貌、則僕當謀寺僧耳、」秋月　俟風晴得與左右同遊、則當有目擊口吟詩耳、」

稟

凡天地之間、聖人之道莫尙焉、雖然後世之儒者、以道爲己之私有、以標同伐異貴中國賤夷狄爲務、是其識見之陋、不知天地之大者也、蓋貴邦吾邦同僻東維、而貴國聲敎之隆、民德之醇、如四學養人才、設歸厚之署、賜養老之燕、奴僕亦許行三年之喪、雖古至德之世、亦不過如此、比比而有奴婢盡忠、娼妓死節之類、亦不鮮矣、彼中華聖人之國、而其人之姦惡有甚於蠻夷者、僕於明淸律而見之、凡律條所載姦騙兇惡之甚者、皆吾邦之人所未嘗及知也、又如和蘭不二色國無乞食、皆中國之所不及也、且夫□□人之化、詩書禮樂之敎、所被及者貴邦吾邦琉球交趾諸國已也、自古西洋南蠻船舶來吾長崎者百二三十國、又見地球圖坤輿外記、而考諸明淸會典一統志、其所不載者尙多矣、宇宙之大、邦域之多如此、而其國各有其國之道、而國治民安也、乾毒有婆羅門法、與釋氏之道幷行、西洋有天主敎、其他如回回敎囉嘛法者、諸國或皆有之、夫作者七人皆開國之君也、繼天立極者也、立利用厚生之道、立成德之道、皆所以代天安民也、國治民安又復何求、何必中國之獨貴、而夷敎之可廢乎、故君子之道成器達材、以供安民之用、其不得志也、樂天安命優遊卒歲又復何求、故欲使世之不信己者信己、欲使夫不好學者好學、不知時不揣勢、欲施其道於當世、悶悶爭論好勝人者、不知天地之大者也、僕之所見如此、高明以爲如何、高明前有盡三大之語、是以再請示敎已、」鴨綠江長廣可得詳乎、（黃河大江、其廣不見諸書、問諸華人始得聞其詳、故以奉問耳、）承貴國至北京、道經沙漠、自長城外入中國、果爾乎、行程幾許、」盛京在遼東衞、中國來往所經由乎、」長白山在咸鏡道乎、將徼外乎、與金剛峯接近

乎、其形狀可得詳乎、」貴國世宗以來不崇佛法、與編戶民無異乎、無有官寺官僧如統正者乎、」三使相皆正三品、知事同、知正從二品、而爲儐從者、何爲乎、

右解纜後贈於竈門關、

答

別幅見諭、以世儒之貴中國而賤夷狄、爲小見陋識異於天地聖人之道、此足下志大眼空之論也、足合尚士呰口、然竊謂天地至大、而不能不先陽而後陰、聖人至公、而不能不內華而外夷、其或中國而夷其行則夷狄之、夷狄而變於夏則中國之、楊子所謂在牆則揮、在狄則進是也、苟其生在中國之外、慕陳良而不可得、指中國之夷行者曰、是眞中國之不如夷狄、指夷狄之華行者曰、是眞夷狄之賢於中國、豈揣本齊末之言哉、但當平心公察明是非、而辨內外形勢之所局者、雖不得自拔趣向之本、然者當有以自定、鶴臺見識超邁、必有犂然者矣、」鴨綠江袤、則有三江十里而近、長則自發源至入海、可千里而近、」敝邦至燕京、經遼瀋長城行程三千餘里、長白山在咸鏡道、金剛山在江原道、脉通而壤不接、形勝則卒忽難說、金剛以色相奇潔勝、長白以氣勢雄拔勝、」敝邦貴四民而賤僧道、不得與編戶比、國有左道之禁、那得有官寺官僧、」敝邦用人明有等威、或有秩下而官淸者、或有秩高而職冗者、使相雖三品、皆朝廷名大夫、員役雖二品、自當使臣之統攝、

右自竈門關來、以上、長門癸巳問槎、

明和元年

一那波魯堂先生は、相國寺瞻長老の倚に因て、浪花より江戸まて、往來とも韓客に接せり、凡甲申の歲の聘使に親しく交りしものは、魯堂にしくはなし、韓人歸國の後、予再ひ京に遊ひ、しは〳〵此人を訪ふ、故粗其說和を聞り、或は其筆語忌諱に觸〻、事なと有て、公然と人に語り難き事もまゝ見えたり、且三使は正月浪花に到りけれとも、馬海東靑はその前年の十二月に着船し、正月中旬まて賓館に逗留し、信使着船二三日前に浪花を發す、その間三十日あまりなり、因て馬官の張世文と言ものに隨て、その逗留の間に、粗朝鮮語を學はれたり、予も又一二是をきけり、和語に朝鮮語多く混せりと、兼て聞及ひたる事にて、白石の東雅にも其說あり、然るに魯堂の話をきくに、和語の蓋豈寡、これらの訓みな朝鮮語と見ゆとそ、此說さもありなん、これらの訓は日本にて制したるにはあらさるへし、よしと云事をチョッソと云なり、唐人の好と云に當れり、予館中にて此事を聞しゆへ、書畫なとを韓人より見せける每に、チョッソチョッソと云ぬれは、金溪か、チョッソと云事を知て居ると言やうなる樣子にて、同列のものに指して笑ひたり、言語の模樣は凡て口疾にて、四聲の中には、上聲に似たるものなり、

一彼國人茶を嗜む、鹽の淡きを好、肉食油膩のものを好事華人に同し、辛葱姜を嗜む、煙草は嫌もあれとも多くは嗜、秋月、玄川は好む、龍淵は好ます、煙管大にして長し、副使伴人金應錫字汝圭予に逢て朝鮮たばこを惠めり、甚辛く色黑し、予か如き稟賦の薄きもの喫にたへす、押物通辭李彥鎭號曇寰なるもの唐音粗通し、中華へ兩度まて使せし人なり、博物能文にあらされとも中等の人と見ゆ、元美を慕へり、于鱗は剽竊なりとて好ます、吾國徂徠の著述を見ていへるは、海內の豪傑なり、同行の人の內にも謗る人あり、惜むへしといへり、同行の人とは學士之書記なとは、徂徠を能文排道といひ、邪說といひ、不世の才を以て荒淫の浪に埋沒せりといへり、此人々を指ていふなり、浪花與力內山藤藏、曇寰と筆談を見るに曰く、中華の文物今は皆胡に變して見るにたへす、學問豪傑なしとそ、吾國名山水を問へは琵琶湖富士山の賞は、吾輩もとより聞くところ、筥根の湖尤奇なり、巖石の峩々たる處寡といへり、かの國の國制に、程朱の學を重し、異學は一人もなしと秋月云たれと、又儘に箇樣の人物も有と見ゆ、玄川予か扇頭に題して云く、宇宙中間有兩人、仲尼元氣紫陽眞、朱子を尊ふ事をしりぬへし、盧魯齊は元朝に仕たる人ゆゑ、もと廟に祀たれとも今廢せりと云り、趙東觀字聖寶號花山、齊正使の姪、書を能、洪善輔字聖老號默齊、詩を嗜、巧はなけれとも、述なる事實に七步競病の才なり、予〻唱和四五首あり、有人、扇面書を求むれは、何十人にても即席に詩賦て書くゆゑ、江戸にて魯堂に與る和詩に曰く、逢人盡是投團扇、一日留題百首篇、その後に書曰、一日或百首少不下四五十首と云り、予も扇六七書を乞に、五絕七絕を題す、初め意とせす、宋人の詩を諳記して

寫すと、後否知れり、書は徂徠の風に似たり、○一通辭を朝鮮音にてトクソウと云なり、○對馬の通辭はかりにあらす、朝鮮人の內にて日本の語に通たる人、通辭職になりて來る事なり、然れは兩方に通辭あるなり、これはいかにして和語を學ひたるとなれは、彼釜山の和館に、常に對馬の人在留する事故、幼少より朝夕館中に出入して、賃錢を求めすして薪水の勞を助くるなり、此の如く年月を經れは、自然に和語に通するなり、さて信使來聘の時、その者ともを撰ひて通辭とする事なり、予も李命和字は聖欽といふ者と一二度接見せり、この人は即次上通事の職をつとめて來れり、和語も格別入組たる事は通しかたし、たとへは今日好天氣、平安否（ノ）と言事は通すれとも、もはや少し六かしく丁寧にいへは通し兼るなり、あの方より物語る事も有ふれたる事はよけれとも、少し六かしき事、或は冗長なる事は、その語前後上下轉倒錯出して、きこえかぬる事多きか、吾國の平假字和歌俳句をも、少々つゝは習居たり、人の求めに應して古歌抔を書けるを多く見及へり、予か爲に、あの山の月か鳴たか杜鵑と言發句を寫贈れり、三使の事を、吾國の人ともの語るときは三使樣といへり、金鶴雜話、

德力十之丞良顯か子良弼、十五郎、藤八郎と稱す、

寶曆十二年三月四日、御書物奉行となり、朝鮮人と贈答す、明和元年閏十二月十六日、欽定古今圖書集成吟味御用をつとめ、銀五枚を賜ふ、一話一言、

明和元年二月

松庵曰、貴國三百三十三郡、東西二千三百七十三里、東北千七十三里、信然乎、（按するに、姓井名敏、號松庵と號す、）退石曰、三百六十三郡、東西二千里、南北四千二百里、」松庵曰、釜山浦、距漢江幾里程、」退石曰、一千五百里、」松庵曰、箕子之胤尙有存者乎、」龍淵曰、箕子之胤奉其祀者尙有數家、」松庵曰、檀君之祀何如、」龍淵曰、此吾邦開國之祖、其祀儼然尙存、」松庵曰、貴國正北有毛憐海貨、蓋靺鞨之類耶、」龍淵曰、舊有野人種落、今則無之、」一人氈笠白衣坐學士席、」松庵曰、斯人何官、」曰龍澤、兩班（按するに、金龍澤、細柳童と號す、）」松庵曰、貴國兩班之號、謂文武官耶、又先世有兼文武官者、其子孫僉得稱兩班耶、」龍澤曰、敝邦先祖嘗兼文武官、累世襲官之兩班、」龍澤曰、僕輩其畏斯人、失禮斯人



則打可畏、松庵筆語、

明和元年

勝山稟、○按するに、勝山姓田名立松、美濃國人なり、賓客中有以獸皮作巾者之人、此巾名何、龍淵答、賓客中無獸皮作冠者、尊必誤見矣、勝山稟、此行諸賓客不飲酒、何也、龍淵答、敝邦酒禁甚嚴宴禮亦不用耳、勝山稟、敝邦鯛魚、貴邦亦有之邪、若有之則名之爲何、龍淵答、敝邦亦有、稱道味魚、問槎餘響、

明和元年

既賜佳作、中有禪經不到鴨江東之句、試問、佛敎何故不到鴨江乎、東渡（○按するに、釋固靜、東渡と號す、）」昔我康獻大王肇開鴻業、一洗麗朝之陋、痛斥佛敎、故凡于禪敎者不敢接跡、故西域寂滅之敎、不敢渡鴨水以東、退石」大王者大祖尊謚乎、東渡」然、退石」李東郭曰、新羅之時佛法盛行、果然乎、貴邦中一掃佛敎耶、東渡」新羅高麗之世、果崇佛法、而康獻大王、以其非聖人之道、一切痛禁、雖有些少沙門之寄在山間者、皆不敢齒於衣冠之列耳、退石、○東渡筆談、

一韓使は文事を主張する故、隨分文才に秀てたるを撰みさしこすと見えたり、故に沿道客館にて侯國の儒臣と詩文贈答筆談の事多し、此方の儒臣多き中には文才の長せぬもありて、我國の出色とならぬもまゝ見えて殘念なり、夫はさて置又三都にては平人までも手寄さへあれは館中に入て贈答するに、官禁もなけれは、浮華の徒先を爭て出る事になり、館中雜沓して市の如く、疎文惡詩を以て韓客に冒觸し、その其敷は一向未熟の輩百日も前より七律一首やう〳〵荷ひ出し、それを懷中し、膝行頓首してさし出し一篇の和韻を得て終身の榮として人に誇るなと笑ふへし、かゝる事なれは韓客は諸人を蔑視し、數十篇の詩を前に積置、筆に任せて是を和するに、其中に聲律ちがひ韻のちがひたるやうの詩あれは、墨を附て投出し返すを、廣座の內よりにじり出て拾ひとり懷中し退くなと見苦しき事限りなかるへし、又韓人の和詩を書するに、文鎭の代りに脚を投出し、踵にて紙をおさへるなと狼藉至極の事なるを、有かたかりて頂戴するもあり、いつれも我邦の大耻、寔に苦々敷事也、愚は寶曆の聘使のとき（按するに、信使來聘の年二月明和と改元あり、）客館を見物に往しに唱和の始まりてある席を通りかゝり、右の樣子はまのあたり目擊せり、苟も志氣ある者、誰かこの輩と伍を

して贈答に出へきや、故にまれ〳〵正學眞才の人ありとも、是を愧て初めより韓人とは聲息をたちたり、韓人は是を知らす、その接する所は往々右の如くなれは、渠をして日本に人なしなと、いはさん事は、寔に歎すへき事なり、かさねて聘使あらんには、兼て令を下し、沿道諸侯の儒臣を、前弘に都下に召れ、其詩文達才の人に改させ、格に入さるは停られ、驛次にて贈答を望むものは、其格に入たるを儒臣より改、三都の平人の贈答は禁せられ、たま〳〵に才子ありて文稿を獻し自分請ものは、儒臣その外官吏以下の文才ある人に命して改め、まのあたり席上の作をも試むるほとにて官許あらは、韓館中も靜かにゆる〳〵贈答筆談も出來て、韓人も我邦に人ある事を知り、袵を歛めて輕急の態をやむへし、これ詞藝の末事といへ共、外國に對して我日本の耻を洗ひ雪むるは大なりとすへけれは、官より忽かせにさせらるへきにはあらすかし、前後にて正德の唱和はと盛なるはなし、まことに日本の出色とすへし、されとも其時は、天下の人才を江都に集めさせ玉ひし御事なれは、沿道驛次は寂寥たることなりしにや、正德年他所にての唱和集といふものは聞及はす、右の耻へきこと多かりしかもしらす、今日にては正德程の盛事には及はすとも、其かはりに沿道盡く人をゑらんて、いつ方にても、日本の尾を出さぬやうの處置ありたしと希ふのみ、

草茅危言、

申の歳韓人來聘の前年、其使事の禮の聞合にとて、延享年中に來りたる元德淵字仲舉といふ一韓官對馬州に來る、譯使とて來りける、右の韓客某對州の家老に別れを惜むとて和歌を詠して書して贈りける、其書一紙には惜別の二字を大書して、關防の印をおしたり、一紙には歌をかく平かなにて書けり、

明日はまた誰なからんも知らぬ身に友あり今日の日こそ惜けれ、

と書て、元德淵拜とかきて押印して贈りける、其書を彼地より、播州室津の人園文哲の大人に贈りしを、それより又珍らしきものなりとて、姫路藩の某氏に贈らる、今其家の屏風に張てあるよし、園文哲親らこれを語れり、有斐齋劄記、文會雜記○按するに、この事異說あり、その書下に出す、

寶曆十三癸未年

先將軍家の御弔儀として、朝鮮國の官人季深玄同知と、聖歡李僉正といへるもの、對馬の國へ來りし時、人々まどゐして酒たうへつゝ遊ひける折から、仲舉玄僉同といふ者又の名は德淵といへるか、この人うたをよみて出しぬ、二枚に書て一枚には惜別と大字に記し、一枚に、あすはまた誰なからんもしらぬ身に友あるけふの日こそおしけれ」となん、下に印文あり玄德淵印と云、緇藏瑣錄、隱見瑣錄、

甲申之春韓使來聘、竣事歸國、經品川驛、行中少年金雲龍者見兒女之皎美、而俾人問其庚、自傍答曰、已向破瓜、雲龍熟視云、洵美且艷、因援筆立書一絕贈之曰、顏色如桃李、春秋十五年、君無王上點、我作出頭天、兒女赧差誦之、卒和之曰、海外西方客、翩翩美少年、縱成千里別、猶望釜山天、雲龍屢唱賡歌、次旦不能進、從者叱馬乃行、右稻垣氏の記する處、めつらしき事なり、秉穗錄○按するに、この事猥雜、かつ兒女の和酬信しからたけれとも、また文事の一端なるをもて、しばらく存す、

文化八辛未年、

精里　洪浩然家傳、是敝妹夫之先出貴國者、以今千載一遇接見諸賢、故敝妹苦懇使求序跋、其事涉講和前、不免唐突之罪、其不忘所自出之意、則難峻拒、姑以謀從違、」清山按するに、清山は、正使書記金善臣の號なり、

壬辰之事豈忍言哉、今聞之不覺淚涔々、」精里　是所以慮其唐突也、」清山　今見洪浩然傳、既已談及於壬辰矣、其時我國金河西號獐厚名之子孫被擄入貴邦、因往不還、冒姓河西氏、而族黨繁衍云、其一族在我國、故今番信行囑得其實、方當兩國無疑阻之日、此一事本不足諱、而問之貴邦諸賢、皆諉以未聞、今見公誠實人也、若知其宗幸以見示、」精里　俘虜人刷還數次、而其人留而不肯去者衆、若余姻親有洪氏所識文人有高麗氏、有高本、自注、今高麗日本以爲姓、其他指不遑數、然事有係禁條者不可公然尋訪何也、慶元按するに、我慶長刷還宜無復遺餘故也、是語亦不可爲外人說、碍條有罪、請以畀炎、自注、至是清山設取問答紙片、納諸袴若將投火者、然恐將以此復命河西也、」清山　秀吉果猴之子乎、」精里　以其貌肖名、以猿面郎耳、猴子之說則未之聞、」精里　有鄕試省試殿試之法乎、」太華　按するに、太華は製述官歌相の名なり、漢城試曰京試、八道試、取曰鄕試自上臨策曰殿試、」精里　殿試止於御前試乎、亦有南宮試否、」太華　已登及第者令聚殿庭、更試親臨故曰殿試、殿試則以相國中一人爲命官耳、」珮川　山丹人與貴國通耶、」清山　山丹之號未聞、指何方爲

問乎、」瓢川　兀良哈東方濱海地、我國呼曰山丹、」清山　兀良哈即黑龍江之夷、自長白以北皆稱兀良哈、今按爲清朝臣屬、僕嘗至瀋陽、見所謂吉林胡者、獰猛異常、似是兀良遺種耳、」瓢川　壯矣行也、瀋陽育黎民所背據、今何光景、聞寧古塔是與鄂羅斯分界地榮衰如何、」清山　寧古塔即喇嘛氏肇基之地、在長白山下、前臨沙漠一支、僕至遼野、從者指示其界云、距此不過爲五六里云、」瓢川　八旗兵、或在京城、或在寒堡、其制可槩聞耶、」清山　民家俱是漢人旗下俱是滿人、亦有以民而竄名旗下者、則俱是牟利卑微之流耳、八旗之號僕不能書記、而有黃赤白黑鑲赤等號、隸旗下者俱是兵、臣民乃不隸於旗下云、」瓢川　盛京及順天府戶口凡幾萬乎、」清山　盛京之瀋陽乃僕所曾往、繁華壯麗亞於北京、北京戶口雖未可得其詳、內城四十里、外城（內城外城）二十里、合內外言之似不下數十萬家耳、」瓢川　山海關之固如何、」清山　山海關雖未之目、明時徐中山所築、僕之白眉崔旋燕身歷略聞其制、蓋亦金城天塹耳、前臨大海、後背遼野、重重設關、橫截北陲、延袤四千餘里云、」瓢川　山東江浙地方位如何、西渡果自本羅濟州歟、」清山　山東與我國西堂接界、從濟州直涉則當杭越福建之界耳、」瓢川　全羅道觀察使屬官李東植文始權尹得三以下五十餘員、嘗漂著我五島、僕於長崎得一接晤、極荷情誼、樓指既閱五年、今對諸公感念其人、此黨非公之所知乎、他年如逢貴邦人、而問諸公則我之感慨豈啻、」清山　略聞其事、而此人皆武人與吾輩不相關涉、故頗未甚朦朧、對禮餘蔑、

文化八年

感如（按するに、三宅米、如書之號す、）嘗聞天台智者大師所註知度論、傳在貴國今存否、若存則欲使對州官船購求之、其事可能否（自注、此問代前瑞和上、）」太華　此書元非我國所尙者、好事者往往藏之、雖欲購得恐難容易矣、」感如　智度論註卷數幾許、詳上、」太華　僕嘗一見、而其卷數未記憶矣、」清山　江戶兩使、何其忽忽發船也、」感如　七八月間海濤多颶少晴、故先秋而發耳、」清山　江戶文士間多來此者、而竟失一面可恨、」感如　彼亦皆悵悵耳、但緣今在天、不可奈何、鵝林情且、

通航一覽卷百之十一終





# 通航一覽卷之百十二

## 朝鮮國部八十八

### ○信使歸國道中　從慶長度至正德度

西北部樂浪

按するに、歸國道中御馳走御用書り、及び馬寧の事、すべて參向道中の時のことし、一は參向道中に、歸國の時も同樣との命あるをもて知へし、事は信使參向道中の條に詳なり、今こゝに一二その事に及ぶるものを出せしは、全く別に歸國の時のみなるを以てなり、故に記事前後疎密にして齊しくすること能はす、猶かの條及び來聘御用掛りの條併せ考ふへし、

慶長十二丁未年五月十四日、朝鮮國信使江戶を發途、暇賜はりしは、この歸國あり、

慶長十二丁未年五月十四日、朝鮮人江戶發足、（慶長年錄、諸家聽聞、）

慶長十二年五月、宗對馬守義智、三使と共に駿府に至り、大權現を拜したてまつり、（按するに、駿府謁の事は、信使聽城并江戶西城拜禮の條、事畢りて歸國す、寬永宗義智譜、にあり、）

慶長十二年五月庚戌、（按するに、朝鮮三使到駿州清見寺、此地則仰富士咫尺、俯則田子浦三穗松在眼下、絕景無雙、三使眺望、各賦詩而到駿府、（按するに、此時の詩三首あり、こゝに略す、○續本朝通鑑、）

慶長十二年、朝鮮三使六月歸國、（續善隣國寶記、）

慶長十二年

寓對陽、通筆語於異邦、前南禪仙巢老衲玄蘇等、拜答朝鮮國鐘峯松雲大師法座下、新正初八所封尊書、至暮春上旬蛻封、珍重古人得一張白紙、以爲千里同風、況縷縷細陳無底蘊者乎、與晤語相去者不遠、而不覺兩涯隔煙浪微茫、伏乞尊察、殊嘉惠件件目子粘貼紙尾、拜而受之、只以無詩頌寄來、爲遺憾而已也、吾五岳諸老願再會者、伏可昭亮焉、今度貴使三位、全大事以歸橈、愚老多年勞苦、於此時而止矣、恰如遙網金鱗得大自在也、自今而後、古洞房裏折烟鐺、烹月團聽松風、要出世外、雖然今年七十一、生涯其樂亦果幾時乎、嗚呼、不宣、百拜頓首、丁未六月晦日、外撒金漆器三重、酒盃十箇、胡椒一斤餘、聊表寸志、

庶幾受留、（仙巢稿、）（按するに、ここは參考のため姑く存す、）

元和三丁巳年九月十日、信使山城國伏見を發して、（この年御上洛により伏見において聘禮を受させられ、國に歸る、歸國の命ありしは、この月五日なり、）

元和三年丁巳九月十日、朝鮮人發紫野、今夜宿淀、板倉伊賀守奉旨、以驛馬匹夫送之、往來共於淀宿賜飲食也、原夫朝鮮者、自古爲我西藩、今及其來而厚惠

之、是亦柔遠人懷諸侯之意乎、羅山文集、記事錄、慶延略記、
元和三年、信使御暇を賜はり、九月十五日、按するに、この書日次た誤れり、出京歸國す、朝鮮物語、
寛永元甲子年十二月廿七日、信使江戸を發す、この月廿二日御暇賜はる、
寛永元年、信使太守義成公接伴、十二月廿七日發江戸、翌年春二月十五日歸州、三月五日自鰐浦歸帆矣、韓錄、續善隣國寶記、
寛永二年、按するに、元年の誤寫なり、十二月二十二日、諸執政寄書告示朝鮮人歸路饗應、治其之事、
朝鮮人御禮相濟歸國候、然者泊々馳走の事、今度者不及高盛候、雖然信使三人、上上官二人は、吹ちらし少々金銀賞候膳部も可然存候、謹言、

十二月廿二日　永井信濃守　井上主計頭　土井大炊頭　酒井雅樂頭

細川越中守殿人々御中　細川家譜○按するに、雅樂頭正就、信濃守尙政ともに老中なり、

寛永二乙丑年正月

一十日己未晴、朝鮮人自江戸上洛、資勝卿記、
信使歸國の時は、柳川按するに、豐前守調興なり、對馬の鰐か浦まて送ること毎度例なり、然るに寛永元年調興京まて送り、江戸に御用ありと稱して國へ赴かす、大德寺の旅宿にて暇乞しけれは、信使等兩國往來の事に、先例を背くこと不屆なり、然るにおいては、御返簡請取ましきよしを申し、事既に大いになりて如何なりけれは、和談をつくろひて、此度は柳川に代りて方長老鰐か浦まて送るへきに定りぬ、朝鮮物語、
寛永元年信使來、正使通政大夫鄭岦、副使通訓大夫姜弘重、從事通訓大夫辛啓榮也、翌年二月十五日歸對州、本州編年略、
寛永十三丙子年十二月廿九日、信使首途ありて、この月廿七日暇たまはり歸國に赴く、
寛永十三丙子年十二月廿九日、朝鮮人一昨日御暇被下に付、今日辰刻御當地罷立、依之、宮木越前守、石谷十藏按するに、この二人ともに御目付なり、品川迄被遣、是見物の者萬事無作法無之樣に可申付旨也、人見私記、
寛永十三年十二月廿九日、三使發江戸、義成榮陰玉峰亦賜暇同道歸國、續善隣國寶記、



寛永十三年極月六日に、高麗人爲御禮四百七十三人參候、道中之御馳走又江戸にて殊外御馳走にて候、大晦日に皆々罷登り候、但大將三人參候、慶長寛文間記、
寛永十三年
一十二月廿九日に三使江戸を發足す、兩町奉行通筋幷品川邊まて巡見す、路次中御馳走等及ひ人足馬數に至るまて、右京都を發足の時に同し、
一廿九日朝鮮人江戸發足の時、京まて鞍置馬幷皆具數付の事、
一九疋但、鞍置馬口附共に、外鞍皆具口附共に○四疋分出す、馬は無用たるへし、松平隱岐守
○一七疋右同斷同二疋分　松平出羽守○一九疋右同斷同四疋分
小笠原右近大夫○一七疋右同斷同三疋分　堀丹後守○一
十二疋右同斷同三疋分　眞田伊豆守○一三疋右同斷同二疋分　松
浦壹岐守○一四疋右同斷同二疋分　牧野右馬允○一七疋
右同斷同二疋分　內藤帶刀○一四疋右同斷同二疋分　松平丹波守
○一四疋右同斷同二疋分　小笠原信濃守○一三疋右同斷同一疋分
本多能登守○一四疋右同斷同一疋分　內藤豐前守○一五
疋右同斷同一疋分　松平因幡守○一三疋右同斷同一疋分　本多飛
驛守○一三疋右同斷同一疋分　金森出雲守○一三疋右同斷
一疋同分　鳥居主膳正○一七疋右同斷同一疋分　酒井宮內大
輔○一十一疋右同斷同一疋分　松平式部大輔○一三疋
右同斷同一疋分　織田辰之助○一二疋右同斷同一疋分　松平丹後
守○一四疋右同斷同一疋分　松平紀伊守○一二疋右同斷同一疋分
小笠原壹岐守○一二疋右同斷同一疋分　本多內記○一三
疋右同斷同一疋分　井伊兵部少輔○一三疋右同斷同一疋分　佐久
間三五郎○一三疋右同斷同一疋分　新庄越前守○一一疋
鞍置馬口附共に　牧野播磨守○一三疋右同斷　堀田加賀
守○一二疋同　阿部豐後守○一二疋同　西尾丹後
守○一一疋同　伊丹播磨守○一一疋同　京極主膳
正○一一疋同　森川半彌○一三疋同　本多主稅○
一二疋同　小笠原左衞門佐○一一疋同　松平主稅
○一一疋同　九鬼式部少輔○一一疋同　六鄕長五
郎○一二疋同　織田百助○一一疋同　毛利市三郎
○一二疋同　桑山修理允○一一疋同　三宅大膳亮
○一一疋同　溝口金十郎○一一疋同　山口但馬守
○一一疋同　松平大隅守○一一疋同　奧田內記○

一一疋同　池田内藏介○一二疋同　堀田淡路守○
一一疋同　前田大和守○一一疋同　堀漆路守○一
一疋同　□□□□□○一一疋同　小出大隅守○一
一疋同　佐久間藏人○一一疋同　伊東若狹守○一
一疋同　西郷若狹守　鞍置馬都合百六十八疋、
鞍皆具都合四十六疋分朝鮮往來、玉露叢、

寛永十四丁丑年正月
一十六日丙辰晴、今日高麗人をつれ、宗對州上洛候也、資暇齋記、

寛永十三年十二月廿九日、三使太守義成公發江戸、翌年春二月十四日歸州、同月廿三日信使發船、同月廿五日同着于朝鮮、韓錄、

寛永二十癸未年八月六日、信使江戸を發して、この月三日御暇なり、歸國す、

寛永二十癸未年八月六日、義成三使と同く江戸を出て國に歸る、およそ此度三使往還路次の船衛、ならびに治具經營かねて仰をかうふり、先例に超たる事尤おほし、寛永宗義智記、

寛永二十年八月、朝鮮國三使發江戸、宗對馬守義成、建仁寺鈞天洪長老、東福寺周南旦長老亦賜暇、同途歸國、續善隣國寶記、

明暦元年霜月朔日に、ちやうせんへ歸るとて、加奈川まで行泊り候唐人、御朱印をは日光に納め、又江戸より御申請、又歸るとき御朱印箱いたゝき歸り申候、榎本氏覺書、

明暦元年十一月十五日
一朝鮮人、去十二日到名護屋滯留の由、

明暦元年十一月十七日
一朝鮮人京都にて三十三間堂大佛、京着の節歸國の節見物仕由也、朝鮮使來聘記、

明暦元年霜月朔日に上り、京へ十六日に着申候、長寛文問記、

明暦元年、韓客、季秋停留于京洛三日之間、筆舌吟音更無一人、前日足下所貽老爺之書札云爾、九重城下握筆攤卷之書生、應難屈指、何其到此哉、可歎可怪、近聞、歸來滯稽京師者中間五日、又復如前度乎否、

途歸國、續善隣國寶記、

寛永二十年八月六日、三使江戸を發足して歸國す、對馬侍從又同道すと云々、行列以下前のごとし、朝鮮使來聘記、

明暦元乙未年十一月朔日、朝鮮の信使發途す、暇賜ほりは前月廿五日なり、

明暦元乙未年十月晦日
一兼日より朝鮮人今日發足の處、しきりに雨下に付て延引、

十一月朔日
一朝鮮人今巳刻發足、行列は最前日光より歸府の時同前也、跡に宗播磨守、其次五十間程ありて宗對馬守供廻、尤美々たり、江戸より品川迄辻固坂部三十郎、屋代越中守、安藤彦四郎、按するに三十郎・越中守は百人組の頭、彦四郎は御先手頭なり、役之、朝鮮使來聘記、

明暦元年十一月朔日
一朝鮮人今日江戸發足、御日記、寛明日記、正慶承明日記、

明暦元年家綱樣御代初之爲御祝詞、從朝鮮信使來聘、

正使　翠屏　副使　秋潭　從事　壺谷





右者、先對馬守被成義成、同道仕候、私儀も被成下歸國の刻、先對馬守同前に相送申候、真享宗對馬守書上、

明暦元年十一月朔日、三使發江戸、宗對馬守義成、建仁寺几岩達長老、茂源柏長老亦賜暇同途歸國、續善隣國寶記、

明暦元年霜月朔日に、ちやうせんへ歸るとて、加奈川まで行泊り候唐人、御朱印をは日光に納め、又江戸より御申請、又歸るとき御朱印箱いたゝき歸り申候、榎本氏覺書、

明暦元年十一月十五日
一朝鮮人、去十二日到名護屋滯留の由、

明暦元年十一月十七日
一朝鮮人京都にて三十三間堂大佛、京着の節歸國の節見物仕由也、朝鮮使來聘記、

明暦元年霜月朔日に上り、京へ十六日に着申候、長寛文問記、

明暦元年、韓客、季秋停留于京洛三日之間、筆舌吟音更無一人、前日足下所貽老爺之書札云爾、九重城下握筆攤卷之書生、應難屈指、何其到此哉、可歎可怪、近聞、歸來滯稽京師者中間五日、又復如前度乎否、

然在此地、而或寄詩贈簡于韓客者僅不誤仄平、頗不知句法不屬文路之類比比有之、余且看之且聽之、蕪詞穢文、傳笑于他人、流耻于異方、由是見之則彼之與此得失判然、續耕文集寄史山文人書、

明暦元年十二月、朝鮮人歸路、於播州兵庫逢颶風、入室津十餘日逗留、東武編年要錄、萬年記、

明暦二年丙申正月十一日、義成君伴信使歸州、此時義眞君同伴始入州、本州續稽略、

明暦元年十一月朔發途、十六日京着、廿三日大坂着、翌年正月十一月對州着船、二月四日歸國、三才雜錄、

天和二壬戌年九月十二日、信使江戸を發して、この月六日御暇を賜ふ、國に歸る、

天和二壬戌年九月十二日
一朝鮮人巳刻發足、依之百人組御先手、新橋より芝口まで辻固被仰付、兩町奉行、大目付、御目付警固出る、柳營日次記、

天和二年九月十二日
一水野右衛門大夫、秋元攝津守、大岡五郎右衛門本誓寺ゟ相越、大目付彦坂壹岐守、町奉行甲斐庄飛驒守、北條安房守、御目付松平孫太夫、日根野七左衛

門道筋見分罷出、百人組水野半右衞門、秋山十右衞門、御鐵砲頭天野孫五右衞門等也、御日記、

天和二年九月十二日

一巳刻三使以下不殘江戸發足、水野右衞門大夫、秋元攝津守、大岡五郎右衞門本誓寺へ趣き指引す、彦坂壹岐守、兩町奉行甲斐庄飛驒守、北條安房守、御目付松平孫太夫、日根野長左衞門道筋見分す、百人組二頭水野半左衞門、秋山十左衞門、御鐵砲頭天野彌五右衞門各組を率ゐて、芝口まて辻固めす、天和二年朝鮮來朝記、

天和二年

一土井能登守屋敷東の方、幷松平佐渡守屋敷東の方御先手一組、

一神田御殿東の方、御普請小屋東方、松平因幡守屋敷東方御先手一組、但與力同心上下著可申、同心棒爲持可申事、

一朝鮮人通り候刻、與力同心共に踞申間敷事、

一京橋より中橋迄八町、御先手一組可被相勤事、

一先手頭者、信使通候節引込可罷在事、

一頭羽織立付、與力同心同前、對之羽織竹杖つき可申、但朝鮮人通り候刻、與力同心共に踞申間敷候、

鐵砲爲持無用之事、

一新橋より札之辻迄三十二町、百人組一組にて可固候事、

以上令條錄○按するに、この書月日を記さゝれども、その文錄國の時のごとく聞ゆ、故にこゝに附す、

天和二年九月十二日、三使發江府、宗對馬守義眞、相國寺太虛靈長老、東福寺南宗辰長老亦同途歸國、續善隣國寶記、

享保四年五月十八日、松平對馬守樣按するに、御用掛寺社奉行、御用人吉田十兵衞、井川治右衞門方より直右衞門方ゟの手紙、幷返書左記之、

以手紙致啓上候、天和年中朝鮮人來朝の節、壹州勝本より大坂迄海上御觸、且又大坂出帆の儀、勝本迄右來朝共に海上の分、其元樣より御觸被遊候哉承度奉存候、若大坂出帆の儀、其許樣より御觸不被成候はゝ、何方より御觸有之候哉、御留も御座候はゝ御報被仰聞可被下候、此段拙者ともより得御意候樣、對馬守申付候、以上、

五月十八日　　吉田十兵衞

井川治右衞門



平田直右衞門樣

御手紙致拜見候、然者天和年中朝鮮人來朝の節、壹州風本より大坂まて海路の觸、且又大坂出帆の儀、風本迄の觸の儀御尋被遊候、留書吟味仕候處、天和年對州より先達て海路御馳走所ゟ相觸申候、歸國にも同前の事に御座候、正德年も船中往來共に、此方より相觸申候間、右の趣宜被仰上可被下候、以上、

五月十八日　　吉田十兵衞

平田直右衞門

井川治右衞門樣享保己亥信使記錄、

天和二年九月十二日、信使江戸發足神奈川に泊る、」一歸國の時、道中泊休共に來朝の刻と同所なり、幷に宿々御馳走人も同前也、其内道中御馳走は、たばこ代銀にて渡る、」一三使へ七五三の入目程銀子渡の由、」一上上官へ五々三の入目の銀渡す、」一上官一人へ一日に銀二十匁渡す、」一中官壹人へ一日銀拾匁渡す、」一下官一人へ一日銀五匁渡す、」一道中御馳走の鞍置馬も、前方同前也、」一同廿二日三州岡崎に泊り、正使より按するに、正使は尹壯完なり、書翰一通城主へ書置之、其文曰く、

岡崎太守源公閣下、來時不得面敍、別懷中心耿々無日不思、今到公之采邑、人々體公之意、待之有加、聊述短律以寓謝悃、仍作異日顏面、儐接經旬月、慇懃意自親、歸時遠面別、何處續音塵、封邑偏相敬、懷人轉更新、寄詩仍有問、君亦唳應頻、

壬戌季秋東山拳稿　印

一同廿六日京本國寺に着す、中二日の逗留、」一同廿九日京都發足、淀に泊る、按するに、」に晦日とす、」一同晦日大坂に着、宿坊本願寺に中三日の逗留、」一十月四日大坂發足、按するに、諸記によるに五日の誤りなり、○天和韓聘記、

天和二年十月五日、朝鮮の信使大坂を開帆す、遠廟實錄、

天和二年十月十三日

一韓使去五日出帆の旨、大坂より注進之、御日記、

享保四己亥年五月十一日、平田直右衞門より差出書付、

天和二年信使下向

九月十二日、江戸發足、」同月廿六日、京着、」同月晦日、京發足、」十月朔日、大坂着、」同月五日、大坂乘船直に出船、」同月十七日、對府着船、」同月廿六日、

對府出船」同月廿九日、鰐浦出船釜山浦着船」以上、享保己亥信使記錄、

天和二年十月

一同十七日、對州に着船す、一十郎宛一人へ一日逗留之由一中宮壹

信使對州に逗留の內、旅宿の屋敷を以酊菴と號す、先々來朝の時、信使旅宿の館也、正三位入目

一十二月六日、按するに、十月廿六日の誤りなり、信使對州出帆、釜山浦の內草梁東に着船歸國すと云々、天和韓聘記、

天和二年、對馬島主復朝鮮國禮曹書

按下並係信使謝送書牘

日本國對馬州太守拾遺平義眞、奉復朝鮮國禮曹大人閣下、星使樓使華緘隨至、副以腆貺、感荷冢深、玆審、專賀吾大君莅位宣化、兼慶儲君正體毓德、官使兩回登城、按するに、兩回登城とあるは、本城及び西城に登營せしなり、ふなり、大禮已終、進退中規、相好之誼彌久彌篤、此實兩國不替之懽慶、不佞曷堪蹈舞、區區曲折、想在三官使詳覆、不復煩贅、仍呈薄儀、略表回敬、即時初冬惟冀自玉、統惟盛亮、不宣、

天和二年壬戌十月日　對馬州太守拾遺平義眞

又與朝鮮國禮曹書

日本國對馬州太守拾遺平義眞、奉書朝鮮國禮曹大人閣下、星使趙溟惠札至、僕況與官使屢得會、欣甚欣甚、所用盛荷、別幅輕品、敢申謝忱、冬日可愛、惟冀順序珍毖、不宣、

天和二年壬戌十月日　對馬州太守拾遺平義眞

又

日本國對馬州太守拾遺平義眞、奉書朝鮮國禮曹參判大人閣下、律中黃鐘、遐惟、動定有相企仰益切、已聞我大君纘承洪業、輝騰先烈、官使馳賀聘禮以敦、矧又登儲君之城、仲孕秀之慶、德隣之義、實非偶然、本邦用極嘉尚、不佞勤護往還、使命成功、榮旋在玆、仍差家臣平眞幸齎送釜山浦、所冀三使早達都下、必報平安、土儀薄品、聊表遠忱、莞領幸甚、不宣、

天和二年壬戌十月日　對馬州太守拾遺平義眞

又

日本國對馬州太守拾遺平義眞、奉書朝鮮國禮曹參議大人閣下、時維季小、緬惟、起處萬勝、係戀不已、即者官被韶槎海陸無碍、不佞擁護往還何怠、如今解纜敝州、仍俾家臣平眞幸而差送釜山浦、三官使不日且達都下、則必蒙告諭、薄物土儀、聊表微忱、錄在別幅、



伏希采納、不宣、

天和二年壬戌十月日　欲馬州太守拾遺平義眞

又與東萊釜山兩令書

日本國對馬州太守拾遺平義眞、啓達朝鮮東萊釜山兩令公閣下、想惟、僉雅動止亨嘉、爰官价通國信於東武、不佞護使節於脩塗、令揚歸帆、無由款留、即仍舊貫、差遣家臣平眞幸、裁判藤成久、送達釜山浦矣、都下回旆必報平安、觀縷餘情、附在兩价、非品別錄、且表遠敬、統希照亮、不宣、

天和二年壬戌十月日　對馬州太守拾遺平義眞

續善隣國寶記、方策新編、

天和二年十二月、三使書を對馬守に寄ていはく、十月晦日釜山浦へ歸着し、十一月十六日王城へ到着す、今度御馳走の丁寧なる事を謝す、天和二年朝鮮來聘記、

享保十三戊申年、雨森東五郎書上、

一天和信使歸國の節、今度公儀より御馳走丁寧被仰付難有仕合奉存候との趣、三使より書簡を以殿樣に宛て可被申越候、左候はゝ公儀に可被差上さの儀にて、上上官を以被仰掛候處、其書翰致出來、御記錄に載り居申候、右書翰の文躰を見申候に、三使の筆力とも見えかたく、文意全く日本風儀に相見え申候、惣躰日本にても國使者に能越、彼方丁寧被致候時能歸、主人より禮を申遣候、又は家老より先の家老に申遣候事は有之候へとも、使者の身として我身に當りたる事の樣に禮を可申述樣無之、增て唐朝鮮にはなほ有之ましき事に候故、不審に存候へとも、先例の事に候ゆゑ、正德年にも右の通、上上官を以先例如此候段被仰達候處、三使歸國の後科に逢申候ゆゑ、今にては書通いたし難く候と事、終に埒明不申候、享保年に至り、又々右の通被仰越候へ共、三使不審に被存候よし譯官共申候に付、天和年の書翰迄御見せ被成候得共、兎や角申候て埒明不申候、就夫得と右天和の書翰吟味被仰付候處、圖書も違ひ樣子疑かはしく相見え候、天和の時分迄は、譯官共の風儀兎角日本人の心にさかひ不申候樣にいたし候儀、第一と心得居申候時分にて、朴同知なと申もの、日本の事情も能知居申候者に候故、此儀書翰に及申事に無之候と、一旦申見候へとも、此方其聞入無之候に付、中間に挿、三使の書翰と號し差出し候僞作と相見え候、此譯官共

は開傳へも有之、推量も可有之候故、正德享保共に此方より被仰掛候時、三使に申達候とは申候へとも、實は三使ゐ者其沙汰曾て不仕候て可有之と存候、かやうの儀、江戸向のつゞやを思召候て、不當事を被仰掛候段、元來不宜事に御座候、交聘提醒、

通航一覽卷之百十二終

# 通航一覽卷之百十三

## 朝鮮國部八十九

○信使歸國道中　正德度

正德元辛卯年十一月十九日、信使發途あり、御暇賜ばりしは、この月十一日廿四日駿河國府中に晝憩のとき、御饗應上使なり、その日藤枝に夜宿す、

正德元辛卯年十一月十六日

一朝鮮の信使、今日客館東本願寺雖可發途、支度等出來兼付て延引、

同月十九日

一朝鮮信使今日江戸發足、以上、柳營日次記、

正德元年

一十一日十九日朝鮮人歸國に付、今日江戸發足、御徒方御役當、

馬場曲輪固　林藤四郎組共　金田惣八郎組共

右服紗小袖上下、明六半時田安御門前揃、

人拂　東本願寺より、筋違橋、一橋、田安、半藏、外櫻田、幸橋、芝口御門邊まで、　新庄伊織組共





中山勘解由組共　菅沼圖書組共　長谷川半四郎組共　代り建部幸右衛門

右熨斗目上下、明六時一番二番は場所揃、三番四番は明五時揃、御徒方萬年記、

正德元年十一月十九日、朝鮮人歸國の道筋、

一東本願寺より廣德寺門前通、新光明寺前より織田山城守屋敷前、按するに、正德三年分間江戸大繪圖によるに、今の下谷新寺町戸田邦之介上屋敷これなり、華藏院門前より宗對馬守屋敷前、中根攝津守屋敷より按するに、同圖によるに、今の向柳原藤堂和泉守屋敷東にあり、島田佐渡守屋敷前通、本多信濃守屋敷按するに、同圖によるに、今の筋違外仲町の邊にあり、一後脇より筋違橋松平伊豆守屋敷前按するに、同圖に、今の筋違御門内、酒井若狹守屋敷なり、通、稻葉丹後守屋敷前より神田橋護持院前通、大久保大藏大輔屋敷前通御春屋前、按するに、同圖に、大藏大輔は今の一ッ橋御門外板倉伊豫守屋敷、御春屋は稻垣藤九郎屋敷前、安藤同所松平豐前守屋敷これなり、駿河守屋敷前、按するに、同圖に、駿河守は今の九段坂下竹本主水正屋敷なり、田安御門内通半藏御門に出、井伊掃頭屋敷脇通、長井備前守屋敷前脇より朽木民部少輔屋敷前、酒井左衛門佐屋敷より按するに、同圖によるに、備前守は今の外櫻田松平市正屋敷、民部少輔は今の相馬大膳亮屋敷、左衛門佐は今の幸橋御門内松平甲斐守屋敷是なり、幸橋御門ゐ出、芝口御門より通町通、



從見到着の道筋同前、

一信使發途の日御饗應の次第、着日の例に同しかるへき事、

一品川の旅館まて以上使送らるゝ儀、到着の日迎ひ入らるゝ儀のことくなるへき事、以上、琉韓記事、

正德元年十一月十九日、三使歸國の發駕なり、巳の刻に出て品川に至る、

自旅館至品川行記

館を發して西に行、新光明寺より南に折れ、織田山城守屋敷前を西に廻り、佐竹大膳大夫屋敷の前をすき、藤堂和泉守屋敷前より西へ折れ、本多信濃守屋敷の裏門前を過りて、筋違橋の御門に入、其より先日賜享登城路を經て、神田橋の御門外に至り、護持院二天門の前を經て、安藤駿河守宅前を過り、御堀にならびて飯田町の新坂を登り、田安御門に入、半藏御門に出て御堀に循て、井伊執政の邸第の前を過き、外櫻田御門外より南行し、松平右衛門佐霞關の屋敷の南端より東に折れ、幸橋御門より出て左に行て、川の南を過、芝口御門の外に至り、其より先日初入の路を南に歸て品川に至る、是日、申の刻

品川に及て晝休をなす、時に上使として酒井左衛門佐前日のごとく參らる、三使拜謝、其儀亦皆前に同し、踐好錄、

正德元年十一月十九日に發駕して品川に至る、その者日發駕と三度の登城に、信使經過の道路に觀るもの堵のごとくなれば、市中にあらかしめ令條あり、其文にいはく、信使經過の道さ見物の場におゐて、男女僧尼等雜て居へからす、籠幕屏障の類を以、其間を隔て限るへし、或は酒果飲食の物を陳らね、或は醉狂戲慢の容をあらはすへからさる事とあり、男女別有は謹なり、今異邦の人に示す爲に、男女の雜居を禁し告らるゝは俗吏の知ちさる所なり、この時に南郊品川に、例のごとく極惡の大罪人の刑日を延して蓄へ置て、其日磔梟なとに處して、其屍をさらし置て示す事なりけるを、人言を聞に、大寅天待對して不敬失禮なり、且又直に教化に乏しくして、元惡の罪人も道に絶へさるを示すに似たる故なりといふ、今令條を讀て其しかちさる事を知れり、令條に云、朝鮮信使江戸到着の日、初て登城の時、御暇被下候而退出の時、發駕の日、右四度書簡の通候時、下馬下座等の禮可有之候、又云、道中にて來る時は彼國書あり、歸る時は御國書あり、江戸着の日は彼國書なり、初て登城の時同斷、退出の時はから輿なり、禮に及はす、御暇被下退出の時は御國書あり、登城の時は禮に及はす、發駕の日は御國書あり、右之趣道中筋へ可申渡ものなりと、この丁寧なること其國書に委し、御國書を尊敬せるに、下馬下座等の禮命出さるれは、死喪の穢れさ対退くへし、況や弃市の戮斷せられし屍に、近くへき事有ましきは理なり、正德朝鮮聘使錄卷貳、

正德元年十一月七日、

一御代官江川太郎左衛門、朝鮮人歸國に付、駿州富士川船渡奉行被仰付罷越候に付、御暇被下之、

但、最前鈴木三郎兵衛相勤候處、病死に付代也、

御日記、十一月十九日、三浦藩國の書簡なるへ、

正德元年十一月十三日、

一品川の道筋、芙蓉の間、御暇高家、

一金十枚、時服二、羽折、　畠山飛驒守

一右者、朝鮮人歸國の節駿府書休旅館に、爲上使被遣候に付、被下之旨申渡之、





一右同斷に付、西國まて被遣候に付御暇面々、

御徒目付　服部宇右衛門　山崎武左衛門　安田藤兵衛　吉岡權右衛門

朝鮮人來聘の節、兵庫まて道中筋御用相勤罷歸、此度信使歸國の節も道中まて罷越候に付御暇、

金二十兩つゝ、

被下物大和守申渡之、　伊東李右衛門　竹本十右衛門

御小人目付　六人　ゐ

金四十五兩つゝ、

御使の者三人

同五兩つゝ、

按するに、こは六人に四十五兩、三人に五兩賜はりしなる誤り記せしなるへし、

右之通被下之、柳營日次記、御日記、

正德元年十一月十九日歸國、晴天也、箱根より手前の御馳走大名、信使逗留中江戸に歸り、信使歸國一兩日前に、御馳走の衆中、右の宿々に御立候事、

自江戸京、自京淀に鞍皆具、

四疋分　松平摂津守○同　松平出雲守○二疋分　松平大學頭○同　松平播磨守○十二疋分　牧野駿河守○同　水野隼人正○同　内藤能登守○同　松平備後守○九疋分　相馬讃岐守○七疋分　溝口伯耆守○同　秋田信濃守○同　松平中務大輔○同　太田備中守○同　有馬大學○同　津輕土佐守○六疋分　金森出雲守○四疋分　田村下總守○四疋分　堀丹後守○同　諏訪安藝守○二疋分　織田越前守○同　安部摂津守○同　六郷伊賀守○同　岩城伊豫守○同　酒井石見守○同　堀大和守○同　酒井信濃守○同　南部遠江守○同　佐竹壹岐守○同　保科兵部少輔○同　松平三四郎○同　松平縫殿頭○同　阿部民部○同　板倉伊豫守○一疋分　内田信濃守○同　酒井備後守○同　太田原飛驒守○同　米津出羽守○同　松平越前守○同　松平筑後守○同　遠山和泉守○同　松平下野守○同　新庄駿河守○同　山口伊豆守○同　前田又四郎○同　丹羽式部少輔○同　本多若狹守○同　本多山城守○同　戸田淡路守○同　井上筑後守○同　堀式部少輔○同　佐竹式部少輔○同　松平刑部少輔○同　松平式部少輔○同　本田宮内少輔○同　屋代越中守○同　松平信濃守　合鞍皆具百八拾疋分人數五十六人、

鞍皆具一疋分　足輕一人、口取二人、沓籠持一人、雨具持、挑燈持、

道中往還乘馬并鞍皆具割合

本多彈正少輔　仙石丹波守　荻原近江守

按するに、彈正少弼は寺社奉行、丹波守は大目付、近江守は御勘定奉行として、ともに御用掛也、○琉韓記事○按するに、この事、續談海に載する處、おのつから異同あり、參考のためしばらく兩存す、

正德元年

一朝鮮人歸國の節、被差出候面々合六拾五人、按するに、五十六人の誤りなり、馬數百八拾疋、松平縫殿頭、二、松平信濃守、一、岩城伊豫守、六、相馬讃岐守、九、酒井備前守、一、本多山城守、二、戸田淡路守、二、井上筑後守、一、堀式部少輔、一、安部攝津守、二、津輕土佐守、六、諏訪安藝守、四、松平備後守、十二、牧野駿河守、十二、内田信濃守、一、本多宮内少輔、一、前田又五郎、二、太田原飛驒守、二、松平刑部少輔、一、松平式部少輔、一、本多若狭守、一、松平攝津守、四、阿部民部、二、松平筑後守、一、酒井石見守、二、屋代越中守、一、田村下總守、四、内藤能登守、十二、溝口伯耆守、七、松平出雲守、四、松平中務少輔、七、松平下野守、一、松平三四郎、二、松平大學頭、二、松平播磨守、二、丹羽式部少輔、一、織田越前守、二、秋田信濃守、七、佐竹式部少輔、一、米津出羽守、一、佐竹豐岐守、二、太田備中守、七、六郷伊賀守、二、酒井信濃守、二、保科兵部少輔、一、遠山和泉守、一、山口伊豆守、一、板倉伊豫守、二、水野隼人正、二、新庄駿河守、一、有馬大膳、七、堀丹後守、四、松平越前守、二、金森出雲守、六、南部遠江守、二、堀大和守、(脱アルカ)續談海、

正德元年十一月十九日、酉の刻に品川を起て川崎に赴く、御馳走人御代官斯より壹岐國風本に至るまて、前人各勤役する事、三使參進の時のことし、是夜亥の刻川崎に至て宿す、下行、二十日戸塚宿、下行、二十一日大磯休、下行、小田原宿、下行、二十二日箱根休、下行、三島宿、下行、二十三日吉原休、下行、江尻宿、下行、二十四日駿府休、

御饗應をもふけらる、其儀前に同し、前番頭筑後守按するに、御書院番頭板倉筑後守なり、寛永の末より、この頃猶駿府に在番あり、交替して還る、當番頭岡野備中守組衆、最前のことく素襖長袴にて給仕あり、時にこの所へ、上使として畠山下總守按するに、下總守は高家にしてこゝに上使たり、參らる、

藤枝宿、下行、長舒錄、

正德元年十一月



駿州藤枝内藤紀伊守様御馳走書

家老 袈斗目麻上下 島田治右衛門○信使附　家老 袈斗目麻上下 鳥居喜兵衛　番頭同江坂伊織　近習同湊仙右衛門○上上官附　用人 袈斗目麻上下 内藤刑部左衛門　番頭同島田五郎右衛門　近習同杉田新右衛門○判事學士醫師小童附　近習 袈斗目麻上下 安藤八郎左衛門　大納戸同木村又六○同所廣間番人給人 袈斗目麻上下 澤田兵藏　同同宮川六郎左衛門○同所勝手詰諸事用達　町奉行 町中傳馬場見廻、袈斗目麻上下 藤田新兵衛　同三枝孫左衛門　同石川權兵衛　普請奉行同室田七郎右衛門　同江坂五郎兵衛　給人同永田藤兵衛　中小姓同岩崎梶右衛門　同藤田與一右衛門　同三枝園右衛門　醫師十德矢野玄悅　外科同沓掛宗甫　右筆 袈斗目麻上下 齋藤九郎兵衛　十德茶道一人、帳付一人、表坊主三人　徒目付 帛物麻上下 岡武右衛門　同遠藤儀兵衛○火之元改　徒目付 羊羽織 藤田雲八　同澤吹新七、下横目二人○小童給仕徒士七人、小役人六人、料理方五人

一正使之間　屏風　料紙箱硯箱　衣桁　臺子茶筥笥ともに　御手水鉢手拭掛ともに　燭臺　手燭　行燈　置火燵

一副使之間　屏風　料紙箱硯箱　衣桁　臺子茶筥笥ともに　御手水鉢手拭掛とも　燭臺　手燭行燈　置火燵

一從事之間　屏風　料紙箱硯箱　衣桁　臺子茶筥笥ともに　御手水鉢手拭掛ともに　燭臺　手燭行燈　置火燵

一上上官之間　屏風　料紙箱硯箱　臺子茶筥笥ともに　手水鉢手拭掛　燭臺　手燭　行燈　火鉢

一判事學士醫師小童之間　屏風　木枕　手水桶手拭掛　燭臺　手燭　行燈

一宗對馬守様御役人中詰所　屏風　料紙硯箱臺子茶筥笥ともに　手水桶手拭掛　燭臺　手燭行燈

此外、表向座敷所々幔幕、紫幕、布幕、燭臺、行燈差置申候、

火事地震之節信使御退候刻警固

物頭 袈斗目麻上下 山田孫平次　足輕五十人　中間五十人

一用心乘物　乘物七挺　駕籠三挺　毛氈敷之、

宰領足輕二人
一不時用鞍置馬三疋　厩之者九人　小頭一人
輿乘物支配　給人 熨斗目麻上下菅郷右衛門　同中根勘右衛門　同松井佐五右衛門　足輕八人
人足三十八
上官附　番頭 熨斗目麻上下江坂與兵衛　給人 同桂川兵右衛門　徒目付 帛物麻上下野田久左衛門　小役人二人　足輕四人
幕　臺子　料紙硯箱　屏風　手水桶手拭掛　燭臺　手燭　大挑灯　二階行燈　唐傘　茶水桶
長柄傘　單絹合羽
長老宿二軒附　給人 熨斗目麻上下小谷勘四郎　同石田九藏　徒目付 帛物麻上下小瀧仁太夫　小役人二人　足輕六人　中間四人
幕　臺子　料紙硯箱　屏風　手水桶手拭掛　燭臺　手燭　大挑灯　二階行燈　唐傘　茶水桶
中官宿三軒附　給人 熨斗目麻上下古市善兵衛　同若林善右衛門　同小田部十藏　同渥美十兵衛　徒目付 帛物麻上下北村權藏　同荒井幾右衛門　同花田小一右衛門　同山口久米右衛門　下役六人
料理人五人　給仕町人卅人　足輕六人　中間六人
幕　料紙硯箱　燭臺　手燭　二階行燈　手水桶手拭掛　大挑灯　傘　木枕
下官宿三軒附　中小姓 熨斗目麻上下高橋市左衛門　同土屋十郎右衛門　同原田喜左衛門　同西川四郎右衛門　徒目付 帛物麻上下宮田忠左衛門　同田澤五郎左衛門　同寺川市郎兵衛　同德田甚兵衛　下役六人　料理人十二人　給仕人四十六人　足輕六人　中間六人
幕　料紙硯箱　燭臺　手燭　二階行燈　大挑灯　手水桶手拭掛
通詞宿五軒附　給人 熨斗目麻上下澤村代右衛門　同廣瀨彌門　同青戸八郎兵衛　同山田市左衛門　同安藤平馬　徒目付 帛物麻上下坪川宗太夫　同櫻井吉右衛門　同矢野武太夫　同德田藤左衛門　同早川武平次　同渡部彌五右衛門　下役六人
料理人三十五人　給仕町人四十一人　足輕十人　中間十人
幕　料紙硯箱　燭臺　手燭　手水桶手拭掛　大



挑灯　二階行燈　傘
信使旅館表門前番所　物頭 熨斗目麻上下朝比奈平藏　給人 同中島平右衛門　同服部權右衛門　同前川八郎右衛門　同近藤津太夫　足輕五人　中間三人
紫幕　布幕　弓十張　鐵砲十挺　鎗十本　三道具　熊手　鳶口　早縄　明松　團　大挑灯　火消道具　水桶　組手桶
同所立番　徒士 徒上下上遠野又市　同青山源介　同關澤又右衛門　同野田岡右衛門　足輕十五人
同所門內小番所　足輕小頭一人　足輕二人　注進番足輕二人
鳶口　明松　早縄挑灯　行燈　火消道具　水桶　組手桶
同所裏門小番所　足輕小頭一人　足輕二人
挑灯　行燈
東口木戸門所　給人 熨斗目麻上下川又左平次　同篠田友右衛門　足輕三人　中間二人
幕　鎗　三道具　熊手　鳶口　早縄　明松　團　水桶　火消道具　組手桶
西町口木戸番所　給人 熨斗目麻上下矢部金兵衛　同沼野安右衛門　足輕三人　中間二人
幕　鎗　熊手　鳶口　三道具　早縄　明松　團　水桶　火消道具　組手桶
往還通城內入口木戸番所　物頭 熨斗目麻上下近藤縫殿右衛門　足輕小頭二人　足輕五人　中間二人
幕　鎗　弓　鐵砲　三道具　熊手　鳶口　早縄　明松　團　水桶　火消道具　組手桶
傳馬割宿附　郡奉行羽織立付高橋里右衛門　代官　同斧女甚五右衛門
同所番所　足輕三人　中間一人
三道具　早縄　明松　挑灯　行燈
官人宿附人夫割　勘定奉行羽織立付櫻井太郎左衛門　下役十人
人馬溜所　足輕十人　中間六人
挑灯三十
往還人馬割　傳馬役羽織立付澤田勘太夫　同山口儀左衛門

大井川越人足召連島田ゟ　代官羽織立付有原郷左
衛門　手代一人
三使旅館町中火之番　物頭革羽織立付牧野三郎右
衛門　足輕三十一人　大焚之者三十一人　火消
道具持廿五人
城内幷外曲輪侍屋敷火之番　物頭革羽織　鳥居刑部
右衛門　小頭一人　足輕二十人　中間二十五人
火消道具　中小姓革羽織□□□□□□　同岡田瀬
兵衛　同永井六部右衛門　同金澤五右衛門　同
飯田所左衛門　中間三十人
三使音物使者　蜜柑一籠つゝ　番頭髮斗目麻上下
島田武兵衛
藤枝町外使者　物頭髮斗目麻上下杉浦作左右衛門
三官使爲迎府中ゟ使者　物頭髮斗目麻上下關九郎
右衛門
丸子境より藤枝まて先乘　物頭羽織野袴重野孫太
夫　足輕八人
御書翰輿御先拂　足輕小頭一人　足頭二人
三官使御先拂　足輕六人　挑灯百
東領分境ゟ　使番羽織野袴川上源右衛門　道奉行
給人同加用庄左衛門　小奉行一人　足輕六人
東領分境より三官使御宿まて警固　足輕小頭二
人　足輕六十人
岡部町御先拂　町同心小頭一人
御書翰輿　町同心二人
三官使　町同心六人
同所休息所　番頭髮斗目麻上下木村六兵衛　町奉
行　十總茶道一人　表坊主一人　小役人二人
足輕八人
屏風　紫幕　布幕　臺子　蒸菓子　干菓子　酒
多葉粉盆　挑灯　手燭　燭臺　手水桶手拭掛
料紙硯箱
鬼島村腰掛茶屋桁行三間、梁間九尺、　中小姓帛物麻上下朝比奈
角右衛門　表坊主一人　小役人一人
幕　風呂釜　水菓子　多葉粉盆　挑灯　燭臺
手燭
東西町入口木戸先ゟ　町奉行
藤枝御先拂　町同心小頭一人
御書翰輿　町同心二人
三官使ゟ　町同心六人



三官使御發出之節西領分境まて御先乘　物頭羽
織野袴口山治左衛門　足輕八人
御書翰輿御先拂　足輕小頭一人　足輕二人
三官使御先拂　足輕六人
挑灯百
瀨戸川ゟ　使番羽織野袴夏目治部右衛門　同進藤
村右衛門　足輕二十人
西領分境ゟ　使番羽織野袴中澤三郎兵衛　道奉行
給人同神谷傳兵衛　小奉行一人　足輕六人
三使御宿より西領分境まて警固　足輕小頭二人
足輕六十人
金谷御休ゟ送之使者　物頭羽織野袴淺川孫兵衛
足輕小頭一人　足輕九人
一領分所々修復幷掃除、來聘の節申付候通御座候、
一岡部休息所本陣用の玄關幷雪隱新規に建、疊替
其外修復等申付候、
朝鮮之荷物通付駿州藤枝宿内藤紀伊守御馳走書
付
東之方野間先拂　足輕二人
野間掃除小奉行二人
東領分境ゟ挑灯奉行　足輕小頭二人
高挑灯持　中間六人　箱挑灯持　中間三人
岡部町中掃除
同所傳馬場　傳馬役　金澤藤太夫　小頭一人
同所先拂　町同心二人
同所ゟ　町奉行　藤田新兵衛
藤枝町外ゟ　町奉行　三枝孫左衛門
藤枝町中掃除　町同心二人
同所先拂　小頭一人
同所傳馬場　傳馬役　澤田勘太夫
荷物附　宿了善寺　町奉行　石川權兵衛　給人
石黑三郎左衛門　中澤新六
荷物改　徒目付矢野武太夫　宗田彌一右衛門　田
澤武助
荷物番　足輕小頭一人　足輕十人　中間三十人
同所門前番所但飾道具　足輕三人　中間二人
町中幷了善寺境内火之番　物頭鳥居刑部右衛門
足輕小頭一人　足輕三十人　火消道具品々中間
二十人
荷物送　物頭近藤縫殿右衛門　使番川上源右衛門

宰領足輕小頭一人　同足輕六十人
荷物附挑灯持　中間三十人
西方野間先拂　足輕二人
野間掃除道小奉行二人、以上、正德辛卯信使記錄、

通航一覽卷之百十三　終

# 通航一覽卷之百十四

## 朝鮮國部九十

### ○信使歸國道中　正德度

正德元辛卯年十一月廿五日、信使遠江國金谷驛にて晝餉、その夜同國掛川宿に泊す、翌日見附驛に晝憩あり、

正德元辛卯年十一月二十五日、金谷休下行、懸川宿下行、二十六日見附休下行、踐好錄、

正德元年十一月廿五日

休遠州金谷驛晝休御馳走之覺

小笠原山城守役人附

一途中迄使者　熨斗目上下渡部丈右衞門

一町口迄使者　同百足半七郎

一西町口番所　同平岡藤藏（同脫カ）永原又次郎

足輕六人　中間五人

幕　長柄　三ッ道具一組

一東町口番所　熨斗目上下平田助之進　同藤田新六郎　足輕六人　中間五人





幕　長柄五本　三ッ道具一組

一町中横小路口拾四ヶ所之立番　足輕壹人宛

一三使本陣向番所　熨斗目上下高須金左衞門　同近藤甚右衞門　同津田四郎左衞門　同下山惣七郎　足輕拾人　小頭壹人　中間拾人　小頭壹人

幕　弓拾張空穗共に　弩袋一穗　鐵炮拾挺　玉箱

一荷　長柄拾本　三道具一組

一火之番　革羽織立付小川才右衞門　足輕廿人

小頭壹人　中間廿人　小頭壹人

梯子貳挺　大籠貳內小籠　鳶口　長鳶　つるべ

一三使本陣玄關前番　足輕三人　中間貳人

一同所臺所番所　足輕貳人

一同所裏番所　足輕貳人

一同所相詰候面々

家老　熨斗目上下百足九郎右衞門　惣奉行同前

塲幸右衞門　同多賀小早太　同百足半七郎

同渡部丈右衞門　同山田權內　同鳥羽猪平太

同服部判右衞門　同宮崎宗碩　同赤木左郡次

同戶澤豐藏

三官使に進物之菓子　林子一籠宛　包熨斗

使者前塲幸右衞門

一三使本陣に差出す諸道具

一幕　一段子暖簾幕　一絹內幕　一屏風　一臺子　一料紙硯箱　一手水手洗湯次共に　幷手拭掛手拭共に

一上官宿御馳走人　熨斗目上下小池利右衞門○中官宿御馳走人　同大米武平次○一中官宿御馳走人　熨斗目上下長坂次郎兵衞○一下官宿御馳走人　同夏目源右衞門○一緣長老宿御馳走人　熨斗目上下丸山嘉市郎○一集長老宿御馳走人　同人○通詞宿御馳走人　同木村五右衞門○一通詞宿御馳走人　同三宅孫次郎○一通詞宿御馳走人　同山中七郎右衞門○一通詞宿御馳走人　同東代武助

一金谷より懸川へ三使送り　騎馬百足半七郎　足輕拾六人

一萬一出火之節、三使幷官人中共相退候節者、其宿宿詰罷在候者共御案內申筈、

一鞍馬乘物駕籠爲用心差置候、

以上

正德元年卯十一月廿五日　小笠原山城守內　百足九郎右衞門

前場幸右衛門
多賀小早太

泊遠州掛川御馳走
參向に相變儀無御座候、以上、
十一月廿五日　小笠原山城守内 多賀長左衛門
雨森惣兵衛

吉川六郎左衛門殿

三使上上官に御音物　蜜柑一籠宛
上上官に　同斷
右者、小笠原山城守方より、三使歸國之節致進覽之候、以上、
十一月廿五日　多賀長左衛門
雨森惣兵衛

吉川六郎左衛門殿

遠州御賄下行
參向に相變儀無御座候、以上、
十一月廿五日　鈴木八右衛門手代 澤田丈助
高谷太兵衛手代 堀田林右衛門

吉川六郎左衛門殿 按するに、八右衛門太兵衛は、御代官なり、

遠州見附宿松平伯耆守御馳走所役人附帳

一信使上上官　宿清兵衛
信使方御馳走人　家老熨斗目木下善右衛門　用人同江原猪右衛門　同小笠原城太夫　大目付同中村曾兵衛　給人同羽山勘左衛門
上上官御馳走人　物頭同小泉八郎兵衛　取次同河村傳五郎　祐筆服紗小袖麻上下高須又兵衛　同小役人五人　十德茶道貳人　廣敷番足輕貳人　玄關前足輕貳人　臺所火之番足輕貳人　働之者足輕拾五人
一赤根絹幕　一紫絹幕　一純子内幕　一金屏風
一硯箱料紙筥紙共に　一臺子　一手水鉢　一手拭懸　一木枕
一上官　宿三郎右衛門
御馳走人　物頭熨斗目彦部儀左衛門　給人同下山伴右衛門　服紗小袖麻上下小役人貳人　給仕人拾人　十德茶道壹人　廣敷番足輕貳人　働之者七人
一幕　一屏風　一硯箱料紙ともに　一臺子
一手水鉢　手拭掛　一木枕　一火鉢

一中官　宿孫兵衛
馳走人　給人熨斗目中島儀太夫　同佐藤勘助　服紗小袖麻上下小役人貳人　同給仕人貳拾六人　十德茶道壹人　廣敷番足輕貳人　働之者七人
一幕　一硯箱料紙共に　一臺子　一手水鉢
一手拭懸　一木枕　一火鉢
一下官　宿武太夫
馳走人　服紗麻上下高橋兵藏　同和田藤右衛門　羽織袴給仕人拾人　廣敷番足輕貳人　働之者七人
一幕　一手水鉢　一手拭掛　一木枕　一火鉢
一中官　宿三右衛門
馳走人　服紗小袖麻上下熊谷三太夫　同木俣作兵衛　羽織袴給仕人拾人　廣鋪番足輕貳人　働之者七人
一幕　一手水鉢　一手拭掛　一木枕　一火鉢
一通詞　宿左兵衛
馳走人　給人熨斗目山下郷左衛門　林十郎太夫　服紗小袖麻上下小役人貳人　給仕人拾人　十德茶道壹人　廣敷番足輕貳人　働之者五人
一幕　一料紙硯箱共に　一臺子　一手水鉢
一手拭掛　一木枕　一火鉢
一通詞　宿彌市
馳走人　給人熨斗目加藤又右衛門　同酒井判七　服紗小袖麻上下小役人貳人　給仕人拾人　茶道壹人　廣敷番足輕貳人　働之者七人
一幕　一臺子　一硯箱料紙共に　一手水鉢
一手拭懸一木枕　一火鉢
一通詞　宿甚右衛門
馳走人　給人熨斗目雜賀新左衛門　同三上政之進　服紗小袖麻上下小役人貳人　同給仕人拾人　十德茶道壹人　廣敷番足輕貳人　働之者七人
一幕　一硯箱料紙共に　一臺子　一手水鉢
一手拭懸　一木枕　一火鉢
一通詞　宿市郎左衛門
馳走人　給人熨斗目笠原久之丞　同戸祭久右衛門　服紗小袖麻上下小役人貳人　同給仕人貳人　十德茶道壹人　廣敷番足輕貳人　働之者七人
一幕　一臺子　一硯箱料紙共に　一手手鉢
一手拭懸　一木枕　一火鉢
一緣長老　宿次郎兵衛

服紗小袖麻上下小役人壹人　廣敷番足輕貳人　働之者三人
一幕　一硯箱料紙共に　一臺子　一手水桶
一手拭懸　一木枕
一集長老　宿　市右衛門
服紗小袖麻上下小役人壹人　廣敷番足輕貳人　働之者三人
道具品々右同斷
一官人荷物宿
番人　給人熨斗目木村藤太夫　足輕拾五人
濱松迄送共に
一三使輿宿
番人服紗小袖麻上下村尾新藏　足輕貳人
一町廻　徒士目付
一三使宿前町中所々辻固立番　足輕六拾人
一火之番　物頭村上丹下　足輕廿五人　鳶之者廿人　中間廿人
一見附宿町端迄信使迎之使者
取次役　熨斗目　河村傳五郎
一元締役　同　中村彌兵衛

一吟味役　服紗小袖麻上下石井平助
一正使に　使者　熨斗目　河原猪右衛門
久年母一箱　包のし
一副使に　使者　同小笠原成太夫
同斷
一從事に　使者　同尾見彌治太夫
同斷
一宗對馬守樣に　使者　同　人
御音物御座候
一信使新居迄送使者　物頭　小泉八郎兵衛
一見附宿に相詰候醫師本道　森田春庵
外科　井田品伴
右者朝鮮人歸國之節、見附宿御馳走役人附如此御座候、以上、
正德元年卯十一月
附紙書
信使旅館脇之御番所、町東西御番所勤番之人數書、幷武具員數者、見附、天龍、濱松、舞坂、船割役人一帳に相認、於濱松差出申候、
見附、天龍、濱松、舞坂御番所勤番之人數幷武具覺帳



一見附信使宿御番所　番頭熨斗目松田忠兵衛
給人同相原新八　物頭同稻川喜内　同馬場喜平次　給人同雜賀傳之進　足輕小頭一人　足輕二十人　長柄之者十人
一弓十張　一鐵砲十挺　一長柄十本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一見附東口御番所　給人熨斗目秋山六郎兵衛
同山下新次郎　足輕三人　長柄之者五人
一長柄五本　一三ッ道具一組
一見附西口御番所　給人熨斗目本多翁助　同松山彌四郎　足輕三人　長柄之者五人
一長柄五本　一三ッ道具一組
一天龍東御番所　番頭熨斗目猪俣民部　同雜賀七郎左衛門　給人同大野八九郎　同粟飯原庄助
同柴田小平次　足輕小頭一人　足輕二十人　長柄之者十人
一弓五張　一鐵砲十挺　一長柄十本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一天龍西御番所　番頭熨斗目鞍岡縫殿助　物頭同相原藤左衛門　同指田藤助　同大泉庄助　同小笠原忠四郎　足輕小頭一人　足輕二十人　長柄之者十人
一弓五張　鐵砲十挺　一長柄十本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一濱松信使宿御番所　物頭熨斗目中島治郎右衛門
給人同笠原權内　同都筑喜内　同加藤淺介
同友恒三平　足輕小頭一人　足輕十五人　長柄之者十人
一弓十張　一鐵砲十挺　一長柄十本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一濱松信使宿裏御番所　足輕小頭一人　足輕四人　中間二人
一三ッ道具一組
一濱松馬込番所　物頭熨斗目沼野靱負　給人同淺右衛門八　足輕小頭一人　足輕四人　長柄之者五人
一弓三張　一鐵砲五挺　一長柄五本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一濱松中番所　物頭熨斗目岸本文右衛門　足輕四人　長柄之者五人

一弓三張　一鐵砲五挺　一長柄五本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一濱松成子坂番所　物頭熨斗目牧村平馬　給人同古屋助右衞門　足輕小頭一人　足輕四人　長柄者五人
一弓三張　一鐵砲五挺　一長柄五本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一舞坂町濱手假御番所　家老熨斗目有本吉太夫番頭同本多求馬　物頭同沼野左近右衞門　給人同内藤喜八　同三田忠右衞門　同林孫右衞門　足輕小頭一人　足輕十人　長柄之者十人
一弓二十五張　一鐵砲廿五挺　一長柄十本
一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一同所船揚警固立番　目付役熨斗目山崎助太夫徒士目付服紗小袖麻上下伊藤十助　徒士同留川友左衞門　同岩崎幸助　同高瀨佐吉　足輕小頭一人足輕卅五人
一舞坂町番所裏荷物同勢、船場御番所　物頭熨斗目松野作左衞門給人　同太田儀平　同三上庄助　足輕十人

一弓十張　一鐵砲十挺　一長柄十本　一矢箱一荷　一玉箱一荷　一三ッ道具一組
一同所警固立番　徒士目付服紗小袖麻上下宮島平太夫　足輕小頭一人　足輕十八人
一舞坂町之中出口之御番所　給人熨斗目彦部源六足輕七人
一三ッ道具一組
一舞坂船割人　勘定奉行熨斗目小堀惣兵衞　大目付同鹽田久助　給人同鈴木孫市　わかれ道目付同桑原官兵衞　給人同洲貝惣太夫　徒士目付六人　下目付五人　足輕卅五人
一舞坂町に相詰醫師　本道小林由見　外科小川見宅
一三使新居に渡海見屆使者　給人熨斗目林小左衞門
右者朝鮮人歸國之節、見附、天龍、濱松、舞坂御番所勤番之人數、并武具員數如斯御座候、以上、
正德元年卯十一月　松平伯耆守内朝鮮人用掛有本吉太夫
沼野内藏介
小笠原城太夫



こゝに日次を載せされども、前後の記事によるに、廿六日なり、

覺

一三使以下官人不殘、并長老通詞舞坂本船場より渡海之事、
一官人荷物同斷之事、
但、官人附添不來、荷物計は新船場より渡海之事、
一官人駕籠乘物、舞坂本船場より渡海之事、
一朝鮮人に諸大名より被指出候人馬附之荷物同勢、餘計之乘馬并皆具等、舞坂新船場より渡海之事、
一舞坂宿之中程新船場之分れ道札建置、爲案内家來差置候事、
右之通滯無之樣に被存候、舞坂船場兩所共に手せはく有之に付、舟場致混亂候而者渡海之遲滯に可罷成被存候故、鍋島内匠殿にも申合、爲御案内先達而右之趣申入候、以上、以上、正德辛卯信使記錄、

柴田杢之允按するに、

# 通航一覽卷之百十四 終



# 通航一覽卷之百十五

## 朝鮮國部九十一

○信使歸國道中　正德度

正德元年卯年十一月廿六日、信使遠江國濱松にいたりて夜宿あり、翌廿七日同國新井にをいて晝餉をとゝのふ、

正德元年卯年十一月廿六日濱松下行、廿七日新居下行、踐好錄、

正德元年十一月

遠州濱松宿、松平伯耆守御馳走所役人附覺

一信使上上官　宿　杉浦助右衞門
信使方御馳走人　家主熨斗目沼野半太夫　同岩城善左衞門　同關圖書　番所同沼野内藏助　用人同中島團右衞門　同柴田杢之允　物所同洲貝勘解由　給人同河原恒右衞門　同朝倉四郎右衞門　右筆服紗小袖麻上下武山甚五兵衞
上上官御馳走人　大目付熨斗目關口新五兵衞
取次役同小谷數右衞門　服紗小袖麻上下小役人拾三

人　十德茶道二人　廣敷番足輕二人　玄關前足輕二人　臺所火之番足輕四人　働之者三十四人
門外警固足輕廿人
一赤根絹幕　一紫絹幕　一純子內幕　一金屏風
一硯箱料紙筥紙ともに　一大小挑灯蠟燭共に
一箱挑灯蠟燭共に　一臺子　一手水鉢　一手拭
懸　一唐金燭臺手燭ろう燭共に　一行燈油共
一木枕　一玄關薄綠　一水溜桶手桶共　一火鉢
信使上上官附
一小童　服紗小袖麻上下小役人一人　同給仕人八人
働之者六人
一上官　宿　梅屋市左衛門
御馳走人　物頭熨斗目稻川源五兵衛　給人同松
山彌左衛門　服紗小袖麻上下小役人三人　十德茶道
二人　廣敷番足輕二人　門外立番足輕二人　働
之者二十人
一幕　一金屏風　一硯箱料紙共に　一大小挑灯
蠟燭共に　一箱挑灯　一臺子　一手水鉢　一手
拭懸　一唐金燭臺手燭蠟燭共に　一行燈油共
一木枕　一火鉢

一中官　宿　與左衛門
御馳走人　給人熨斗目佐藤勘兵衛　同村岡次郎
大夫　服紗小袖麻上下小役人二人　同給仕人十二人
十德茶道一人　料理人七人　廣敷番足輕廿人
働之者三十人
一幕　一硯箱料紙共に　一大小挑灯蠟燭共に
一臺子　一手水鉢　一手拭懸　一唐金燭臺手燭
蠟燭共に　一行燈油共　一木枕　一火鉢
一中官　宿　彦右衛門
御馳走人　給人熨斗目大原源五左衛門　同餘語
彌右衛門　服紗小袖麻上下小役人二人　同給仕人十
三人　十德茶道壹人　料理人七人　廣敷番足輕
貳人　働之者三拾人
一道具品々右同斷
一中官　宿　清兵衛
馳走人　服紗小袖麻上下外山傳六　同今泉小助
羽織袴給仕人拾人　料理人四人　廣敷番足輕貳人
働之者貳拾人
一幕　一硯箱料紙共に　一丸挑灯蠟燭共に　一
手水鉢　一手拭懸　一唐金燭臺手燭蠟燭共に



一行燈油共に　一木枕　一火鉢
一下官　宿　次兵衛
馳走人　服紗小袖麻上下天野爲右衛門　同渡邊清
兵衛　羽織袴給仕人拾人　料理人四人　廣敷番足
輕貳人　働之者貳拾人
一道具品右同斷
一通詞　宿　吉左衛門
馳走人　給人熨斗目高主小右衛門　同雜賀權藏
服紗小袖麻上下小役人貳人　同給仕人拾人　十德茶
道壹人　料理人五人　廣敷番足輕貳人　働之者
貳拾人
一幕　一硯箱料紙共に　一丸挑灯蠟燭共　一臺
子　一手水鉢　一手拭懸　一唐金臺燭手燭蠟燭
共に　一行燈油ともに　一木枕　一火鉢
一通詞　宿　七郎左衛門
馳走人　給人熨斗目森田平左衛門　同下村與五
右衛門　服紗小袖麻上下小役人貳人　給仕人拾人
茶道壹人　料理人五人　廣敷番足輕貳人　働之
者拾人
一道具品々右同斷

一通詞　宿　五郎右衛門
馳走人　給人熨斗目粥川小平太　同天方清太夫
服紗小袖麻上下小役人貳人　同給仕人拾人　十德茶
道壹人　料理人五人　廣敷番足輕貳人　働之者
貳拾人
一通詞下宿三軒
小役人壹人宛　給仕人五人宛　働之者五人宛
一緣長老　宿　與惣兵衛
服紗小袖麻上下小役人壹人　廣敷番足輕貳人　働之
者拾貳人
一幕　一硯箱料紙共に　一丸挑灯蠟燭共に　一
臺子　一手水鉢　一手拭懸　一唐金燭臺手燭蠟
燭共　一行燈油共に　一木枕　一火鉢
一集長老　宿　清太夫
服紗小袖麻上下小役人壹人　廣敷番足輕貳人　働之
者拾貳人
一道具品々右同斷
一御荷物宿　傳馬町　助太夫
一物頭熨斗目戶祭兵太夫　給人同木村藤太夫　足輕

拾五人
右之者共新居に御荷物送り宰領共相勤候、
一三使與宿　傳馬町　長　左　衞　門
番人服紗小袖麻上下佐治宅右衞門　足輕貳人
一使者宿　取次役　熨斗目根井庄九郎　給人龜井
外記　本醫、松田快庵　外科、渡邊宗占
一町方諸事支配　町奉行熨斗目粟飯原源藏　根井
惣左衞門
一濱松東領分境より町入口迄道路警固　道奉行
熨斗目原八太夫　同大原武兵衞　足輕五拾人
一町廻り　徒目付
一町中所々辻固め立番　足輕七拾人
一火之廻り　物頭馬場只右衞門　足輕貳拾五人
鳶之者貳拾人　中間貳拾人
一上馬役人　勘定奉行熨斗目大泉與一兵衞　給人
同酒井金太夫
一人馬割役　郡奉行　神戸幸右衞門　葛山由右衞
門　代官　山本惣藏　岡部太郎左衞門　藤田條
助　元締役熨斗目小田岡右衞門　同東郷隼太　吟
味役服紗小袖麻上下長谷川又八

一天龍迄信使迎使者　取次頭熨斗目中島庄右衞門
一濱松町端迄信使迎使者　用人同鳥居主馬
一正使に　使者熨斗目沼野内藏助
饅頭一合　柑子一折　包熨斗
一副使に　同斷　使者同中島團右衞門
一從事に　同斷　柴田杢之允
一上上官に　使者同望月一學
饅頭一合　柑子一折　包熨斗
一宗對馬守に使者　右　同　人
御音物御座候、
一休息茶屋一軒　見附宿より濱松之間藥師村
但長拾間半横貳間
熨斗目山崎甚右衞門　同室田十次郎　服紗小袖麻上
下藤井五左衞門　茶道貳人　小役人一人　給仕
人三人　立番足輕拾人　中間三人
此置道具　一臺子一飾　一干菓子　一餅菓子
一煙草道具　一煎茶道具　一手水桶　一手拭懸
手拭共に
一腰掛茶屋一ヶ所　見附宿より濱松宿之間橋羽
村



内長三間之腰掛一ヶ所　同貳間之腰掛一ヶ所
同六間之腰掛一ヶ所
但、此所に茶道具差置申候、
服紗小袖麻上下川邊太曾右衞門　茶道貳人　小役人
一人立番足輕五人　中間五人
此置道具　一茶道具　一水道具　一煙草道具
一水茶屋一ヶ所　濱松宿より舞坂之間東若林村
但長三間横壹間
服紗小袖麻上下川邊太曾右衞門　茶道貳人　小役人
一人　立番足輕五人　中間五人
此置道具　茶道具　一水道具　一煙草道具
一休息茶屋一ヶ所　濱松宿より舞坂之間增樂村
但長拾間半横貳間
熨斗目山崎甚右衞門　寶田十次郎　服紗小麻袖上下
藤井五左衞門　茶道貳人　小役人貳人　給仕人
三人　立番足輕十人　中間三人
此置道具　一臺子一飾　一干菓子　一餅菓子
一煙草道具　一煎茶道具　一手水桶　一手拭懸
手拭共に
右は朝鮮人歸國之節、濱松宿御馳走役人附如此御
座候、以上、
正德元年卯十一月
同年同月廿七日
休　遠州新居土井山城守御馳走
同御賄方役人附覺
一信使御馳走人　家老　遠藤與三左衞門　印東
七右衞門　用人　印東市郎左衞門　澤矢柄　印
東平兵衞　取次　多米甚太夫　物頭　杉山權左衞
門　取次　馬場主馬　鑓奉行　遠藤甚兵衞　川井
善左衞門　目付役　野瀨理左衞門、
一信使幷上上官上判事學士醫師用聞
物頭　印東八兵衞　側役　竹田左助　板橋角之丞
馬廻り、魚住吉兵衞
一信使旅館　醫師　岡李庵　野村玄碩　外科　池谷
升賀　大納戸　松岡三郎右衞門　小納戸　澤惣右
衞門　篠崎近右衞門　大小姓　村上又藏　大野
雲四郎　澤判太夫　書役　老沼源次郎　奥澤近
九郎　茶道一人　坊主七人
一書翰與出入手傳　大小姓　井川新平　倉田彌
平太

一下行方　馬廻り山中樓八郎　矢野仲之進　中小姓　貴田平次郎　下役三人
一小童御馳走人　側役　矢野金太夫　脇坂武左衛門　給仕人十人
一上官御馳走人　旗奉行　伊藤源太夫　中小姓　芳賀四郎右衛門　歩行三人　坊主二人　給仕人十人　足輕五人
一中官四宿御馳走人　徒頭　小泉善次郎　山内左内　馬廻り　澤平馬　小谷善右衛門　山崎政右衛門　伊藤儀平次　大小姓　安井源左衛門　小谷勘平　歩行八人　給仕人四十人　足輕十二人
一下官五宿御馳走人　歩行五人　給仕人四十人　足輕十人
一長老二宿御馳走人　馬廻り　安井左兵衛　澤一學　歩行二人　坊主二人　足輕六人
一長老下宿　歩行一人
一通詞三宿御馳走人　馬廻り　大塚淺右衛門　吉田甚右衛門　赤見判藏　歩行六人　給仕人二十人　足輕六人
一通詞下宿五宿御馳走人　歩行五人　給仕人二十五人
一信使宿前番所　物頭　飯村覺左衛門　馬廻り　片岡造酒右衛門　藤澤市郎兵衛　服部權平　三宅作之進　足輕小頭一人　足輕十五人
一同所警固　目付藤井東右衛門　馬廻り　中野左太夫　勝間清右衛門　熊木三右衛門　太田七兵衛　中小姓　德丸庄右衛門　西江彦七　鈴木半左衛門　徒目付一人　歩行三人　足輕小頭一人　足輕十人　中間五人
一同所裏通警固　津田隼人　高木九右衛門　中野新六　河島源八　阿知波與次兵衛　徒目付一人　歩行二人　足輕小頭一人　足輕八人　中間三人
一町中警固　取次　堀江藤兵衛　徒士　多米三之丞　馬廻り　野口惣助　太田元左衛門　徒士中島治右衛門　杉山權之丞　川岸十右衛門　徒士中姓　杉山郡平　松岡嘉平次　佐藤岡右衛門　大小小姓　小宮山藤助　町島武兵衛　間宮平次郎　平田新兵衛　服部作右衛門　和田逸平　徒組頭一人　徒目付一人　歩行十人　足輕小頭二人





足輕八十人　中間十人
一玄關前張番所　足輕三人
一信使宿後張番所二ヶ所　足輕六人
一新居宿入口番所　馬廻り　濱田彌次右衛門　河目源五右衛門　足輕小頭一人　足輕七人
一同所横道十四ヶ所　足輕三十人
一信使着之節使者　家老　遠藤與三左衛門　印東七右衛門
一信使ゟ音物進候使者　遠藤與三右衛門　印東七右衛門
一舞坂先迄使者　用人　澤矢柄
一新居町口迄使者　用人　印東市郎左衛門
一吉田迄送　物頭　河目治部右衛門
一先荷物送　馬廻り　別府平藏　徒目付二人
一足輕五十人
一信使荷物送　足輕二十人
一新居火消　馬廻り　伊藤傳藏　足輕小頭一人　足輕三十人　火消道具
一迎之使者衣服、熨斗目麻上下、
一御馳走人所々番人、其外役附之者共熨斗目麻上下、
一吉田迄送使者、羽織立付、
一先荷物幷信使荷物送者、羽織立付、
一火消役、革羽織立付、
一信使ゟ進候梨子蜜柑籠に入、包熨斗蚫添白木臺に載申候、
右之通信使ゟ一籠つゝ遣申候、
正德元辛卯年十一月廿七日　遠州新居御馳走所　土井山城守
火事地震大水之節役附
一鐵砲拾挺　物頭　河目治部左衛門
一弓拾張　同　印東八兵衛
一長柄拾本　鎗奉行　遠藤甚兵衛
一先乘　用人　印東平兵衛　取次　馬場主馬
一書翰警固　取次　堀江藤兵衛　大小姓　倉田彌平太　井川新平　與昇拾人
一三使與添上上官上判事製述官醫師小童警固
取次　多米甚太夫　目付　野瀨理右衛門　側役　矢野金太夫　脇坂武右衛門　竹田左助　板橋角之丞　馬廻り　中野左太夫　山中權八郎　猪飼清右衛門　矢野沖之進　小納戸　澤惣右衛門

大納戸　松岡三郎左衛門　大小姓　村上又藏　書役　老沼源次郎　奥澤近九郎　醫師　岡李庵　外科　野村玄碩　池谷升賀　輿舁五拾人

一上官以下官人幷兩長老通詞共に、御馳走取附候者共致警固立退可申事、

一官人荷物支配　馬廻り　小谷萬右衛門　歩行八人　人夫百人

一乘替輿　歩行三人　足輕貳拾四人

一鐵砲拾挺　物頭　杉山權左衛門

一弓拾張　同　飯村覺左衛門

一長柄拾本　鑓奉行　川井善左衛門

押　家老　遠藤與三左衛門

用人　印東市郎左衛門

一三使宿　家老　印東七右衛門　目付　藤井東右衛門　馬廻り　熊木三右衛門　太田七兵衛　野口惣助　高木九右衛門　中小姓　貴田平次郎

一番所　馬廻り　片岡造酒右衛門　安井左兵衛　藤澤市郎兵衛　服部權平　足輕小頭壹人　足輕拾人　中間五人

一町口番所　馬廻り　濱田彌次右衛門　河目源五右衛門　足輕小頭壹人　足輕七人　中間三人

一火之番　馬廻り　伊藤傳藏　足輕小頭壹人　足輕三拾人　中間□□

正德元辛卯年十一月廿七日　遠州新居御馳走所　土井山城守

遠州新居町朝鮮人書休宿御賄方役人附覺

三使　上上官　判事　學士　醫師　小童　宿　八　兵　衛

一川崎庄右衛門　八木岡助九郎　鈴木平助　田中次郎太夫

上官　宿　武　兵　衛

次官　宅間小野右衛門　井上唯吉

中官　宿　武右衛門　廣瀨文右衛門

同　宿　市郎右衛門　武田善右衛門

同　宿　才兵衛　石倉又兵衛

同　宿　次郎右衛門　長坂九一右衛門

下官　宿　五兵衛　大橋甚右衛門

同　宿　善介　近藤彦兵衛

同　宿　傳四郎　長谷川源助

同　宿　六郎兵衛　岡崎武兵衛

同　宿　次五兵衛　尾田利右衛門



長老　宿　安之助　内田權左衛門

同　宿　權右衛門　鳥崎四郎左衛門

同下宿　宿　彦五郎　大橋儀太夫

通詞　宿　庄兵衛　松井仁左衛門

同　宿　金左衛門　島田忠助

同　宿　十兵衛　石原要左衛門

同下宿　宿　彌　太　郎

青山五右衛門　小澤善太夫

同　宿　惣　左　衛　門

小澤市左衛門　赤坂次郎兵衛

同　宿　市　三　郎

南部平左衛門　杉本新右衛門

同　宿　忠　次　郎

内藤庄兵衛　今澤安左衛門

同　宿　茂　平　次

深町平右衛門　庄田平藏

下行渡場役人　小島惣次郎　南部十右衛門　山本猶右衛門

長谷川茂左衛門　西那五左衛門　山本十郎右衛門　松田甚左衛門　黑川太左衛門　木下儀右衛門

右衛門

右之通、宿々ゟ差出し歸國御賄相勤申候、衣服之儀服紗小袖麻上下着仕候、尤給仕人、御馳走方より右之宿々ゟ出申候、以上、

馬場源兵衛

馬場傳右衛門　手代

田中次郎太夫

宅間小野右衛門　以上、正德

卯十一月

辛卯信使記錄○按するに、源兵衛傳右衛門は、ともに御代官なり、

通航一覽卷之百十五　終

# 通航一覽卷之百十六

## 朝鮮國部九十二

○信使歸國道中 正德度

正德元辛卯年十一月廿七日、信使三河國吉田にいたりて宿泊す、明日同國赤坂にて午時の憩息あり、

正德元辛卯年十一月二十七日、吉田宿下行、二十八日赤坂休下行、踐好錢、

正德元年十一月廿七日

參州吉田朝鮮人歸國御馳走方出役人之覺

同御賄方役人附

牧野大學家來

一三官使本陣詰　家老 熨斗目藤江竹右衛門　城代 同石川市平　用人 同横田新藏　大奉行 同江川刑部右衛門　番頭 同大鹽數右衛門　番頭 同千本木平兵衛　町奉行 同高橋喜助　同中島勘兵衛

目付 同近藤判右衛門　同平野彌一右衛門　祐筆 同樋口幸助　中小姓 服紗麻上下須藤沖右衛門　醫師十德荒木道仙 同佐藤玄節　同山本宗運　同岡山一友　外科 同村松豐庵　針醫 同卯野陽專　書役 服紗麻上下岡本清兵衛　同佐藤與左衛門　茶道十德西原道甫 羽織茶坊主一人

一三官使方用達　請人 熨斗目麻上下大原平左衛門　役人 服紗麻上下梅澤權右衛門　羽織茶坊主一人　荷物運　足輕三人

一上上官方用達　給人 熨斗目麻上下守岡與惣右衛門　中小姓 服紗麻上下堀江幸右衛門　羽織茶坊主一人　荷物送　足輕三人

一上上官方用達　給人 熨斗目麻上下入江傳兵衛　中小姓 服紗麻上下有坂源七　羽織茶坊主一人　足輕五人

一上判事、學士、書記官、良醫　給人 熨斗目麻上下高谷孫左衛門　中小姓 服紗麻上下原新助　羽織茶坊主一人○荷物運　足輕二人

一玄關 熨斗目麻上下樋口友之進　給人 同金森伴五郎　帳付 服紗麻上下麓藤助○玄關前張番　足輕二人○臺所口張番　同二人○書院裏番二ヶ所同四人

一與乘物小屋　小役人 羽織小林理兵衛　足輕二人



一荷物置所　悟眞寺塔頭善忠院　足輕二人

一本陣前番所　物頭 熨斗目麻上下富田儀兵衛　給人 同森喜四郎　同本多文四郎　同中島門太夫　同毛利政之進　足輕十六人

一悟眞寺表門前番所 但大學自分番所　給人 熨斗目麻上下坂部新五左衛門　同板橋多仲　同西郷求馬　足輕十人

一本堂前荷物裁判　役人 服紗麻上下市川理左衛門　徒目付 同松島彌兵衛　同松本伊兵衛

一本町口人馬警固　役人 服紗麻上下渡部郷太夫　徒目付 同淺野館右衛門

一本町門寺内人馬警固　目付 熨斗目麻上下森善兵衛　給人 同水島平六　下目付 羽織立付森田清六　小役人 同落合半兵衛　同田中十兵衛　足輕十人

一悟眞寺表門前 上馬中馬 裁判　給人 服紗麻上下永島太郎右衛門　足輕五人

一同所荷物馬裁判　中間大頭 服紗麻上下長谷川奥右衛門　下役二人　足輕五人

一小童御料理所　悟眞寺塔頭淨招院

御徒目付衆幷通詞頭御料理、此所より仕出、

御馳走人　給人 熨斗目麻上下鰭澤又八　料理人 服紗麻上下市川久八　羽織下料理人四人　足輕三人 服紗麻上下給仕之者八人

一中官御賄所　悟眞寺塔頭西岸院

但、中官宿三軒之御料理仕立所、

役人 服紗麻上下青木甚右衛門　料理人 同中丸平藏　同廣岩金左衛門　羽織下役人七人　小役人二人　足輕三人

一中官泊宿 御馳走所共　悟眞寺塔頭三昧院

御馳走人　給人 熨斗目麻上下信太清太夫

膳部方　役人 服紗麻上下川田又右衛門　羽織茶坊主一人　服紗麻上下給仕之者八人　足輕三人

一中官泊宿 御馳走所共　悟眞寺塔頭西禪院

御馳走人　給人 熨斗目麻上下山本源藏

膳部方　役人 服紗麻上下手塚久太夫　羽織茶坊主一人　服紗麻上下給仕之者八人　足輕三人

一中官泊宿 御馳走所共　悟眞寺塔頭法藏院

御馳走人　給人 熨斗目麻上下大野判藏

役人 服紗麻上下阿部次郎右衛門　羽織茶坊主一人

服紗麻上下給仕之者八人　足輕三人
一下官御賄所　悟眞寺塔頭東齊院
但、下官宿三軒之御料理所仕立、
給人服紗麻上下鈴木兵助　小役人同中野佐五兵衛
波多野惣七　料理人　廣瀨門左衛門　下役八人
足輕三人
一下官泊宿御馳走所共　悟眞寺塔頭竹意軒
御馳走人　中小姓服紗麻上下高谷善助羽織給仕
之者十人　足輕二人
一下官泊宿御馳走所共　悟眞寺塔頭專稱軒
御馳走人　中小姓服紗麻上下富田右衛門八
羽織給仕之者八人　足輕二人
一下官泊宿御馳走所共　悟眞寺塔頭樹松院
御馳走人　中小姓服紗麻上下大原兵左衛門
羽織給仕之者十人　足輕二人
一通詞頭五人泊宿　悟眞寺塔頭勢至軒
御馳走人　給人熨斗目麻上下平賀清助　膳部
方　小役人服紗麻上下石島彌太夫　羽織茶坊主
一人　麻上下給仕之者十人　足輕二人
一通詞頭五人泊宿　悟眞寺塔頭龍興院

御馳走人　中小姓服紗麻上下瀨戸雲八　茶坊主
一人　足輕二人
右通詞頭十人之御料理、勢至軒に而出之、
一通詞頭之下宿食事所共　札木町長十郎
小役人羽織永島半右衛門
一中官下官御賄所　札木町伊右衛門
御馳走人　給人熨斗目麻上下加茂與一右衛門
中小姓服紗麻上下谷新右衛門　役人同渡部六左衛
門　小役人同大島庄助　料理人同中川十藏
羽織下料理人四人　同茶坊主一人○中官服紗麻上
下給仕之者八人○下官羽織同七人足輕八人
一通詞十四人泊宿上下御馳走所共　本町久太夫
御馳走人　小役人熨斗目麻上下竹原權六　膳部
方小役人服紗麻上下岡部斧右衛門　料理人同內藤
太次右衛門　羽織下料理人三人　茶坊主一人
服紗麻上下給仕之者六人　足輕三人
一通詞十三人泊宿御馳走所共　本町久兵衛
御馳走人　給人熨斗目麻上下櫻井伊兵衛　膳部
方小役人服紗麻上下鈴木判藏　料理人同金窪左五
兵衛　羽織下料理人三人　茶坊主一人　服紗麻上下



給仕之者八人　足輕三人
一右通詞十三人之下宿　本町七右衛門
小役人羽織藤井吉右衛門
一通詞十三人泊宿御馳走所共　本町嘉兵衛
御馳走人　給人熨斗目麻上下瀧川市郎右衛門
膳部方小役人服紗麻上下中村三右衛門　料理人中
村儀右衛門　羽織下料理人三人　茶坊主一人
服紗麻上下給仕之者六人　足輕三人
一綠長老泊宿　札木町彦四郎
用達給人熨斗目麻上下江原定右衛門　足輕二人
一集長老泊宿　札木町吉右衛門
用達給人熨斗目麻上下松本惣兵衛　足輕二人
一東町番所　給人熨斗目麻上下岸田仲右衛門　同伊
藤甚兵衛　足輕小頭一人　足頭六人
西町番所　給人熨斗目麻上下有馬勘助　同戸山
伊太夫　足輕小頭一人　足輕六人
一悟眞寺境內火番　革羽織野本清右衛門　中小姓
同岸本伊三郎　同永沼軍平　同大熊源兵衛　足
輕四人
一町中火番　一組、物頭革羽織山本彌平左衛門

同足輕小頭一人　足輕二十人○一組、給人革羽織
廣瀨四郎兵衛　同中間小頭一人　鳶者十人　火
消道具持三十人○一組、中小姓革羽織須藤文五郎
同秋山平藏　足輕二人○一組、同同中川武右衛門
同萩野藤助　足輕二人○一組、同同伊部喜左衛
門　同佐藤金太夫　足輕二人○一組、徒士革羽織
村田彦市　同關根彌五兵衛○一組、同町同心小頭
一人　同同心十人
一道奉行　給人羽織立付東郷幸右衛門
一往還野間掃除方　地方役羽織立付倉橋友右衛門
中間大頭同近藤與左衛門　地方役同安達加右衛
門
一同野間警固　足輕四十人
一町中辻固　同　三十人
一普請奉行服紗麻上下土方佐五右衛門　下役羽織立付
松本武右衛門　同長谷川吉兵衛
一人馬割場立合　郡奉行服紗麻上下阿部瀨兵衛
代官同江尻喜多右衛門　地方役同小幡善九郎
同下役羽織高坂多七　足輕五人
一二川宿迄出迎使者　使番熨斗目麻上下加藤勘左

一衛門
一町外迄出迎使者　番頭熨斗目麻上下大鹽數右衛門
一三官使に進物使者　用人熨斗目麻上下横田新藏
三官使に蜜柑一籠宛　目錄、包熨斗、蚫
一三官使赤坂宿迄見送使者　惣頭羽織立付中野善助
揚挑灯五十張
一大學領分出人馬赤坂迄見屆　地方役羽織立付小畑善九郎
一伊奈村腰掛水茶屋　中小姓服紗麻上下秋山善九郎　茶坊主一人　足輕一人　給仕之者
腰掛一ヶ所、四間に一間半　同一ヶ所、三間に一間半、雪隱一ヶ所　小屋一ヶ所、六間に一間半
風呂釜一飾水差棚小道具共に　煎茶道具一通茶碗棚小道具共　菓子一籠　水桶二　多葉粉盆二
通　次多葉粉道具
右茶屋構之外　馬口洗水一ヶ所　下雪隱一ヶ所
一飯村腰掛水茶屋　中小姓服紗麻上下河村判八羽織茶坊主一人　足輕一人　給仕之者
一腰掛并小屋右同斷、　置道具右同斷、
一小坂井村水茶屋　足輕一人　給仕之者
小屋一ヶ所、二間に一間半、煎茶道具一通、茶碗臺
小道具共　多葉粉道具　水桶
右茶屋構之外　馬口洗水一ヶ所　下雪隱一ヶ所
一山中橋水茶屋　足輕一人　給仕之者
小屋并置道具右同斷、
一官人爲入用乘鞍馬支度　馬役齋藤七兵衛　西海半助　宰領足輕　馬附之者
上官中官雨道具
一同斷乘物駕籠　宰領　足輕十人
朝鮮人歸國、三州吉田并御賄所役人附　牧野大學按するに、前文によるに、牧野大學の下家來の二字を脫せしなるへし、
一忠善院元方　野澤藤八郎　富山政右衛門○帳付　室田曾助　中島利兵衛○請取渡方　田上四郎兵衛　梅村沖右衛門○魚鳥吟味　仁右衛門
一酒井院中官御賄所　志村郡平　菊地宗内　吉田宗兵衛　落合孫右衛門



一東高院下官御賄所　成田清六　麻生三左衛門　青山太七
一勢至軒通詞十三人宿　近藤條左衛門　高亜新左衛門
一三昧院中官四十六人宿　河原甚八郎　西忠左衛門
一四禪院中官四十五人宿　西村宗七　惠郎七郎右衛門
一法藏院中官二十三人宿　生田竹右衛門　住江源六郎
一竹意軒下官五十人宿　田所猶右衛門　加藤友右衛門
一寡稱軒下官三十五人宿　森十藏　齋藤所左衛門
一樹松院下官五十五人宿　二村此右衛門　高瀨十右衛門
一淨招院御賄方詰所　近藤宇吉　西山常右衛門
津房相右衛門
一食燒所　島田庄次郎　小野久野右衛門　拜田利右衛門　平野其助
御賄所　伊右衛門
町屋　中官三十四人宿　小半七郎
下官三十三人宿　十左衛門
一中官下官御賄所泊宿共　安塲織右衛門　正木利兵衛　加藤彌十郎　河野加兵衛
一町屋久兵衛通詞十三人宿御賄共に　二村甚兵衛　野中戸右衛門
一町屋久太夫加兵衛通詞十三人同十三人　通詞宿二軒御賄共　秋山勘右衛門　島村豐六
一町屋七兵衛、長十郎通詞下宿二軒御賄共　水野半平
一町屋吉右衛門長老宿下々共　下行
一町屋彦四郎右同斷　下行
畫休朝鮮歸國之節、赤坂御馳走出役人
牧野大學家來
一三使本陣詰　家老熨斗目麻上下牧野齊　大奉行同奥平七郎右衛門　番頭同戸倉平馬　同西郷十郎右衛門　物頭同土肥理左衛門　目付同河村小左衛門　醫師十德小島儀庵　針醫同服部玄親外科同早川休巴　役人服紗麻上下内海村右衛門林彦助　祐筆安達八右衛門　徒目付上原伊右衛門　書役山崎與助　羽織茶坊主一人
一三使用達　給人熨斗目麻上下榎並文右衛門　中

小姓服紗麻上下 松本元右衛門 小役人羽織袴 森田銀右衛門○小童方役人服紗麻上下 森佐太夫○輿請取小役人羽織袴 大崎丈右衛門 足輕四人

一上上官用達 給人熨斗目麻上下 安澤平右衛門 中小姓服紗麻上下 渡部平内 小役人羽織袴 澤田七右衛門 乘物請取 足輕二人

一本陣玄關取次 熨斗目麻上下 石川彌五六 同山本喜兵衛○帳付 服紗麻上下 磯村文右衛門○玄關前番所 足輕二人○路次口番所 足輕二人○臺所口番所 足輕二人

一三使本陣前人馬警固 目付 熨斗目麻上下 落合澤右衛門 給人同 永田助太夫 徒目付 服紗麻上下 横山縫右衛門 下目付同 保坂八平 小役人同 須澤善八

一本人向番所 物頭熨斗目麻上下 大森市郎右衛門 同加藤甚右衛門 給人同 大野金右衛門 同池田源助 同笹山紋兵衛 足輕六人 長柄之者十一人

一上官休宿 宿 庄左衛門 用達 給人熨斗目麻上下 阿部野儀太夫 中小姓服紗麻上下 草山字右衛門 足輕四人

一中官休宿 宿 又左衛門 給人熨斗目麻上下 小野丈右衛門 御馳走人同 岩本茂兵衛 給人服紗麻上下 稻葉權右衛門 御馳走人同 柘植宗左衛門 同石塚清右衛門○膳部方役人 同小川十左衛門 同金子四郎右衛門 同古屋德右衛門○食酒魚鳥、青物、鹽、噌、菓子、諸色 小役人同 岸本孫市 茶坊主二人 足輕七人 麻上下給仕三十人

一下官休宿 三軒之内 助左衛門 御馳走人 中小姓服紗麻上下 大井彌五左衛門 役人 長澤庄右衛門○膳部、酒食、魚鳥、青物、菓子、諸色 小役人 同木村忠兵衛 足輕三人 羽織袴給仕十人

一下官休宿 庄右衛門 御馳走人 中小姓服紗麻上下 森十太夫 役人同佐藤甚吾兵衛○膳部、食酒、魚鳥、青物、諸色 小役人 服紗麻上下小原吉左衛門 足輕三人 羽織袴給仕十人

一下官休宿 伊左衛門 御馳走人中小姓服紗麻上下 大澤友左衛門 小役人同 乘山平藏○膳部、酒食、魚鳥、青物、諸色 小役人 林金兵衛 足輕三人 給仕十人



一通詞休宿 判右衛門 御馳走人 給人熨斗目麻上下 恩田半五兵衛 小役人羽織袴 久保禮右衛門○膳部方、食酒、魚鳥、青物、諸色 小役人 服紗麻上下 永塚何右衛門 茶坊主一人 足輕四人麻上下給仕七人

一通詞休宿 判之丞 御馳走人 給人熨斗目麻上下 朝比奈仁右衛門 小役人羽織袴 鈴木右衛門○膳部、食酒、魚鳥、青物、諸色 小役人 服紗麻上下 田中三左衛門 茶坊主一人 足輕四人麻上下給仕七人

一詞頭休宿 勘右衛門 御馳走人 給人熨斗目麻上下 原勘七 小役人羽織袴 小島新七○膳部、食酒、魚鳥、青物、諸色 小役人 服紗麻上下 最上茂七 茶坊主一人 足輕四人 麻上下給仕七人

一通詞休宿 五太夫 御馳走人 給人熨斗目麻上下 關段四郎 小役人羽織袴 矢田九兵衛○膳部、酒食、魚鳥、青物、諸色 小役人 服紗麻上下麻上下 青木文五郎 茶坊主一人 足輕四人 給仕七人

一長老休宿 小平太 用達熨斗目麻上下 久能小兵衛○表口番足輕二人

一長老休宿 金右衛門 用達熨斗目麻上下 相馬字平次○表口番足輕二人

一官人用意馬附 役人羽織立付齋藤七兵衛 同西海判助 足輕三人

一用意乘物駕籠 宰領 足輕十人

一西町口番所 給人熨斗目麻上下 大澤十太夫同 富永金左衛門 足輕五人 長柄之者五人

一東町口番所 給人熨斗目麻上下 太田萬右衛門 同川田軍右衛門 足輕五人 長柄之者五人

一火之番 物頭革羽織 長田六郎兵衛 足輕小頭一人 足輕二十人 給人同 内田又助 中間小頭一人 鳶之者廿人 火消道具持卅人

一町横小路辻固 足輕二十四人

一二三里先使者 使者熨斗目麻上下 大木勘兵衛

一町外迄使者 番頭熨斗目麻上下 西郷十郎左衛門

一三使に音物使者 番頭熨斗目麻上下 戸倉平馬 九年母、目錄、包熨斗、蛇一籠つゝ 足輕二人

一書簡先拂

一三使先拂　足輕六人
一三使岡崎迄見送　物頭羽織立付中野善助　牧野大學家來
一御關所相詰　家老熨斗目麻上下樋口市左衛門
番頭同斷板橋新五兵衛　目付同斷谷三郎兵衛
一御關所面番　物頭熨斗目麻上下富永覺左衛門
給人同平野龍右衛門　同秋元直右衛門同大西郷左衛門　同富永甚左衛門　同五味直之進　下役麻上下神田四郎兵衛　同服部加右衛門　足輕小頭一人　足輕十五人
一兩船場廻り　羽織立付太田次郎太夫　同木村宗兵衛　足輕二人
一御關所勝手相詰　外科十德清水三益　本道同中川養伯　同高須玄秀　祐筆　馬被惣五郎　書役池田市郎兵衛　役人　小林治部右衛門　上田平六　徒士　加藤常之進　服部傳左衛門　茶道中村三賀
一御關所前船場警固　物頭熨斗目麻上下松崎勘右衛門　目付同森善兵衛　給人麻上下上月平太夫
一同中江治兵衛　下役同神田新助　徒目付同磯村織右衛門　徒士麻上下勝又傳次郎　足輕小頭二人　足輕三十五人
一船場役人　物頭熨斗目麻上下秋山源太左衛門
給人麻上下大脇喜右衛門　徒目付同岡島小右衛門
下目付羽織立付佐藤李左衛門　同川本吉兵衛　足輕五人
一御門前立番　徒目付麻上下本橋萬右衛門　同齋藤染右衛門
一荷物同勢船場假御番所　物頭熨斗目麻上下五味六郎左衛門　給人麻上下赤澤新兵衛　同池内五兵衛　下役同中村源左衛門　足輕小頭一人　足輕八人
一同所勝手相詰　役人麻上下信田藤太夫
一同所船場警固　物頭熨斗目麻上下三堀三郎右衛門　目付同野本藤兵衛　給人麻上下片岡丈右衛門
一同伊丹次郎右衛門　下役同加藤忠太左衛門　徒士同神田傳次郎　同鈴木喜六　足輕小頭一人
足輕廿五人
一船場役人　給人麻上下杉山織右衛門　徒目付
一同笛木平次右衛門　下目付羽織立付本郷政右衛門
足輕五人
一人馬溜場道具筋共に立番　足輕十二人
一町奉行　熨斗目麻上下小山五左衛門　足輕五人
一在方諸用　地方役麻上下宮田幾右衛門
一人馬割方立合　給人麻上下林八左衛門　勘定役同小島吉左衛門
一道奉行　羽織立付正田新八
一野間掃地方　地方役同上田又藏
一御先拂　足輕十人
以上

十一月廿七日　按するに、赤坂書鉤は廿八日なり、こゝに廿七日とあるは、これきのふ吉田において、一時に書上しものなるへし、

以上、正德辛卯信使記錄、

通航一覽卷之百十六終



# 通航一覽卷之百十七

## 朝鮮國部九十三

○信使歸國道中　從正德度至文化度

正德元辛卯年十一月廿八日、信使三河國岡崎にいたる、是より京著等の事記載を闕く、明年二月にいたりて對馬國を出帆す、

正德元辛卯年十一月廿八日、岡崎宿下行、踐好錄、

正德元年十一月廿八日

朝鮮人歸國に付、三州岡崎水野監物御馳走書付

一三州岡崎水野監物領内往還通盛砂蒔砂爲致、町中并大濱茶屋家並簾掛させ手桶出申候、夜中行燈差置申候、其外來聘の通申付候、先頃書出候三使御宿新規建物、今度公儀御入用にて被仰付候旨、御賄御代官より被仰渡候、

一法藏寺まで御迎使者　給人熨斗目麻上下水野與一惣右衛門

一三使御先乘　物頭同須賀井半兵衛　足輕十二人

一御書翰與御先拂　足輕二人

一三使御先拂　足輕六人　小人四十八人
挑灯四十四
一領内野間道掃除奉行　給人羽織立附安見新七
同富田長兵衛　足輕十人
挑灯十
一町口まで御迎使者　者頭髮斗目麻上下佐藤十右
衛門
一領分野間　代官羽織立附西田市右衛門　同斷沼
野武兵衛　同斷齋藤四郎兵衛
一東領分境より信使御宿まで警固
足輕三十八人　辻々番百姓町人三十五人
挑灯三十四
一信使御宿より西領分境迄警固
足輕六十三人　辻々番百姓町人五十一人
挑灯七十六
一矢作橋　物頭髮斗目麻上下神谷六郎兵衛　足輕
二十二人　小人百人
挑灯百
一西矢作村腰掛茶屋　中小姓麻上下山田三左衛
門　代官麻上下野澤安左衛門　坊主二人　足輕二
人　小人二人
臺子茶籠笥共に　多葉粉盆　水菓子　手水鉢手
拭共　挑灯　燭臺　手燭
一尾崎村腰掛茶屋　中小姓麻上下綱島新藏　代
官同津田彌五助　坊主二人　足輕二人　小人二
人
臺子茶籠笥共　多葉粉盆　水菓子　手水鉢手拭
共　挑灯　燭臺　手燭
一東門惣門番所　物頭髮斗目麻上下小泉文左衛門
給人同古市傳右衛門　足輕十人　長柄之者五人
掃除之者小人三人
幕　鑓五本　三道具　挑灯十二　燭臺
一西惣門番所　物頭髮斗目麻上下水野主馬　給人
髮斗目麻上下山路左兵衛　足輕八人　長柄之者五
人　掃除之者小人三人
幕　鑓五本　三道具　挑灯十二　燭臺
一往還通城内木戸口番所二ヶ所
足輕六人　掃除之者小人十六人
幕　三道具　挑灯五
一町中見廻り　町奉行髮斗目麻上下三好傳兵衛



同斷岡本彌兵衛　足輕十八人　目付羽織袴青木市
之進　歩目付四人
一信使御宿火之番　物頭羽織立附熊倉又之丞　富
島吉右衛門　足輕四十六人　小人四十人
火消道具
一町中火之番　給人羽織立附中島善藏　落合七郎
右衛門　眞田助之丞　内田九左衛門　吉田角左
衛門　石原平九郎　町人足輕五百十人
火消道具
一城内并往還脇町火之番　同斷眞田助之丞　内
田九左衛門　吉田角左衛門　石原平九郎　町人
五十人
火消道具
一城内并往還脇町火之番　給人羽織立附古町彌助
水野兵九郎　須賀太左衛門　中小姓羽織立附志賀
勘助　五十幡萬右衛門　下方彌七　平間勘六
足輕二十二人　町人足輕百五十六人
火消道具
一領内往還通在家火之番　百姓三百人
一火事地震等之節信使御退之刻警固

物頭髮斗目麻上下須賀井判兵衛　近習詰同二本松
七郎　給人同津田紋右衛門　足輕五十五人　小
人二十人
挑灯二十
一用心鞍置馬乘馬　三匹
右馬附　馬役麻上下都筑新五右衛門　大谷權
平　厩者九人　同小頭壹人
一用心乘物三挺同駕籠七挺
右乘物駕籠附　足輕十一人　乘物舁四十人
一信使御宿表門番所　物頭髮斗目麻上下稻垣惣右
衛門　給人同志賀友右衛門　給人刑部角右衛門
安部井清右衛門　秋山兵助　足輕十二人　掃除
奉行足輕二人　長柄之者十人　掃除之者小人十
五人
幕　弓十張　鐵砲十挺　鑓十本　三道具　燭臺
一同所立番　中小姓麻上下増田又右衛門　村上
孫平次　杉左平次　吉田武左衛門　藤本淺右衛
門　平石清右衛門
一裏門番所一ヶ所　足輕二人
三道具

一中之門番所　足輕二人
一臺所口番　足輕三人
一御荷物置所番　足輕三人
挑灯五十
一同所廣間番　旗奉行熨斗目麻上下雄倉源右衛門
鑓奉行落合武左衛門　給人木村傳藏　岡本伴四郎　秋山園右衛門　二本松權之助
幕
一三使上上官小童之間并御役人御詰所、右席々ゟ差出候道具、來聘之節之通に御座候、
一三使上上官小童之間并御役人中御詰所、且又上官、中官、下官、通詞、長老宿々ゟ火鉢差出申候、
一信使附　家老熨斗目麻上下拜鄕源左衛門　水野三郎右衛門
一蜜柑一籠　正使ゟ　使者年寄拜鄕縫殿
一蜜柑一籠　副使ゟ　使者年寄松野尾平馬
一蜜柑一籠　從事ゟ　使者年寄水野文右衛門
右之使者熨斗目麻上下
一信使附　目付熨斗目麻上下中山甚五兵衛　給人同友松彌五左衛門
一上上官附　歩士頭同關口源之丞　同松本左太夫
一小童附　目付同仁科九右衛門　給人同嶺岸判内　料理人五人　足輕二人　麻上下給仕町人十五人
料理道具　庖丁　まな板
一三使上上官小童所　働人足四十人
一御馳走所勝手詰　中小姓麻上下和久庄右衛門
三好長右衛門　明石左助　内田源六　山路甚平次　設樂清藏　村上孫四郎　宮田喜右衛門　醫師十德東城玄意　外科同斷松田道益　大工頭麻上下花村伊右衛門　大工二人　坊主一人　足輕十五人　小人共二人
一火之本見廻り　中小姓目付麻上下村上孫左衛門　歩目付二人
一上官附　給人熨斗目麻上下杉太郎左衛門　大久保傳之丞　足輕二人　働人足十人
一中官附　給人熨斗目麻上下松野尾左次兵衛門　戸田新藏　料理人十二人　足輕二人　麻上下給仕町人十二人　働人足二十五人



一下官宿七軒附　給人熨斗目麻上下坂東市十郎　岩本十兵衛　志賀淺右衛門　德賀七左衛門　淺井判右衛門　小林市左衛門　清水源七　進藤太夫　高宮伊兵衛　井上助右衛門　柘植源兵衛　秋元勝右衛門　青山三郎左衛門　小久江半平羽織袴料理人二十八人　足輕十四人　給仕町人四十七人　働人足五十三人
一通詞宿五軒附　給人熨斗目麻上下水野新右衛門　井上喜兵衛　笹本萬次郎　牛皮善右衛門　園田市右衛門　劍持李之助　奥平庄太夫　井上鹿之助　板原惣左衛門　渡邊判助　料理人二十五人麻上下給仕町人四十四人　働人足五十人
一長老宿二軒附　給人熨斗目麻上下野前一郎兵衛　鈴木六兵衛　足輕四人　働人足十人
右宿々ゟ差出候道具、來聘之節之通御座候、
一御輿乘物宿附　中小姓麻上下沼野治助　小林九郎兵衛　足輕六人　人足六十人
幕　挑灯十二
一領内より出候人馬役　給人羽織立附呼子平右衛門同斷伊藤兵左衛門　代官同設樂清兵衛　小川武左衛門　醫師十德山内玄碩　外科同波多野喜庵　町馬醫一人　足輕二十五人
挑灯百五十
一同所火之番　足輕十人　百姓七十人
一三使鳴海御馳走所迄御送
物頭旅裝束赤星彌三右衛門　歩目付一人　足輕十一人
御書翰與御先拂　足輕二人
三使御先拂　足輕二人　乘物駕籠昇六十人同斷附足輕二人　小人十四人
乘物三挺　駕籠七挺毛氈敷申候　同相油共に
一領内より出候人馬名古屋迄送
者頭旅裝束伊藤兵左衛門　歩目付一人　足輕二十人　小人四人
挑灯四十
領内より出候馬八百七十一疋、人足千五百三十四人
朝鮮國ゟの御荷物通候節
一東領分境より御荷物先拂　足輕二人
挑灯

一御荷物宿附　給人麻上下清水源七　岡部七郎兵衛　井上助右衛門　鈴木小右衛門　秋元勝右衛門　鈴木森右衛門　足輕三十四人

挑灯三十

一同所火之番　物頭羽織立附大塲市兵衛　足輕三十三人　小人二十人

火消道具

一同所見廻　麻上下拜郷源左衛門　同斷水野三郎兵衛　同斷松野尾平馬　同斷水野文右衛門

一御荷物鳴海迄送　旅裝束岡部七郎兵衛　鈴木小右衛門　歩目付二人　足輕十人

御荷先拂　足輕二人

御荷物警固　足輕五十一人　小人五十人

挑灯六十　桐油百十八　替棒十本

一領内より出候人馬役　羽織立附呼子平右衛門　同斷伊藤兵左衛門　同斷設樂清兵衛　同斷小川武左衛門　足輕十二人　小人五人

挑灯百

領内より出候人足五百一人

右之通に御座候、以上、

十一月廿八日以上、正德辛卯信使錄、

十一月廿九日、尾張國名古屋において、尾張中納言殿饗應せらる、これ公命によりてなり、十二月四日京着、この日、大佛殿耳塚等を見せしめらる、同七日旅館本國寺にて御饗應、上使等參向の時のことし、

正德元辛卯年十一月二十九日、鳴海休下行、名古屋宿尾公より最前の如く按するに、信使參向の時をさす、上意の御饗應あり、」十二月朔日、起休下行、大垣宿下行、二日今須休下行、彦根宿下行、三日八幡休下行、守山宿下行、四日大津休下行、是日京都に着く、大佛殿幷三十三間堂に詣て、酉の刻本國寺の旅館に還着す、七日旅館にて御饗應、其儀幷給仕の輩最前に同し、上使松平紀伊守按するに、京都所司代松平信用なり、參らる、踐好錄、

正德元年

入京之道筋　淀より鳥羽海道ゑ出、鳥羽之實相寺に而休息仕裝束改、其より四條東ゑ、大宮通七條東ゑ、油小路ゑ、松原ゑ出、西ゑ行本國寺ゑ着、

江戸より登り之道筋　三條通より大和大路下る大佛殿見物、大佛にて御馳走在之、大佛正面より伏見海道上ゑ、五條橋通西ゑ、寺町上ゑ、四條西ゑ、室



町下ゑ、松原西ゑ本國寺ゑ、

一四日京着五日所司代ゑ御禮に參向、七日饗應、

東西兩門主幷京都所司代ゑ進物

人參壹斤　色紙口　墨十笏　筆十柄　花氈三枚

尾扇口　胡桃三斤

所司代ゑ者龍眼肉三斤、月堂見聞集、

正德元年十二月四日

一明け六立ち、松原通り室町へ出て、大佛の耳塚を見せけるなり、中村氏筆記抄、

十二月八日京師を發し、翌九日大坂に着す、同十一日旅館西本願寺において御饗應、上使また例のことし、同十八日大坂を發船あり、同廿七日備前國牛窓において、領主松平池田伊豫守綱政、かねて鈞命により饗應を設く、明年二月九日對馬國に着船あり、

正德元年十二月八日發京、未の刻淀に至り、下行の事畢りて、申の刻に橋の下より乘船し、亥の刻枚方に着く、下行畢るの後即ち發船して大坂に赴く、九日未の刻大坂難波橋の下に着岸す、是より最前の如く陸行して、西本願寺の館舍に入る、十日館中にて御饗應、其儀幷給仕の輩皆最前に同し、上使土岐伊豫守按するに、大坂御城代土岐頼隆なり、參らる、十五日大坂發船を催す所に、正使病るによりて延引せらる、十八日三使以下對馬守兩長老皆乘船、二十二日副使從事の船河口を發す、副使の乘れる船は、是日酉の刻兵庫に至る、二十三日正使幷に對馬守河口を發す、辰の刻に及て對馬守の船兵庫に着く、昨日發せる從事の船も至る、申の刻正使の船も至る、暫く有て三使の船對馬守の船を初として、一度に出て室の津に赴く、二十四日室下行、二十七日牛窓、上意として伊勢守斯にて御饗應を設らる、二十八日備前日比、二十九日鞆浦に至る、三使以下對馬守斯にて越年あり、其下行を留る、」正德二年壬辰正月元日、備後桃島に至る、二日安藝高原、三日家室、四日周防笠戸に着く、是日は上の關に船を寄せす、五日深浦、十二日龍口、十八日長門本山、二十日赤間關、」二月朔日筑前藍島、二日壹岐風本、九日對府に至りて三使以下休息す、十八日三使以下、對馬守兩長老に辭謝し、發船して國に還る、其後兩長老は京師に歸る、」二十五日佐須浦より發船して、即日に其國の釜山浦に着船す、二十八日東萊を發軔すとなり」、三

月九日、王畿に還着せると云、踐好錄、
正德二壬辰年二月、信使歸國之節、灘廻警固幾度又右衞門に相渡候覺書、左記之、

覺

一朝鮮船佐須奈より渡海之儀に候間、御行規無緩被申付、見掛等宜樣に萬端可被申付事、
一加番之横目、兼て申渡置候面々、佐須奈に罷越、當役同前に相勤可被申事、
一又右衞門儀、佐須奈にて朝鮮船に相附、船中灘廻行儀能可被相勤候事、
一大浦忠左衞門乘船於佐須奈改之、寺田一郎兵衞乘船幷引船小早等鰐浦にて相改候樣に可被申付候事、
一朝鮮國船佐須奈出船仕、帆陰見え不申候節、早々御案内可被申上候事、
一佐須奈幷灘廻逗留之節、陸に上度由被申候は、、大浦忠左衞門差圖次第に可被仕事、
右之外、差當難計儀候は、、忠左衞門幷市郎兵衞被申談差圖可被請候、以上、

辰二月日　　年寄中

幾度又右衞門殿正德辛卯信使記錄、

正德二年

李健命答宗對州書

朝鮮國禮曹參判李健命、奉復日本國對馬州太守拾遺平公閣下、槎使鼎來、芳緘頒到、備諳動止、深用慰沃、信使回泊緊賴勒護、矧此佳貺、又出盛眷、款好之儀、隨事深感、玆將溥儀、用申回敬、不備、

壬辰年四月日

李大成答宗對州書

朝鮮國參議李大成、奉復日本國對馬州太守拾遺平公閣下、信使回槎、遠勞護送、仍承華翰、兼受珍貺、旣慰且荷、有倍常品、不腆土宜、用表情素、草此、不備、

壬辰年四月日　廉按、(按するに、廉は此書の著人桂川元廉なり)右書通二通聘使還國、禮書謝宗公者雖無他、又亦存此、以見布帆無遂市復命○踐好錄、

一文昭院樣御代寶永に參候三使は、朝鮮に歸り候て、上上官抔も皆流罪に逢申候、大坂にて迎送仕候不調法多條之處にて、流さる由に候事　異國朝鮮物語、○按するに、此書ふしんなれども姑らく存す、

享保四己亥年十月十五日、信使江戸を發途ありて、この一日御暇賜はれり、歸國す、

享保四己亥年十月十四日
一明十五日朝鮮人歸國出立の由、柳營日次記、
享保四年十月
一十五日朝鮮人江戸發足、御日記、享保通鑑、享
享保四年十月十五日、三使以下不殘本願寺發足下行也、脫漏柳營祕鑑、雜記燭談、
享保四年四月
鞍皆具四疋分、但壹人之分、
足一人　口つき二人　沓籠持
手傘紙合羽　合羽籠持　挑灯持
右當秋朝鮮國之信使歸國之節、從江戸遠州舞坂迄可被出之事、
一鞍皆具改不及取繕可被用事、
一當秋も前々之通、美濃路通之事、
一鞍皆具御定之所に役人差添罷越、御馳走人幷馬割之御代官に相達、其以後宗對馬守役人申談可任差圖事、
一信使發足の日限等、松平對馬守、横田備中守、大久保下野守に　按するに、對馬守は寺社奉行、備中守は大目付、下野守は御勘定奉行にして、ともに御用掛りなり、可被承合候事、

以上

四月　先例政典續編、
享保四年朝鮮人歸國、霜月十日大坂川口に乘船、天氣次第に十五日出船之由、月堂見聞集、
享保四年
一十一月十五日大坂到着、一同月十九日蒲苅到着、
一十二月廿一日對州到着、一同五年正月朔日對州發船、脫漏柳營祕鑑、
己亥　按するに、享保四年、我通信咨報禮部、回答奉旨、朝鮮國差往日日本使人回來、」庚子差譯院正申之淳、同通信使回來、倭學堂上金圖南前去咨報禮部、回答送至熱河、將日本地方情形奏摺啓奏、奉旨知道了、方策新編載日觀要攷、
寛延元戊辰年六月十三日、信使府を發す、暇賜はりしは、この月七日なり、
寛延元戊辰年六月
一十二日　　京極若狹守
右者東海寺に罷越　町奉行　能勢肥後守　御目付　中山五郎左衞門　神尾市左衞門　道奉行　堀田源右衞門　松平惣兵

衛

右道筋見分

盜賊火附改 河野忠右衛門　長田山城守

右同斷

一同十三日午刻、朝鮮人本願寺發駕、朝鮮來朝記、

寛延元年六月十三日、朝鮮人江戸出立、但江戸逗留

廿二日、同日藤澤泊、宮中要錄、

寛延元年六月五日

御右筆部屋縁頰

大判金二枚 時服二 宛　御勘定 木原豐次郎　池田唯太郎　葉若平太夫

右者、朝鮮人歸國之節宿々ゟ被差越候に付、被下之旨雅樂頭按するに、酒井忠知、老中申渡之、寛延年錄、

寛延元年

朝鮮人歸國之節、江戸より舞坂迄送り、

一十五疋　三十五萬石 水戸宰相殿○一四疋　右衛門督殿○一同斷　刑部卿殿○一六疋　十四萬石酒井左衛門尉○一七疋　十五萬石柳原小平太○一三十八疋　六十二萬五千石松平陸奥守○一十二疋　三十萬石松平兵部大輔○一十疋　二十三萬石松平肥後守

中馬組合

一二疋　一萬石松平志摩守○一二疋 同斷高木主水○一三疋　一萬八千石水野日向守○一三疋　二萬石内藤金市郎　○一二疋　一萬石内田卯之助○同斷 同斷山口修理亮○一三疋　一萬五千石内藤越中守○一四疋　二萬石保科越前守○一二疋　一萬石丹羽和泉守○一四疋　二萬石石川内膳正○一二疋　一萬六千石大久保李之丞

中馬組合

一三疋　一萬五千石内藤美濃守○一十五疋　七萬八千石戸田能登守按するに、鷄林求聘詳錄には、十五疋松平壹岐守、十三疋戸田能登守とあり、○一二疋　一萬五千石米倉鍋三郎　○一四疋　五萬石岩城伊豫守○一八疋　三萬五千石土岐伊豫守○一五疋　二萬三千石小笠原源彌○一三疋　一萬九千石大關伊豫守○一六疋　三萬石大久保山城守○一四疋　二萬石六郷伊賀守○一二疋　一萬二千石酒井大和守

中馬

一十三疋　七萬石松平丹波守○一十疋　五萬石秋田河内守○一六疋　三萬石田村右京大夫○一十一疋



五萬石本多中務大輔○一十三疋　六萬石相馬彈正少弼○一六疋　三萬二千石諏訪因幡守○一十三疋　六萬石井上河内守○一十一疋　五萬石間部若狭守○一三疋　二萬石松平大學頭○一二疋　一萬石松平淡路守

新居より城州淀迄送り馬次

鞍置馬組合

一五疋　十二萬石松平讃岐守○一御普請御手傳に付御馬御用御免　三十二萬五千石松平勝五郎○一二十四疋　五十四萬五千石細川越中守○一十四疋　三十二萬三千石藤堂和泉守○一八疋　十八萬六千石松平出羽守○七疋十五萬石松平隱岐守○一四疋　十萬石松平下總守○一四疋　十萬石奥平大膳大夫

中馬組合

一二疋　一萬石加藤織部正○一四疋　一萬七千石板倉攝津守○一三疋　一萬八千石市橋下總守○一二疋　一萬石立花民部○一二疋　一萬石本多肥前守○一二疋　同斷本多兵庫頭

中馬組合

一六疋　三萬石稻垣攝津守○一二疋　一萬三千七百石渡邊越中守○一七疋　三萬五千石松平筑後守○一四疋　二萬五千石植村出羽守○一六疋　三萬石松平近江守

中馬組合

一六疋　二萬石九鬼河内守按するに、同書に六疋伊達紀伊守、三疋九鬼河内守とあり、甲斐を載す、○一三疋　同斷松平甲斐守

中馬組合

一六疋　三萬石毛利山城守○二疋　一萬石遠山佐渡守○一二疋同斷京極出羽守○一二疋　同斷青木甲斐守○一二疋　同斷一柳土佐守○一二疋　同斷毛利讃岐守○一三疋　一萬五千石京極甲斐守○一五疋　二萬三千石木下定太郎○一二疋　一萬石片桐主膳正○一四疋　二萬石鍋島備前守○一二疋　一千二千五百石久留島信濃守

中馬組合

一五疋　二萬二千石相良政太郎○一四疋　二萬石分部若狭守○一十四疋　六萬五千石安藤對馬守○一御普請御手傳付御馬御用御免　七萬四千石中川修理大夫○一十疋　四萬八千石青山大膳亮○一御普請御手傳に付御馬御用御免　五萬石黑田甲斐守○一五疋　二萬五千石加藤豐後守○一十五疋　七萬石

内田備後守〇一四疋　三萬六千石九鬼長門守〇一十五疋　七萬石　土井大炊頭〇一六疋　二萬九千石大村河内守　以上

右迎馬　八十六ヶ所より鞍置馬〆百四十二疋中馬〆三百五十四疋

送り馬　八十三ヶ所より鞍置馬〆百五十二疋中馬〆三百四十四疋

但鞍置馬一疋に付　兩口二人　足輕二人　長柄一人　草履取一人　沓箱一人　合羽箱一人　挑灯持一人　〆九人掛り

中馬一疋に付　兩口二人　足輕二人　手笠一人　沓箱一人　〆七人掛り

馬一疋に付長持一棹宛

右家々より

物頭格一人乘物乘掛　徒士目付格一人　乘物

右之通差出す、

一朝鮮人御用に付、柳原御用明地に寄せ人馬小屋場出來、江戸近在村々より凡人足二千五百餘人、馬千疋餘、右之小屋場に寄置る、

一朝鮮人歸國之節、東本願寺より品川宿迄出立御用掛り

關東御郡代四千石　伊奈半左衛門

柳營拾穗集、鷄林求聘詳錄、

六月廿七日信使入洛、この時、京都所司代の許に音物あり、翌廿八日淀乘船のとき、三使已下に菓子及ひ酒肴を賜ふ、對馬國着船等の事今所見なし、

寛延元年

一六月廿七日江州守山自注、京より十里大津泊にて未の下刻京着、翌廿八日五時出立、淀より乘船夜に入り大坂に着、

一淀乘船の節御菓子下さる、三使に御折自注、白木檜大さ三尺四方、三合、右之内に三ッ懸之饅頭九百入、御杉重自注、長一尺五寸、横一尺、三重、自注、但し金銀の水引を以てこれを結ふ、上之重は鶉の燒鳥、蛸之酒煮、椎茸、蒟蒻、中之重は花ぼふる、かすてら、菊輪とう、あるへひ糖、下之重いが餅、きんとう餅、羊羹、御酒自注、縄まき、わらひ六樽、

一上上官に御折自注、寸法同斷、三合、此内に饅頭、きんとう餅、いが餅、羊羹、洲はま、肴鶉之燒鳥、蛸の酒煮、からすみ、蒟蒻、椎茸、酒三樽、

一長老に御杉重二組、上之重椎茸、烏瓜、蓮根、山の芋、麩、中之重あるへい糖、大落雁、花ぼふる、下之重饅頭、きんとう餅、いが餅、酒なし、



一通詞に御折一合、三ッ掛の饅頭百入、同一合の内に竹輪、蒲鉾、蛸、椎茸、蒟蒻、御酒一升入二樽、

朝鮮國王幷三使より所司代に贈物

一國王より虎皮一張、豹皮一張、白苧麻五匹、青皮二張、黄毛筆二十柄、眞墨十笏、鷹一連、

一禮曹より人參一斤、色紙三卷、黑麻布五匹、扇子二十柄、黄毛筆二十柄、眞墨十笏、石鱗一斤、胡桃二斗、

一三使より扇子十柄、尾扇三柄、草注紙二卷、石鱗一斤、胡桃二斗、

一三使より本圓寺に白紗綾二匹、花席二張、壯紙三卷、胡桃二斗、扇子十柄、尾扇三柄、

一此時所司代は牧野備後守、日向延岡八萬石、

一同町奉行は、三井下總守、永井丹波守、

一大坂御城代は酒井讃岐守、若狹十二萬石、

一同町奉行は、小濱周防守、久松筑前守、

一京都旅宿本圓寺に於て、松平美濃守馳走之躰幕屏風、但三使上上官は金屏風、上官以下は金屏風に不及、覗料紙箱共、挑灯、水溜桶、臺子、手拭掛、行灯等、枕、薄緣、衣桁、多葉粉臺、此外諸番所の飾道具色々、宮中要錄、

明和元甲申年三月十一日、信使江戸を發途し、歸國の暇賜はりし日は、この月七日なり、四月八日大坂に着す、時にかの都訓導崔天淙を害せしものありて、江戸に注進す、よて遽かに御目付曲淵勝次郎を遣はさる、こゝにおいて、大坂町奉行及ひ勝次郎等これを搜索し捕ふ、罪人は即宗對馬守義暢の家來鈴木傳藏なり、遂にその地において刎首し、かの人に觀せしむ、歸國の月日等今所見なし、

明和元甲申年三月十一日、朝鮮人江戸發足、四半時本願寺出拂、續談海、

明和元年

一朝鮮人歸國之節、鞍置馬同皆具、江戸本願寺より舞坂まて出之、栗園漫抄、

明和元年三月十一日、朝鮮人歸國、晝後雨天、品川泊、朝之内雨天、四月八日大坂着、爰に於て朝鮮人を、何者とも不知鑓を以突殺候よし、御注進を申と云々、右御注進川支にて同十六日に告來る、依之同十八日、御目付曲淵庄次郎出立、同廿一日大坂着之積りと云々、

趙曮等寄對馬島主書

伏惟、日來尊履益勝、昨日都訓導崔天淙被刺致命之變、足下想已聞知矣、其行兇館及現在房中、出門逃躲、又是十目之所覩、則其爲貴邦人之所害、更無可疑、天淙設有見嫉之事、因譯舌告使行、以爲公勸之道、事理當然、而天淙初無與貴邦人一言爭詰之端、則結怨作仇非所可論、而今乃挾刃直入於使館咫尺之地、乘睡下手無顧忌、雖是同國之人、命至大未嘗有公然刺刃者、況敝邦之人、皆是使行隨牽之人、貴邦之人皆是使行迎護之人、而忽有此變、於相恃相依之地、此誠從古有使行以來所無之變怪也、殺人者死、乃是天下同然之法、死者雖不可復生、得此罪人比死者一洒、則庶可以少慰其寃魂、亦爲貴邦遵約條待行人之道、想不待此言有所査究、而已經一夜尙未斯得、誠莫曉其故也、俺等王事幸竣、陸路已畢、今可以使風擧帆、歸國有期、而遽遭無前之變、骨驚心寒、不但爲死者慘惻而已、目下行事有不暇論、幸嚴覈摘發、以償寃死之命、以好交好之誼、統希亮察、不備、

甲申年四月日

從事官金相翊

副使李仁培

和世說○按するに、書簡の文方策新編同し、

通信正使趙曮

明和元年四月三使より、

惟我誠信交隣之間、諸事相信、而今般變怪出於千萬慮外、彼此驚慘不可勝言、今則罪人捕置、云早早究覈處斷、以明貴國法典、其外無罪之人心疑阻、太守與使行之間、惟當如前相信相厚而已、此後凡事專太守被誡飭、才無弊端是所望也、

甲申四月日

對馬守答　示事謹悉、至於無査究處斷事、自使行言諭於町奉行云々、

三使より再答　自此專恃者惟太守在焉、至於他處言諭事、非俺敢爲也、

甲申四月二十日栗園漫抄、

明和元年四月十七日

金五枚時服二羽織　芙蓉之間　曲淵勝次郎

右者、於大坂朝鮮人變死の儀に付、急に被遣候に付被下之、按するに、此事來聘御用掛御褒美等の條併せ見るへし

一大坂表朝鮮人都訓導崔天淙、下通詞鈴木傳藏密密窠所に忍入鎗にて突殺、其身は出奔仕候、被召捕死罪に被行候由、續談海、

明和元年

一鷄林國信使吾國に來る、對馬より東都まで往來ともに、道中幷に賓館に於てのもてなし、大に厚重なる事なれとも、今にては只吾國同士の外見のやうになりて、かの國の人々心には、かほどの奔走とは思はさる事多しと見ゆ、大坂江戸の客館、また道中にて每夜の旅館にても、手寄の諸侯に命して、其事を主とらしむる事にて、その諸侯方には何れとも前々の記錄あり、因て大小の事鑛細の事迄も、ややもすれは先例を引き、一として時の宜きにしたかふ事なし、譬へは諸學士の席へは蠟燭三條なれは、夜話長くなりて燭盡れとも、三條の外に再ひ出す事なし、乞へは先例三條なりと答ふ、是等の事かの國の人の心には、大に快よからさる事なり、この外の事も率かくの如し、故に歸國の時、江州守山の旅館にて、副使の書記玄川魯堂に語て曰、入貴國以來先例之二字喧耳とそ、聖人の政は禮と法とを定てこれら行ひ、猶便宜きにも從ふ事なるに、今の世の政事には、禮にも非す法にもあらす、何となく一度仕初めたる事を先格とて、堅く守るは文盲なり、一信使一行の人多は、對州の役人に私ある事を甚疾めり、いかにしても餘人は言の通せさる事ゆへ、私あるも外へは明にしれかたし、ことに鈴木傳藏か崔天淙を殺せしより、愈々對州を怨る氣色ありとそ、故に秋月或人に語て曰、對馬を黜涉するに因て、日本の政の明不明とを卜せんと云り、崔天淙は都訓導三人の一人なり、殺したる意趣は樣々異說あれとも、何故といふ事詳ならす、爭論より起りし事と見ゆ、四月七日の朝按するに、和世說には四月八日大坂着とあり、今その是非を辨しかたし、未明の事なり、三使と上上官より對馬侯へ穿議を乞し書簡二通あり、害したる刃は關の兼永の鎗也、短く切て持參し、殺して後其所に捨置て歸りしなり、韓人は兼を魚と讀誤りしにや、上上官の書簡の文に刻むに、以魚永二字と云り、この變後三十日餘も館中に逗留す、かれも門禁甚嚴重なり、外人は通行を許さす、且往來ともに難風旁々變多かりし故に、三使は歸國待罪と稱して何事もつゝしめりとなり、傳藏は出奔したりしを、攝の池田にて捕へ來り、罪極りて大坂吉島にて首を刎ぬ、韓人立會し

なり、金鶏雜話、

文化八辛未年六月廿七日、信使對馬國を出帆して、同所に於て暇賜ばりしは この月十五月なり、國に歸る、

文化八年六月廿七日、朝鮮人對州を發船して本國に歸る、片山氏筆記、

通航一覽卷之百十七 終

# 通航一覽卷之百十八

## 朝鮮國部九十四

### ○來聘御入用

朝鮮國信使來聘により諸御入用、この事寛永二十年以前は記載を欠く、自餘分明ならざるもあれども、今所見にしたがひ、錄して後考をまつのみ、

明暦元乙未

一唐人參候而歸る迄、御上樣御金四十兩程入、此外大名衆下々の入め、かけて百萬兩も可入候、大成ついゑ是にまさり候は有間敷候、榎木氏覽書、

天和之朝鮮人來朝人馬御入用之覺

天和二戌年、朝鮮人來朝人馬御入用、但播磨私領寺領後平加る、

一高二十一萬九千二百八十九石餘　山城

内　四萬四千三百五十二石餘　御料○四萬八千四百二十四石餘　私領○一萬九千八百二十三石餘　禁裡御料○五萬六百二十七石餘　公家衆諸役人　○一萬五千九百五十二石餘　社領○三萬九千七百二十六石餘　御門跡方幷寺領内一萬五千三百七十五石餘御門跡　○三百八十石餘猿樂等雜色高、〆

一高四十八萬九千四百七十六石餘　大和

内　八萬二百五十四石餘　御料○三十六萬九千七十八石餘　私領○三千五百五十六石餘　公家領○六千三百三十二石餘　社領○二萬六千五百四十二石餘　御門跡幷寺領共内三千二百十六石餘御門跡○三千七百二石餘　樂人猿樂領十津川

一餘十六萬七百二石餘　和泉

内　七萬三千八百七十九石餘　御料○八萬五千六百九十二石餘　私料○千百三十石餘　寺領〆

一高二十六萬九千三百四十四石餘　河内

内　七萬千九百六石餘　御料○十九萬五千百三十三石餘　私領○千十四石餘　公家領○三百五十七石餘　社領○九百三十一石餘　御門跡幷寺領内二百石御門跡領〆

一高三十八萬千四十六石餘　攝津

内　十三萬四千九百八十六石餘　按するに、この石高の下、御領の文を脫せしなるへし、○二十三萬八千三百七十四石餘私領○二千五百四十九石餘　公家領○二千九百五十七石餘　社領○二千百七十八石餘寺領〆

一高八十三萬七百三石餘　近江

内　十三萬九千七百五十九石餘　御料○三十九萬二千六百五十石餘　私領○四千七十一石餘　社領○一萬五千六百六石餘　御門跡幷寺領内千四百五十八石餘御門跡領○三百十四石餘　長濱地子幷前川方○二十八萬石　井伊掃部頭領分〆

一高二十九萬千七百四十石餘　丹波

内　三萬六千四十八石餘　御料○二十四萬九千七百三十八石餘私領○五千石　新院御料○七百十七石餘　公家領○三十五萬石餘　社領○四百石餘　御門跡幷寺領内三百石御門跡領百石猿〆

一高五十四萬二千二百九十一石餘　播磨

内　十四萬五千七百七十七石餘御料　但馬銀山附共○按するに、この石高の下、御門跡幷寺領の文を脫せしなるへし、　社領○四千六拾貳石餘　御門跡幷寺領内二百石御門跡領〆

高都合三百十八萬七千六百六十七石餘

内　七十二萬六千九百六十七石餘御料但馬銀山付共○百九十七萬千九十二石餘　私領○一萬九千八百二十三石餘　禁裡御料○五千石　新院御石餘　社領○二千百七十八石餘寺領〆

一高八十三萬七百三石餘　近江

内　十三萬九千七百五十九石餘　御料○三十九萬二千六百五十石餘　私領○四千七十一石餘　社領○一萬五千六百六石餘　御門跡幷寺領内千四百五十八石餘御門跡領○三百十四石餘　長濱地子幷前川方○二十八萬石　井伊掃部頭領分〆

一高二十九萬千七百四十石餘　丹波

内　三萬六千四十八石餘　御料○二十四萬九千七百三十八石餘私領○五千石　新院御料○七百十七石餘　公家領○三十五萬石餘　社領○四百石餘　御門跡幷寺領内三百石御門跡領百石猿〆

一高五十四萬二千二百九十一石餘　播磨

内　十四萬五千七百七十七石餘御料　但馬銀山附共○按するに、この石高の下、御門跡幷寺領の文を脫せしなるへし、　社領○四千六拾貳石餘　御門跡幷寺領内二百石御門跡領〆

高都合三百十八萬七千六百六十七石餘

内　七十二萬六千九百六十七石餘御料但馬銀山付共○百九十七萬千九十二石餘　私領○一萬九千八百二十三石餘　禁裡御料○五千石　新院御

領○六萬二千五百三十八石餘　公家領○二萬七千四百五十七石餘　社領○九萬三百二十二石餘　御門跡并寺領内二萬五百四十九石餘御門跡領○四千四百九十七石餘　樂人猿樂雜色長濱地子寺領○二十八萬石　井伊掃部頭領分溫知柳營秘鑑、

貞享元年、朝鮮人來朝に付、按するに、天和二年の誤なり、本誓寺雲光院法禪寺御賄方作事の帳あり、竹橋蠹簡、

天和二戌年朝鮮人來朝之節、所々御修復御入用覺

京都大佛并本國寺假小屋番所等御修復御入用

一銀十三貫四百二十九匁餘

宿々泊晝休御修復御入用

一金九百九十六兩二分○一銀二十九貫五百二十五匁餘○一米十四石五斗餘

道中道橋御入用○一金千七百二十九兩餘○一銀二貫八百九十九匁餘○一米二十八石一斗餘風折松木十五本

江戸本誓寺雲光院法禪寺御修復御入用

一銀五十三貫百十七匁餘○金合二千七百二十五兩二分餘、銀合九十八貫九百七十一匁、此金千六百四十九兩二分餘、二口合金四千四百二十五兩餘○米合四十二石六斗餘

正德元卯年朝鮮人來聘之節所々御修復御入用之覺

大坂西本願寺御修復、同所川口御船屋、同御番所御修復、并新造川船御入用

一銀八百九十五貫六百二十四匁○一米百二十二石一斗七升一合

京都本國寺大佛堂　并三十三間堂御修復御入用

一銀六百十八貫六百四拾九匁二分

播州兵庫より江戸迄、泊晝休宿々御修復、往還道橋御普請、并人馬割御入用

一金八萬四千二百四十九兩三分○一銀千二百十三貫六百八十六匁七分○一米千八百八石八斗三升○一樽木五萬四千六百四十五挺

江戸本願寺御修復、并小普請方新規御修復共に御入用

一金一萬九十百七十兩○一銀二千六百四貫九百五十五匁二分○一米三千四百五十四石四斗八升五合○金合十萬三千四百十九兩三分、銀合五千三百三十二貫九百十五匁一分、此金八萬八千八百八十一兩三分銀十匁一分○都合、金十九萬二千三百一兩



二分銀十匁一分、米五千三百八十五石四斗八升六合、樽木五萬四千六百四十五挺竹橋餘藁、

享保六辛丑年二月廿七日

播州一國之大名方に被仰渡候覺

一去る亥年、朝鮮人人馬御入用高役懸り金、此度は播州私領へも相懸り候樣に、從江戸申參候間、役高引高等之義、子春按するに、享保五年、觸帳被指遣、村々高書付指越候處、古來より不殘引高にて候故、朝鮮人御入用懸り不申と計帳面に斷書相見候、朝鮮人海上往來之節、漕船水船水夫引船等付、浦役相勤候村方在之候は、其村迄村切高、又は村々より不勤助郷在之候に付、村高何程之内高何程浦役相勤候と書付、庄屋年寄印形いたし、御一領一結に仕、來月十日迄早早指出候樣に御申付可被成候、

同年三月

一播州一國の大名方へ、朝鮮人來朝之節、人馬入用銀之事、江戸にて二月九日被仰出候、同廿七日御書付京都御奉行所より銘々被遣候、自注、三枚に林田へ參候寫あり、百石の知行高新金三歩五匁宛也、一萬石に付金八十五兩、當四月晦日迄に、大坂御金奉行衆へ上納可致との事也、尤常是後藤包なり、播州之内にて海手無之處へは、右之入用銀掛り不申由、先年播磨一國百萬石一圓に御取被成候、大名方朝鮮人來朝之節は、船中にて御馳走在之、其後いくつにも分れ候故、唯今までは其事無之、今度右之例を以て、海手御取被成候御大名方へは、右之人馬入用銀上納被仰出、候以上、月堂見聞集、

享保六年三月八日

一去々亥年朝鮮人來朝、人馬賃銀之儀御書付之寫、去々亥年、朝鮮人道中往來人馬賃銀、五畿内近江丹波播磨美濃尾張三河遠江駿河伊豆相摸武藏御料私領共に、國役懸り出候に付、右國役割合取上之譯、五畿内近江丹波播磨八ヶ國之御料私領共に、右村村へ京都町奉行より相觸候間、右國々に知行在之面々觸書之趣を以、知行所村々より取立、上納可有之候、爲心得如此候、

三月　　松平對馬守

横田備中守

大久保下野守

萩原源右衛門

松岡彌太郎
辻　六郎左衛門

右六人連名按するに、對馬守は寺社奉行、下野守は御勘定吟味役なり、走奉行、源右衛門以下は御

一大目付横田備中守相渡候書付

覺

去々亥秋、朝鮮人來朝に付、城州淀より江戸迄、道中往來之人馬賃錢、五畿内近江播磨美濃尾張三河遠江駿河伊豆相摸武藏、右國々へ國役懸りに成候間、可有其心得事、

一右人馬役跡々も國役割合にて差出候處、格別之多少有之、又は可相除も無之、村方も役金懸りを除候類も有之に付、此度吟味之上、可相除分は左に記し、其外は役金懸り候筈候、且又船橋懸候所々、其役村と申候而、入用之品々差出候村々有之候得は、其役懸りは纔之品を出越候所も多く候、雖然船橋役と申相勤候義候得は、外村之懸りよりは相減し、左之通に候事、

船橋役村之外は、高百石に付金三分銀五匁宛、船橋役之村々は、高百石に付金一分二朱宛

右割合を以、御料私領共高役金書面之通取立之、五畿内近江丹波播磨八ヶ國は大坂御金藏、濃州より武州迄、東海道筋國々は江戸御金藏へ可被相納候、

但金は後藤包、銀は常是包にて、四月晦日限り、江戸大坂共に可有上納候、

一銀兩替は金壹兩銀五拾目宛之積たるへき事、

一御朱印地寺社領高、幷諸役御免許之謂有之村高は、役銀懸除之候事、

但、此役懸り相除候村々は、其譯委細遂吟味、是又御料は御代官、私領は領主地頭より書付、御勘定所に可被差出候、

一東海道中山道日光甲州道中驛場高、幷其驛へ道中奉行より證文渡し置候、定助之人馬差出候村々は、役金懸り除之候事、但右同斷、

一役金取立上納相濟候上にて、右國々に有之銘々知行高委細書付、且又寺社領、其外右可除村方在之分は、其趣外書に記可被差出候事、

一舟橋役村之分、是又御料私領ともに、何方之船橋役相勤候と申譯、幷其村高共に書付、上納金相濟候上にて被差出候書付之内に、一ヶ條書加へ可被差出候事、



但支配頭有之面々は、右書付支配頭へ可被差出候、支配頭より御勘定所へ可被差出候、

以上

丑三月

松平對馬守
横田備中守
大久保下野守
萩原源左衛門
杉岡彌太郎
辻　六郎左衛門

御營日次記〉按するに、格致累年錄には、三月十六日と載す、

享保六年四月五日

朝鮮人往來之人馬賃金高掛、東海道之分は定助は除之、大助之分は國役金取立之候、中山道美濃路佐屋路日光海道は、定助大助之分り無之に付、定助に准、高役相除候筈に候間、可被得御意候、以上、

丑四月五日

辻　六郎左衛門
萩原源左衛門
松岡彌太郎
大久保下野守

格致累年錄、

寛延己巳年、享保此度朝鮮人御入用差引書付

朝鮮人來朝に付御入用享保之節御入用之差引之覺

一金六萬四百餘　享保年御入用

但割增を加候得は○金九萬七千五百九拾兩餘

一金五萬四千五百七拾兩餘　此度御入用

差引金五千八百三拾兩餘　此度減

○此印、差引金四萬三千貳拾兩餘　此度減

前條者、此度御入用五萬四千五百七拾兩餘、享保之節御入用に不組分、其外此度新規御入用之分、

貳萬四千五百八拾兩餘を加へ候得者、

一金七萬九千百五十兩餘△

享保御入用割增共、

一金九萬七千五百九拾兩餘

差引合壹萬八千四百四拾兩　此度減竹橋餘筆、

寛延二己巳年九月廿八日

去辰年、朝鮮人來朝幷歸國之節、人馬割諸御入用、其外御賄方入用共、先格之通り、山城大和河内和泉攝津近江丹波播磨美濃三河遠江駿河伊豆相摸武藏國御料私領へ國役懸候筈に付、此度割合候、尤禁

富三月書上げ候大積り高九萬八千九百兩餘ト
差引
一萬九千七百五十四兩餘　此度減

裏御料御門跡領公家衆家領御朱印寺社領、本海道宿場并助郷御傳馬役勤候村高、朝鮮人御用に付人馬差出、或は渡場船橋役御賄御用として、人足等差出候村方、其外前々より譯有之、高懸り諸役免除高等之分除之、其餘は拜領高込高新田改出等、都而其村々有高百石に付金三分宛、其所々通用次第、金に而成とも銀にて成とも、尤銀も六拾目替之積、村々より取立之、來午二月を限、大和丹波は京都三井三郎助、山城近江は同所烏本三郎九郎、攝津河内和泉播磨は大坂平野屋又右衛門、同所鴻池屋善右衛門方へ相納、美濃より武藏まて七ヶ國之分は、御代官舟橋安右衛門、山本平八郎兩人之内へ可相納候事、

一右高懸り金納濟候上にて、別紙案文之通書付、并納濟候節之請取手形共に、御勘定所へ可被差出候事、

一朝鮮人諸御用勤候村々之内、御賄方へ鷄差出候下村、御扶持方被下人足勤候村方、玉薬被下候諸役村高等之分は、半高懸り、百石に付金壹分貳朱宛之積りたるへく候、其餘少分之役勤分共、除高并半高懸り之内へは不入候而、一統割合之通り取立、上納可有之候事、

以上

巳九月　　御勘定所

覺

一高何程　何國何郡之内何ヶ村
一高何程　何國何郡之内何ヶ村

是は朝鮮人御用不相勤村々

此高懸り　金何程　但百石に付金三分宛
　　銀何程　但金壹兩に付六拾目替

一高何程　何國何郡之内何ヶ村
一高何程　何國何郡之内何ヶ村

是は朝鮮人鷄役計、又は御扶持米相渡候人足役、玉薬代受取候諸役村々、

此高懸り　金何程　但百石に付金壹分貳朱宛
　　銀何程　但金壹兩に付六十目替

外

一高何程　何國何郡何村
一高何程　何國何郡何村

御朱印

寺社領分除

何道中何宿之助郷村に付除





一高何程　何様之謂に付除

右者去辰年、朝鮮人來朝歸國之節、諸御入用高懸、書面之通り取立、何月幾日誰方へ相納申候、以上、

寛延二年巳何月　何役誰　印

御勘定所　御書付留、公制觸事錄、御觸書、

寛延二巳年十一月

延享四卯年中、拂方御金藏御勘定帳、

一金壹萬七百三拾貳兩三分　依田一學、泉本茂左衛門、藤井八右衛門、

内壹兩參分　壹分判　按するに、一學は御納戸頭、茂左衛門以下二人は御代官なり、

一銀六拾五貫三百拾六匁六分

一灰吹銀四貫五百目　按するに、この二人ともに御代官なり、

菅沼久次郎、青木次郎九郎外二十四人、

是去卯年、朝鮮人來朝に付、御本丸西丸御翠簾、御城内外、東本願寺旅館、新規御修復、朝鮮へ被遣候御鞍鐙、羽二重、紗綾、亂茶宇、御屏風、宇治御茶、御返翰紙、其外品々御入用、并道中旅館宿々御修復船橋等、手代下役諸入用、服部大和守、曲淵越前守、按するに、大和守越前守は御作事奉行、大柳八左衛門、福田久左衛門、疋田庄九郎、堀權左衛門、按するに、この内庄九郎は御細工頭、自餘の三人は今詳ならず、順阿彌、春阿彌、清由、長古、按するに、順阿彌、春阿彌は御同朋頭、清由長古は御數寄屋頭にや、加判板倉佐渡守、神谷志摩守、神尾若狭守、逸見出羽守、松浦河内守、按するに、佐渡守は若年寄摩清、志摩守、若狭守、出羽守、河内守御勘定奉行なり、曲淵豐後守、按するに、豐後守は越前守の前稱、然れは御作事奉行にて、この加判の時は摘越前守にて、寛延元年聘禮後、七月廿一日御勘定奉行を命せられしの ち、豐後守と改稱し、この裏判ありしなるへし、遠藤六郎右衛門、兒島孫七郎、堀江荒四郎、井澤彌惣兵衛、正木與市郎　按するに、六郎右衛門以下は、裏判手形有之、ともに御勘定吟味役なり、

川田玄蕃　蔭山外記

一金百四十四兩　裝　笠之助　佐々新十郎
　　山本平八郎　筧傳五郎渡

按するに、この六人及ひ次の半左衛門、十右衛門は、ともに御代官なり、

是は去卯年、朝鮮人來朝に付、道中人馬割、人馬溜矢來場所見分御用、手代書役足輕諸入用、神尾伊賀守、神谷志摩守、神尾若狭守、松浦河内守、曲淵豐後守、遠藤六郎右衛門、兒島孫七郎、井澤彌惣兵衛裏判手形有之、

寛延元辰年

一金五萬參千八百五拾五兩　長井半左衛門、内藤十右衛門名略、外七十二人、
　　内八拾參兩　壹分判

一銀三百拾六貫百八拾貳匁四分
　　内拾貳貫七百七拾四匁　小玉